

西 乙 原 遺 跡

勝更白山神社周辺遺跡

東海北陸自動車道建設に伴う

緊急発掘調査報告書

1 9 9 5

日 本 道 路 公 団

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

霊峰白山・位山に源を発し、たゆたう流れで奥美濃の歴史を育んできた長良川。西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡もこの長良川のほとりにあります。

今回の調査では、3,000年の昔から長良川とともに生きた祖先達の姿を垣間見た気がします。勝更白山神社周辺遺跡の850点余の石製土掘具は、その滑らかな刃部で彼らの生活の息吹きを感じさせてくれました。土器の底部に残ったクズの葉の圧痕、特殊な形態の石皿など、この段丘がどのような空間であったかを直接、間接的に語る資料も出土しました。

数百年の間、この地が根菜類の採集の場として彼らの生活を支え続けていた可能性は高く、このことは奥美濃の縄文社会を語るうえできわめて重要なポイントとなるでしょう。

また、調査を通じて埋蔵文化財に対する地元の人々の関心の高さも感じることができました。今後もこの地域における研究活動が発展することを期待しています。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたってご協力いただいた関係諸機関、並びに地元の関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 吉 田 豊

例 言

1. 本書は郡上郡八幡町大字有坂字道下・大木場尻に所在する勝更白山神社周辺遺跡（G21H06767）と、郡上郡八幡町大字西乙原字西廻通に所在する西乙原遺跡（G21H08709）の調査報告書である。
2. 本調査は東海北陸自動車道（美濃～八幡間）建設事業に伴うもので、日本道路公団から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 勝更白山神社周辺遺跡の調査は平成4・5年度に実施し、西乙原遺跡は平成4年度に実施した。
4. 発掘調査は大参義一愛知学院大学教授の指導のもと、平成4年度は川部誠・各務光洋・安江祥司・長屋幸二が担当した。平成5年度は市原輝明・長屋が担当した。
5. 本書に記載した遺物の実測・トレースは次の者が行った。
土器実測 國井 悦子・藪下賀代子・武藤美和子・長屋
石器実測 長屋
陶磁器実測 國井・武藤・和田 房枝・坂井由賀子
トレース 今尾さち子・宇野 広子・小木曾美智・國井・竹中百合子・藪下・武藤
6. 遺物の写真撮影はスタジオベガに委託して行った。
7. 本書の執筆は、第2章第2節を市原が、第4章第4節、第9章第2節（2）を小野木学が担当し、そのほかは長屋が担当した。編集作業は長屋が行った。また、執筆に際して当センターの春日井 恒、藤田英博の協力を得た。
8. 測量は㈱イビソクに委託して行った。
9. 自然科学分析は㈱ズコーシャ総合科学研究所、㈱パレオ・ラボに委託して行った。第6章第1節は帯広畜産大学生物資源化学科の中野益男氏、㈱ズコーシャ総合科学研究所の中野寛子、菅原利佳、長田正宏氏による報告である。同第2節は㈱パレオ・ラボの菱田量氏による報告である。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）
泉 拓良・植田 文雄・大熊 茂弘・門脇 秀典・川崎 保・工藤 俊樹・木下 哲夫
小井土由光・佐藤とき子・西村 勝広・穂積 裕昌・宮田 明
11. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た。
藤井 定彦・後藤 彦司・竹内登喜夫・西部あさゑ・高山 花子・粥川 茂子・古川 巖
太田 保夫・田中 盛夫・大塚 昭三・河合 吾平・松尾 太・佐田 進・高橋 猛
高瀬 愛子・馬場 義憲・村瀬 正夫・孝森 小好・山中 寛一・深沢さだ枝・河合 二喜
日置 正次・坂井由賀子・鈴木トミエ・牧野 幸子・鷺見 淳子・国田 和義・河合 喜好
伊藤 明・小池 照子・村井 誠一・島崎美智子・岡本 進・篠原 久志・多賀 岩雄
武藤 嘉男・増田 勇・篠田 昭・菱田 幸男・立枕 定義・河合千代子・鈴木 茂一
渡邊 清司・立枕 ヨシ・山下 豊三・管田 とも・和田 通郎・野々村政治郎・松井 都
澤谷 緑・市村 三代・黒子さかえ・荒井 久男・澤 よし子・寺田 長松・正者力之助
曾我三千代・曾我 小明・曾我 茂・増田久美子・山田 厚子・和田 房枝・山田あさ子

水川 五月・長瀬 定一・須田そとゑ・須田すみゑ・簗島 正夫・清水 増児・狩野 又八
細井 喜晃・武藤ます子・鷺見 由兄・大坪 敬子・篠田 玉子・川島 種・井上 昭治
古池 一美・今尾さち子・宇野 広子・小木會美智・國井 悦子・竹中百合子・藪下賀代子
後藤 千鳥・武藤美和子

12. 本書に報告した遺跡の記録及び出土した遺物は岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言・凡例

第1章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 発掘調査の経過…………… 2

(1) 西乙原遺跡…………… 2

(2) 勝更白山神社周辺遺跡…………… 2

第2章 勝更白山神社周辺遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境…………… 4

第2節 歴史的環境…………… 4

第3章 勝更白山神社周辺遺跡の基本層序…………… 7

第4章 勝更白山神社周辺遺跡の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物出土状況……………12

第2節 縄文・弥生時代の遺物……………16

(1) 土器……………16

(2) 石器類……………58

第3節 V層上面検出の遺構……………97

第4節 古代以降の遺物 ……111

第5章 まとめ

第1節 縄文時代の様相 ……120

(1) 時期別、石器別の分布状況 ……120

(2) 縄文時代における勝更白山神社周辺遺跡の性格 ……124

第2節 古代以降の様相 ……126

(1) 勝更白山神社について ……126

第6章 自然科学分析

第1節 勝更白山神社周辺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析 ……127

第2節 勝更白山神社周辺遺跡出土灰釉陶器内面付着赤色物質の蛍光X線分析 ……139

第7章 西乙原遺跡周辺の環境 ……140

第8章 調査方法と基本層序 ……142

第9章 遺構と遺物

第1節 遺構 ……143

第2節 遺物 ……149

(1) 石器類 ……149

(2) 古代以降の遺物 ……153

参考文献 ……158

挿 図 目 次

第 1 図	東海北陸自動車道と文化財	1
第 2 図	勝更白山神社周辺遺跡調査区	3
第 3 図	八幡町長良川流域の遺跡と白山神社	5
第 4 図	勝更白山神社周辺遺跡土層柱状図	9
第 5 図	勝更白山神社周辺遺跡16列・49列土層断面図	11
第 6 図	勝更白山神社周辺遺跡出土遺物分布図	13
第 7 図	勝更白山神社周辺遺跡12V 石製土堀具出土状況図	12
第 8 図	勝更白山神社周辺遺跡32M 土器片出土状況図	14
第 9 図	勝更白山神社周辺遺跡38 J 埋設土器出土状況図	14
第10図	勝更白山神社周辺遺跡47・48H・I 遺物の分布と焼土塊出土状況図	15
第11図	勝更白山神社周辺遺跡VIII・IX層出土の土器、V～VII層出土の土器(1) 第I期	17
第12図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(2) 第I期	19
第13図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(3) 第II期・第III期	21
第14図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(4) 第II期・第III期	23
第15図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(5) 第III期	25
第16図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(6) 第III期	27
第17図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(7) 第III期	29
第18図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(8) 第III期	30
第19図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(9) 第IV期	32
第20図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(10) 第IV期	33
第21図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(11) 第IV期	35
第22図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(12) 第IV期	37
第23図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(13) 第V期	39
第24図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(14) 第V期	41
第25図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(15) 第V期・第VI期	42
第26図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(16) 第VI期	44
第27図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(17) 第VI期	45
第28図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(18) 第VI期	47
第29図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(19) 第VII期	49
第30図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(20) 第VII期	50
第31図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(21) 第VII期	51
第32図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(22) 第0期	53
第33図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(23) 第0期	54

第34図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(24)	第0期	55
第35図	勝更白山神社周辺遺跡V～VII層出土の土器(25)	第0期	57
第36図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(1)	石核・剝片類	59
第37図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(2)	石核・剝片類、スクレイパー類	61
第38図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(3)	石核・剝片類	63
第39図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(4)	石鏃、くさび形石器、石錐	64
第40図	勝更白山神社周辺遺跡石鏃の長さ	と抉りの深さ	65
第41図	勝更白山神社周辺遺跡石鏃の質量		65
第42図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(5)	石核・剝片類、粗石材製石器	68
第43図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(6)	石核・剝片類	70
第44図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(7)	凹石、磨石・敲石類、石皿	71
第45図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(8)	石皿、石錘、磨製石斧	73
第46図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(9)	石製土掘具	79
第47図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(10)	石製土掘具	80
第48図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(11)	石製土掘具	81
第49図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(12)	石製土掘具	82
第50図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(13)	石製土掘具	83
第51図	勝更白山神社周辺遺跡出土石器類(14)	石製土掘具	84
第52図	勝更白山神社周辺遺跡石製土掘具の質量		85
第53図	勝更白山神社周辺遺跡石製土掘具の最大幅		85
第54図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構分布図	9～16グリッド	98
第55図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構分布図	17～24グリッド	99
第56図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構分布図	25～32グリッド	100
第57図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構分布図	33～40グリッド	101
第58図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構分布図	41～48グリッド	102
第59図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構分布図	49～50・51～55グリッド	103
第60図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構(1)		105
第61図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構(2)		107
第62図	勝更白山神社周辺遺跡V層上面の遺構(3)		109
第63図	勝更白山神社周辺遺跡古代以降の遺物(遺構内遺物)		111
第64図	勝更白山神社周辺遺跡古代以降の遺物(1)		113
第65図	勝更白山神社周辺遺跡古代以降の遺物(2)		115
第66図	勝更白山神社周辺遺跡古代以降の遺物、時期別個体数		117
第67図	勝更白山神社周辺遺跡遺物出土分布図		121
第68図	勝更白山神社周辺遺跡遺物出土分布図		122
第69図	勝更白山神社周辺遺跡遺物出土分布図		123

第70図	土器内外の試料採取地点	134
第71図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	135
第72図	試料中に残存する脂肪のステロール組成	136
第73図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	137
第74図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	138
第75図	灰釉陶器内側付着赤色物の蛍光X線スペクトル	139
第76図	西乙原遺跡地形測量図	141
第77図	西乙原遺跡18D北壁土層断面図	142
第78図	西乙原遺跡遺構分布図	144
第79図	西乙原遺跡遺構図SK1～4	146
第80図	西乙原遺跡遺構図SK5～7	147
第81図	西乙原遺跡遺構図SK8	148
第82図	西乙原遺跡出土石器類(1)	150
第83図	西乙原遺跡出土石器類(2)	152
第84図	西乙原遺跡古代以降の遺物(1)	154
第85図	西乙原遺跡古代以降の遺物(2)	155
第86図	西乙原遺跡古代以降の遺物、時期別個体数	156

表 目 次

表1	勝更白山神社周辺遺跡における石器組成表	58
表2	石製土堀具観察表	86～96
表3	勝更白山神社周辺遺跡古代以降の遺物観察表	118・119
表4	土器および土壌試料の残存脂肪抽出量	133
表5	試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合	133
表6	西乙原遺跡古代以降の遺物観察表	157

図版目次

- 図版 1 勝更白山神社周辺遺跡 遠景・近景・調査開始風景・崖錐堆積状況
- 図版 2 勝更白山神社周辺遺跡 堆積状況・遺構
- 図版 3 勝更白山神社周辺遺跡 遺構
- 図版 4 勝更白山神社周辺遺跡 遺構・遺物出土状況・調査風景
- 図版 5 勝更白山神社周辺遺跡 V層上面遺構検出状況・完掘状況
- 図版 6 西乙原遺跡 遠景・近景・土層堆積状況
- 図版 7 西乙原遺跡 遺構
- 図版 8 西乙原遺跡 遺構・完掘状況
- 図版 9 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（石器）
- 図版10 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（石器）
- 図版11 勝更白山神社周辺遺跡・西乙原遺跡 出土遺物（石器）
- 図版12 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（土器）
- 図版13 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（土器）
- 図版14 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（土器）
- 図版15 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（土器）
- 図版16 勝更白山神社周辺遺跡 出土遺物（土器）

第1章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経緯

勝更白山神社周辺遺跡・西乙原遺跡は東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の一貫として、平成4年度、5年度に発掘調査を実施した。

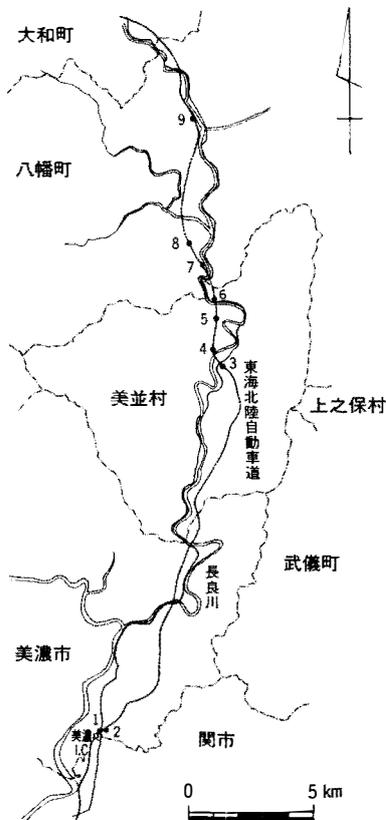
日本道路公団名古屋建設局美濃工事事務所管内の美濃IC から八幡町までの全長31.5km区間においては、昭和59年度に岐阜県教育委員会が実施した遺跡分布調査で9遺跡が路線内に含まれることが判明している。そのうち樅の木遺跡(2)、上巾上遺跡(1)についてはそれぞれ昭和60年度と62年度に美濃市教育委員会・県教育委員会によって調査が実施されている。県教育委員会では、平成3年度より岐阜県文化財保護センターを設立し、引き続いて調査の実施に当たることとなった。

平成3年度は美並村の鶴尾山城跡(3)、宮下遺跡(5)、深戸遺跡(6)の発掘調査を行った。野首遺跡(4)については高架設計となり、工事区域が遺跡の中心から外れることが判明したため、工事に立ち会い、遺跡の有無を確認することとなった。結果、遺跡の存在は認められなかった。宮下遺跡は平成4年3月に、鶴尾山城跡・深戸遺跡は平成5年3月に発掘調査報告書を刊行している。

平成4年度は八幡町の赤谷(7)、西乙原(8)、勝更(9)の3地点が対象となった。赤谷は長良川本流右岸

に赤谷川が合流する低位段丘に位置する。6月16日に重機による試掘調査を実施し、トレンチ掘りで600㎡について調査した。一部4mほどの深さまで掘り進んだが、水田耕作土・水田敷の下は、河川による堆積物と考えられる粗い砂利層が続き、遺物包含層・遺構等は認められなかった。

西乙原遺跡は1,600㎡について調査を実施した。詳細は7章以降に後述する。勝更は、調査区が位置する段丘面の北部に勝更白山神社周辺遺跡として岐阜県遺跡地図にも登録されている。しかし、段丘面の広い範囲に遺跡が広がる可能性もあり勝更遺跡と仮称した。その確認のため6月18・22日、8月18・27日に重機と手掘りで700㎡について試掘調査を実施した。しかし、段丘南部は崖錐堆積物に厚く覆われ、崖錐の下に包含層があったとしても調査区の設定が不可能であると判明した。一方、段丘北部は崖錐堆積物が薄く、この区域を中心に調査を行うこととした。この時点で、調査区が既登録の遺跡の範囲と重なることから、勝更白山神社周辺遺跡の名称を用いることとした。平成4年度はそのうち3,200㎡について調査を行い、平成5年度はひきつづき6,000㎡について実施した。



第1図 東海北陸自動車道と文化財

第2節 発掘調査の経過

(1) 西乙原遺跡

調査区の周辺で、石製土掘り具、チャート岩製の剥片、近世の陶磁器類などが採集されており、縄文時代・近世の遺物散布地として調査を行った。現地での作業は平成4年5月1日に開始し、同年7月21日に終了した。調査は4×4（m）のグリッドを設定し、グリッド名は南から2～26、西からB～Hを付した。I層とIV層を重機によって除去した以外は手掘りで掘削した。遺物は多くがローリングを受けており、原位置の保持は疑わしいことからグリッド毎に一括して取り上げた。

(2) 勝更白山神社周辺遺跡

勝更白山神社周辺遺跡は、遺跡地図には室町時代の遺物散布地として登録されている。これは古瀬戸の四耳壺が採集されていたことによる。しかし、平成4年8月に行った試掘調査において、水田敷の下層で縄文時代後期から晩期にかけての遺物包含層が確認された。そこで中世と縄文の複合遺跡として調査にはいることとなった。

現地での発掘調査は平成4年8月25日に開始し、平成6年3月19日に終了した。調査は起工承諾によるものであり、さまざまな規制の下での調査であった。現在使用している水路の確保が優先され、水路の部分は未掘箇所として残すこととなった。また、起工承諾を得ることができた箇所から順次調査区を拡張したため、不連続的な調査区設定となった。全体的な調査計画を立てることができず、今後の反省材料としなければならない。

なお、遺物の取り上げはトータルステーションの遺跡システムを使用し、出土地点を記録した。ただし平成4年度分についてはデータと作業効率を考慮した上で、遺物に遺物番号を登録しなかった。平成5年度の調査では遺物に遺物番号を登録した。

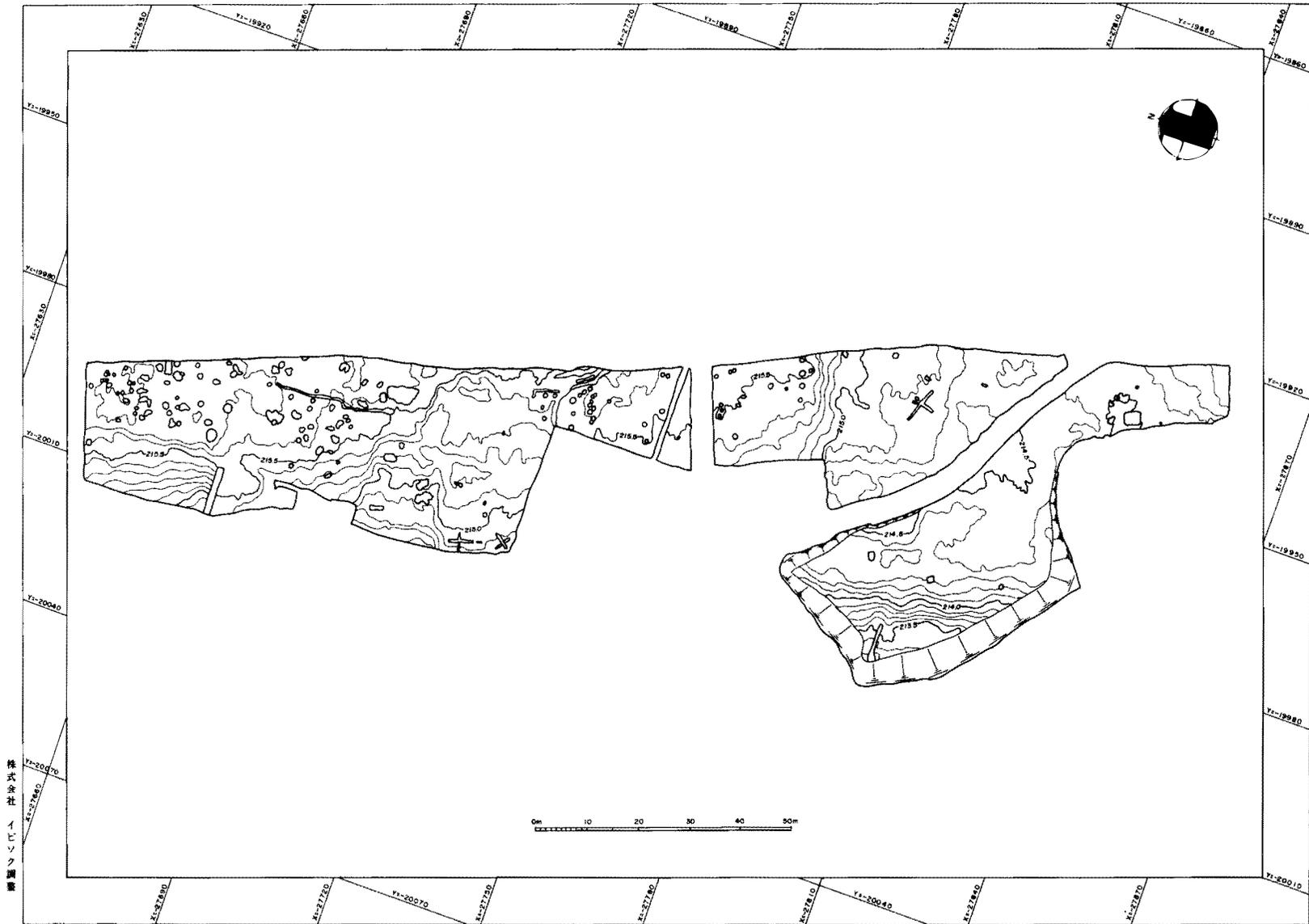
各調査区の調査に入る際にはパイロットトレンチをいれ、土層の堆積状況を確認していった。基本的には基盤となる段丘面を構成する礫層・粗砂層まで掘削したが、基盤が深く落ち込む調査区西側では、VII層上部の遺物の出土が見られなくなった時点で掘削をストップし、それ以下に包含層が存在しないことをトレンチにより確認した。包含層の下で出土した土器は2点あるが、出土状況は第4章第2節に述べる。

グリッドは磁北にあわせて4m×4mで設定し、グリッド名は北から南へ順に8～63の数字を、東から西へB～Yのアルファベットを付した。

8月25日、調査は23～30グリッドにおいて始まった。中世から近世の陶磁器類は耕作土や水田敷から出土し、遺構も伴った。縄文時代の遺物は若干の疎密を見せながらも散漫に分布する様子が見え、遺構は全く検出されなかったことから、中世・近世の遺構の調査、縄文時代遺物包含層の調査と遺構の確認を調査の指針とした。プランは表れていなくても、遺物の集中している箇所にはトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。

8～22グリッドまでの起工承諾を得て、10月27日より重機で耕作土・水田敷を除去し、11月17日より調査を開始した。冬場の降雪の間を縫って作業は行われた。

平成5年度に入って4月12日から31～44グリッドの表土除去を行い、7月8日から44～52グリッド水路西側、10月13日から53～61グリッドの水路西側、12月2日から42～53の水路東側の表土掘削に入り、調査を行った。平成6年3月19日、現地における作業を終了した。



株式会社
イビック調査

財団法人
岐阜県文化財保護センター

第2図 勝更白山神社周辺遺跡調査区

第2章 勝更白山神社周辺遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

位山白山分水嶺に源を発し、岐阜県西部を縦断して南流する長良川。高賀山地、和良山地の間を刻みながら、やがて濃尾平野へ流れ出る。この長良川上流部は奥美濃地方と呼ばれ、今も素朴な文化と人情を感じる山紫水明の地として訪れる人をなごませる。

長良川は谷底部を緩やかに曲流し、その左右には交互に河岸段丘面が残される。勝更白山神社周辺遺跡もこうした段丘面の上に位置している。川面との比高差は5m程の低位段丘である。長良川は有坂付近で一旦谷底部の右端に寄り、八幡町市街地付近までに左端へと谷底部を横切り、ここで吉田川と合流する。この時谷底部左岸に残されたのが五町の段丘で、右岸に残されたのが勝更の段丘である。勝更の段丘の西側は標高500m前後の山塊が迫る。この山塊の土砂が段丘上に押し出され、いくつもの扇状地状の地形を形成している。この地域は地質的には古生層の砂岩・チャートが複雑に褶曲しているが、調査区を覆う崖錐堆積物は砂岩で占められている。

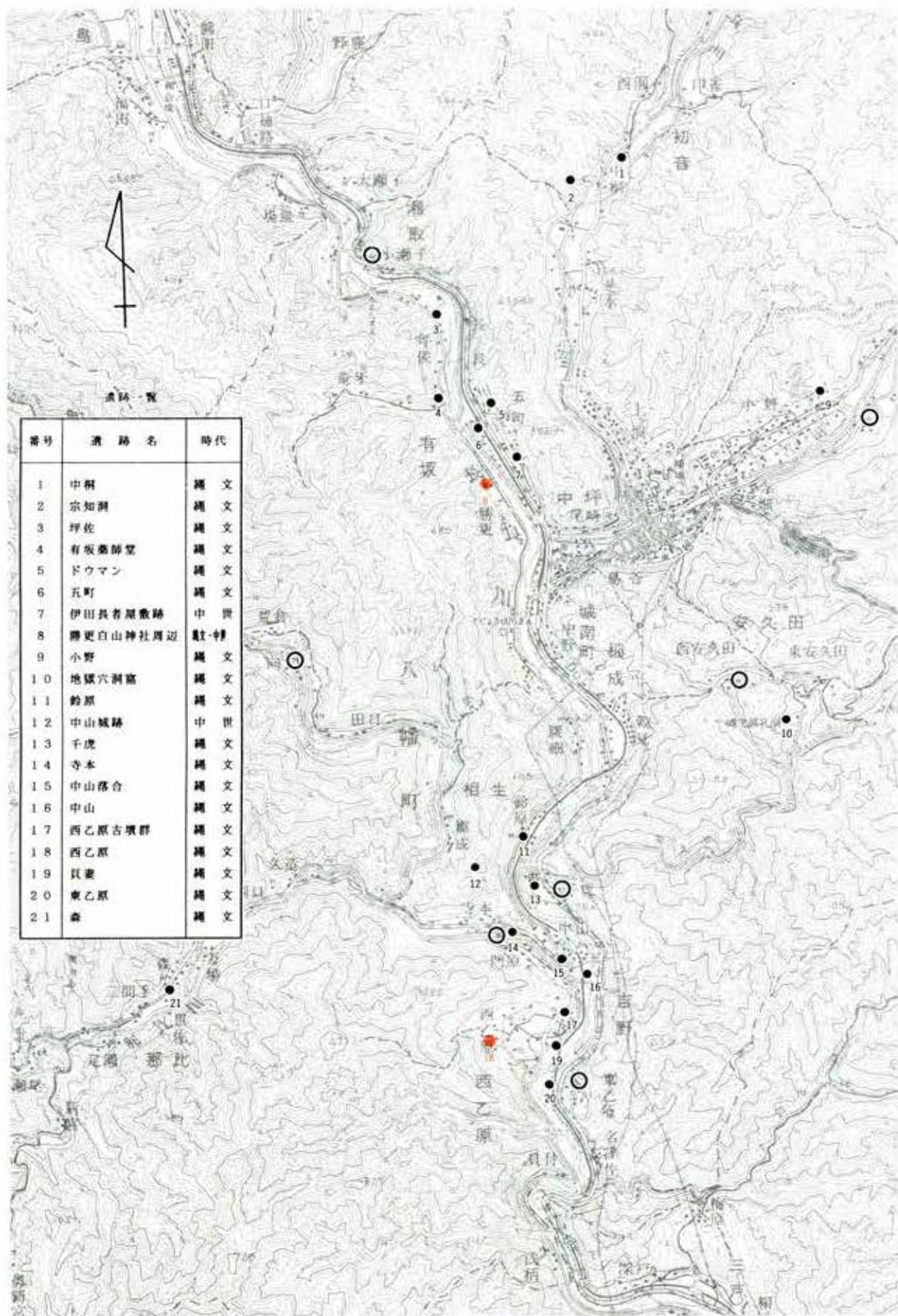
遺跡はこの段丘面の北部に位置し、段丘幅の狭い部分である。調査前には段丘面のほとんどが水田及び休耕田の牧草地となっていた。扇状地状の高地は、主に雑木林・畑地となっているが、住居の多くはここに営まれている。

第2節 歴史的環境

長良川流域及びその周辺の主な遺跡については、第3図でその位置を示したが、縄文時代の遺跡が多く分布している。

当遺跡より北（町内）の長良川の河岸段丘上には、五町、ドウマン、坪佐遺跡、そして、勝更のすぐ北に有坂薬師堂遺跡がある。当遺跡の対岸に位置する五町遺跡からは石製土掘具、磨製石斧が出土しており、特に石製土掘具が多く出土している。長さが23cm程度の大形の資料も見られる。また、性格や時期は不明であるが住居跡であろうと推測される遺構が検出されている。有坂薬師堂遺跡は、調査時の昼休みなどを利用して表面採集調査を行い、チャート岩製の剥片・石匙とともに縄文式土器片を表採したが、磨耗が激しいため時期等は不詳であった。

遺跡より南の段丘上には、千虎、中山、西乙原、東乙原、貝妻、塚前遺跡などがある。東乙原、貝妻遺跡などからは縄文時代早期から晩期にわたって土器片が出土しているが、中期・後期のものが主である。貝妻遺跡は、俗称「乙女岩」という高さ1.25m、幅0.8m程の自然石のメンヒルが立っている付近一帯の約1haが遺跡範囲である。ここからは縄文式土器片約200点、土偶片が出土しているほか、石皿・石棒・たたき石・石製土掘具・磨製石斧・石鏃・石匙・石錘・石版などが出土している。また、長良川を挟んで貝妻遺跡の対岸の河岸段丘面に位置する東乙原遺跡からは縄文時代中期の土器片のほか、土錘・石匙・打製石斧、そして、珍しいものとしては石笛が出土するなど多様な石器組成を示している。また、長良川と吉田川の合流点から下流約1.5km、長良川の左岸にある穀見地区南部に位置する塚前遺跡からは、縄文時代中期の土器片・弥生式土器片・石鏃・石製土掘具・磨製石斧などが出土



第3図 八幡町長良川流域の遺跡と白山神社

している。さらに竪穴住居跡の炉跡も検出されている。

一方、吉田川も町内において幅20m～200mほどの河岸段丘を形成しているが、長良川との合流点から2kmほど遡った右岸の河岸段丘上に存在する小野遺跡からは、多くの縄文時代の遺物が出土している。その遺物の中には早期の押型文土器片3点が含まれ(S47年出土)、有舌尖頭器1点も出土している。また、八幡町から金山町へ通じる堀越峠の南側に位置する安久田地区内の地獄穴洞窟遺跡(標高約370m)からも早期から晩期にわたる縄文式土器片や弥生式土器片が出土し、炉跡や石器類も検出されている(S45年)。早期の土器片には貝殻条痕文が付けられ胎土に繊維が含まれるものや沈線文様を持つものが出土している。

このように、八幡町内では吉田川の河岸段丘や高所の洞窟などには縄文時代の早期・前期からの遺跡が多く、長良川流域の段丘上には中期・後期の遺跡が比較的多く確認される。縄文時代における生活域の変化も考えられるが、資料は未だ断片的である。

古代以降について概観すると、福田古墳(大和町)・西ヶ洞古墳(白鳥町)などの古墳や遺物散布地が確認されており、古代においても長良川上流域は集落として拓けていたと推測される。

また、国内において神仏習合思想の普及(8～10c)以降、仏教の勢力は増大するが、郡内においては長滝寺がその最高勢力者となった。その長滝寺を中心として郡内のほとんどの各村落に白山神社が勧請せられ、鎮座するようになり、郡内唯一の靈驗地としてその神霊的威光を輝かすことになった。現在全国で白山神社の数は二千余社といわれているが、そのうち五百余社が美濃・飛騨両国に在って、多くは中世に開創勧請されている。この信仰が広まる中世において、本山へ参詣するための道が開かれたようである。参詣の道は美濃路から長良川に沿って須原・八幡・白鳥・長滝と北進していた。つまり、美濃・尾張方面からの登拝者は、まず濃尾平野の北端に位置する“里の宮”洲原神社に詣で、次に長良川に沿う郡上街道を北上して白山山系の南麓に鎮座する中宮長滝寺に参詣した。「上がり千人、下り千人」と称されたのはこの頃である。その他、登拝するルートは二通りあった(白山記に「三箇の馬場は、加賀馬場・越前馬場・美乃馬場なり。加賀馬場は本馬場なり」と記され、三方の馬場から、御山すなわち白山に盛んに登拝が行われていたことがうかがえる)。この交通路に当たる穀見の塚前地区において鎌倉期のもと考えられる大甕・釜・鍋が地下約1mから出土している。

15・16世紀、町内には10の城が築造されたことが知られている。しかし、その城跡は当時の面影をほとんど残していない。単に石塁を積み上げるか乾壕をめぐらしていた程度のものである。郡上城(八幡城)については、寛文7年(1667年)に改修されたようである。その機会に城下町が整備され、且つ、郡上藩の特別保護によって発達していった。このような経緯から、この地において活発な人間活動が繰り広げられてきたことが類推される。

郷土史家喜多七五郎(1866～1958)が速水敬行の「名所図絵」を模写したものの中に、天保年間の勝更の古景をみることが出来る。崖錐の斜面に街道が描かれている。現在の県道は川に沿うようにして走るが、かつての道は山側にあった。字名の道下もそれを示している。

第3章 勝更白山神社周辺遺跡の基本層序

地層の識別と区分にあたっては、土壌の様相（色調・粒度等）、礫の様相（礫の多少、大きさ、形状等）を基準にした。これら区分された各層は、その堆積のあり方、遺物の有無等を考慮して9つの群に大別した。これら大別された層の名称は、地表に近い層から、つまり地層の堆積順序とは逆にローマ数字を付した。また、区域によってその様相は異なるものの同等に扱えるもの、連続性が見られるものについてはローマ数字の右肩に「」を付した。大別された地層が上記のような視点で細別される場合には上からアルファベットを順に付した。

I 層

I層・I'層は旧表土である。I層は水田耕作土（旧水田耕作土）で水路東部の旧水田域全面に見られる。当層の下面は215,800～215,900mまでの間にほぼおさまり、水平に広がる。陶器片が出土し、土器石器もわずかに含まれるが、いずれも小片で磨滅が著しい。

また、水路西部の栗林部にみられる腐植土をI'層とした。崖錐堆積物を薄く覆うI'層からは、遺物は全く出土しなかった。

II 層

砂粒は均一に粗いが、かたくしまり、鉄分が沈着して全体的に褐色味を帯びる水田敷である。II'層は調査区北部西側のII層下位に見られる。砂粒は粗く、II層と同質であるがII層ほどしまりはなく、鉄分の沈着がみられない分色調も暗い。II層とは漸移的に重なっており、水田面を水平に整えるための客土であろう。遺物の出土状況はI層と同様である。

III 層

主に山塊に沿って調査区西側に堆積する崖錐層を一括した。第5図に49列の断面にみられる堆積状況を図示した。III a～III i層に細分され、層厚厚く黄褐色を呈する。III a層は山麓斜面のみに広がり、III b～III e層は若干の角礫を伴い広く調査区南部を覆っていた。III層の崖錐堆積物中の角礫は全て砂岩であった。III b～III iのシルト質壤土・砂壤土とIII aの角礫層が一度の崩落によって連続して堆積したものかどうかは定かではないが、III b～III e層については土壌の分解はほとんど進んでおらず、比較的短い期間内に行われたと思われる。

IV 層

V層の上、崖錐及び崖錐の二次堆積と思われるものを一括した。49列地層断面図と25列の基本層序図に図示した。49列はIV a～IV g層の7層、25列ではIV h～IV k層の4層に細分される。49列の断面を中心に述べたい。IV a層以下には壤土・シルト質壤土の薄い互層が堆積し、山側埋没谷の上部を埋めている。IV b・f層を除いて暗褐色～黒褐色を呈し、小さな pore がみられることから、土壌が断続的に供給され、随時分解が進んだものと思われる。土壌の供給と分解のバランスから色調の変化が生じたと考えられ、その意味でIV b・f層もこの堆積の中でとらえることができる。これらの層が埋没谷上の小凹地以外に広がらず、堆積状況もほぼ水平であることなどIII層の状況との相違も感じられ、土壌の供給源として、直接「山塊」を考えるわけにはいかない。しかし、IV b・fのにおい黄褐色・褐色シルト質壤土や25列IV h層中の角礫の存在から、間接的には山土を供給源として考えることがで

きる。したがって実際はIII層とIV層の区別が困難な場合も生じ、III h・i層をIV層に含めて考えることも可能である。たまたまIII i層とIV a層の層理が明瞭であったことと、分解の有無等考慮して、III iはIII層に含めた。どの層も山側ほど粘性強く、緻密である。層は漸移的に推移している。25列にみられるIV h～k層は、49列IV a～g層の一群に相当するであろう。調査では、IV層までを重機により除去し、それ以下を手掘りで掘削した。

V 層

暗褐色の砂壤土である。砂粒はやや粗いがVI層への推移は漸移的である。当層の下部より土器、石器は出土するが小片が多く、立位で出土するものもみられることから下層からの浮き上がりの可能性が高い。傾向として弥生時代の遺物が多い。したがって1つの独立した文化層として認識するには至らなかった。調査区東側は削平をうけ、当層は薄いか滅失している。

VI 層

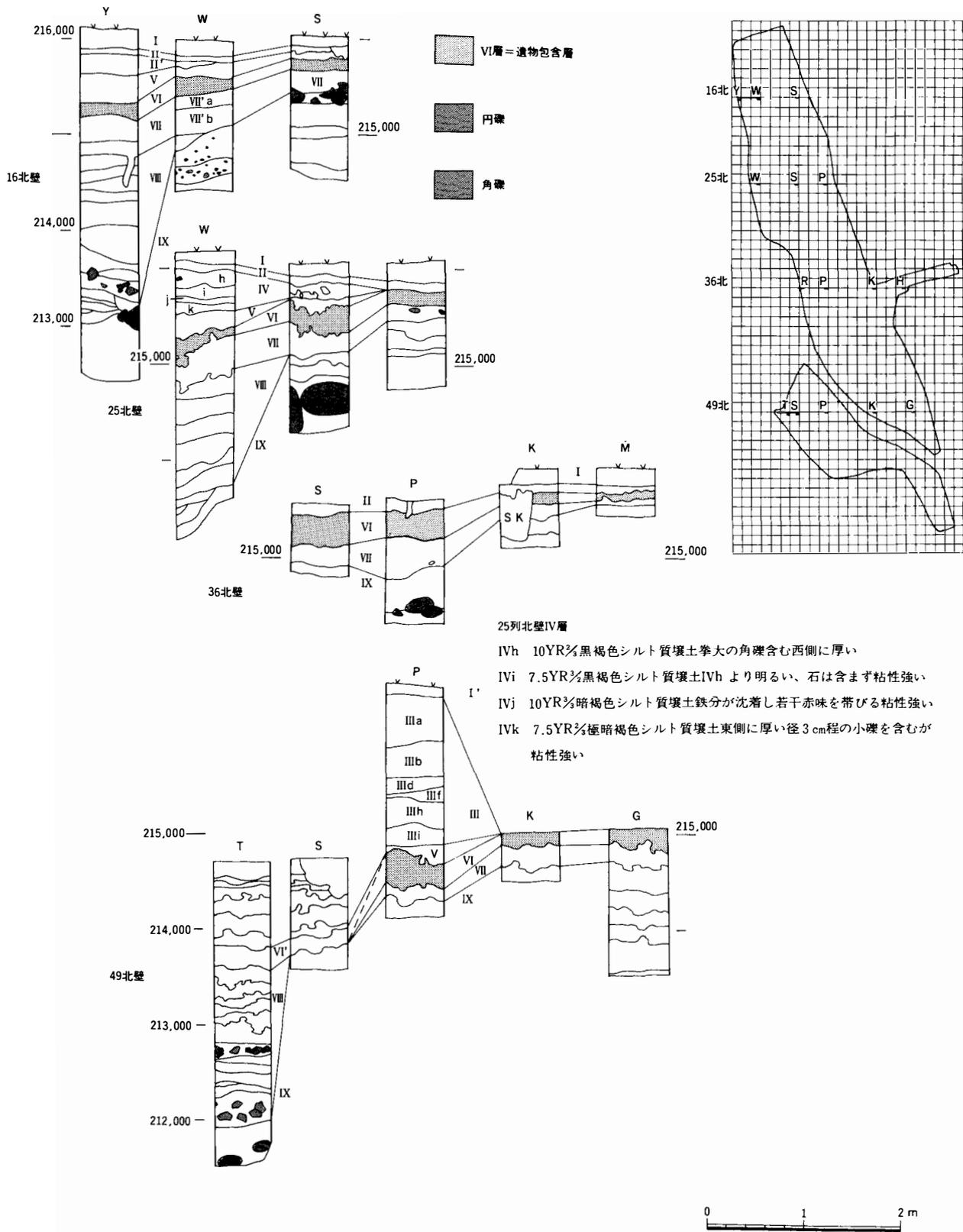
調査区のほぼ全面に広がる縄文時代遺物包含層で、当層を中心として中期末～晩期及び弥生時代の遺物が出土する。黒褐色の壤土で全体的に軟質である。分解が進みポーラス化もみられる。VI層下底部を南北におうと調査区北部～中部では215.570～215.560mほどで平坦に広がり、以南で若干低くなる傾向をみせるが顕著ではない。一方、東西では西ほど低くなり、埋没谷部ではシルト質が強くなり明度を増す。後期前半の土器(第III期第4群164)が埋設状態で出土した土坑は当層中位より掘り込まれており、層中に遺構面が存在したと考えられるが、肉眼による分層はできない均一な層であった。

VII 層

調査区のほぼ全面に広がる砂土層で、当層の上部までで遺物の出土はみられなくなる。当層の上部からVI層において中期末～後期初頭の資料がまとまってみられる箇所もあるが、他時期の土器もこの層準で出土するなど総じて時期的な混在がみられ、層位による時期区分は当層でも困難であった。ただし、中期末～後期初頭の土器片が総じて大きく横位で出土したのに対し、他時期の土器片には立位で出土するものがあるなど上下移動の可能性もみとめられる。中期末以降、VII層上部～VI層において縄文人の活動が行われていたと思われるが、連綿と続くこの活動をVII～Vの漸移層によって分けることはできなかった。VII層もVI層同様、埋没谷部では壤土化し、色彩が淡くなるとともに遺物も減少する。若干グライ化が進んでいるようにも見える。VII層は埋没谷をも覆うように広がるが、当層形成時は谷部が湿地状態であったと推測される。

VIII 層

VII層の下、埋没谷を埋める堆積物をVIII層として一括した。その堆積状況を示す16列北壁、49列北壁の土層断面図を図示した。16列ではVIII a～t層の20層に細分した。マトリックスは概ね粗い砂層であり段丘構成礫層と類似するが、VIII t層の下には不整合面が確認できる。そこで、VIII t層以上をVIII層とし、角礫・亜角礫のみられないそれより下を段丘層ととらえた。これらの堆積層には、VIII s層のように円礫を多く含むもの、VIII l層のように角礫を多く含むもの、VIII t層のように亜角礫・亜円礫を含むものなどが見られ、崖錐による堆積、川による堆積、崖錐堆積物の二次的な堆積等が複雑に重なりあっている様子が観察できる。また、不整合面が何枚かみられることから小規模な開析作用も何度かくり返されているようである。この谷部が一度に埋まったのではなくて、水の流れが存在し、堆積と開析をくり返しながらか、それに崖錐も加わって、順次堆積したものである。これらの堆積物は不整合



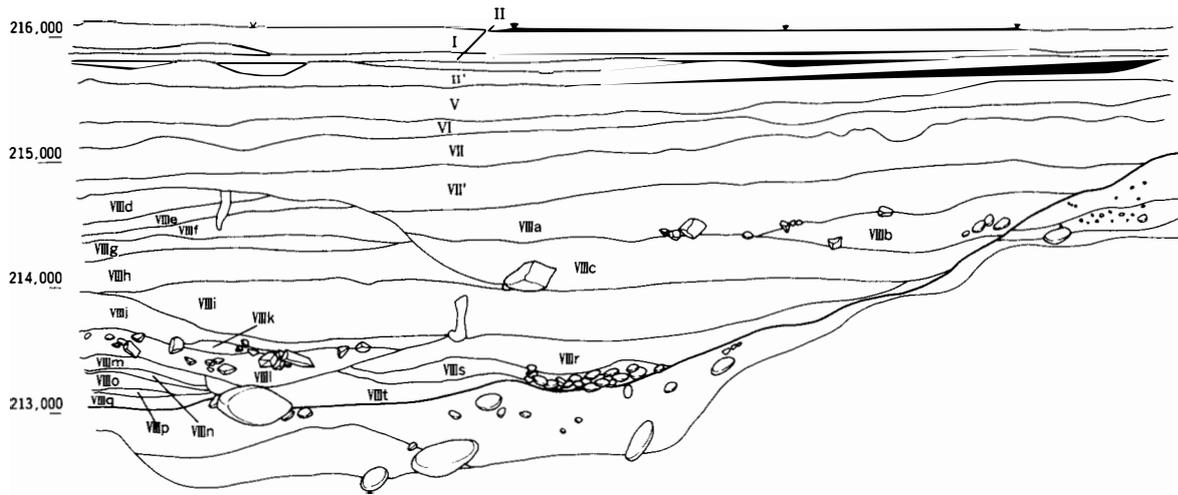
第4図 勝更白山神社周辺遺跡土層柱状図

面によって、VIII a～c層、VIII d～i層、VIII j～q層、VIII r～t層の4つにまとめることができる。VIII r～t層は崖錐の二次堆積礫を含む埋没谷の流れによる堆積。VIII j～q層は角礫が多いこと、山から斜めに堆積していることから崖錐性の堆積物と思われる。VIII d～i層の流れによる堆積で谷がほぼ埋没した後、再び開析をうけて、VIII a～c層が堆積する。これは崖錐二次堆積を含む流れによる堆積である。全体の傾向として、埋没していきながら、谷は東へ寄っていく様子が看取できる。

49列はVIII a'～m'層の13層に細分した。不整合面が発達せず、堆積している礫は角・亜角礫がほとんどであるなど様相は16列とは相違する点が多い。VIII f'～m'層は礫が水平に堆積しており、マトリックスも粗砂で崖錐の二次堆積と考えられる。しかし、VIII e'層以上の堆積はシルト質土の堆積物と砂土の互層で山から斜めに堆積しており、IV層の状況と類似している。ただし、poreは発達しない。上流で谷が埋没したあと、下流地域には微凹地が残り、山塊を供給源とする堆積が包含層形成期を含めて断続的に微凹地を埋めていったと考えられる。VIII d'層において、土器底部片が1点出土している。

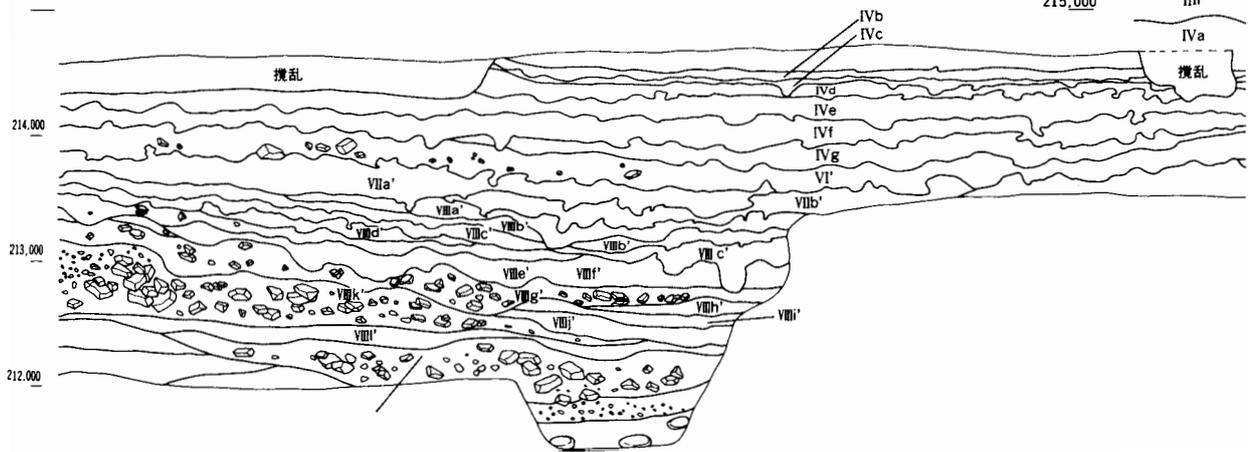
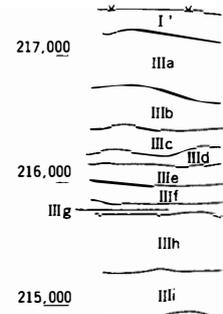
IX 層

基盤層をIX層とした。調査区東側を南流する長良川が形成した段丘を構成する堆積物である。円礫の堆積物と粗砂のみの堆積物とが、帯状に分布する。円礫は上流に向かってインプリケーションをみせる。西側には急峻な山塊がひかえており、この山塊に沿うようにして段丘西部が2 mあまりの深さで刻まれ、浅い谷状の地形をなしている。



16列北壁Ⅷ層

- | | | | |
|----|----------------------------|----|-----------------------|
| Ⅷa | 10YR%に黄褐色砂土、礫なし、下部に円、亜円礫有り | Ⅷj | 5 YR%に赤褐色砂土、鉄分で赤化 |
| Ⅷb | 10YR%に黒褐色砂土、下部に亜角礫有り | k | 10YR%に赤褐色砂土、鉄分で赤化、粗粒 |
| Ⅷc | 10YR%に暗褐色砂壤土 | l | 10YR%に赤褐色砂土、拳大以上の角礫多し |
| Ⅷd | 10YR%に暗黄褐色砂土 | m | 7.5YR%に灰褐色砂土 |
| Ⅷe | 10YR%に黒褐色砂土 | n | 7.5YR%に褐色砂土 |
| Ⅷf | 10YR%に灰褐色砂土 | o | 7.5YR%に橙砂層 |
| Ⅷg | 10YR%に黒褐色砂土 | p | 7.5YR%に褐色砂土 |
| Ⅷh | 10YR%に灰褐色砂土 | q | 10YR%に黄褐色砂層、粗粒 |
| Ⅷi | 10YR%に黄褐色砂土、粗粒、砂利 | r | 10YR%に褐色砂層、粗粒 |
| | | s | 10YR%に褐色砂層、粗粒 |
| | | t | 10YR%に褐色砂層 |

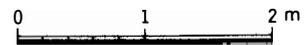


49列Ⅲ層

- | | |
|----|------------------------------|
| Ⅲa | 10YR%に黄褐色、角礫多し |
| Ⅲb | 10YR%に灰褐色の砂上10cm程の亜角礫が小礫に混じる |
| Ⅲc | 10YR%に黄褐色砂土 |
| Ⅲd | 10YR%に褐色シルト質壤土 礫含まず |
| Ⅲe | 10YR%に黄褐色シルト質壤土 |
| Ⅲf | 10YR%に褐色砂質土 礫なし |
| Ⅲg | 10YR%に褐色砂土、小礫多し |
| Ⅲh | 7.5YR%に暗褐色砂質土、角礫多し |
| Ⅲi | 7.5YR%に褐色シルト質壤土、礫なし |

49列Ⅳ層

- | | |
|----|--------------------------|
| Ⅳa | 10YR%に黒褐色壤土、粘性強い、角礫多し |
| Ⅳb | 10YR%に黄褐色シルト質壤土、粘性強い、礫なし |
| Ⅳc | 10YR%に黒褐色壤土、粘性強い、礫なし |
| Ⅳd | 10YR%に暗褐色シルト質壤土、粘性強い |
| Ⅳe | 10YR%に黒褐色シルト質壤土、粘性有 |
| Ⅳf | 10YR%に褐色シルト質壤土、粘性強い |
| Ⅳg | 10YR%に暗褐色壤土、粘性あるが弱い |



第5図 勝更白山神社周辺遺跡16列(上)・49列(下)土層断面図

第4章 勝更白山神社周辺遺跡の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物出土状況

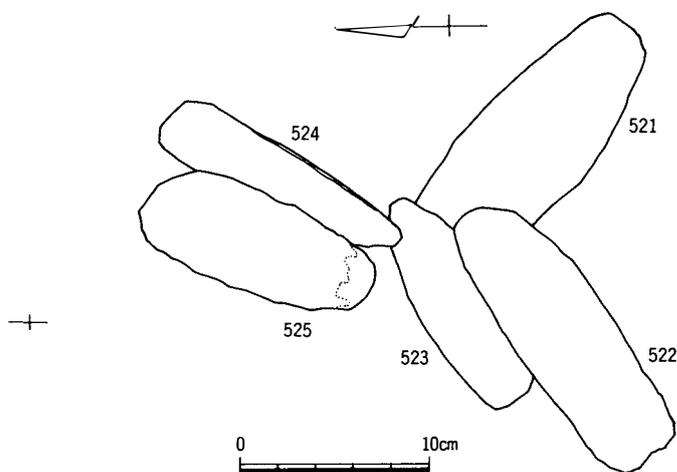
本遺跡から出土した縄文式土器片、石器類は総数で18,000点ほどである。その出土状況を第6図に示した。各ドットが土器片1点、石器類1点を示す。若干の疎密をみせながら散漫に広がるが、10Yグリッド付近、40Iグリッド付近、47Hグリッド付近、54Gグリッド付近など、やや集中する箇所にはトレンチを設定して遺構の有無を確認した。

結局、土坑・住居址等を確認するには至らなかったが、47H区を中心とする遺物集中部において焼土塊を確認した。遺物集中部とはいっても個体数は決して多くはなく、10Y付近の集中は無文の土器数個体に、40Iでは弥生式土器数個体に同定できるのみである。54Gグリッド付近については第5章において詳述するが、中期末の土器片がチャート岩製の剥片類・粗質安山岩製の剥片類とともに出土している。

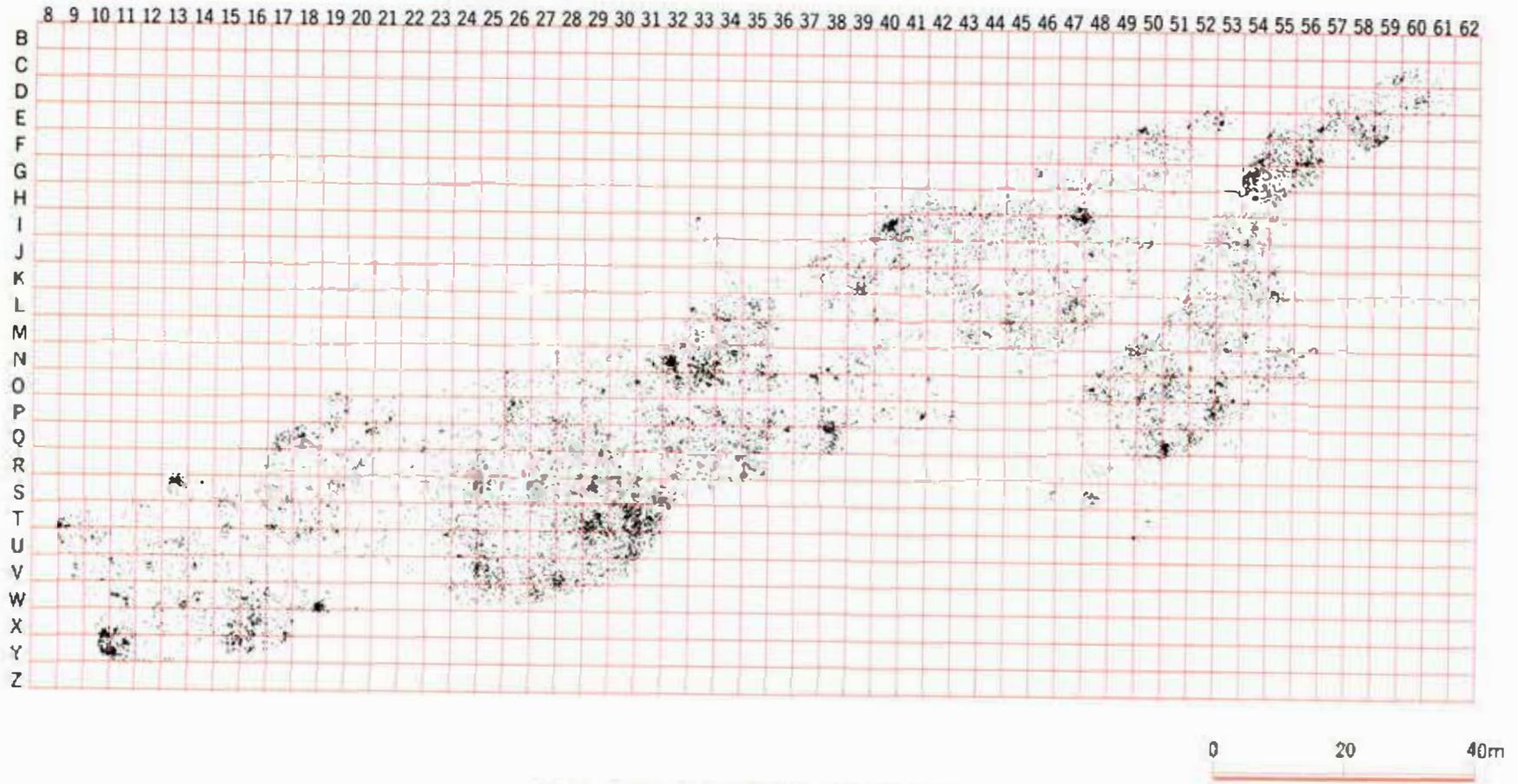
また、12V区において5点の石製土掘具がY字状に集積された状況で出土しており、32M区では縄文時代中期末の土器片が敷設されたような状態で、38J区では縄文時代後期前半の土器が埋設された状態で出土した。

④12V石製土掘具出土状況（第7図・第46図 521～525）

12Vにおいて、5本の石製土掘具がY字状に集積された状態で出土した。521を最も下にして、中央部で積み重なっている。521・524・525は一端に磨耗がみられるが、522・523には認められず、使用されたものと未使用のものが混在して集積されているようである。また、524・525の磨耗は顕著であるのに対して521は発達せず、使用頻度も定まっていない。521・524・525とも刃部を中央にむけており、刃部を意識して設置したものと考えられる。525は短冊形、521・524はやや先細りの形状を呈している。524・525は磨耗が刃先と一面に発達し、521は側縁部に発達する。



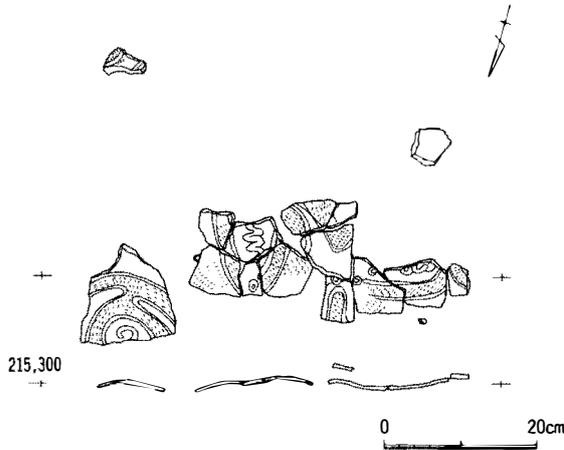
第7図 12V石製土掘具出土状況図



第6図 藤更白山神社周辺遺跡 出土遺物分布図

②32M土器片出土状況（第8図・第12図 18・19）

VII層の上部において、中期末の土器片が敷設されたような状態で出土した。出土時には十数ピースに割れていたが、元来は3ピース程の大きな破片と周囲の小片であったと思われる。全て外面を上

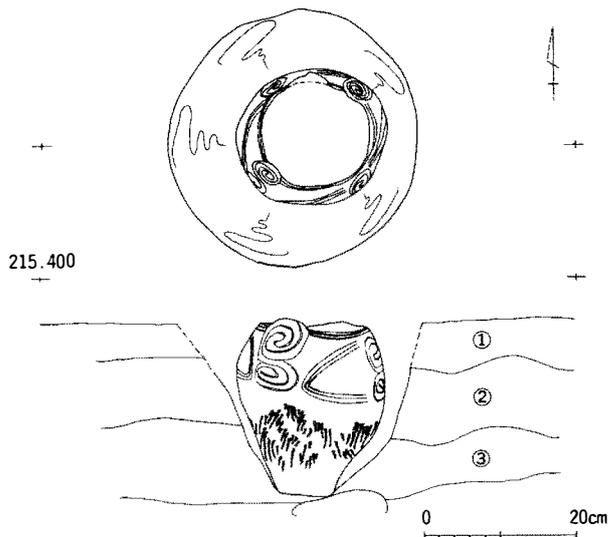


第8図 32M土器出土状況図

むけて出土している。最も東の土器片は胴部下半部の破片であるが接合関係は認められなかった。口縁部方向を北に向けている。最も西の一群は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は東を向いている。これらの土器片は同一個体と思われ、中央の一群と西の一群には接合関係が認められる。ただし、これらの破片の口縁部方向は異なっており、土器がそのまま潰れた状態ではなく、破片となった段階でこの状態に敷設、あるいは廃棄されたのであろう。

③38J土器出土状況（第9図・第18図 164）

①層はVI層に相当し、②層の漸移層を経て③層のVII層相当層に移行する。土器がぎりぎり納まるほどの大きさの土坑内に、土器が正置で埋設されている。土器の下半部は土坑壁に接し、やや東に傾いている。埋土は①層と同質であるが、やや粗い砂粒も僅かにみられる。土器内の土も埋土と同様である。土坑掘り込み面は確認できなかったが、土器の口縁部は①層中に5～6cm出ていることから①層

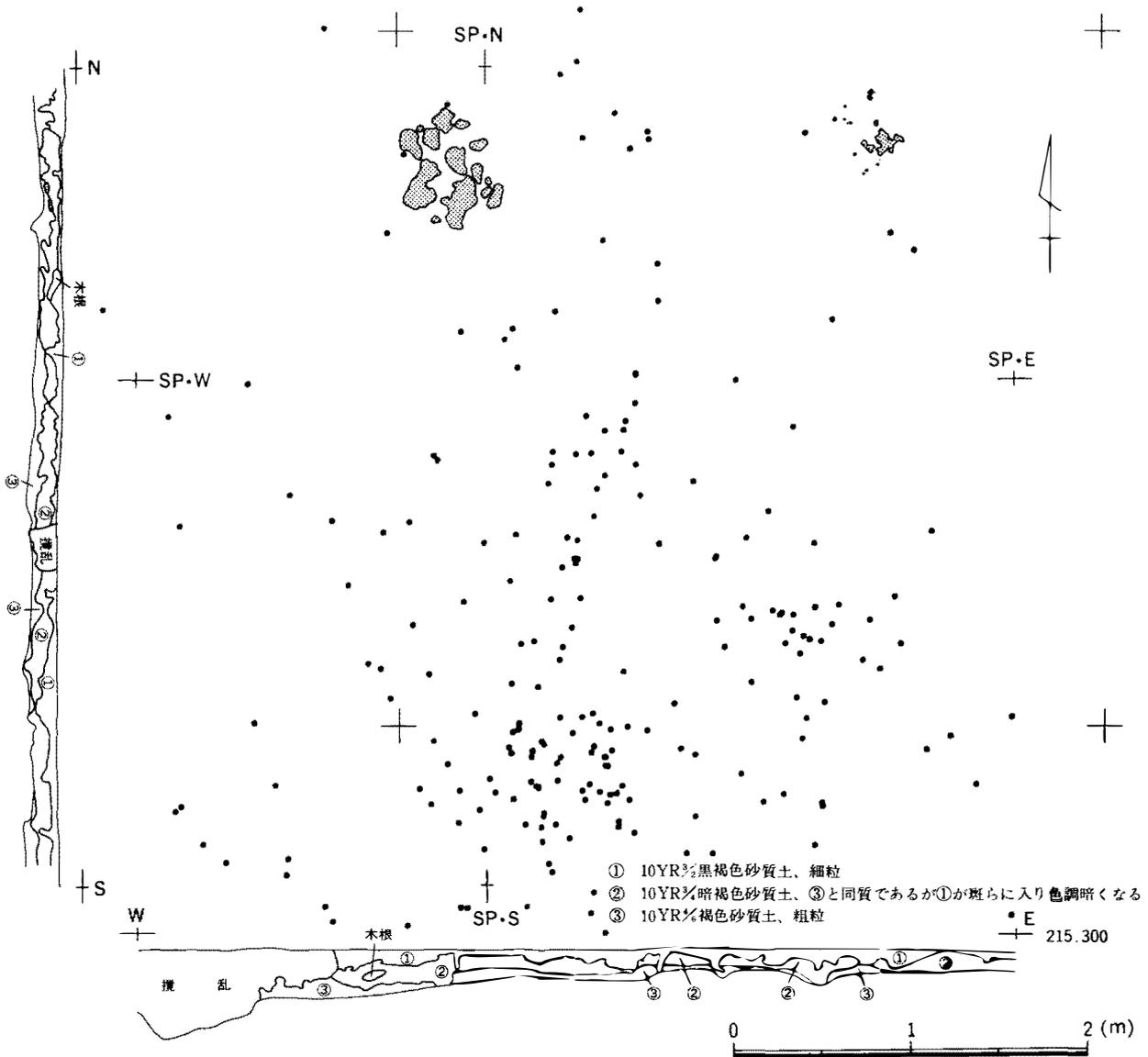


第9図 38J埋設土器出土状況図

中より掘り込まれていたようである。VI層中に生活面があるならばVI層細分の必要性もあるが、この面の上下の土質・色調に変化は認められず、細分は難しい。周囲には遺物の集中する様子もみられず、遺構も確認されていない。単独で出土するこの埋設土器の性格を検討する材料を得るために、当資料については脂肪酸分析を(株)ズコーシャに依頼して行った(第6章第1節)。分析後土器内の土を水洗いしたが、若干の小礫が出土したのみであった。

④47H土器片集中部（第10図）

47Hを中心とする区域で、後期初頭の土器片が径3～4mの範囲にまとまって出土しており、十字にトレンチを設定した。①層はVI層に相当し、③層がVII層に相当する。②層はVII層とVI層の漸移層である。遺物は①・②層より出土し、③層からの出土は減少する。集中部のやや北寄り、焼土塊が2ヶ所で検出された。だんご状の赤化した砂質土の小塊で、②層中から③層上面において確認された。出土高低差は少ないが面的には広がらない。炭化物も若干みられるが分布は散漫で西に偏り、炭化物の分布する域には遺物を伴わないことから炭化物は攪乱に関連するものと思われる。焼土以外、住居址等の遺構は確認されなかった。出土する遺物は土器片のみで、石器は微量であった。



第10図 47・48H・I 遺物の分布と焼土塊出土状況図

第2節 縄文・弥生時代の遺物

(1) 土器

縄文時代遺物のほとんどはV～VII層において出土したが、VIII・IX層からそれぞれ1～2点の土器片が出土している。また、弥生時代の遺物はV層を中心に、VI層からも出土している。

IX層出土の遺物（第11図1・2）

当層は段丘を構成する礫層であるが、人頭大以上の円礫の間から土器片2点が出土した（1・2）。2点は近接して出土し、胎土等から同一個体と思われる。口縁部がラップ状に開き、胴部には逆U字形に粘土紐が貼り付けられる。1では逆U字の隆帯が並んでみられるが、2の粘土紐は一本縦走するのみで連続性は確認できない。粘土紐は指頭ナデが加えられ、縦走する部位は断面がかまぼこ形に、横走する部位は断面三角形に整形されている。粘土紐の上端には竹管状の工具による刺突を連続して施す。全面にナデの施される粗製土器で、胴部外面中位付近にはススが付着している。

VIII層出土の遺物（第11図3）

当層は調査区西の埋没谷を埋める堆積層である。当層の中位付近の砂層より土器片底部が出土した。内面にススが付着し、ローリングも受けていないことから、埋没谷の存続時期について知る手がかりとなる土器である。しかし、外面に縦方向のナデが施される粗製の土器で、時期は特定できない。底径は13.5cmと大きく、底面には1本越え1本潜りの緻密な網代痕が残っている。

V層～VII層出土の遺物（第11図～第35図）

出土した土器は縄文時代中期末～弥生時代まで長期間のものであるが、第3章の層序の項でも述べたように、V層～VII層出土の遺物については出土層による区分は不可能であった。したがって、当層出土の土器については形態的な特徴から分類を行った。

土器は便宜的に7期に大別し、それぞれの時期を以下のようにした。また、帰属時期の不明確な資料も最大限報告するために、形態的な属性のみから分類項目に含めた資料もある。

第I期 縄文中期末	第II期 縄文後期初頭	第III期 縄文後期前葉
第IV期 縄文後期中葉	第V期 縄文後期後葉	第VI期 縄文晩期
第VII期 弥生以降	第0期 無文系土器	

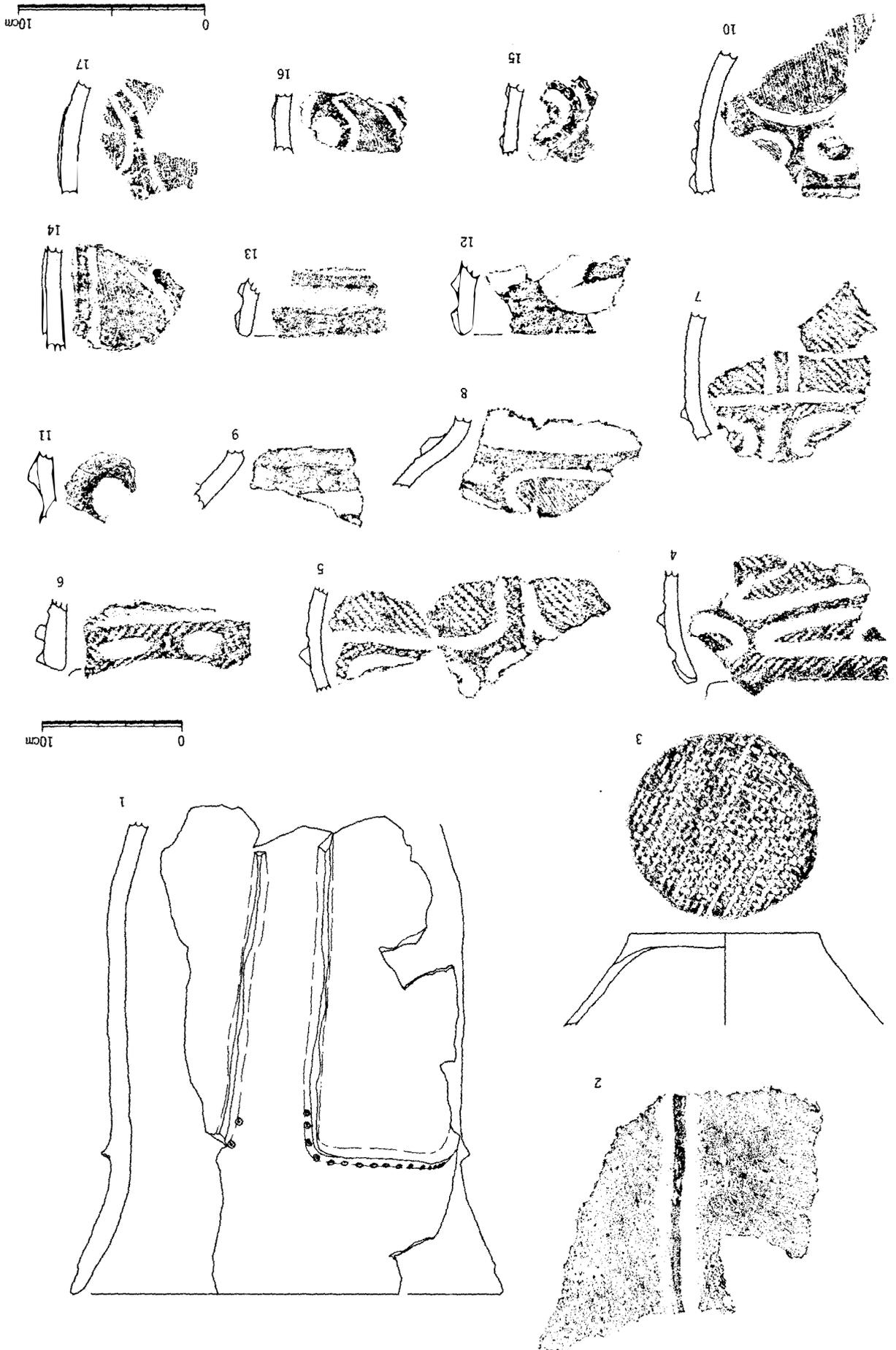
第I期（第11図・第12図）

中期末に属すると考えられる土器群である。VII層において出土した土器が多いが、V・VI層の出土品で文様や胎土の類似するものも含めた。口縁部に杵状の区画を設けるものを第1群とした。それ以外は小片か胴部片であるが、凹線に刺突を施すという特徴でくくられる一群があり、これを第2群とした。その他胴部片を第3群として一括した。

第1群（4～21）

口縁部に隆帯または沈線によって杵状の区画を設けるもの。隆帯による区画か沈線による区画かで

第11図 縄文式土器拓影図 Ⅷ・Ⅸ層出土の土器・第1期に属する土器



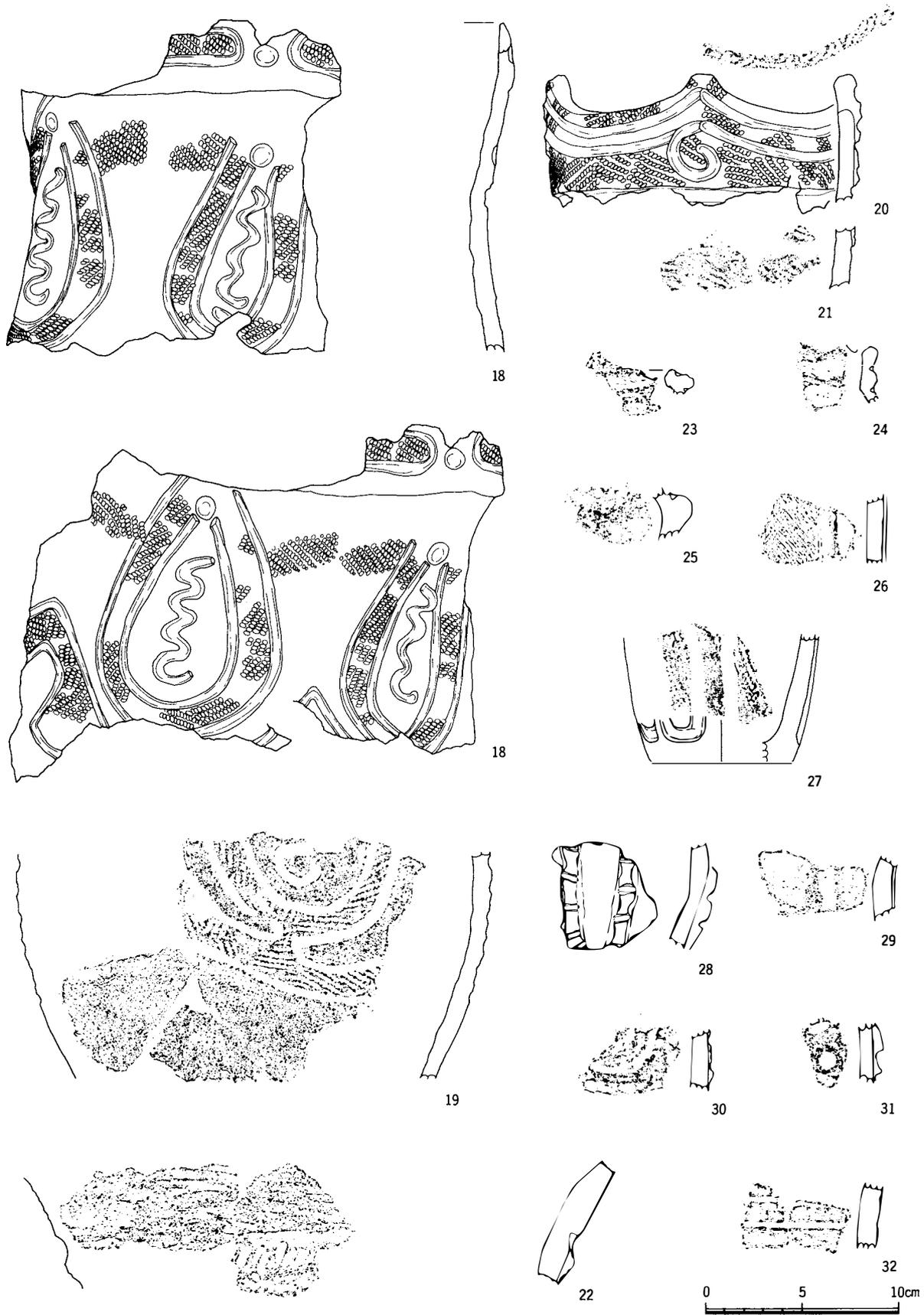
2つに細分する。

1類(4~17)は隆帯によって区画するものである。4~7は区画内に縄文を充填している。4は口縁上端に低く幅広の隆帯を貼り付け、その下に高く太い隆帯によって楕円の区画文を描く。区画は横長のもので短い楕円のものがあり、その区画文間には口縁端に突起を配置する。隆帯の両サイドを、広く浅く断面の丸い沈線がなぞる。同様の沈線が長楕円区画文の下から垂下し、胴部を区画する。短楕円区画文下でも何らかの胴部区画があったことは、隆帯下部をなぞる沈線がここで途切れることから推測されるが、欠損のため詳細は不明である。全面にLR縄文を施す。5は、短楕円区画文下から隆帯による胴部区画が垂下するが、長楕円区画文下からは胴部区画は垂下しない。隆帯の両サイドには、やはり広く浅く断面の丸い沈線が施され、全面にLR縄文が施される。6は山形口縁の波頂部である。上端とそのやや下に隆帯を横位に貼り付け、その中央部縦位に2本の隆帯を貼り付けて区画する。7も2本の縦位隆帯と下部の直線的な隆帯で楕円に区画するが、この縦位の隆帯には縄文は施されない。この区画の直下から、隆帯を伴わない2本の沈線が胴部に垂下する。

4・5では楕円区画文の下から胴部区画文は垂下するが、7は区画部下から垂下する。7にみられる2本の隆帯間の空間を4・5の短楕円区画文的な意味合いでとらえることも可能である。他にも7には4・5の退化現象がみられ、段階的な差も感じられる。しかし、4~7は胎土、調整、焼成など同質であり、同一個体の可能性もある。いずれも区画施文の後、LR縄文を施文する。

8~17は区画内に条線を充填している。8は頸部が強く外反して口縁部で内彎するキャリパー形の土器である。隆帯は太く発達している。区画内を左上から斜めの条線で充填した後、区画隆帯内側を広く浅い沈線がふちどる。9は口縁部の隆帯が剥落し、剥落部の上端には、区画内側をなぞったと考えられる沈線がみられる。10は渦巻と楕円の区画文を配し、楕円の区画文内には左上から斜めの条線を充填し、区画隆帯の内側を沈線がなぞる。上部は隆帯の上で折損し、部位の特定はできない。渦巻文部、上部隆帯はナデにより肩をなだらかに仕上げる。区画部にはナデが施されず、隆帯をふちどる沈線により肩が明瞭となるのと対称的である。胴部は、上部が丸くアーチ状に区画され、区画内を条線が縦に走る。区画の左には2本の沈線が、右には隆線がみられるが、隆線右部は肩がなだらかであり区画文ではない何らかの文様意匠があったと考えられる。11は隆帯による渦巻文であろう。丁寧なナデによりなだらかに仕上げられている。12、13は平口縁の口縁部である。12は渦巻文、13は横位の直線を隆線により描いているが、隆帯と隆帯の間を文様として強調するため、意匠部の肩を明瞭に、そうでない肩はナデによりなだらかにして区別している。14~17は、隆帯間に条線が入ることから8・9などの胴部片であると思われる。8~12、14~17は胎土も類似する。両サイドが沈線でふちどられた断面台形の隆帯が直線曲線を描く。小片が多く、全体の文様構成はうかがえない。

2類(18~21)は沈線による区画文を配するものである。18・19は32Mグリッドにおいて敷設された状態で出土した土器である。胴部下半に最大径をもち、上半で一旦緩やかにしぼみながら再び開き、口縁部で直立する。口縁部は外側に薄い粘土帯を貼り付けて有段化している。広く浅い沈線で長楕円の区画を配し、区画内には縄文を充填している。区画の間には凹点を配する。口縁部文様帯と胴部文様帯は連結せず、口縁部の凹点の直下にも凹点を配し、そこから紡錘文を描く。紡錘文の間には凹点から蛇行沈線文が垂下する。19では紡錘文が下部で胴部下半の帯状文に連結することなど、すでに後期の様相も看取できる。帯状描線内には縄文が充填されるが、胴部上半には帯状描線外にも横位に縄



第12図 第I期に属する土器

文が施されている。縄文原体はRLである。20・21は同一個体。尖った波頂部をもつ4単位の波状口縁で、口縁部は直立し文様帯を肥厚させている。口縁に沿って広く浅く断面の丸い沈線を2条施して口縁上部を画している。正面の波頂部下、2条目の区画線より左巻きの渦巻文が垂下する。しかし左側の波頂部からは右上から左下へ走る直線的な沈線がみられ、渦巻文以外の文様が施されていたようである。ナデ調整後、区画内外を問わず口端部までLR縄文が施される。縄文は縦横斜めに転しており、施文に統一性を欠く。口縁肥厚部の下には凹線が横走し、その下にも縄文が転がされている。縄文原体はLRである。

第2群 (22～25)

刺突を伴う凹線を有するものを一括した。その施される部位により細分した。

1類(22)は口縁部と胴部を区切る位置に刺突を伴う凹線を施すもの。22は口縁部がラッパ状に開く器形を呈する深鉢である。内外面とも横位のナデにより粗く調整されている。口縁と胴部の境に断面台形を呈する隆帯を貼り付け、その上部に巾広で断面の丸い凹線を入れる。刺突は先端のささくれた棒状工具により、隆帯と沈線の壁を削るようにして施されている。沈線の有無は相違するものの、器形や隆帯上部の刺突などIX層の出土土器との共通性が指摘できる。

2類(23～25)は刺突を伴う凹線が口縁部文様帯にみられるもの。23は玉状の口縁部上面と側面に刺突を伴う凹線がみられる。いずれも小片で、全体の文様構成等はわからない。

第3群 (26～32)

上記2群に含まれない胴部片を本群とした。胴部を縦位に区画するものを1類、それ以外を2類とした。

1類(26～29)は胴部を縦位に区画するもの。27は、底部から若干開きながら直線的に立ち上がる。縦位の隆帯とそれをふちどる沈線で区画する。区画には広狭が見られるが、いずれの区画内にもRL縄文が施される。区画上部がとじはじめることから区画の上端も近いと考えられる。底径8cmと小さい。26は断面三角形の隆帯が縦走し、区画内には綾杉状の条線が施される。28は断面カマボコ状の隆帯が2本縦走し、径4mm程の棒状工具を横にして押しつけ刻んでいる。29は低い隆帯が2本縦走する。上部には、隆帯の間と脇に沈線が入る。内外面ともミガキが施されて平滑に仕上げられている。

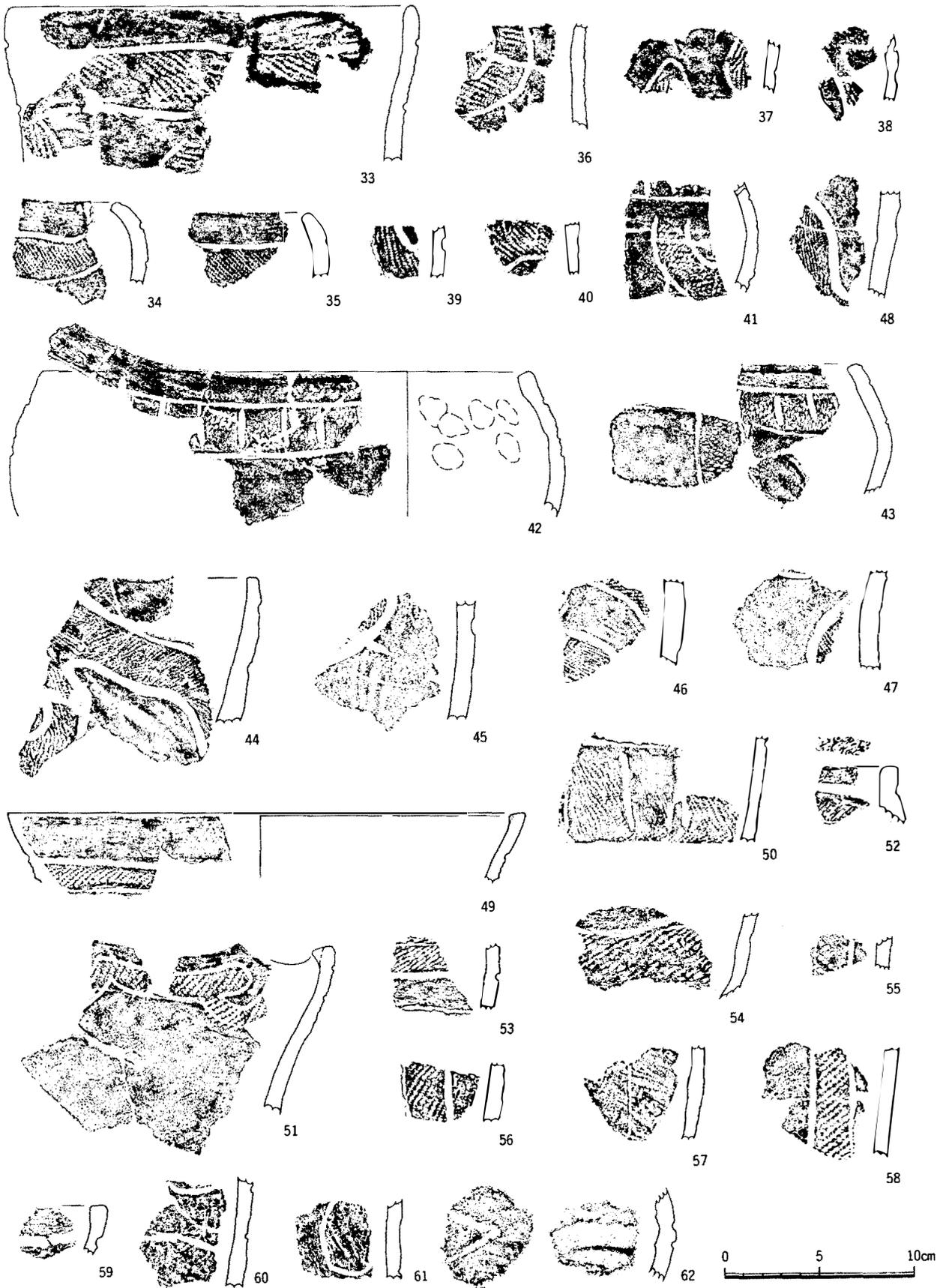
2類(30～32)は小片のため全体の構成がわからないものや、いずれの分類にも属さないものである。30は肥厚した文様帯に2条の弧線文をひき、その間にLR縄文を充填している。弧線文の下に断面の丸い刺突が2ヶ所みられる。

第II期 (第13図・第14図)

後期初頭に属すると考えられる資料である。2条の沈線で帯状の文様を描くもので、帯状の文様内に縄文を充填する第1群と、充填しない第2群に分類される。

第1群 (33～58)

帯状の文様内に縄文を充填するもの。平口縁が主であるが、波状を呈するものもある。口唇部の形状は、丸くおさめられるもの(33～35)、面取りがなされるもの(42～44・49)、内面を断面三角形に肥厚させるもの(51)、口縁端に縄文が転がされているもの(52)など多様である。文様もJ字文が確認できるもの(33・36～39・41～43)、文様が斜めに流れるもの(44～48)、横走または縦走する帯状



第13図 第II期・第III期に属する土器

文のみ確認できるものがみられる。文様によって5類に分類した。

1類(33~43)は口縁の下に縄文帯を横走させ、それ以下に縄文帯によるJ字文などの施描がなされるものである。口唇部は丸くおさめられる。33は、頸部が若干開きながら口縁部は垂直に立ち上がる深鉢である。口縁無文帯の下を縄文帯が横走し、その縄文帯から横長のJ字文が垂下する。全面にナデを施し、先の丸い棒状工具で描文して縄文を充填する。縄文はRL原体で原体長は15mmほどである。34・35は口縁が庇状に内彎し、縄文帯が口縁無文帯の下を横走するが、34は右端で口縁上端まで上昇する。縄文は粒の細かなRL原体で、内外面にミガキを施して平滑に仕上げている。34・35は胎土調整が近似するが、出土地点は離れており、同一個体ではなさそうである。36~40は小片であるが、いずれもRL縄文を充填する。41~43は同一個体で、口縁部が内彎する鉢である。充填されているのは縄文ではなく、1つの節がささくれだった2条の筋で構成されており、オオバコの穂を原体として用いているようである。施文後、描線により区画し、最後に横走施文帯内に縦位の沈線がひかれる。41ではJ字文の描線、施文ともに横走施文帯のやや下から始まり、43でも横走施文帯の下部区画線はJ字文の部位でも行われている。41上端には穿孔が見られる。

2類(44~48)は縄文帯による描文を施すが、口縁の下に縄文帯を横走させないものである。44~48も同一個体と思われるが、接合関係は認められない。頸部で外反し(47)、口縁部が垂直に立ち上がる(44)器形が復元できる。全体の文様構成については明らかではないが、縦走、横走する縄文帯は認められず、文様の横への連携もみられない。縄文は細かなLR縄文で少しずつ丁寧に施文されている。描文は、先端が丸くて太めの工具で施される。

3類(51)は口縁下の横走する縄文帯と描文が一体化したものである。51はゆるやかな波状口縁で、波頂部は尖る。頸部は大きく外反しながら口縁部は直立し、口縁内面のつばが明瞭にはりだしている。文様帯は口縁部に集約され、鉤状を呈する。

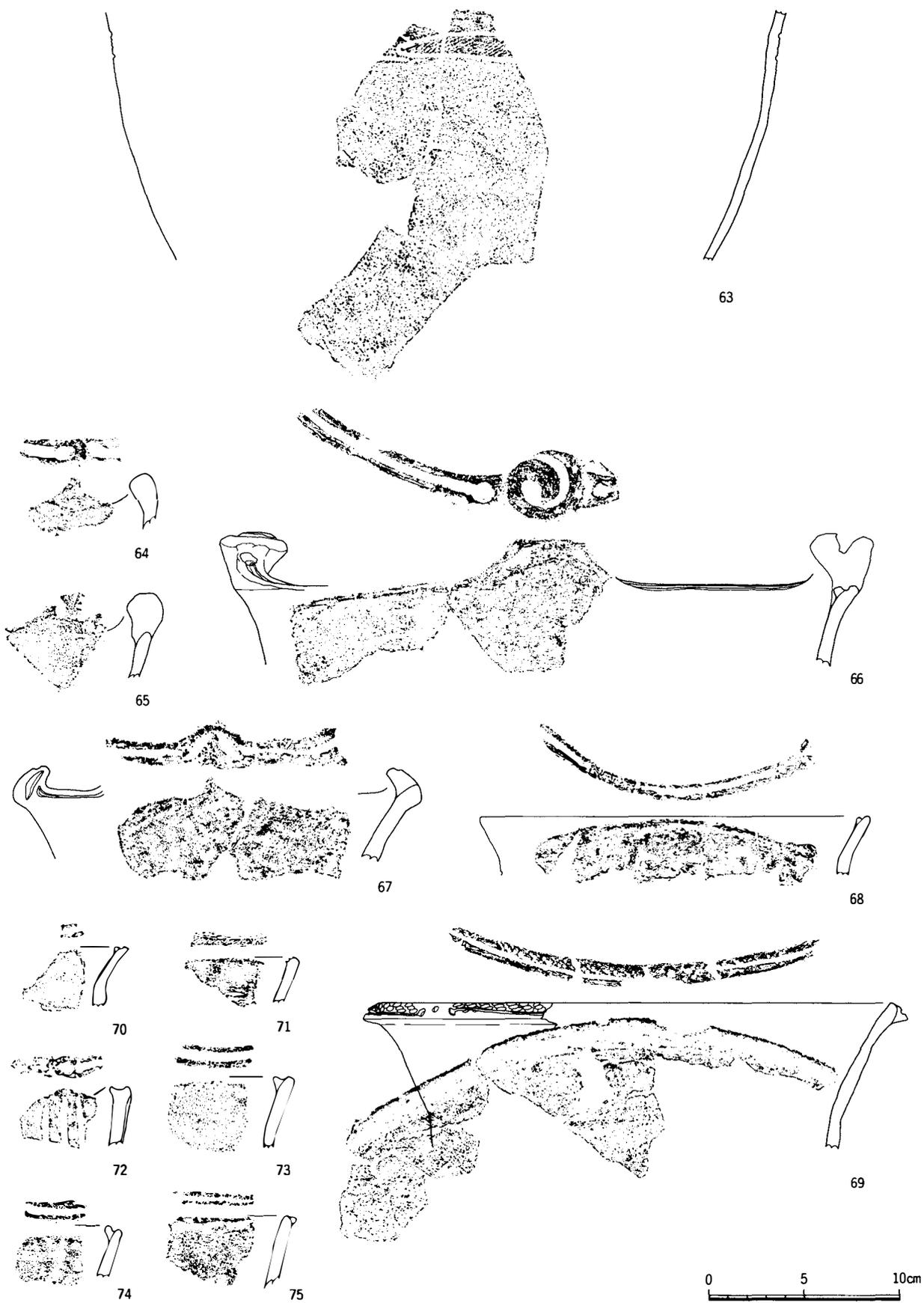
4類(49・50・52~58)は横走する縄文帯、縦走する縄文帯がみられるもの。口縁端は面取りがなされている。49は口縁部がやや開く深鉢で、内外面にミガキが施される。口縁端は面取りがなされ、その際余り出た少量の粘土が内面に貼り付けられ、つば状を呈する。縄文帯にはLR縄文が施され、描線は縄文施文後に施される。胎土には雲母が含まれる。50も胎土に雲母を含み調整等も同一であることから、49と同一個体と考えられる。上下を沈線で画した間を縦位の沈線で仕切り、1つおきにLR縄文を縦に転がす。上下の沈線と縄文の前後関係は明らかでないが、縦の仕切りは縄文施文後にひかされている。上部に横位の縄文がみられることから、当破片の上には横走する縄文帯があったと思われる。52・53は節の発達しないLR、もしくはLR無節縄文を施文している。53は横走する3本以上の沈線によって無文部と縄文施文部が区切られ、無文部には研磨痕の明瞭なミガキが施される。55~58は縦走する縄文帯を有する。55のLR縄文以外は、RL縄文が用いられている。

5類(63)縄文帯で施描するが、1類~4類の中でとらえられないもの。63は上部に施文部が微かにみられるものの、胴部の大半は無文となる。LR縄文を充填している。

当群の資料は、個体数少なく統計的な処理には不適であるが、J字文が認められるもの、縦走する縄文帯はRL、その他はLRが主に用いられているようである。

第2群(59)

太めの沈線によって文様を描くが、縄文を充填しない。点数少なく、細分はできない。



第14図 第II期・第III期に属する土器

1 類 (59) は口縁下に横位に沈線をひいたもの。若干肥厚し、口縁端は広く面取りがなされる。

第Ⅲ期 (第13図～第18図)

後期前葉の土器群。頸部を無文化し文様帯を口縁部と胴部に取れんしていくもの、細い縄文帯で施文するもの、細隆線を施すもの等を群別した。

第1群 (64～82)

頸部を無文化し、文様帯を口縁部と胴部に取れんしていくものうち、外傾もしくは外反する平口縁の、主に口唇部内面に粘土帯を貼付けて肥厚させ、上面に沈線を一条施すものを第一群とした。沈線の端を刺突でおさえる特徴がある。

1 類 (64～68・80～82) は突起を有するものである。さまざまな形態の突起がみられる。64は、丸いつまみ状の小さな突起を付ける。65はなだらかな山形の分厚い突起の左右を刻み、三頭の突起を作出する。66は突起上面に渦状の沈線をいれてその中心を深く刺突し、隆起部分を「の」の字状にしている。刺突の状況から、竹管状の工具を用いているようである。67は内側にむかう嘴状の突起を有する。突起の左右の面に短沈線を刻む。68は右端にこぶ状のなだらかな突起がみられるが左の刺突間は平縁である。頸部と胴部の境を分割する沈線が横走している。67も沈線の端に刺突を施さない。64は左側の沈線の端には刺突がみられるが右側にはみられず、65は沈線さえ確認できなかった。80・81は突起部である。突起部以外の様相は明らかでなく、80は他時期に属する可能性もある。突起の上面を指でおさえつけて楕円の面を作出し、その面と正面に節の大きなLR縄文を施す。突起上部右側が橋状に伸びるが折損している。81は筒状の突起部で、上面に一条の沈線がめぐる。正面には4条の短沈線を縦位にひき、側面にも沈線を施すが、側面の沈線は口縁上面の沈線に繋がりそうである。胎土が67・76と類似している。82は渦巻状に隆帯を貼り付けるが、渦巻の上部がそのまま口縁に繋がる。

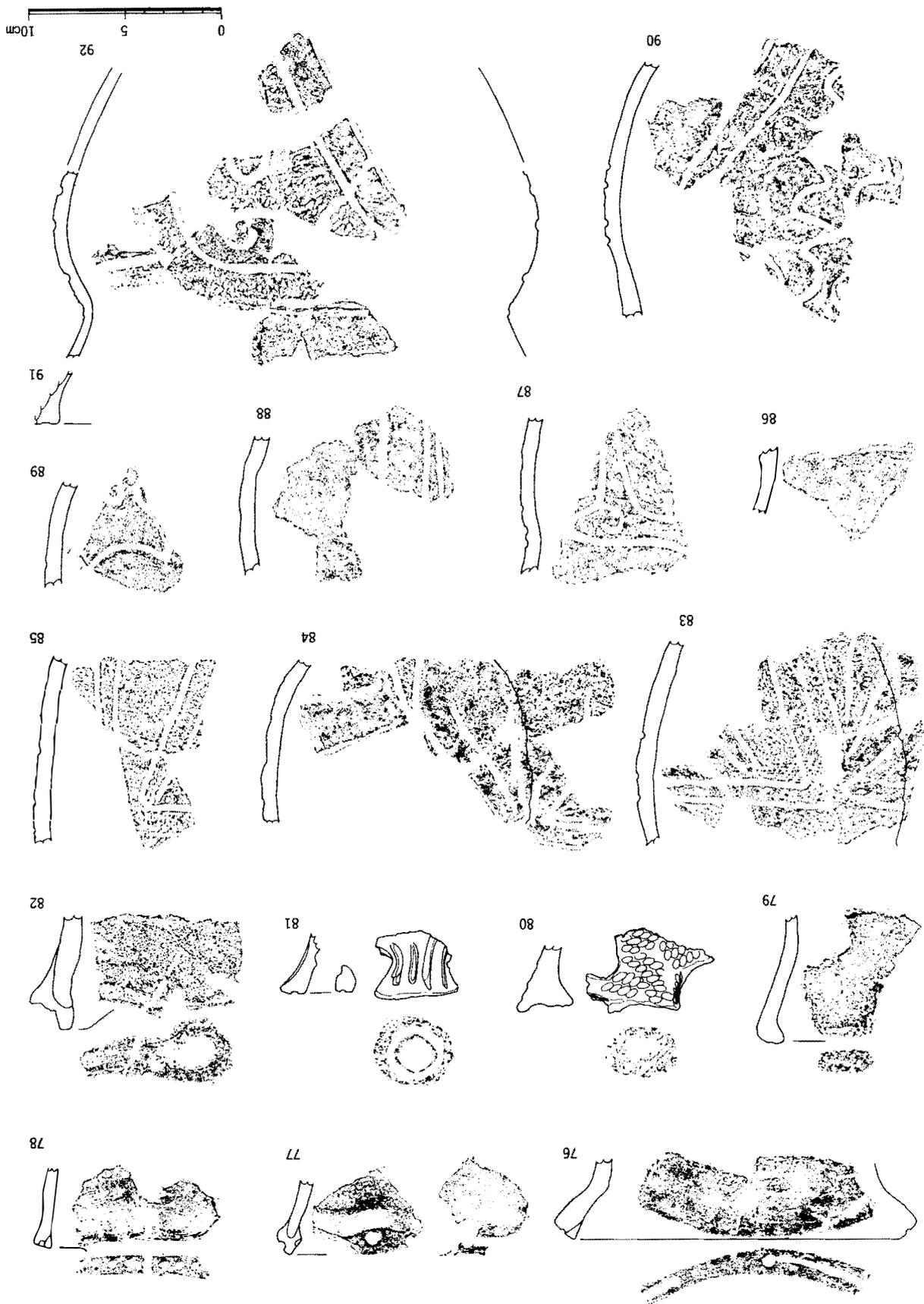
2 類 (69～79) は突起のみられないものである。ただし69・76以外は小片であり、突起を有さない土器の一群が存在することを示すわけではない。69は口唇部外面に粘土帯を貼り付け、口縁上面を外側にむける。その面に両端を刺突でおさめた沈線を一条ひき、沈線の区切れ部には突起にかわって刺突が一点配されている。沈線の上部には節の大きなRL縄文が転がされる。75も外面側に肥厚させるものである。口縁上面に縄文を施すものには71と79があるが、71は肥厚が発達せず、節の細かなLR縄文を用い、浅い沈線が縄文施文後ひかれている。内外面にミガキが施されている。70には頸部と胴部の境の分割沈線がみられる。72は肥厚させないで上面に深い沈線を施し、沈線の区切れ部に凹点を配する。この部位には粘土を足してわずかに高く肥厚させている。ここから側面に3条の沈線を垂下させる。77は上に粘土を足して、外面は丸く、内面は段を成して肥厚させている。外面の肥厚部には一条の沈線をひき、刺突を加えている。裏面にも刺突が2ヶ所に入れられている。内外面とも研磨痕の発達しないミガキによって平滑に仕上げられている。78は口縁上面に刺突が連続して施されている。なだらかな波状口縁を呈する。79は口縁上面に沈線はみられず、LR縄文を施すのみである。

第2群 (60～62・83～92)

第1群の胴部片と考えられるものである。口縁部片と胴部との接合資料が欠如しており、その関係が明らかでないことから別に群を設定した。胴部文様によって4類に分類した。

1 類 (83～85) は直線的な描線で文様を描くもの。83・84は球形にはりだす胴部である。2本の描

第15図 第三期に属する土器



線による帯状の文様を、高さをくい違わせてむかいあうように配する。85は直線的な胴部で、83・84同様横走する描線と斜めに垂下する描線を基調とする文様を描くが、帯状にはならない。左の描線内には、節の粗いLR縄文を充填している。

2類(60~62・86~88)は横走・縦走する描線によって文様を描くもの。86は無文の頸部破片である。胴部との境に沈線を横走させる。内外面にミガキを施す。87は胴部の上部片である。頸部との境を2条の沈線が横走するが、上の沈線は渦状に巻きこみ、それから縦位に沈線が垂下する。下の沈線は渦文部で折れて垂下する。88はやや張り出す胴部片。3本の沈線が垂下するが平行ではない。60・61は胴部片であるが、胴部は小ぶりの土器であったと思われる。縦横に描文されているが、小片多く文様の構成は明らかではない。62は胴部片であるが、内面には2条の隆帯が弧状に施されている。この隆帯はナデにより断面三角形に仕上げられる。胎土は第II期の33に類似する。

3類(89・90)は2本一組の蛇行沈線を垂下させるもの。どちらも胴部がゆるやかに張り出す器形を呈する。蛇行沈線はカーブが尖りぎみになる。90には斜めに垂下する2条の沈線もみられる。2類・3類の資料と、第1群1類66の資料は胎土が類似する。

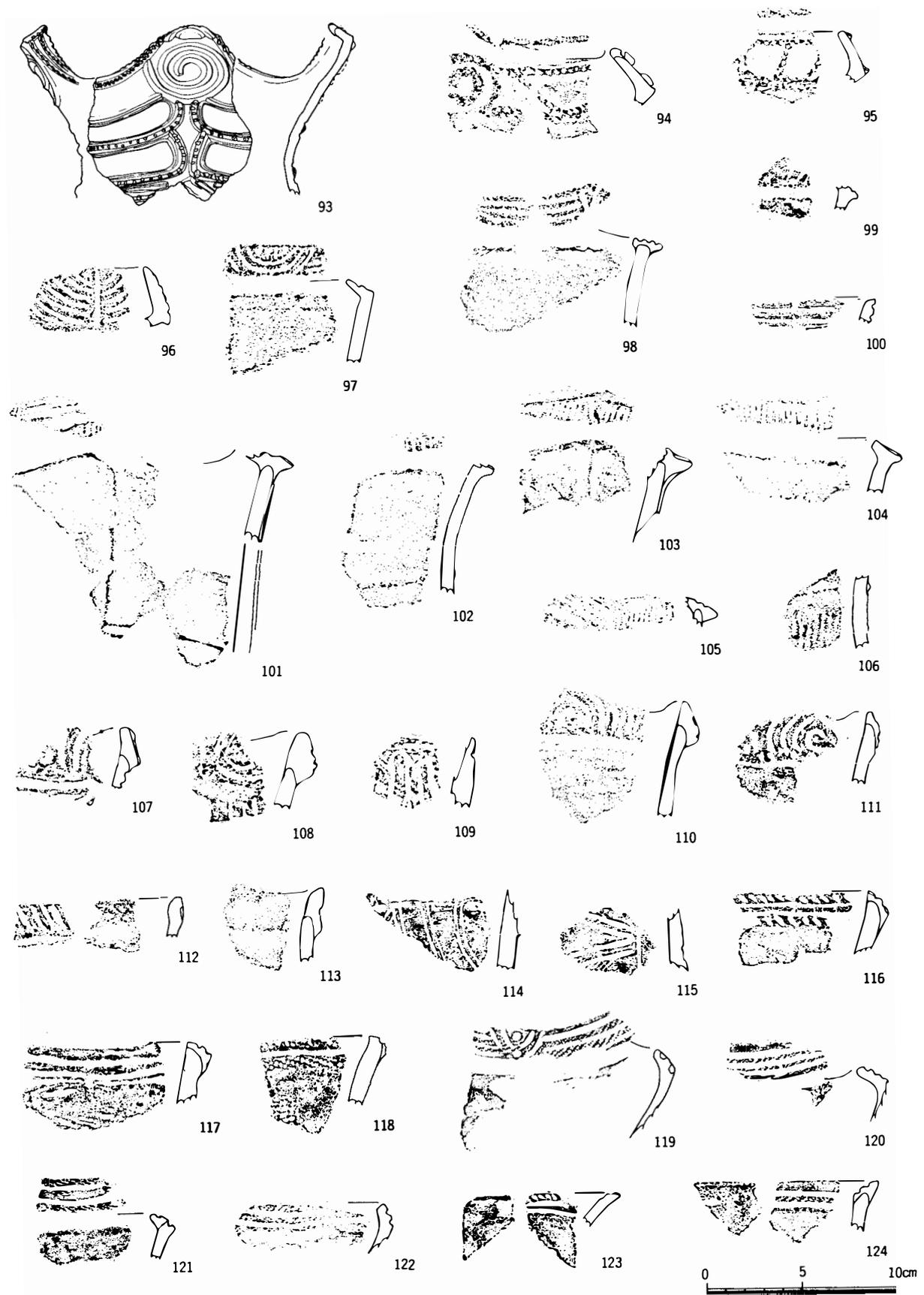
4類(91・92)はやや肩のはる胴部と外反する無文の頸部からなる深鉢である。91・92は同一個体と考えられる。口縁部は内側に粘土を貼り付け肥厚させ、口縁端に面を作出するが施文はみられない。胴部には沈線で逆「L」字状の区画文が描かれ、沈線の端が完結せずに入り組み状となっている。区画内は無文とし、外側に節の粗いRL縄文を充填している。頸部と胴部の境には一条の沈線を横走させている。

第3群(93~124)

拡張・肥厚によって口縁部文様帯を強調するもの。

1類(93~106)は口縁上部を逆「L」字状、「T」字状に拡張して文様帯とするもの。波状口縁を呈するもの、拡張部が一部突出するものが多い。93の文様は頸部に発達するが、逆L字状に拡張した口縁形態、隆帯による渦巻文、刺突を有する隆帯による施文など94・95への連続性が認められることから当類に含めた。頸部が外反する波状口縁で、波頂部下に断面が三角形の隆帯による左巻きの渦巻文が描かれる。頸部から胴部には、断面カマボコ形の隆帯に刺突を施した区画状の文様を配するが、最上部の隆帯には刺突が施されない。隆帯の脇は沈線がなぞる。口縁内面は庇状に張りだし、その上面にも刻みを有する隆帯が走る。器壁薄く焼成は良好であるが、器面荒れのため隆帯は剥落が目立つ。94・95は同一個体である。逆「L」字状の拡張部に、隆帯により文様を描く。渦巻文にはRL縄文を施し、拡張部の上下を区画する隆帯や、その間を斜めにつなぐ隆帯には刺突が施される。拡張部の上下端にも縄文が施される。96・97は多条の沈線によって施文している。96は拡張部の突出部である。98~105は「T」字状に拡張する資料。98は波状口縁で、上面と外面に赤色顔料の塗布がみられる。101~105は同一個体である。「T」字状に拡張した面に、細く深く直線的な多条の沈線が施されている。ゆるやかな波状口縁となり、波頂部下から頸部に細隆線が垂下し、細隆線は頸部と胴部の境界で横走する。細隆線の両脇はナデにより断面三角形に仕上げられる。106は横走する細隆線の下にLR縄文が横位に転がされている。縄文の上部は細隆線脇のナデにより消されている。98~105と同一区域で出土し、胎土も類似している。

2類(107~115)は口縁外面を肥厚させて文様帯にしたもの。平口縁を基調としてなだらかな突出



第16図 第III期に属する土器

部を有するものが多い。107・108は頸部にも施文するものである。どちらも突出部であり、厚く丸みをもたせて肥厚させている。107は縁帯部に重弧文がみえる。頸部にも沈線文がみられるが、折損によって様相は明らかでない。108は頂部に深い刻みを入れ、それを中心に弧文を描く。頸部には沈線を垂下させる。109・114・115は、文様のある頸部片である。109はL Rの縄文を施し、沈線による逆「U」字もしくは枠文を並べる。114・115は半截竹管を用いて施文している。110・111は渦巻文を中心とした左右対称の重弧文を配し、肥厚部の下部には刻みを連続して施す。肥厚部の下には沈線をひいて文様帯を強調している。111は110と比較して肥厚の度合いが弱い。112は内外面に微かに肥厚させ、外面には縦位の短沈線、内面上部にはR L縄文を施す。113は肥厚部作出するが文様はみられない。

3類(116~122)は口唇部を僅かに肥厚し、または肥厚させないで屈曲させることによって斜め上向きの文様帯を作出するものである。文様帯には沈線がめぐり、1条のもの(118)、2条のもの(116・117・121・122)、3条のもの(119・120)がある。また、沈線のみのも(117)以外に、刻みを施すもの(116)、縄文を転がすもの(118~122)がある。119・120以外は縄文施文後に沈線をひいているようである。118はL R縄文を施している。121はL R縄文を施し、沈線間を磨消している。122は内外面にミガキを施し、L R縄文を転がす。119・120はミガキが精緻である。

4類(123・124)は3類と同様の文様構成であるが、内面施文という特徴をもつ。123は2条の沈線と上端部に刻みが、124はL R縄文と2本の沈線が施される。123は内外面にミガキを施し、口縁部は肥厚させずに尖らせる。124は頸部上端に粘土帯を上乗せするように肥厚させ、口縁端を尖らせ内側に面を作り、施文する。

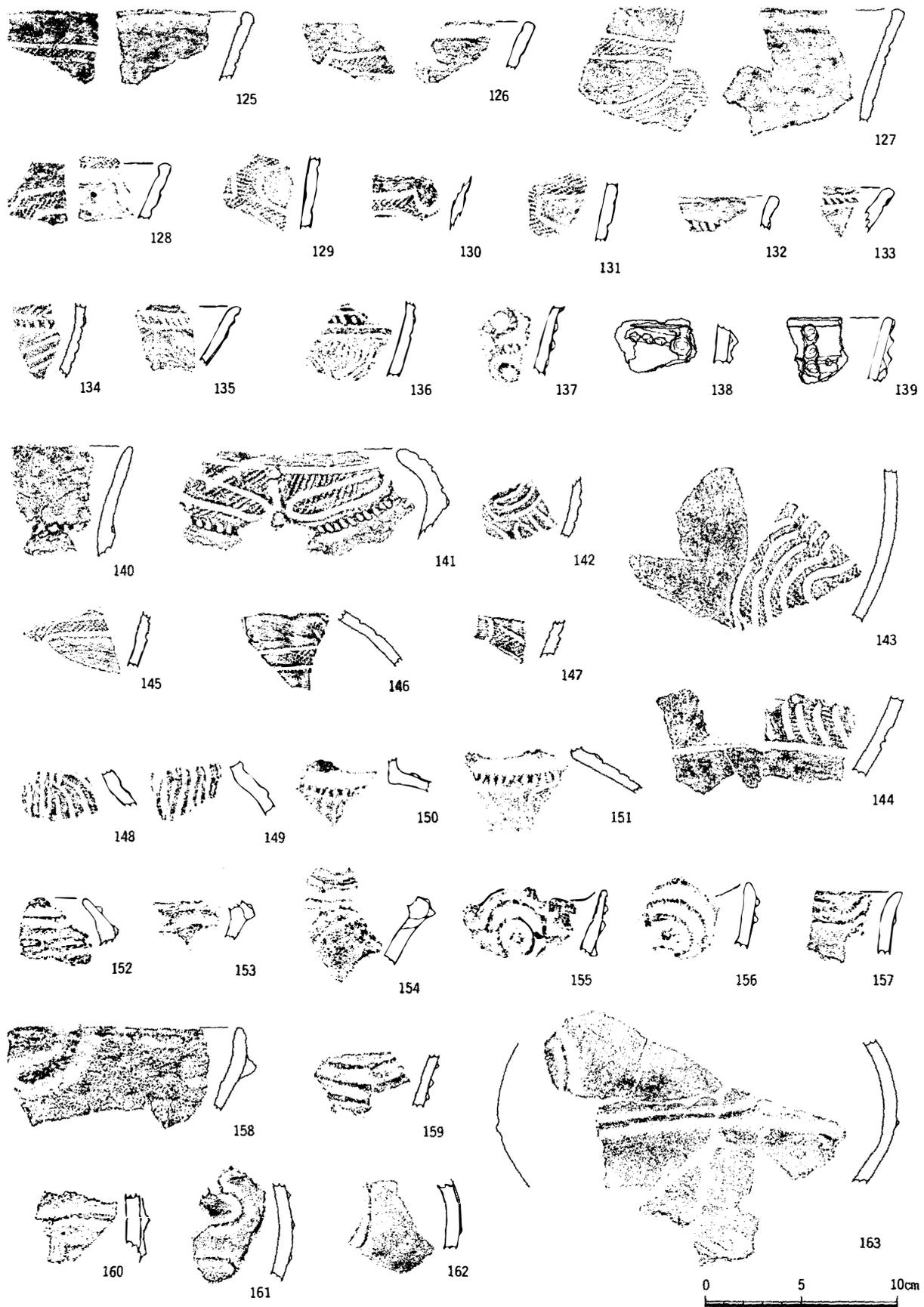
第4群(125~144・164)

堀之内式系有文深鉢を当群とした。総じて器壁薄く、調整も精緻である。同一個体と思われる資料が多く、個体数は少ない。

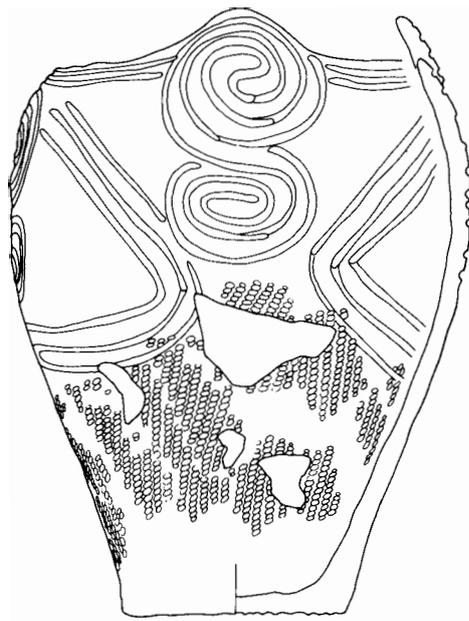
1類(125~131)は帯状の文様に縄文を充填するものである。口縁部が外反するバケツ形の深鉢で、胎土も類似することから同一個体である可能性もある。口縁上部2cmほどを無文とし、その下を文様帯とする。文様は曲線的で、縄文帯は途切れることなく連結している。文様帯上端に縄文帯が横走するが、126・128のように、下方へ「U」字状に落ち込む箇所もある。口縁内面に1条の凹線がめぐることが、128では凹線も同様に落ち込む。この部位にのみ口縁端から凹線上に縄文が施されることから、何らかの文様意匠があったと考えられる。縄文は節のやや細かいL R原体である。内外面に丁寧なミガキが施されるが研磨痕は発達しない。

2類(132~141)は刻みのある隆線が横走するものである。隆線の上下を沈線がなぞるもの(134・136)、上下の沈線だけで隆帯を貼り付けないもの(133・135)もある。後者の資料も、意匠上同類に含めた。隆帯上の刻みも、刺突(132・138~140)、原体を横にして押しつけるもの(136・137)、短沈線で刻むもの(133・135)がある。132・133・135・139・140はアサガオ形の深鉢の口縁部に貼り付けている。当類中、138・139・140は胎土・調整とも粗く、異質である。141は刻みを有する隆帯の存在から本類に含めたが、口縁文様帯下を弧状に区画する用い方は他の資料とは異なっている。口縁下に1条の沈線を施し、隆帯との間を文様帯として、沈線や巻き貝による刺突とL R縄文で施文している。内面・口縁上部にはミガキが施される。

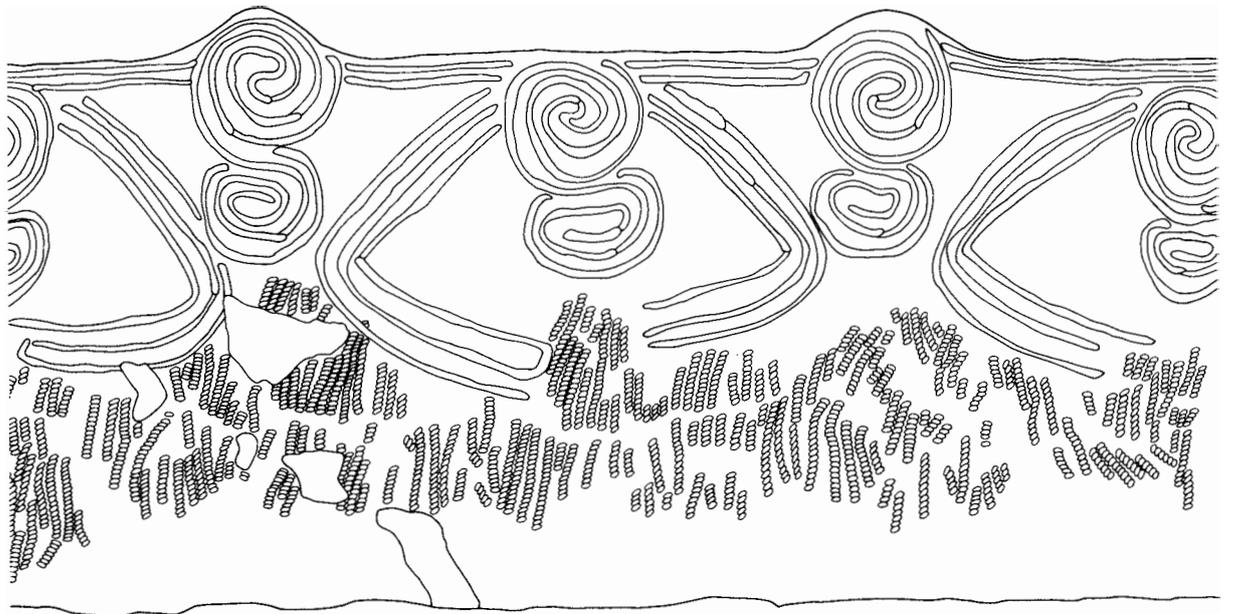
3類(164)は38Jにおいて埋設状態で出土した土器である。胴部上半に最大径をもち、口縁はゆる



第17図 第Ⅲ期に属する土器



164



0 5 10cm

第18図 第三期に属する土器

やかに内彎する。S字状に連結する入組渦巻文を4ヶ所に配し、むかいあう2ヶ所を渦巻文にあわせて突出させる。口縁に2条の沈線が横走している。1類～2類の土器より一段階古いと考えられる。胴部上半の文様部は全体的に縦方向のナデが施されるが、沈線施文部には施文に沿ったナデが施される。こうしたナデと沈線のきりあいから、渦巻文の施文→施文部ナデ→3本沈線による施文→施文部ナデ→胴部下半部にRL縄文という作業順序が復元される。胴部上半の外面にススが付着している。底部には2本越1本潜りの網代痕が残る。

4類(142～144)は沈線文である。142は薄手で136と胎土が類似する。143・144は同一個体。内外面ミガキを施した鉢であろう。LR縄文を施し、描文する。

第5群(152～163)

隆線の両脇がナデにより断面三角形に仕上げられた細隆線によって文様を描くもの。飛驒地方の宮田式土器との関連が考えられるものである。

1類(152～154)は逆「L」字状に口縁部を拡張するもので、第3群1類の土器にも相応する。屈曲部に一条の細隆線を走らせ、拡張部に施文する。153・154では弧線を描くが文様の様相は明らかでない。

2類(155～158)は平口縁であるが、155・156では突出部がみられる。細隆線は貼り付け痕が残りに、仕上げはなされていない。157は口縁が尖り気味に外反し、158はやや内彎する。

3類(159～163)は胴部片である。直線的な器形を呈するもの(159・160)や内彎するもの(161～163)がみられ、文様も縦横に直線的なもの、重弧文、蛇行文等バラエティに富む。161・162は器面を平滑に仕上げている。

第IV期(第19図～第22図)

縄文後期中葉に属すると考えられる土器群である。

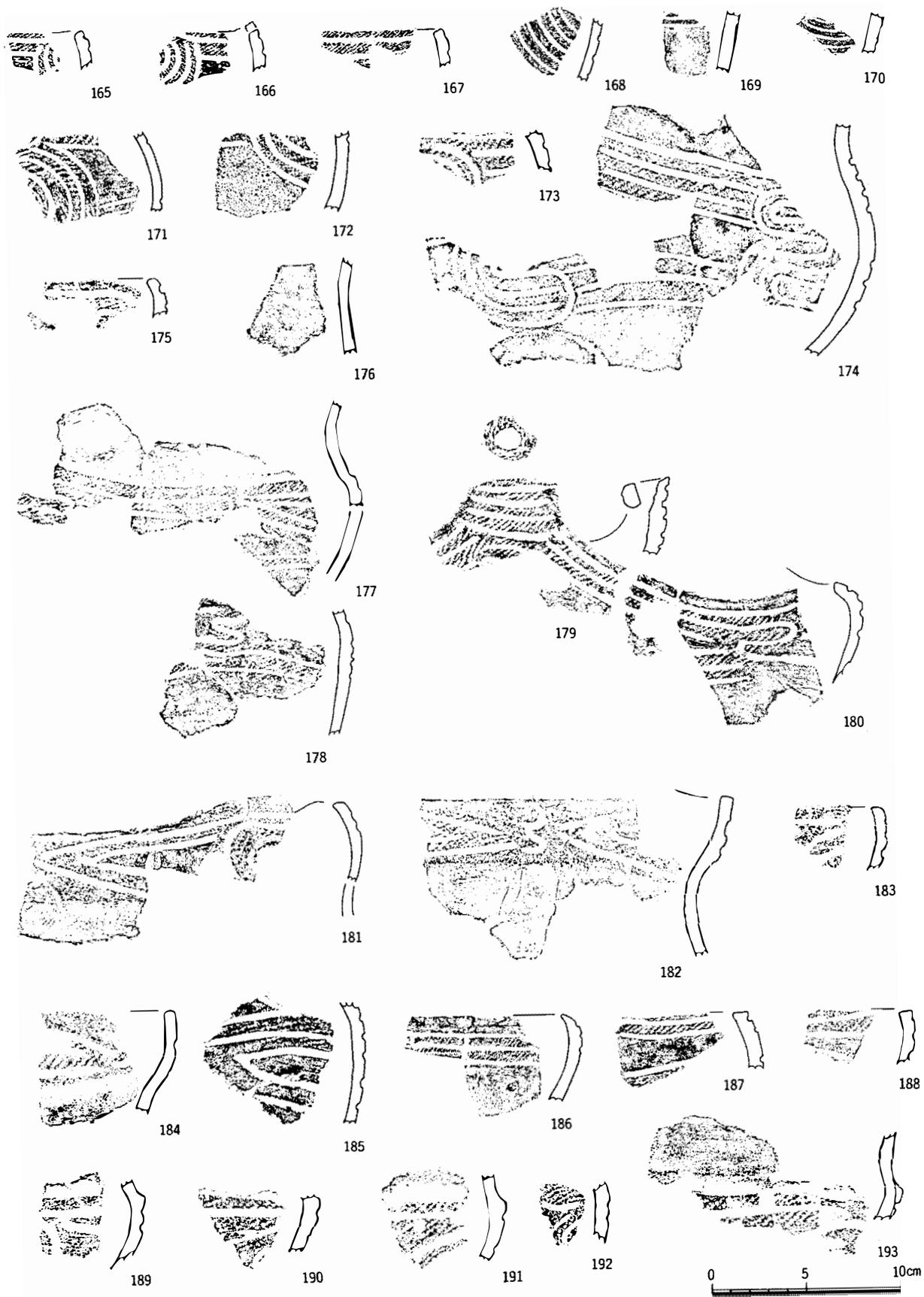
第1群(165～196)

頸部を無文化し、口縁部と胴部に、縄文を伴う多条沈線が横走するものである。横走沈線とともに配する文様と横走沈線のバラエティによって細分した。

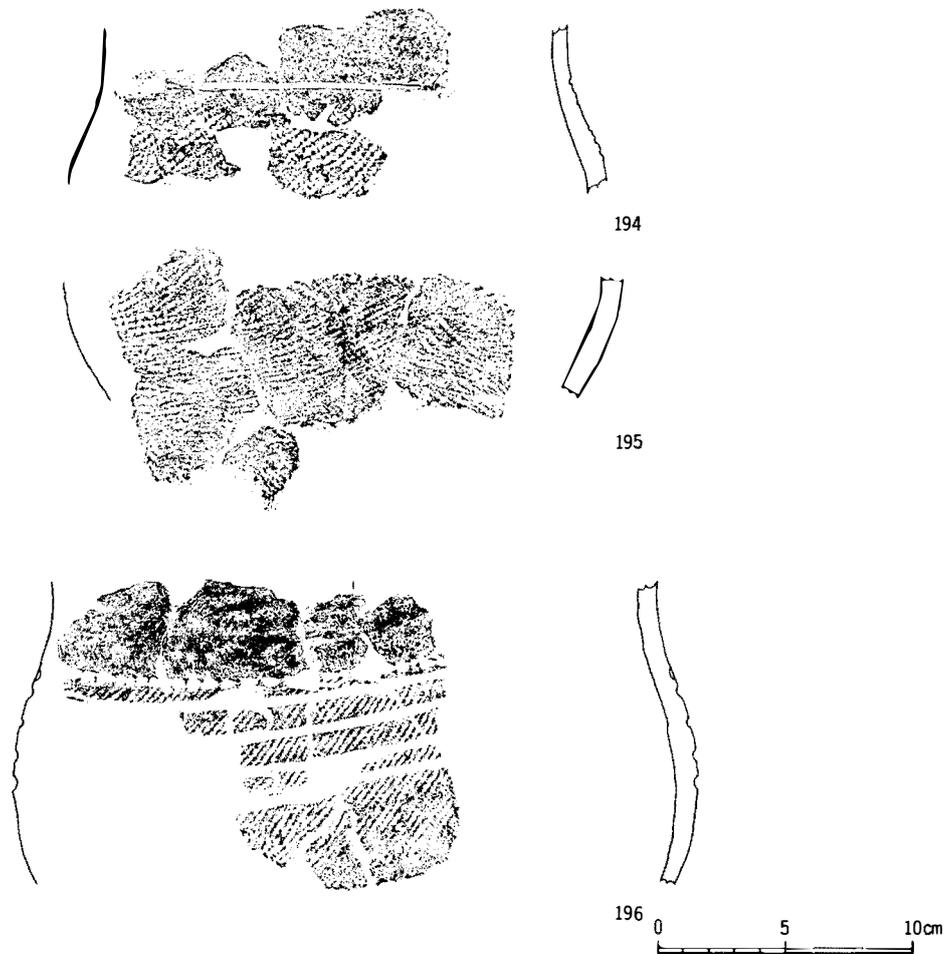
1類(165～172)は同心円文や重弧文を配するものである。165～167は同一個体で2条の横走沈線と同心円を中心とする重弧文が描かれるが、重弧文は1条目の沈線より下を区切る。内外面ともミガキが施され、口縁直下よりLR縄文が転がされている。168～170は同心円文の一部であると思われる。内外面に研磨痕の発達しないミガキが施され、168には節の細かなLR縄文、169・170には無節のRL縄文が施されている。171・172は胴部片。171では、胴部に横走する多条沈線が上下二段に分化し、この同心円と重弧文はそれらをつなぐ役割も果たしている。

2類(173・174)は蛇行する多条沈線文が配されるもの。どちらも胴部片で、174は胴部が中位で張り出し、一旦しばみながら頸部で再び開く器形を呈する。胴部上端は有段化しないで、そのまま頸部につながる。上段に4条の横走沈線と縄文による文様帯、下段に3条の横走沈線と縄文による文様帯を配し、上から4条の沈線と縄文による蛇行文を垂下させている。蛇行文の端は両縁の沈線をまるく結んでおさめている。縄文はLRである。

3類(175～178)は蛇行する沈線を配するもの。175～178は同一個体である。胴上部で張りだし、



第19図 第IV期に属する土器



第20図 第IV期に属する土器

頸部で一旦すばみながら再び外反する。口縁部はゆるやかな波状を呈している。胴部文様帯の上端は有段化しており、この段と2条の沈線による2本の縄文帯を横走させている。1条目の沈線は大きく蛇行しながら垂下し、胴下部に配された縄文を充填した2条の横走沈線の上の沈線につながる。また、蛇行沈線の部位から斜め右下に1本の充填縄文帯を走らせ、上下の文様帯をつないでいる。縄文はLR原体で、頸部、口縁部にはミガキが施される。

4類(179~185)は上下の横走沈線帯が結合していくもの。179・180は波状口縁の土器で、内外面にミガキが施される。波頂部を筒状にし、上面にも縄文を施している。縄文を伴う3条の沈線文が2段に配され波底部で結合する。波底部において、上段中位の沈線がS字を描いて垂下している。内外面にミガキを施しており、縄文はLRである。184は外反する頸部から口縁部を直立させて文様帯を画する。2条の沈線とLR縄文による縄文帯は、平口縁であるが上の縄文帯が斜めに下がり、下の縄文帯と結合する。結合する箇所には蛇行沈線が配される。181・182・183はゆるやかな波状口縁の同一個体である。頸部外反するが口縁部は直立し、更に波頂部は内彎する。口縁部下部を微かに肥厚させ、有段化して頸部と区画する。2条の沈線による上下の文様が波底部で目頭状に結合し、結合部には蛇行沈線が配される。182にはLR縄文が充填されるが181には充填されない。波頂部には、上段2条目の沈線を区切る、縄文を伴う文様が配される。183も波頂部付近の破片であるが、文様の形は不明であ

る。内外面にミガキが施される。

5類(194~196)は胴部の全面に縄文を施すものである。194・195は同一個体。胴部がゆるやかに張り、一旦くびれて頸部が外反する器形である。胴部と頸部の境に1条の浅い沈線を横走させ、以下にLR縄文を施す。196は胴部が丸く張りだし、上半でくびれ頸部で外反する。横位のおしびきによって頸部と胴部を区画し、以下に4条の沈線を横走させる。1条目と2条目の沈線、3条目と4条目の沈線間を弧線をつなぎ、LR縄文を施す。

6類(186~193)は小片等のため上記の分類の中でとらえられなかったものである。186~188は口縁部片である。いずれも内彎する器形を呈し、186は口縁を尖り気味にしあげ、187・188は口縁端に平らな面をもつ。189~193は胴部片であるが、胴部と頸部の境は有段化する特徴をもつ。

第2群(197~221・225・226)

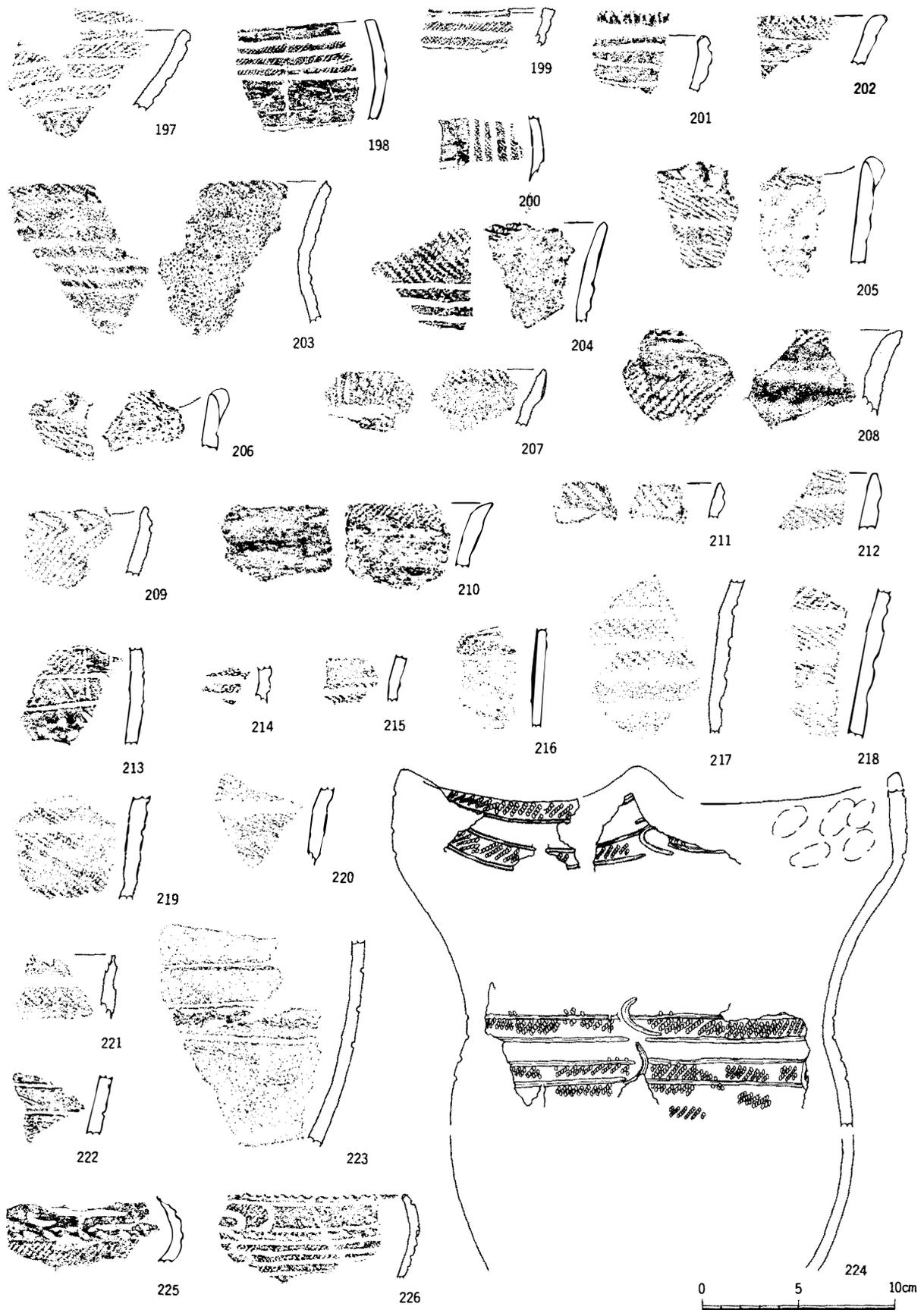
横走する沈線を基調とするが、第1群の資料と比較して沈線は多条化している。頸部は無文帯として区画されない。すべて平口縁である。口唇部の形状等により分類した。

1類(197~202)は口縁端を面とするもの。197は直線的に口縁部が開く鉢であろうか。上面にまでLR縄文が施され、内外面にミガキがなされる。198は口縁がやや内傾する。4条の沈線を横走させ、この沈線間にLR縄文を充填し、口縁直下には施さない。破片の下端にも横走する沈線がみられる。199・200は同一個体。LR縄文を充填した多条沈線が横走・縦走する。内外面にミガキが施され、外面に赤色顔料が残る。201は口縁上部を内屈させ、上面を刻む。LR縄文を施す。202は口縁端の外側の角を刻み、RL縄文を施している。

2類(203~212)は口唇部を尖らせるもの。203は頸部内傾し、口縁を開かせる。器面荒れが著しいが、6条ほどの横走沈線とRL縄文が確認できる。縄文は口唇内面にも施される。204は直線的にやや開く口縁で、RL縄文が外面と口唇内面に施されるが、多条沈線は口縁よりやや下に横走する。205・206も直線的にやや開く口縁で、口唇部外面に刻みが施され、つまみ状の突起が貼り付けられる。外面と口唇内面に縄文が施されるが、縄文は節の発達しないRL縄文か無節のRI縄文である。211・212はRL縄文を用いた小片で、211は外面に刻み、内面に縄文を有する。207~210は横走する多条沈線はみられないが、尖り気味の口縁内面に縄文が施文されたり口縁外面を刻む共通性から当類に含めた。208~210はLR縄文、207はRL縄文を用いる。

3類(213~221)は縄文を伴う多条沈線を有し、口縁をもたないものについて一括した。幅広い凹線も目立つ。221・218は上部に刻みがみられ、218内面の上部に縄文も微かにみられることから口縁に近い部位であると考えられる。幅広い凹線が横走し、221にはRL、218にはLR縄文が施される。213には縦位の区画もみられるが、切り合いは横走沈線の方が新しい。LR縄文が充填されている。そのほかの土器片の縄文は、216がLRである以外はRLである。

4類(225・226)は口縁部が内彎する浅鉢である。226は口縁端を細かく刻んでさざなみ状に整形している。口縁直下に沈線を一条横走させ、13mmほどの無文帯の下に6条以上の多条沈線を横走させ、多条沈線内には縄文を充填する。縄文は粗く、回転の方向は判然としない。1条・2条目の間には、右下方向からの刺突が並ぶ。左端の無文部に縄文を充填する文様がみられ、この下2条目の沈線から蛇行沈線が垂下する。225は器面荒れ著しく、文様の検討はできない。使用する縄文はLRで、外面には赤色顔料が塗布されている。



第21図 第IV期に属する土器

第3群 (222~224)

一乗寺K式に属すると考えられる土器である。点数は少ないが、口縁部から胴部までの接合資料も得られている。

1類(222・223)は結節縄文を横に転がすもの。ゆるやかに内彎する胴部に3条の深い沈線を横走させ、2条目と3条目の間に結節縄文を横へ転がしている。

2類(224)は丸く張り出した胴部が上部で一旦すぼみ、頸部は外反して開き口縁部を直立させる。口縁は4単位の波状を呈するが、波頂部は欠損する。縄文帯を口縁部と胴部に横走させる。口縁部は口縁端と沈線による縄文帯と2条の沈線による縄文帯が横走し、波頂部で右と左に開く三日月状の沈線に区画される。胴部は4条の沈線による2本の縄文帯が横走し、波頂部下で口縁部同様右と左に開く三日月状の沈線に区画される。縄文は2本目の縄文帯の下にも一部施される。縄文はLRで、ミガキが疎らに施される。

第4群 (145~151・229~244)

第IV期までに帰属する、分類から漏れた器種を一括した。

1類(145~151)は第III期第4群に類する注口土器である。148・149は同一個体。口頸部の立ち上がりに近い部位で、148では貼り付けた粘土塊を中心に多条沈線を縦走させ、粘土塊には刻み状の短沈線を施している。150・151は口頸部立ち上がり部の周囲に刻みを有する隆帯をめぐらせる。151は沈線により区画状の文様を描き、150は縦走する多条沈線がみられる。145~147は縄文帯によって施文されるもの。いずれもLR縄文を用い、外面は丁寧なミガキによって仕上げられている。147には櫛描沈線文も一部にみられる。

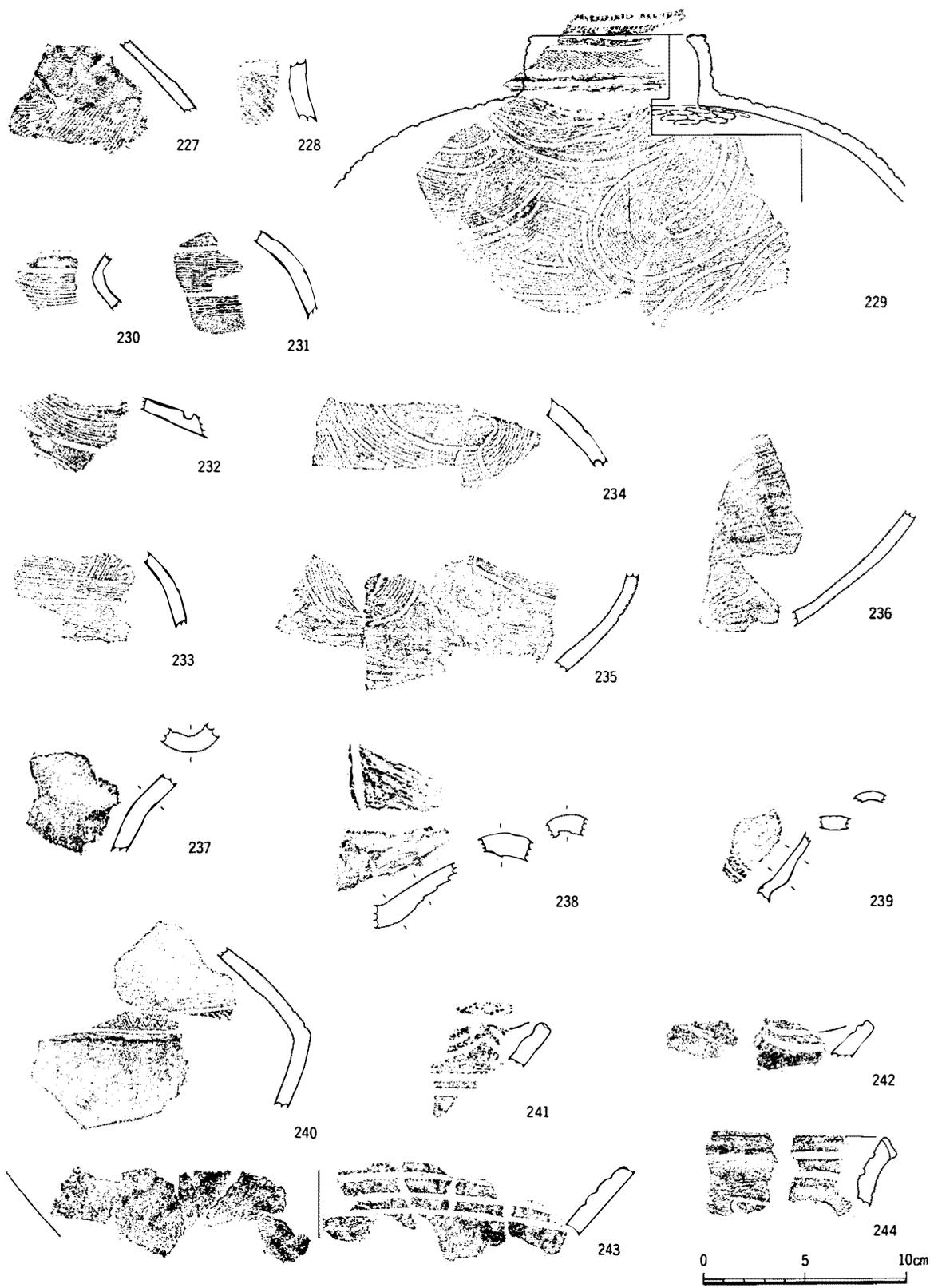
2類(229~236)は櫛描沈線による帯状の文様の両脇を沈線がふちどるものである。胴部が丸く張り出す注口土器か壺形の土器であろうが、229以外は器種の特定はできない。229は肩がまるく張る壺形の土器である。口縁端には1条の沈線と、両脇に細い工具による刻みを施す。直立する頸部には斜格子目状に櫛描文が描かれ、上下を2条の沈線で区切る。胴部もいくらかの文様帯に区切られるようであり、頸部の直下と肩部に綾絡文とそれを挟む沈線が横走している。7条、幅9mmほどの単位の櫛状工具を用いている。曲線的な文様が多く、232には先の平坦な工具による刺突文が丸く施される。234・236は同一個体であろう。235・236等底部付近は無文とする。総じて外面のミガキは丁寧に施されている。

3類(240)は胴部中位で屈曲する注口土器であろう。屈曲部の上に2条の沈線とその間に結節縄文を横走させ、第IV期第3群1類と共通する。外面はミガキが施される。

4類(227・228)は縄文を施したもの。227は縄文の上端を区切ることなくミガキ消している。LR縄文を用いている。228にはRL縄文が施される。

5類(237~239)は注口部である。238は外面にミガキ、内面には口部先から竹管状の工具が挿入された痕が残る。239は薄手の短い注口部で、基部には沈線に挟まれた隆帯をめぐらし、その上を貝殻状の工具で刻んでいる。

6類(241~244)は内面施文の浅鉢である。244は口縁部外側に三角形に肥厚し、稜を作出している。241・242の口縁はやや波状を呈し、内面を4条の沈線がめぐるが、上の2本は波頂部に沿って上昇し、波頂部の口縁端には凹点を施す。243は出土地点がやや離れるが244と胎土類似する。



第22図 第IV期に属する土器

第V期（第23図～第25図）

縄文後期後葉に属すると考えられる土器である。

第1群（245～269）

外反する頸部をもち、口縁部を逆「く」の字形に内屈させ、この屈曲部を中心に施文するもの。なだらかな波状口縁を呈するものが多い。

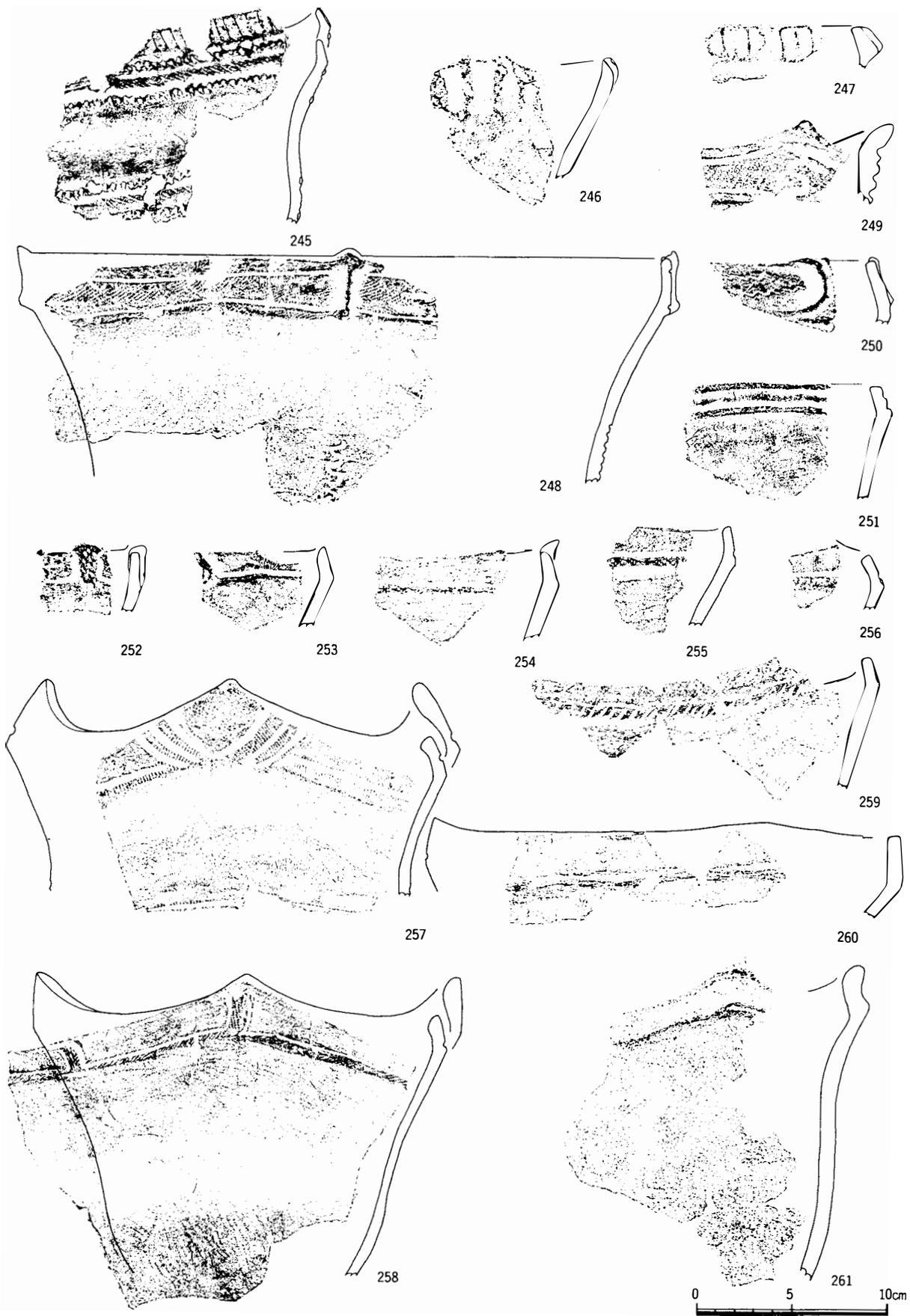
1類（245）は屈曲部の上下に施文するもの。微かに内屈した口縁部には丸い工具によって縦位に連続して短凹線がひかれ、しのぎ状の隆起が残る。屈曲部の下にはR L縄文の施される巾広い隆帯と、それを狭む、刻みを有する2条の隆線がみられる。縄文帯と隆線の間はナデられ、波底部では幅広の隆帯に縄文を施さず、ナデによって隆帯を三角形の断面に整えている。上下の隆線に施される刻みは二山の突起を有する何らかの自然物による。

2類（246～252）は口縁端から屈曲部の間に文様を施すものである。246は口縁内面の指おさえと口縁端を尖らせる調整によって口縁部が三日月形に内弯する。断面かまぼこ形の隆帯を縦位に並べて貼付けている。247は屈曲部に粘土を貼付け三角形に肥厚させて屈曲を強調し、断面三角形の隆帯を縦位に貼り付けている。これら縦位の施文を有する245～247の3点は、屈曲があまり発達しないという点でも共通する。248は平口縁で、2条の沈線を横走させ、1条目の沈線と屈曲部の間にL R縄文を施す。縦に貼付けられた隆帯は口縁端にかかって半円形の突起となり、突起頂部には浅い刺突が施される。胴部にはうねりの強い蛇行沈線が垂下し、左右に互い違いに横走する沈線がひかれている。249は尖り気味の波頂部である。2条の沈線の間にはL R縄文が充填される。波頂部の下には先端の平坦な工具によって刺突が施され、刺突部より蛇行沈線が垂下する。内外面ミガキで仕上げられている。250はゆるやかな波状口縁の波底部である。「つ」の字状に粘土紐が貼り付けられ、粘土紐の右面のみナデられる。2条の結節縄文が施される。251は巾広の半截竹管状工具による平行沈線が横走する。252も隆帯が口縁端に突出するように貼り付けられている。隆帯を境にして杵状に沈線がひかれ、杵の上下と隆帯に、先の尖った工具による刺突が施される。

3類（254～259）は屈曲部のやや上に1条の沈線を横走させ、沈線と屈曲部の間に施文するものである。施文は縄文によるもの（254・255・258）、刺突によるもの（256・259）、擬縄文によるもの（257）がある。257・258は4単位の波状口縁で、波頂部は内側に丸く肥厚している。257の波頂部には擬縄文を伴う3条の沈線が左右たすき状にかけられ、258の波頂部には2条の「ノ」の字状沈線の間には縄文が充填される。257の胴部には擬縄文を伴う沈線が横走し、波頂部のほぼ下に何らかの文様があるが折損のため定かではない。258は胴部まで接合したが胴部に文様はみられず、全面にミガキが施されている。

4類（253・260・262）は屈曲部のやや上に横走する沈線のみを施し、縄文等を伴わないもの。253には弧状の貼り付け文が施されている。262は胴部が低い位置で張り出し、頸部が大きく開く三単位の波状口縁を呈する。口縁部の屈曲は弱いが、内側に粘土を貼付けて丸く肥厚させ、内側のみ屈曲を明瞭に出している。波頂部には沈線の縦走する縦位の貼り付け文が配される。胴部に文様帯はみられない。外面にはミガキが丁寧に施されるが、器壁に剥落が発達している。

5類（261・263～265）は、口縁部を屈曲させるものの沈線も何も施さないもの。261は口縁部内屈したあと再びクランク状に立ち上がるもの。内側は丸く仕上げられている。内面にミガキが施されるが、内面器壁には剥落がみられる。263は3単位の波状口縁。外面は疎らなミガキ、内面は密なミガキ



第23図 第V期の土器

が施される。265は波頂部であるが、単位数は定かでない。外面の屈曲部より上と内面にミガキが施されている。

6類(266~269)は胴部及び頸部片を一括した。当群の口縁部を有する土器で胴部の様相が伺えるものは245・248・257・258・261~263の7点であるが、胴部にも文様が認められるのは3点である。しかもいずれの資料も文様の様相は明らかでなく、したがって口縁部と胴部の関連はとらえることができない。したがって、当群が属すると考えられる元住吉山式にみられる胴部文様を当類で扱った。266は胴部上半がややくびれる器形で、文様帯の上下を2条ずつの沈線で区切り、上は1条で下に凸の連弧文を、下は2条で上に凸の連弧文を描く。連弧文の間には波形の沈線文を横走させる、文様帯内にはL形縄文を充填し、文様帯より下にはミガキが施される。267も胴上部がくびれる器形で、3条の沈線を横走させる。1条目と2条目の間隔は狭く、上に凸の連弧文を描き入れる。2条目と3条目の間隔はやや広く、一段目の連弧文と半位相ずらして対向連弧文を描き入れている。連弧文は細く尖り気味の工具で描かれているが、横走する沈線の断面は幅広で浅く丸い。268は264と同一個体である。269は266の頸部で、外面にミガキが施される。

第2群(270~278)

巾広で浅い凹線を数条横走させるものである。点数が少なく、270を除いて胴部小片である。

1類(270~278)。270は胴下部で一旦肩が張りだし、内屈したあと微かに開きながら直線的に立上がり、逆「く」の字状に口縁を内屈させる。4単位の波状口縁で、波底部に丸い突起をつける。胴部の器壁は薄い口縁部はやや厚い。口縁屈曲部と口縁沿いに2条の浅い凹線をひき、胴下部の肩部と胴中位にそれぞれ3条の凹線をひく。凹線は巻貝によるものである。胴部に施した2段の凹線列の波頂部は下に、粘土を扇状に押しつけた痕がみられる。赤色顔料が内面と外面口縁部に残る。口縁部内外面はミガキが施される。271~274は胴部の外傾する部位に凹線が施されたものである。271・272は巻貝による浅い凹線だが、273はやや深い。274は凹線の間隔がまちまちで、下の方ほど間隔が広がる。外面にミガキを施している。275~277は胴部が内屈する肩部に施されたものである。276・277は凹線にしてはやや深い。278は壺形の器形で、凸帯を伴い、凸帯より上には条痕もみられることから晩期の所産とも考えられる。

第3群(279~283)

横走する沈線に縦位の沈線を付加するもの。やはり断片的な資料しか得られていない。

1類(279~283)。279はゆるやかな波状口縁で、間隔をあけて凹線が3条みられる。2条目の凹線から上に、尖った三角形の抉りが付加される。281・283は縦位の短沈線で横走する沈線を寸断する。280は山形口縁で、横走する沈線が口縁の斜辺でY字状におさまられる。内面にも同様の意匠がみられる。

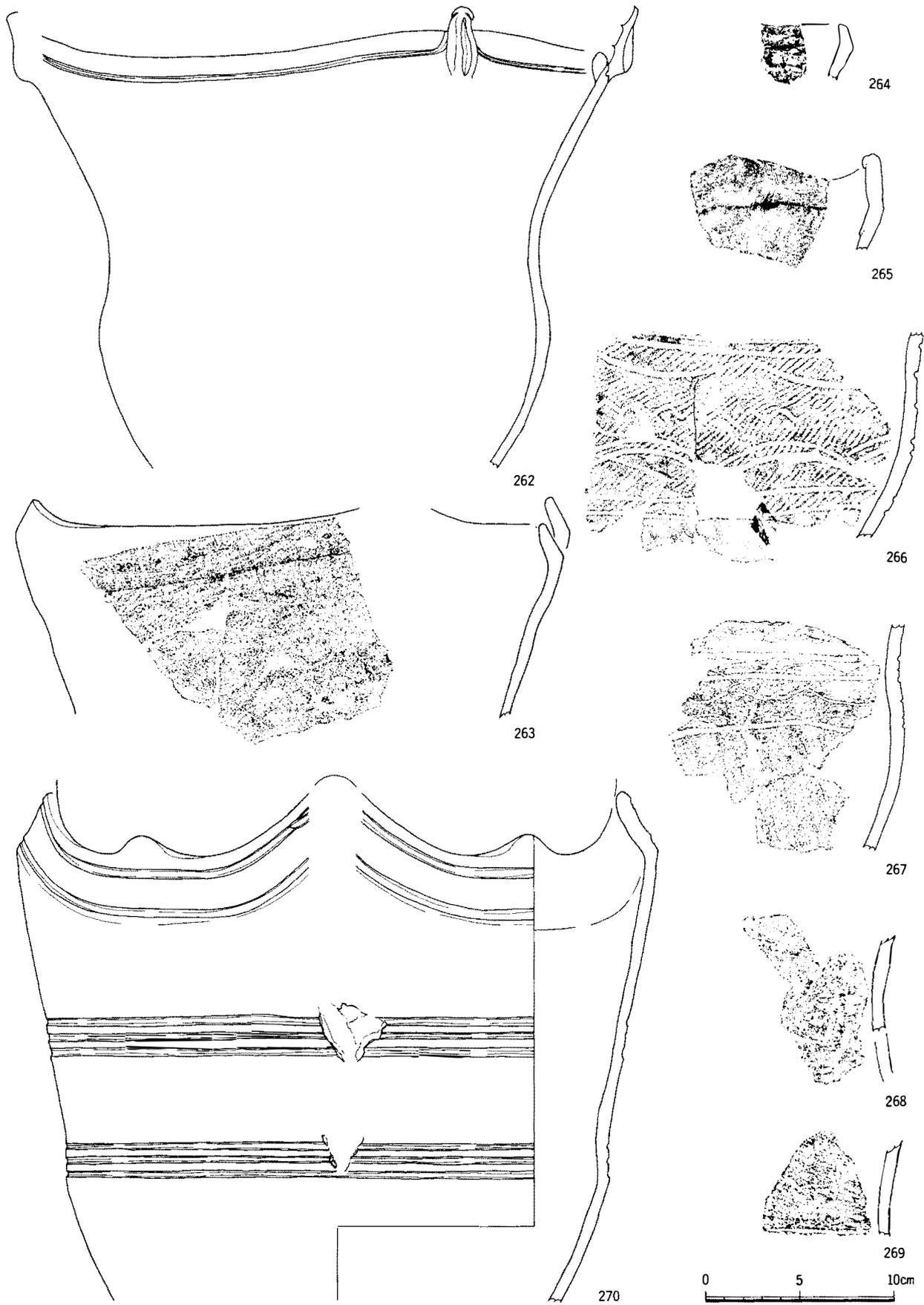
第VI期(第25図~第28図)

縄文晩期に属すると考えられる土器群である。

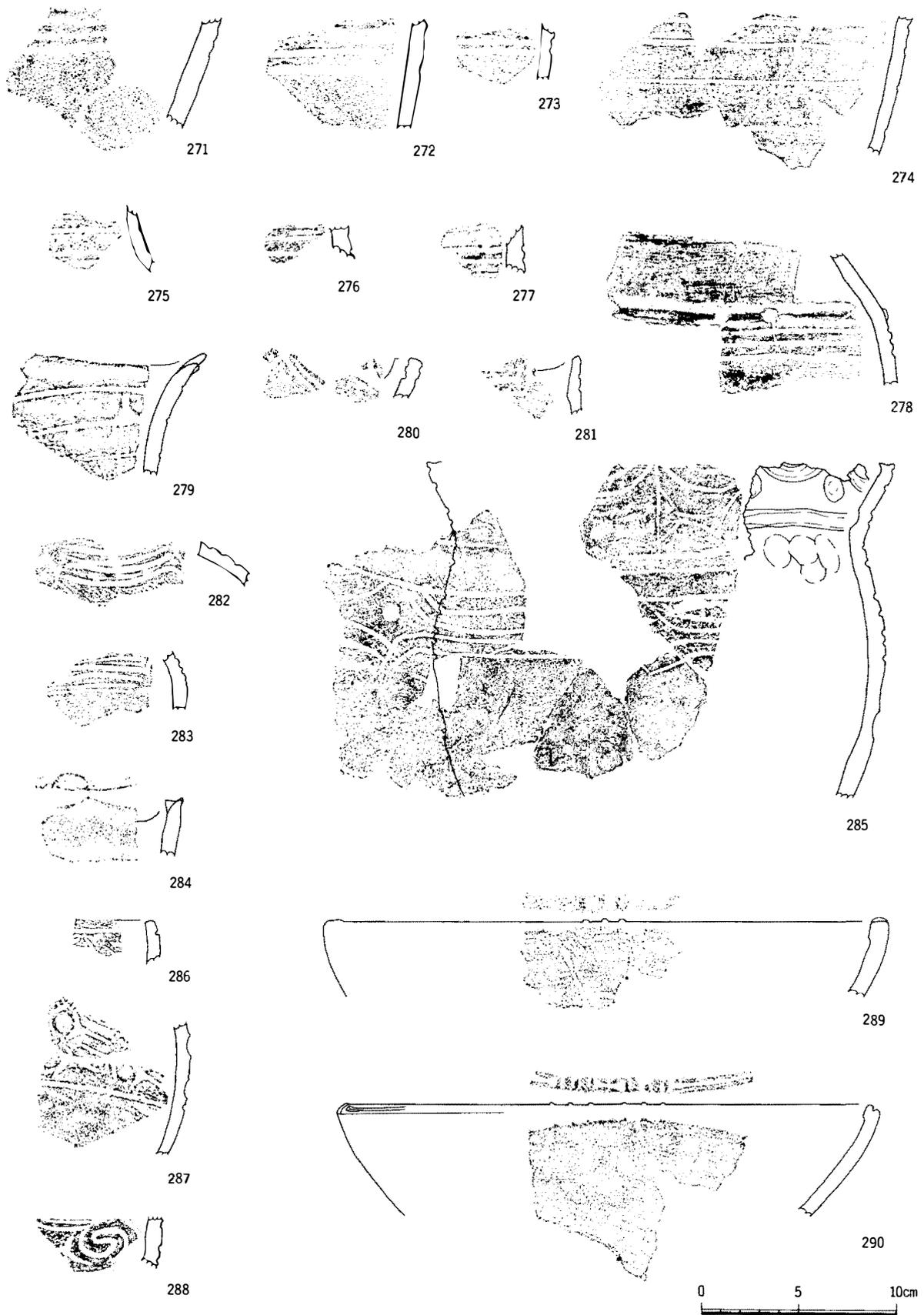
第1群(284~308)

北陸晩期土器としてとらえられる土器や、類似・共通する要素のみられる土器をまとめた。

1類(284~288)は玉抱き三叉文を有する土器である。285は胴部が丸く張りだし頸部がくびれ、■



第24図 第V期の土器



第25図 第V期・第VI期の土器

縁部は外へ開く器形を呈する。8単位ほどの細かな波状口縁を呈していたようであり、一部に残る波底部の上面は丸く押しえられている。口縁部には欠損する波頂部から沈線が垂下し、この垂線の間を一つの単位として、上が二条、下が一条の沈線で対向弧線文が描かれる。胴上部にも文様帯を設ける。上部を一条の沈線で区画し、2波頂部間を1単位とする間延びした二条の対向弧線文が描かれる。弧線文の境にできた空間に凹点を配している。胴上部文様帯下の区画は行われず、左部では弧線が渦巻状に垂下する。口縁部内面にも凹線と凹点による施文がみられる。284も285同様口縁端が丸く押しえられていることからこの類に含めた。286と287は同一個体である。凹点を挟んだY字状の三叉文が、やや斜めに何段も積み重なっており、文様帯下を沈線が区切る。288はY字状の三叉文の間に入り組み状の渦巻文を配する。

2類(289～293)は口縁内面が段をなして肥厚し、口縁端に施文する浅鉢である。289はケズリの痕跡を残すがそれ以外は内外面に丁寧なミガキを施し、292では器壁の内外面に剥落がみられる。口縁端の施文は隆線、端を三角形にしておさめる沈線、縄文等によってなされる。LR縄文を用いる289やRL縄文を用いる290・291、隆線の上に縄文を施す290、3本の隆線を単位とする289・290や4本の隆線を単位とする292、半截竹管による平行沈線、竹管による刺突文を有する292などバラエティに富む。

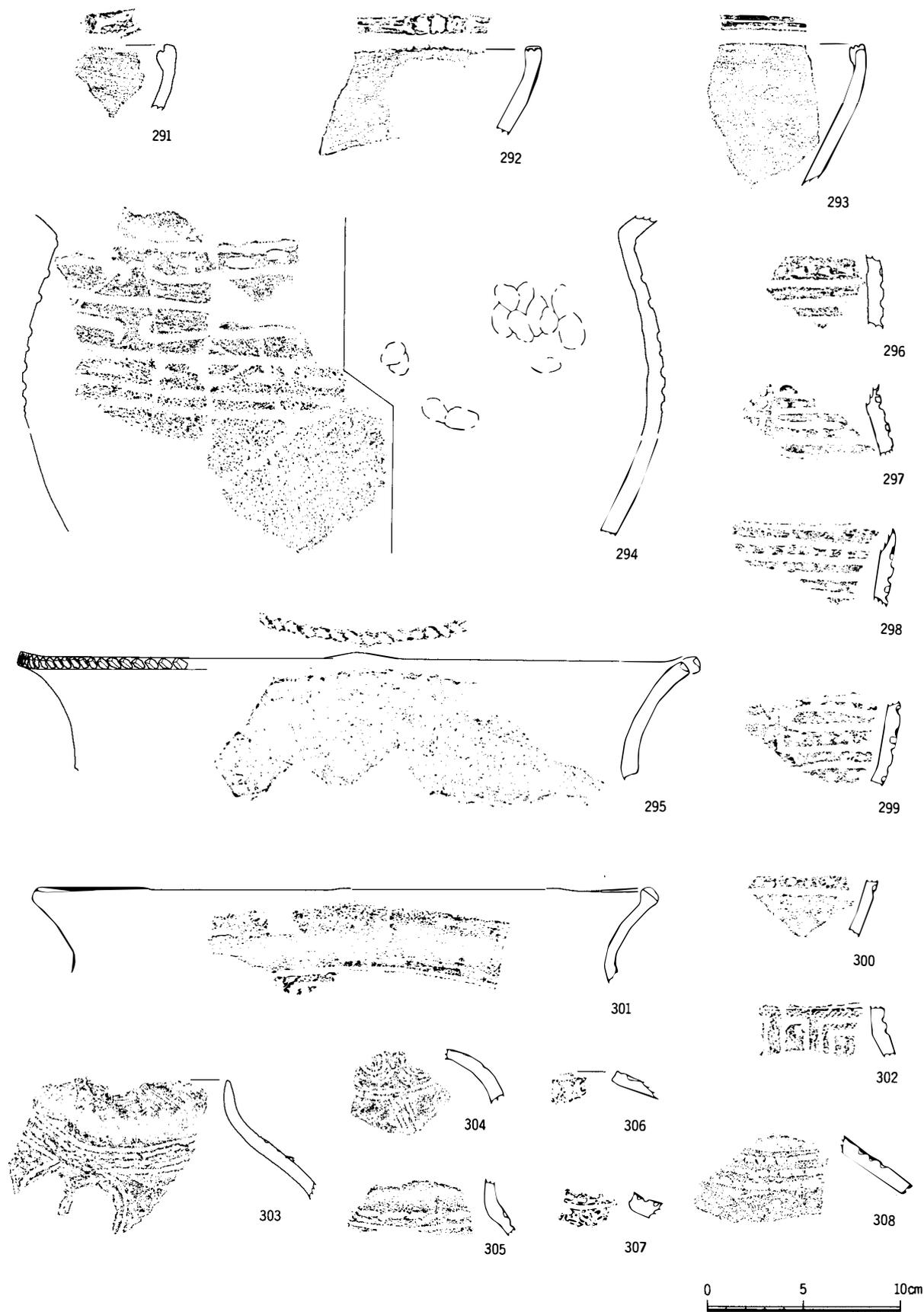
3類(294～308)は沈線と列点文による施文のみられるものである。294は胴上部が丸く張りだし口縁部は外へ開く器形を呈する。胴上部に文様帯を設け、胴下部は縄文を施しているようであるが、器面荒れのため方向などは定かでない。横走る沈線によって文様帯は3つに区分され、一番上は列点文とクランク文、二番目にはクランク文、一番下に列点文を配し、胴下部との区画に二条の沈線を施す。295～300は同一個体である。外反する無文の口縁端には、棒状工具を斜めに用いた刻みが施され、粘土を足して微かな突起を作出する箇所もみられる。胴部は僅かに張りだし上部を文様帯とするが、文様帯は294より広く、胴部下半までおよぶ。297では横に長い棒文を描き、棒の外に列点文を施すように見えるが、299では異なる様相を呈し、全体的な構成はわからない。胎土に径3mmほどの小礫を多く有し、器壁の剥落が内外面に目立つ。301・302は同一個体である。列点文は認められないが直線的な文様と器形の類似から当類に含めた。口縁の一部に粘土を足して微かな突起を作出する。LR縄文を充填し、赤色顔料もみられる。内面にはミガキが丁寧に施されている。303～305は壺形の土器である。303・304では沈線の間を2列の列点文が並び、水平方向だけでなく曲線的な文様が描かれる。303には丸い貼付文が2個並んで付けられるが剥落している。当調査区出土の土器の中では緻密な胎土、堅い焼成がきわだった資料である。306・307は分類上当類に属するが、時期・器形は不明である。306には赤色顔料が付着する。308は壺形土器で、3条の沈線内に刺突を施している。

第2群(309～349)

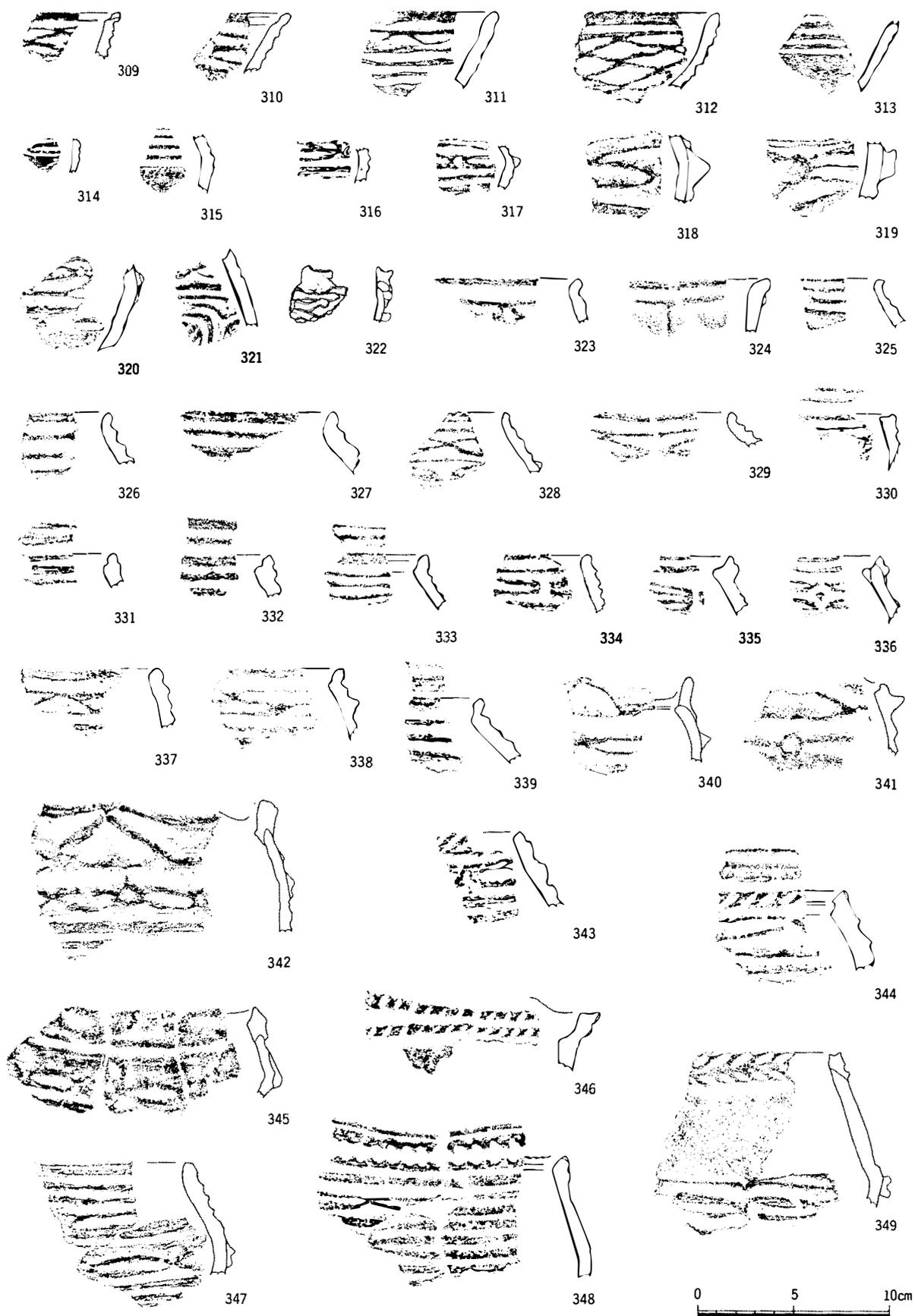
浮線文系の土器を分類した。点数としては150点余が確認されたが、調査区の広い範囲に分布しており、接合率は低かった。したがって器形が復元できる資料は得られなかったが、推測される器形を元に細分した。

1類(309～312)は浅鉢であると考えられる。309・310は口縁内面に段を作出している。309・312には精緻な網状文がみられるが、311では上部に残存するのみで、310にはみられない。

2類(313～318・320・325～330・339・345・347～349)は口頸部が反り気味に内傾するもので、逆「く」の字状に屈折する明瞭な肩を有するものである。ただし、348など肩の張りが弱いものもみられ、



第26図 第VI期の土器



第27図 第VI期の土器

3類との区分は漸移的である。屈折部が残るものは11点で、多くは屈折部に突起を配する。突起のみられないもの(313~315)はいずれも小片である。316~318・320・328は連結部を区切る眼鏡状突起を有し、345・347・349は連結部を区切らない眼鏡状突起を有する。後者の資料において、屈折部上部の文様が簡素化する傾向がある。屈折部で折損する資料が多く胴部の様相は断片的な資料しか得られないが、313・320では胴部の下半が無文となっている。口唇部は、内面が有段化するもの。口唇部が直立、外傾するものがある。

3類(319・337・338・340~342)は口頸部が内彎し、肩の発達しないものである。340~342では口縁上部を波状に拡張するなど誇張した文様表現が目立つ。338は網状文の連結部に突起を配する。340~342は眼鏡状の突起を横に連結するが、連結部には吸盤状の突起を配することもある。吸盤状の突起は3類以外にはみられず、逆に眼鏡状突起の連結部を区切るものは当類にはみられない。口唇部内面は段を作出しているものが多い。

4類(321)は渦文系の壺である。1点みられるのみである。

5類(322~324・331~336・343・344・346)は小片のため4類までに含めることができなかった資料である。口唇部の状況は2類に準じるが、内面に1条の沈線を施すことによって段の代替とするもの(331)。外面に粘土を足して段を発達させるもの(335・336)などバラエティがある。334~336には流水文的な文様がみられる。

第3群(350~357)

沈線によって施描するものである。

1類(350・351)は口縁下に横位の沈線が走る。内外面にミガキが施されている。

2類(353・354)は小片のため器形・文様は不明であるが、数条の平行沈線によって施描されている。353は沈線において折損しており、沈線は3条認められる。内外面とも丁寧にミガキが施されている。

3類(355~357)は弧線文を描くもの。355は上下を1条ずつの沈線で区画し、2条の背向弧線文を描く。352は355と近接して出土し、胎土も類似する。356は弧線内にL R縄文が施されている。357は2条ずつの沈線で上下を区画し、上に開く弧線文を描いている。

第4群(358・359)

半截竹管を押し引いたものである。

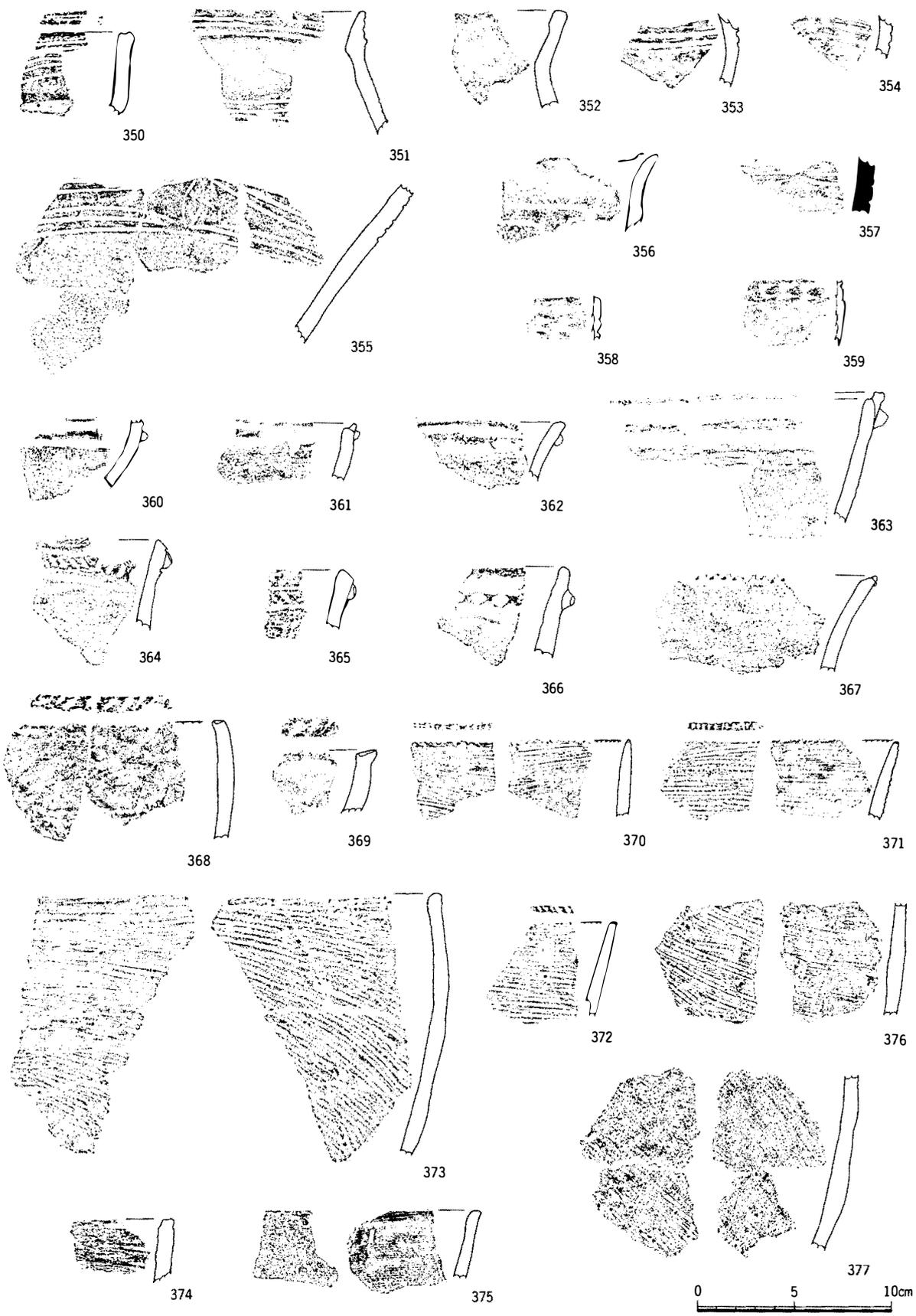
1類(358・359)の2点のみである。出土地点も近く、同一個体であると考えられる。ミガキが施され、いずれも器壁内面が剥落している。胎土には繊維の混入もみられる。358は口縁部片である。

第5群(360~377)

突帯文系土器の一群である。西之山式から馬見塚式にかけての資料が認められるが、多くは西之山式と考えられる。器種は単純な深鉢形、無突帯の甕、突帯が付く甕がある。

1類(360~366)は突帯を有する甕である。突帯がつく資料は素文が多いが、突帯に刻みをもつ364・365や●字状の押し引きが認められる366は西之山式より時期が下がり、五貫森・馬見塚式の資料と考えられる。

2類(367~369)は突帯を有さない甕である。367は尖らせた口縁端を刻んでさざ波状にしており、368・369は口縁端を面とし、刻みを施している。これら甕形土器の口縁部の調整には貝殻条痕は用い



第28図 第VI期の土器

られていない。

3類(370~377)は深鉢形となるもので、砲弾形にならずに口頸部がやや内傾する資料もみられる。370~372では口縁端に刻みを施している。

本群の土器は貝殻条痕の使用、突帯の有無などの点で突帯文系土器においては古相を呈している。

第VII期(第29図~第31図)

弥生時代以降に属するものである。V層を中心にIII層からも出土するが、III層の形成の仕方を考慮するならば、III層の資料は下層からの浮き上がりとしてとらえられる。

第1群(381)

遠賀川系の土器である。

1類(381)の1個体が出土したのみである。逆「L」字形に開く口縁の甕であるが、屈折部の内面に粘土を足して厚くし、ミガキを施している。口縁端に半截竹管の刻みが付けられる。

第2群(378~380・382~391)

条痕文系の土器を分類した。

1類(378~380)は榎王式としてとらえられる。378・379は口縁下に突帯が横走り、378には指押さえ、379には袋状指押さえがなされる。378は口縁内面に粘土を貼り付けて段を作出し、口縁端は押さえられてゆるやかな波状を呈する。379も口縁端を平坦にしている。380は深鉢であろうか。上部に補修孔がみられる。

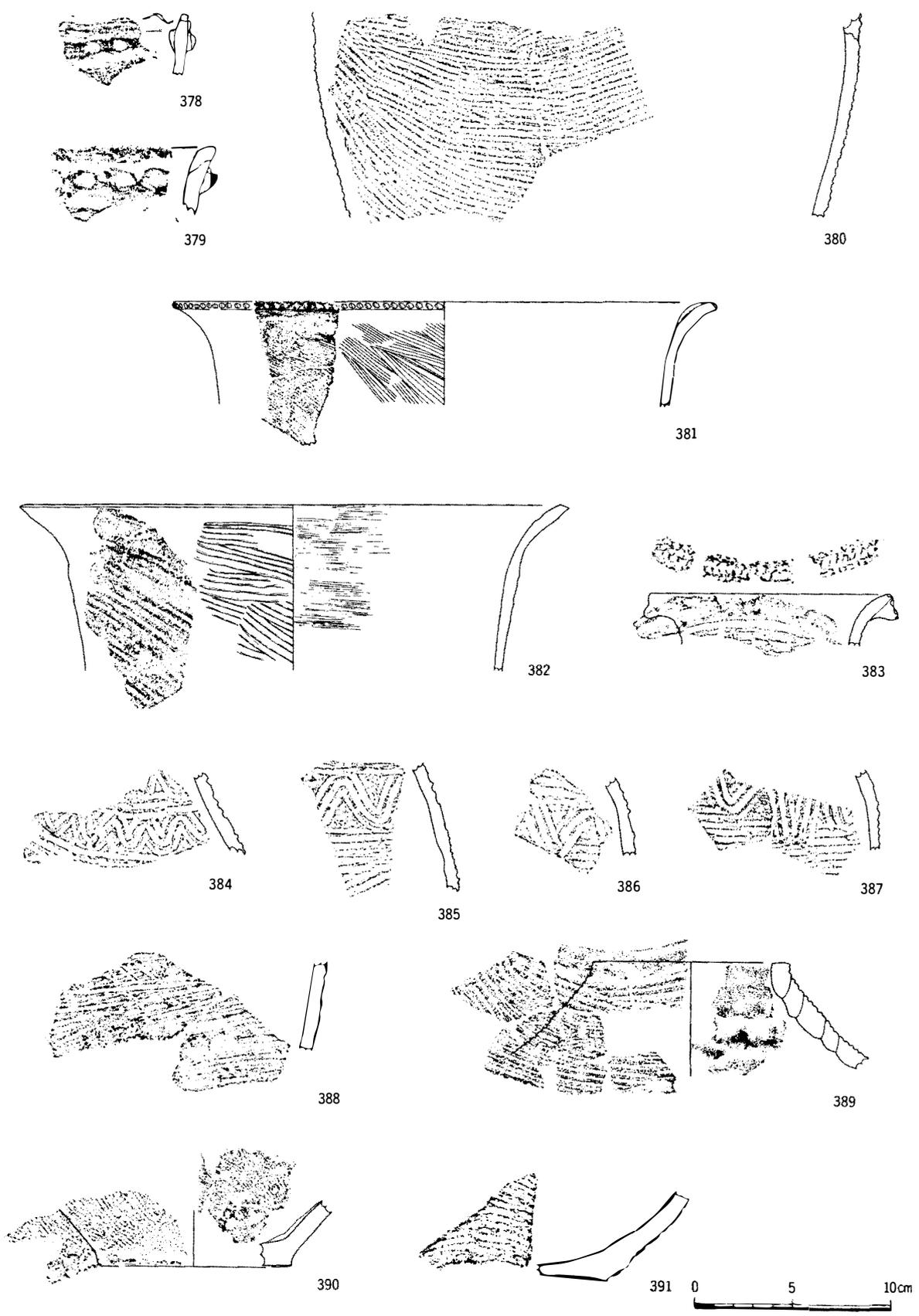
2類(382~391)は水神平式としてとらえられる。382は水神平の新しい段階に属するが、口縁部が屈折するように開く器形や羽状を呈さない条痕など、遠賀川系土器の影響を強く受けている。383~387は同一個体の壺である。胴部には条痕が粗く施され、頸部には波文の条痕と横走る条痕を交互に配して文様化している。施文は下→上の順に施されている。口縁部は外側へ肥厚し、口縁端の上部と下部に半截竹管による刺突が施されている。388は横位の条痕と斜位の条痕が交互に施されている。389は無頸壺。内面の調整は粗く、粘土の継ぎ目が残る。390・391は壺の底部片で、390の内面には何らかの付着物が残る。

第3群(392・396)

沈線文系の土器である。全て壺形を呈する土器である。縄文の有無で細分した。

1類(392~394)は沈線のみで施文されるものである。392は口縁部片。横走る浅い沈線に、三角状の抉りを入れる。393・394は胎土類似し出土地点も近いことから、同一個体の可能性もある。小さな底部からやや内彎気味に開きながら立ち上がり、鋭い肩をもってカーブの大きな頸部につながる。口縁部はラッパ状に開き、粘土を貼り付け有段化して頸部と区画する。口縁端に山形の突起をつける。口縁部の文様は、基本的には5条の沈線からなるが、突起下に1・2条目の沈線を区切る短沈線を入れ、突起と突起の中間付近に3・4条目の沈線を区切り2・5条目の沈線をつなぐ工字状の文様を描く。口縁内面には2条の沈線が横走り、突起部に1条目の沈線を区切る短沈線を入れる。胴部文様は、肩に5条の沈線を横走させ、その下に矢羽根状の沈線文と多条の沈線を縦走させる。口縁内面には赤色顔料が塗布されている。頸部内面のミガキは粗く、肩部に粘土の継ぎ目が残る。

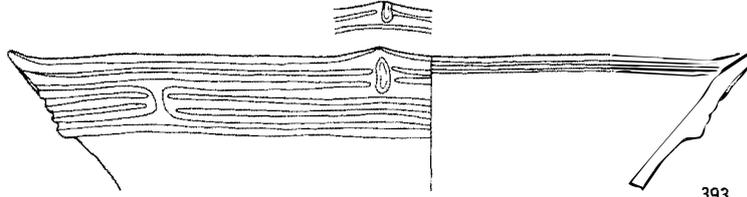
2類(395・396)は節の細かなLR縄文を施す資料で、同一個体である。胴部は丸く張りだし、肩



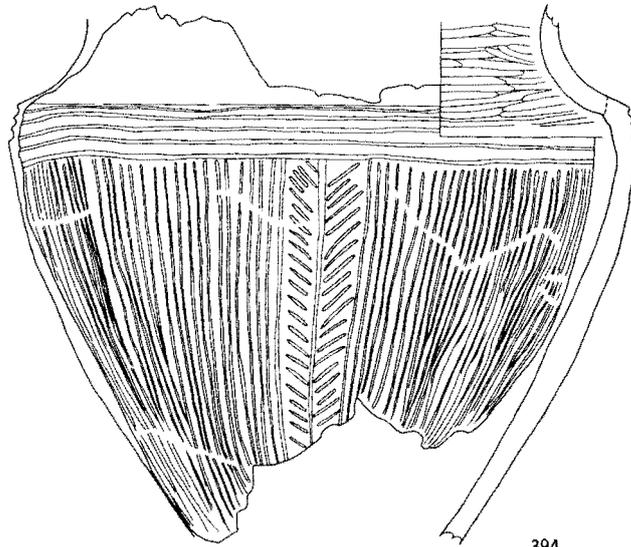
第29図 第VII期の土器



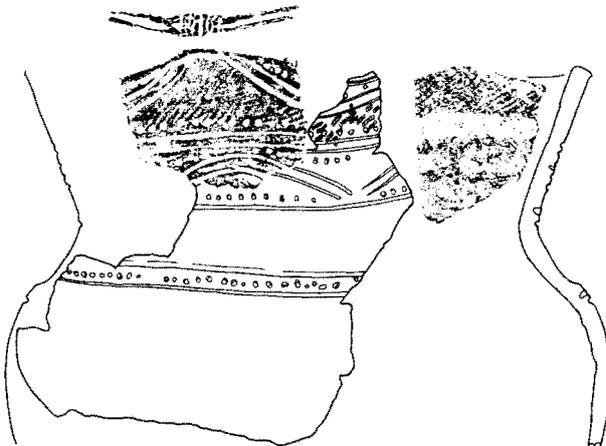
392



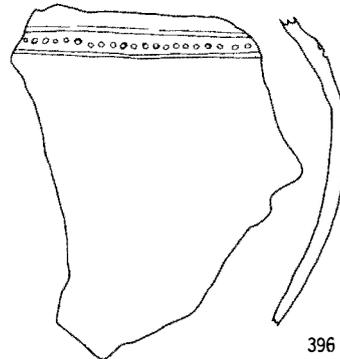
393



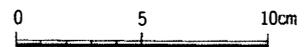
394



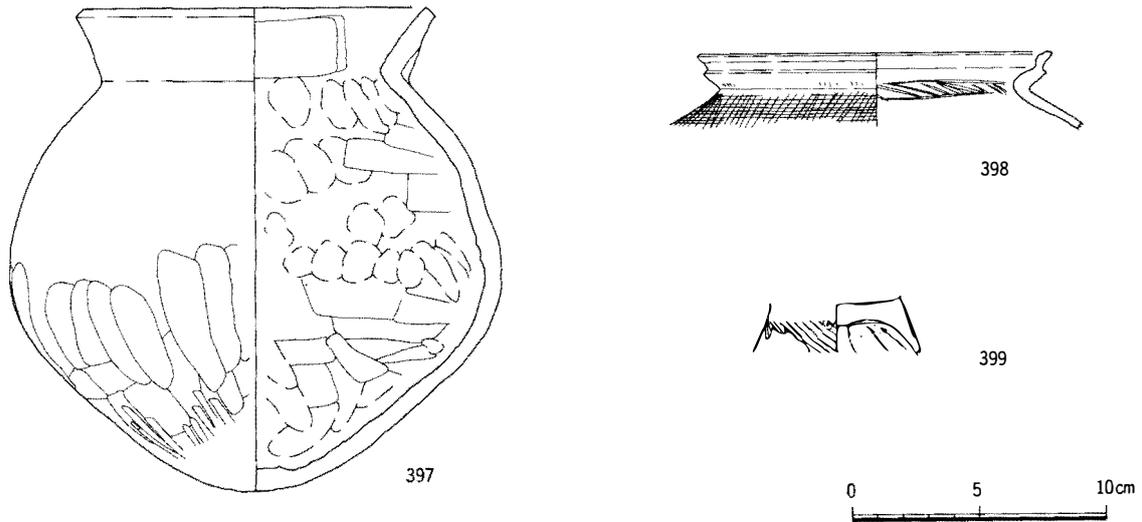
395



396



第30図 第VII期の土器



第31図 第VII期の土器

部から頸部が内傾して口縁部が再び直線的に開く。ゆるやかな波状口縁をなし、波頂部には粘土を足して内外に肥厚させる。口縁端には1条の沈線が走り、波頂部には7条ほどの短沈線を縦に並べている。口縁部の施文は平行沈線と竹管状工具による刺突でなされる。口縁上部には、波頂部を起点とした下に凸の弧線文が描かれ、その上部に刺突が配される。その下には両脇に刺突文をしたがえた平行沈線が横走り、これより上に縄文が施される。その下には、上の弧線文と半位相ずらした上に凸の弧線文が描かれる。頸部との区画は1条の沈線と刺突文による。内面は、口縁に沿ってわずかな肥厚帯を作り、縄文を施文している。肩部は粘土を貼り付けて有段化し、刺突文と1条の沈線を横走させる。内面のミガキは外面に比べて雑である。

第4群 (397~399)

古墳時代に属する甕である。397は丸底である点に布留甕の影響を感じるが、内面のケズリが不完全であるなど調整手法は在地的である。398・399はS字甕である。口縁が直立気味で、上面には凹面がみられる。頸部外面には細部調整があり、内面にはハケ目が残る。S字状口縁甕の中では古相の特徴を有している。

第0期 (第32~第35図)

無文土器や全面に縄文を施す土器など無文系の土器については、時期を特定しうる資料もあるが、時期不明のものが多く、時期不定の0期を設定して一括した。

第1群 (400~418)

全面に縄文を施したもの。

1類(400~404)は結節縄文を縦走させたものである。第I期に属する。地文が無文となるもの(402)が1点ではかは縄文を地文とするが、縄文の方向はいずれも器面荒れのために定かではない。結節縄文は地文の上に重ねて施すが、必ずしも垂直に縦走せず、斜めに傾いたり一旦途切れて異なる位置から垂下するもの(400)もみられる。400は胴上部がわずかにくびれる器形を呈し、径3mm大の小礫を

胎土に混和する。同一個体と思われる資料が近接して出土するが、それによると結節縄文は底部近くにまで施されているようである。

2類(405~413)は縄文のみが施されたものである。405は波状口縁で、内湾する口縁の上端が内面に尖るようにして張り出している。こうした口縁の形態や胎土は、第Ⅱ期第1群の土器に共通するものである。L R縄文を施すが、被熱による器壁外面の剥落が目立つ。406は口縁内面に粘土を貼り付けて段を設けている。縄文は粗いR Lを施す。408は幅15mmほどのL R縄文を斜めに帯状に施文している。節が明瞭で、原体がL { R Rであったことが確認できる。409・410は同一個体である。頸部がやや開く土器で、R L縄文を縦に転がしている。412は補修孔がみられる。縄文は節が明瞭でL { R R原体を用いていたことが確認できる。413は無節のL R縄文を縦位に施すものである。

3類(414~418)は縄文・貝以外の原体を用いたものである。414・415・417は2条の細かな筋が1つの節をなし、第Ⅱ期第1群41~43の資料同様オオバコの穂を原体としているようである。オオバコの穂を強く転がすと41~43のような施文となり、弱く転がすと414・415のような施文となる。417は節の方向が不揃いで、回転による施文ではないようだ。416・418は原体不明で回転施文であるのかも定かでない。418は416と出土地区は異なるが胎土も類似する。

第2群(419~426)

櫛状工具による描文のみられるもの。曲線も交えた描線のみられるものと縦走・横走する櫛描線のみもの、縦位の櫛描線を全面に施すものに分類される。

1類(419)は曲線も交えた描線のみられるもの。口縁部が大きく開き、口縁端は平らにナデられる。4条単位の櫛描線が口縁部から幾筋も垂下するが、中央にみられる櫛描線は右へ屈曲し、屈曲部から三つ又に櫛描線が付加される。内面には疎らなミガキが施される。

2類(420~424)は縦走・横走する櫛描線のみみられるもの。420は口縁部である。縦位の櫛描線を口縁下の横位の櫛描線がきっている。422も同一個体で同様の状況を呈する。423にはR L縄文が横位に施される。

3類(425・426)は縦位の櫛描線を全面に施すもの。同一個体で、焼成は極めて良好である。

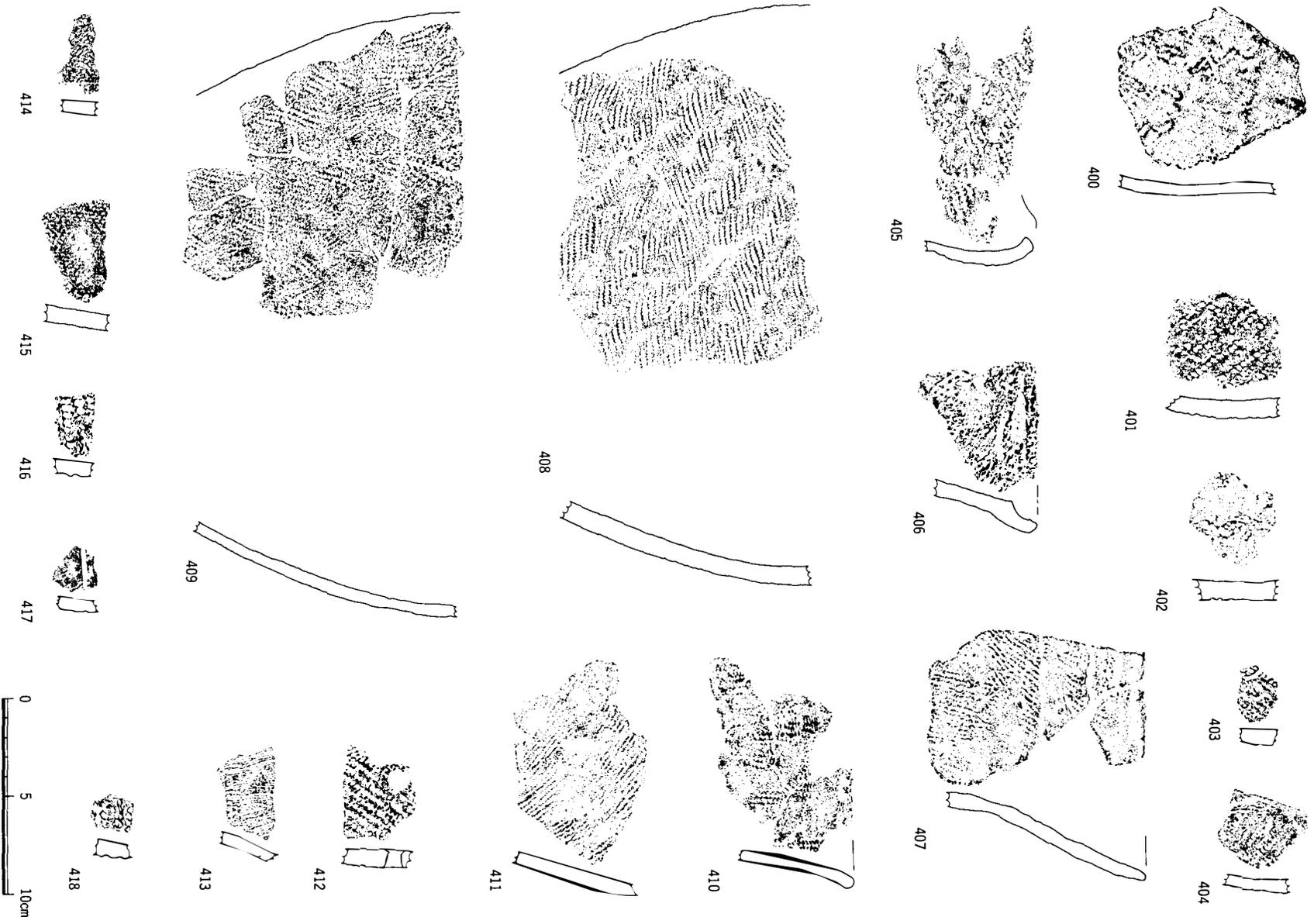
第3群(427~441)

無文の土器である。当調査区において出土した土器のほとんどは無文の深鉢であった。口縁の形態の特徴的なものと径が復元できるものについて図示したが、類別はおこなわない。427は緩やかな波状口縁で、内側に粘土を貼り付けて尖らせるように肥厚させる。428は大きく外傾する口縁で、内側の肥厚がつば状に発達する。429は口縁を「L」字状に内屈させている。440は胴上部が一旦くびれ、頸部が再び開いて口縁は逆「く」の字状に内屈する。3単位の緩やかな波状口縁を呈し、内面にはミガキが施される。

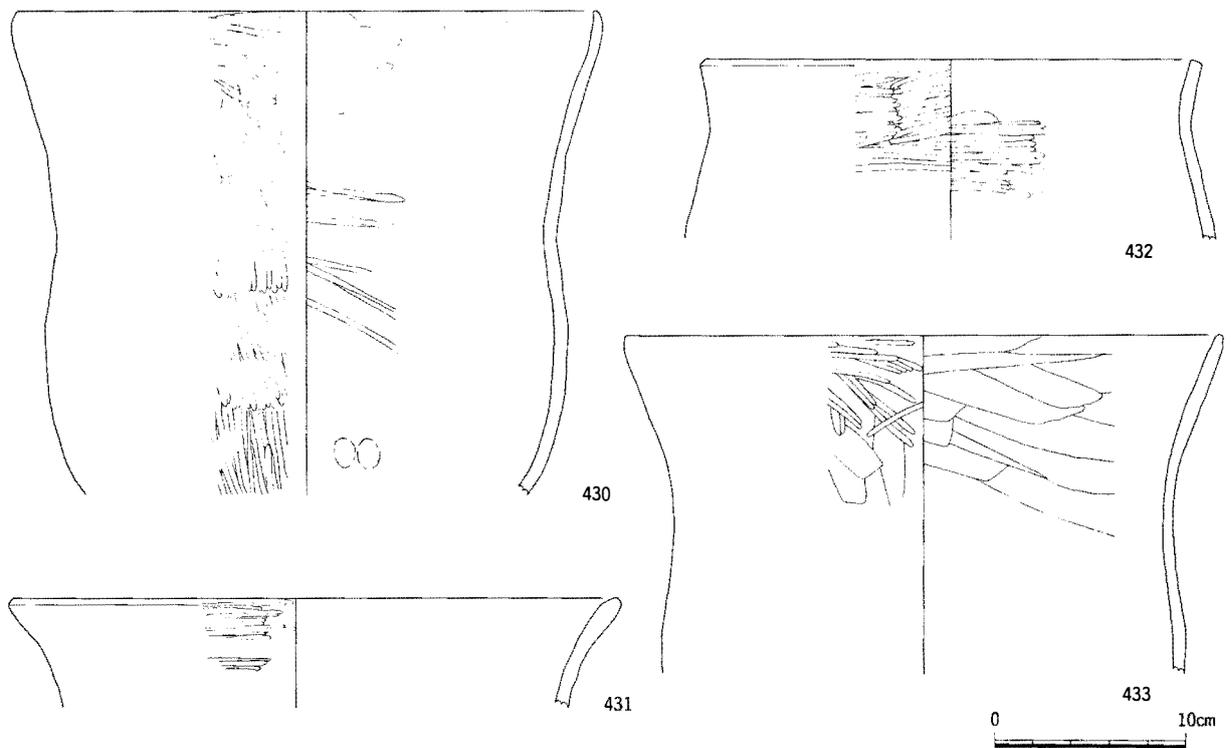
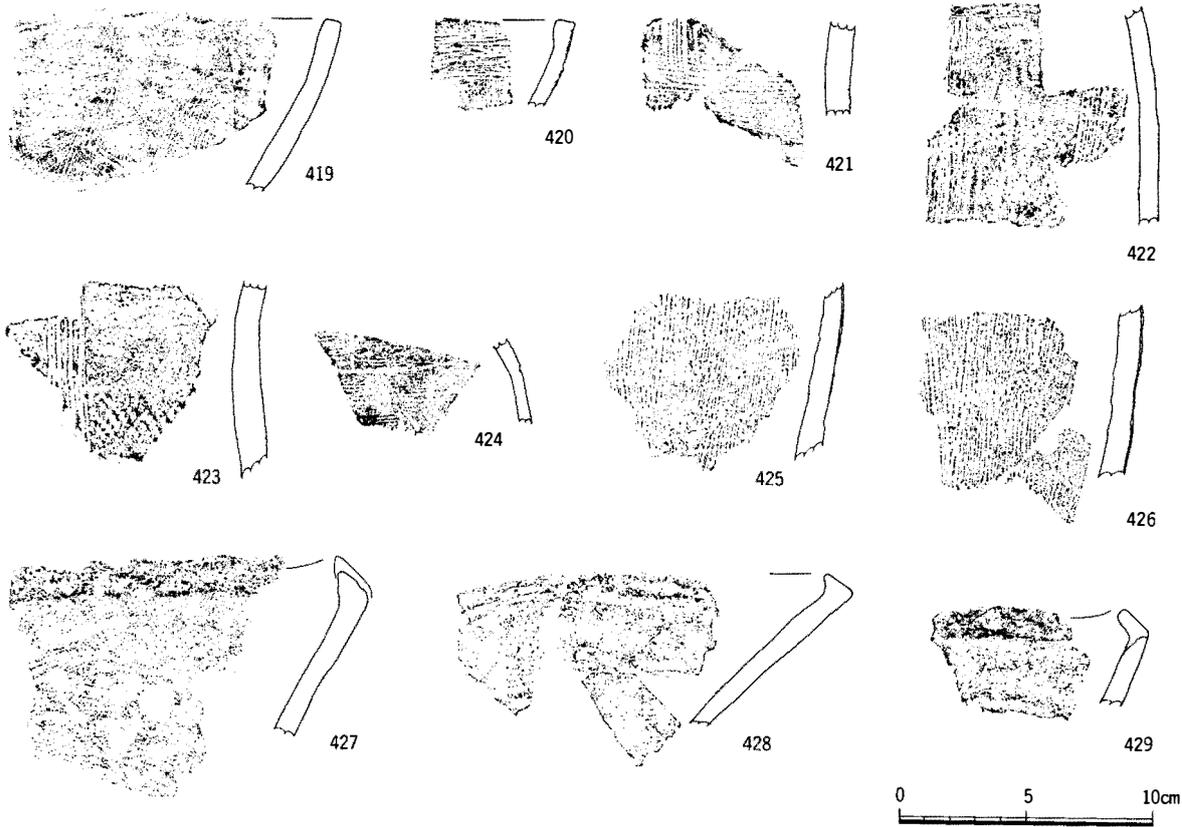
径が復元できるものは口径30cmほどのものが大半を占めるが、437・440など口径20cm内外のものや439など40cmに近いものもみられる。器形は胴部上半から頸部にかけて一旦くびれるものがほとんどであり、439は例外的である。くびれの位置、頸部の開き方はさまざま、432のように頸部があまり開かず、最大径が胴部にあるものもある。

第4群(442~454)

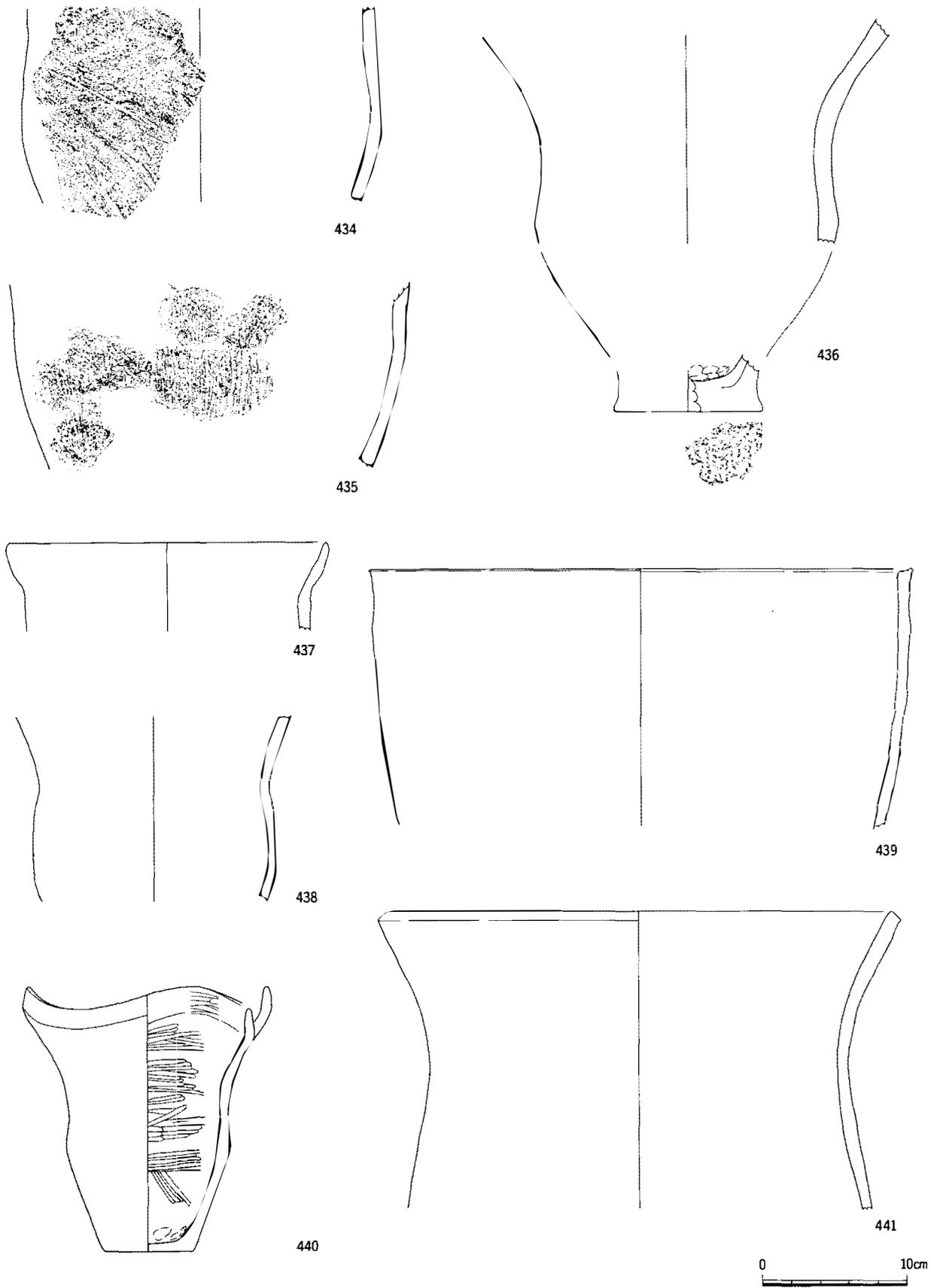
土器底部片である。底部径の復元が可能な資料は38点で、うち34点が底部径10cm±2cmにおさまる。



第32図 第0期の土器



第33図 第0期の土器

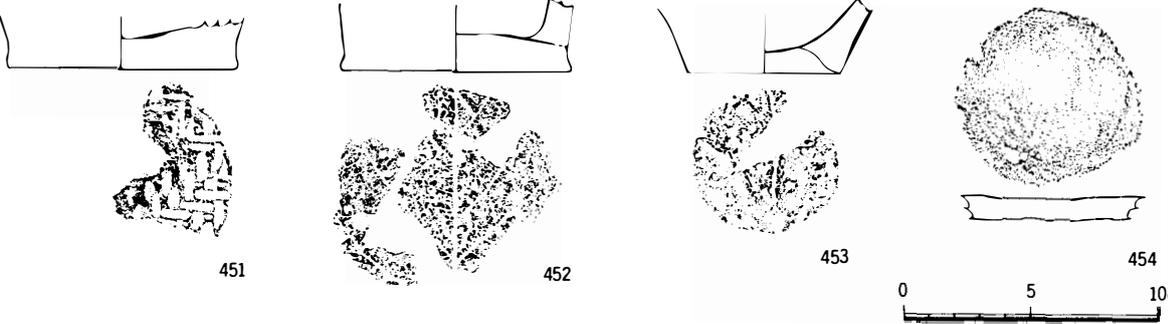
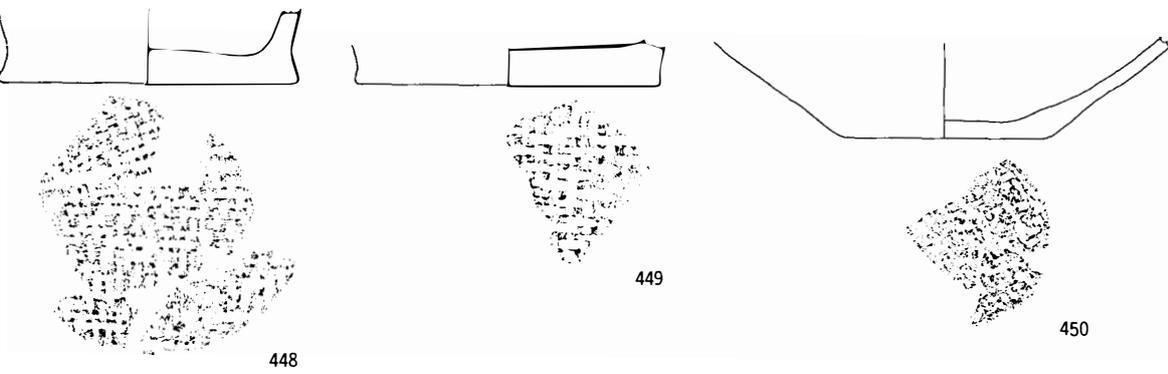
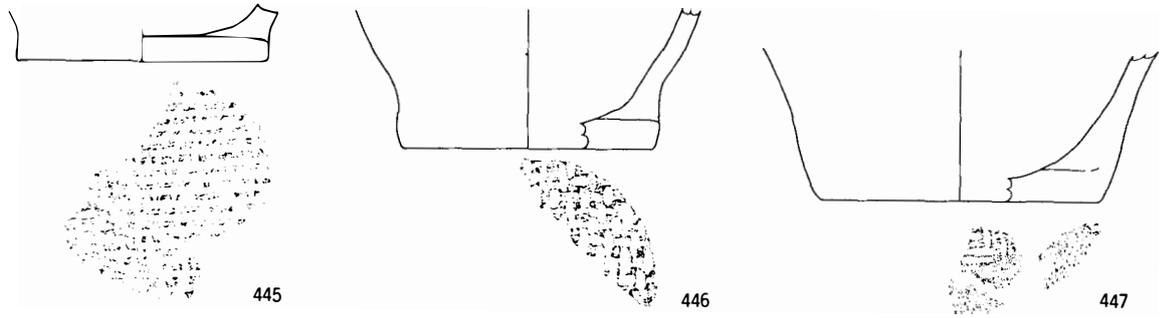
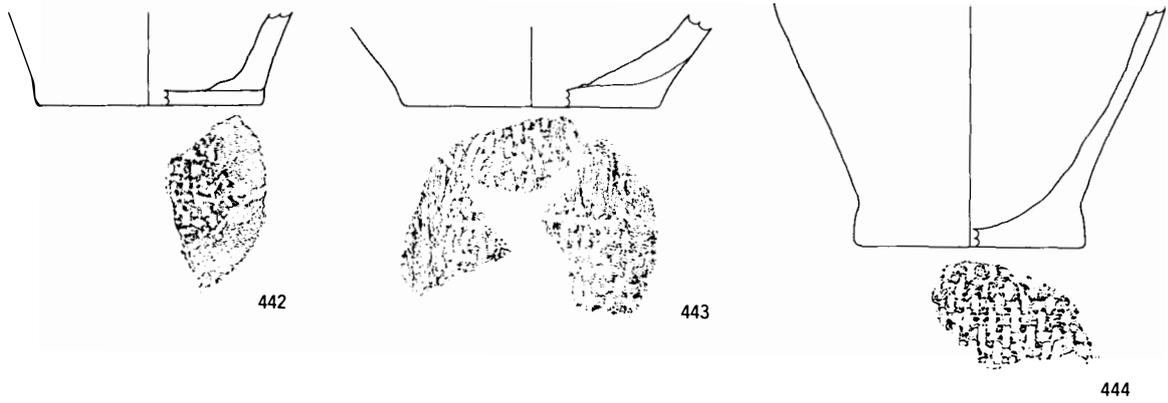


第34図 第0期の土器

底部の断面形は底部から壁面をそのまま積み上げるもの(448・449・451・452)。壁面内面が底部にナデつけられ、斜めに開き気味に立ち上がるものがあり、後者には外面もなであげられるもの(443・450)と外面はナデあげられないもの(442・444～447)がある。

底部圧痕は網代圧痕(442～451)、葉脈圧痕(452・453)、底部にナデを施したもの(454)、器面荒れなどのために不明なものがある。

網代における緯(横)、経(縦)は坪井正五郎の定義(1899「日本石器時代の網代形編み物」)に準じて数多く越えたものを緯とする。442・443は1本越え1本潜りの網代痕である。断面の扁平な条と丸い条をそれぞれ経緯に組んでいる。444～446は2本越え1本潜りの網代痕である。当遺跡の網代痕の確認できる資料の中で、最も多く確認できるものである。444・446は経緯に扁平な条を用い、445は緯に丸い条を用いて、経条を密に、緯条を疎に1本送りで編み込んでいる。448～450は2本越え2本潜りの網代痕である。448は扁平な条を用い、1本送りと2本送りを交互に編み込んでいる。緯条は2方向に編まれている。449は経に丸い条を用い、1本送りと2本送りを交互に、疎に編み込んでいる。450は1本送りの密な編み方をしており、織物の綾織りのような斜方向の文様ができる。447は4本越え4本潜りの2本送りで、450と同様の文様になる。やはり密な編みである。451は4本越え1本潜り1本越え2本潜り1本越え1本潜りの2本送りである。緯に丸い条を用いている。452・453は葉脈圧痕がみられる。452はクズの葉裏面の圧痕が明瞭に残っている。454は底面に指ナデが施されたものである。



第35図 第0期の土器

(2) 石器類

今回の調査において1275点の石器及び剥片・石核類が出土した。その種類と点数は表1の通りである。石器類はほとんどがV～VII層の縄文時代遺物包含層より出土したが、いくらかはI・II層、およびV層上面で検出した遺構中より出土している。包含層以外で出土した石器は、ローリングのため稜部が磨滅し、包含層出土の石器との違いは明らかである。このことは、転じて考えれば包含層出土の石器類が、プライマリーな状態に近い状況であったことを裏付けるであろう。石核・剥片類から順にみていくこととする。

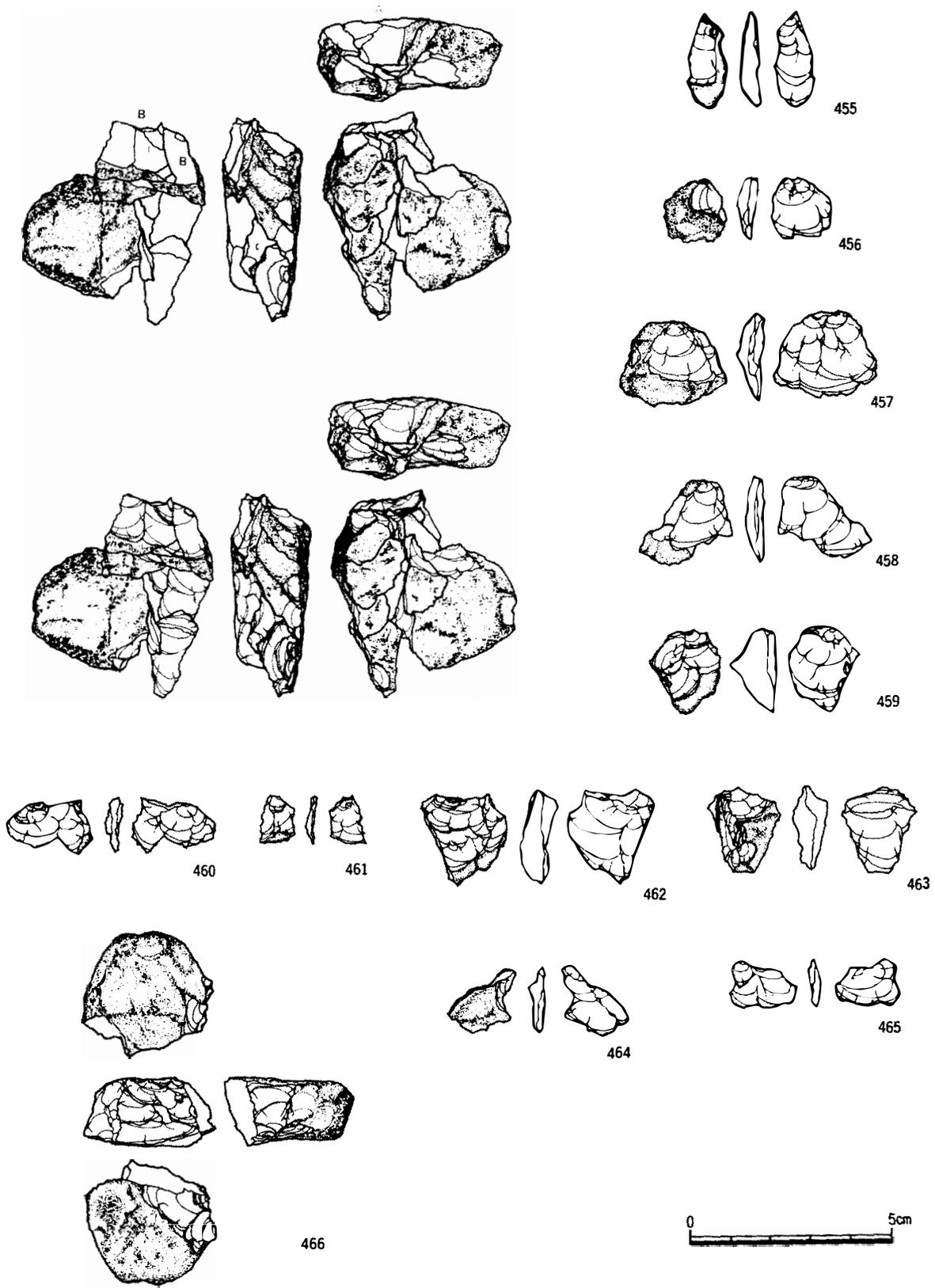
石核・剥片類（第36図～第38図）

石鏃等剥片石器の素材作出のためのチャート岩・下呂石製（益田郡下呂町湯ヶ峰に産するデサイトを下呂石と通称している。本報告書でも学史に準じて下呂石と称する。）の石核は計9点出土したが、剥片数は計287点であり、石核1点に対する剥片の割合は単純計算で約31.9枚となる。この数字は、原石に近い形から残核までの剥片剥離工程を明らかにすることができた455～466の接合資料をかんがみても、極めて多い数字である。したがって、多くの剥片は調査区外で作出されたものが持ち込まれたか、調査区内で剥片が作出された後、石核のみ調査区外へ持ち出されたかである。どちらにせよ調査区内での剥片作出作業は活発ではなかったといえよう。

455～466は53G・54Gで出土した石核1点と剥片11点によるチャート岩の接合資料である。節理の発

表1 勝更白山神社周辺遺跡における石器組成表

石核（チャート岩）	7
石核（下呂石）	2
石核（粗質安山岩）	5
剥片（チャート岩）	229
剥片（下呂石）	56
剥片（粗質安山岩）	107
粗質安山岩分割礫	5
粗石材製石器	11
石鏃	42
石錐	1
くさび形石器	7
スクレイパー類・UF	2
■石	1
磨・敲石	17
石■	2
石錘	3
磨製石斧	2
石製土掘具	850
石製土掘具調整剥片	26



第36図 石核・剝片類

達する板状のチャート岩垂角礫を素材としている。まず、素材の木口面に数枚の剥離を施し(A)、その剥離面のバルヴ側を打面にして3枚程の剥片を剥離する(B)。455は、その際剥離された剥片の1点である。次いで、Bの工程の剥離面バルヴ側を打面として456・457・4583枚の剥片を剥離する(C)。その後、Cの剥離面バルヴ側を再び打面として459・460・461・462を剥離する(D)。459・462の左側縁は節理面であるが、この節理面での折損は、剥片剥離後のものである。それは460の剥片の一部が節理面より突出しており、復元される剥離時の石核の形から推測される。そして463が剥離される(E)。463は折れのため打点を有さないが、Dの剥離面バルヴ側を打面として剥離されたものであろう。その後剥離面側部等を打面として石核の平坦面を剥離する464などの工程(F)を経て、最後に自然面を打面として465等寸詰まりの剥片を木口面に剥離して(G)残核を残す。また、457・458・463の背面にはごく初期に行われた木口面を作業面とした剥離の痕跡もみられる。

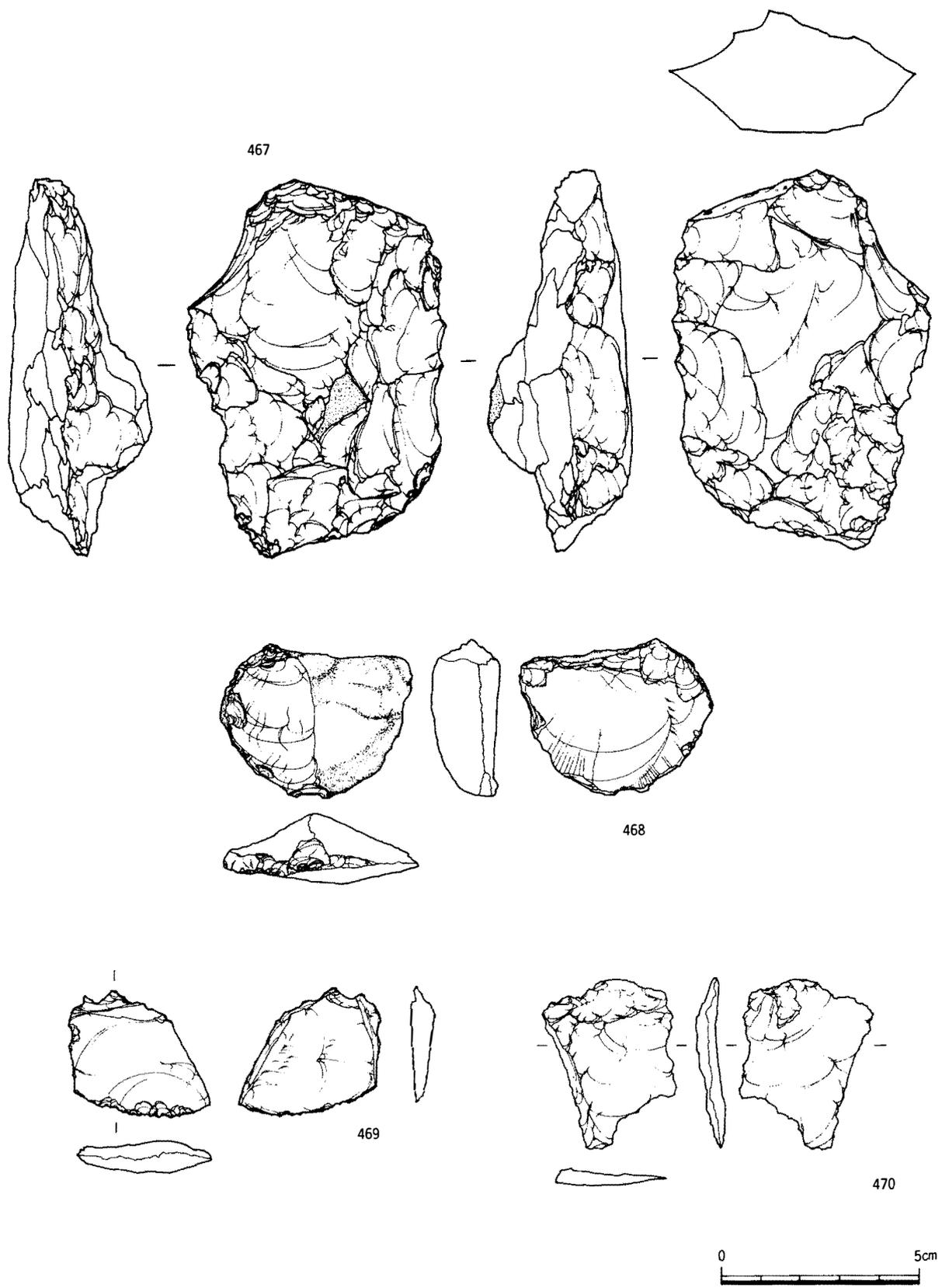
残核からは、自然面を作業面や打面とするF・Gの剥離工程のみが復元されるが、接合資料によってA～Eの工程、すなわち打面と作業面を交互に交替して剥片を作出していく工程が明らかとなった。同一の石核における作業の中で異なる剥離方法がとられており、石核の状況等に応じて適当な方法で剥片が作出されていた様子を読みとれる。

この工程で得られた剥片は寸詰まりで貝殻状の、大きさの一定したものである。しかし厚さは安定しない。A～Eの工程における剥片は、旧作業面の稜上を打撃するものがほとんどである。やや平たいバルヴをみせるもの、ツインバルヴを有するものもみられる。F・Gの工程で得られた剥片の打点部は折損しており、観察できない。残核は、正面では一面から、右面では剥離面を打面とした剥離もみられる。左面は節理で折損している。

他のチャート岩を用いた石核も、剥片を素材としたもの、分割礫を素材にしたもの、原石を素材としたものがあるが、いずれも一枚の自然面・剥離面を打面としたものか、打面と作業面を交替するものである。これらの残核に残る剥離面も寸詰まりの貝殻状を呈している。

467は下呂石の厚手の剥片を素材とし、打面部を除いた全周の表裏で打面と作業面を交替しながら剥片剥離をおこなった残核である。節理面は観察されるが自然面は残らない。原石は小さくとも1,000g以上の大きさが想定される。素材となった剥片の打面は平坦な剥離面で、打痕が複数みられる。剥片作出面のバルヴは、左側縁は正面側に、右側縁は裏面側に主に残る。また、正面での左・右側縁のきりあい関係は求められなかったものの、裏面において左側縁(裏面では右側)の剥離が右側縁(裏面では左側)の剥離をきっていることがかろうじて確認できた。これらの新旧関係から、右側縁正面での作業→右側縁裏面での作業→左側縁裏面での作業→左側縁正面での作業というように剥離は進み、最後に末端部正面・裏面の順で剥離が行われる。得られる剥片はやや巾広で貝殻状を呈している。旧作業面の稜部を打点として剥片を作出している。

471～474は下呂石の石核1点と剥片3点の接合資料である。角礫か垂角礫であろう自然面が残るが、この自然面に細かな打痕がみられる。打痕は剥離面にはなく、自然面全面に若干の疎密をもちながらある。作為的なものとは考えられないことから、剥片作出以前の、転磨の際か運搬の際等に生じたものであろう。残核は逆四角錐状を呈しており、下頂部と一稜部を中心に著しい潰れが発達する。上面と側面を作業面とする。側面の作業面は全て上からの剥離で、やや縦長の剥離痕を残す。上面は周囲から求心的な剥離をおこない、剥離痕は寸詰まりの貝殻状である。バルヴは全て上面に残っており、



第37図 石核・剝片類、スクレイパー類、使用痕を有する剝片

側面での剥片剥離の後、上面での作業に移行していったことがわかる。471は点状打点で、腹面は石核上面の一部にみられる面と同一であり、この打撃では剥離が成功しなかったものと考えられる。いずれかの段階で、裏面からの加圧により折断されている。その後もこの不成立の剥離面を除去するために表裏から剥離が加えられている。472は側面を作業面として得られた剥片である。打点部は折損する。左側縁に、正面から潰れ状の剥離が入る。473は上面で得られた剥片である。末端はヒンゲフラクチャーをおこしている。この剥片は側面の旧作業面の稜上を加撃しているが、上面の他の剥離痕では稜上加撃はみられない。471・472と石核の接合関係から元来の大きさが推測でき、上面では作業によって2 cm程の厚さを減じていると考えられる。

467と471～474の資料は、素材、打面転移のあり方、打点位置等相違点多いが、結果的に求心的な剥片剥離を行っているという点で共通する。

剥片類は接合に関係するもののみ図示したが、チャート岩も下呂石も、長幅3～4 cm内外の寸詰まりの縦長、もしくは巾広の貝殻状の剥片が主である。

石鏃 (第39図)

42点出土したが、うち23点について図示した。裏面に素材の剥離面の残るものは両面について図化したが、残らないものは両面図化したものと正面のみ図化したものがある。断面は厚さが最大の部位で示した。側面図にはエッジの稜線と、頭部にファシット状の剥離の入るものはその剥離面を図示した。

石鏃の形態的屬性の主なものとして、矢柄との装着方法が反映する基部の形態と、刺突能力と関連する鏃身部の形態がある。本遺跡で出土した石鏃も、この2点に着目して分類をおこなった。

基部の分類

凹基式鏃 基部が僅かに内彎するものを凹基式鏃とした。

有脚式鏃 基部の抉りが深く、脚の作りだしが明瞭なものを有脚式鏃とした。抉り部深度が全長の1/10以上で3 mm以上のものを有脚式鏃とし、凹基式鏃と区別した。この数値は基部に抉りの入る石鏃の中で、抉り部深度が全長の1/10以下の一群と、1/6程度の一群があること。抉部1/6程度の一群の抉部深さは大概3 mm以上であることから設定した。

有茎式鏃 基部に茎部を有するものを有茎式鏃とした。また、胴部が収れんしてそのまま基部となる、細長い柳葉形を呈するものを柳葉式鏃とした。

鏃身部の分類

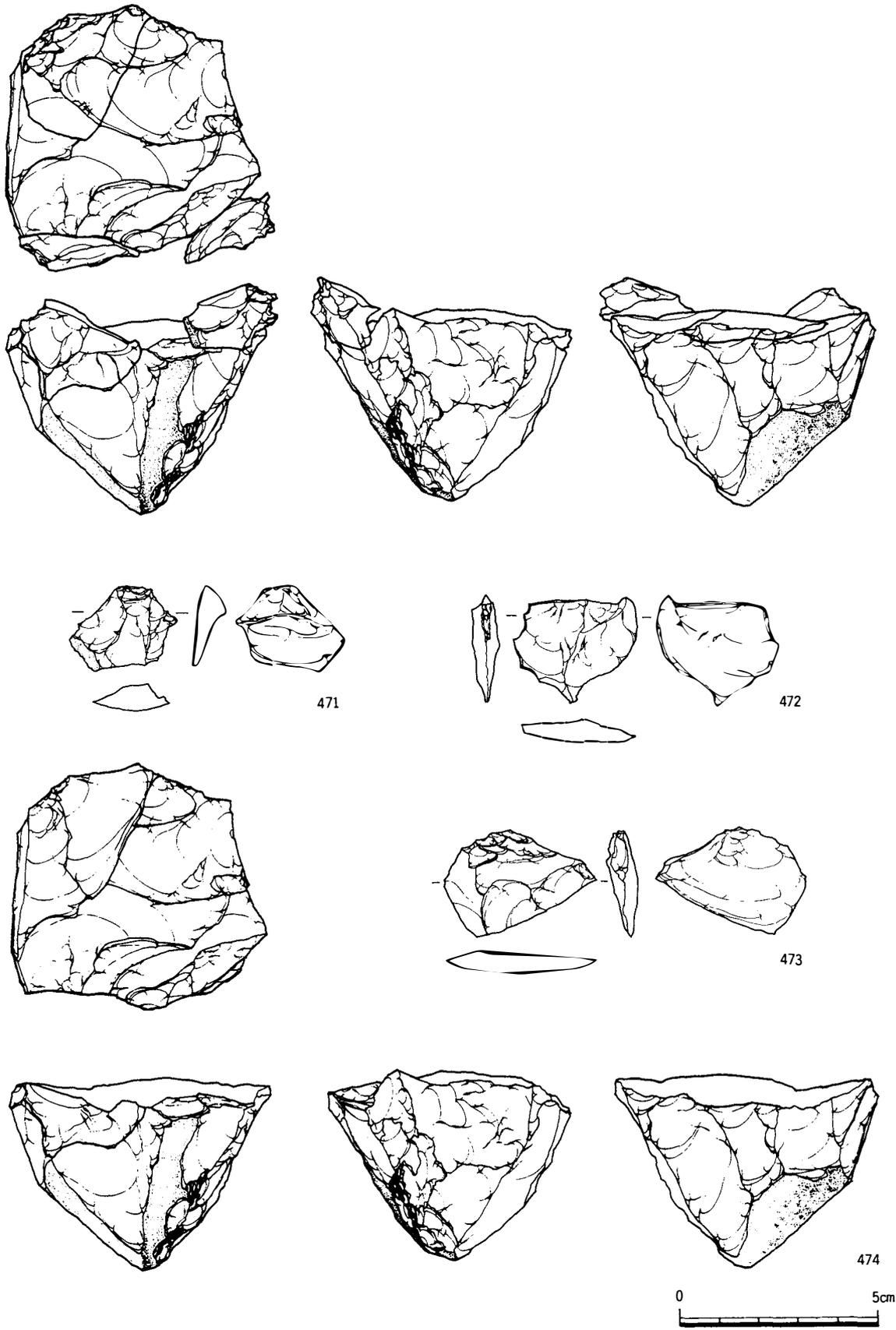
無 肩 側縁部が直線的に、あるいは若干内彎・外反しながら基部に至るもの。全ての基部分類に存在する。

有 肩 側縁部の肩が張った形状をもつもの。鏃身下半部は両側縁が平行かそれ近い形で走り、上部で角度を変え尖部を作り出す。肩は鏃身上部に作り出す。凹基式鏃・有茎式鏃にはみられるが、有脚式鏃・柳葉式鏃には存在しない。

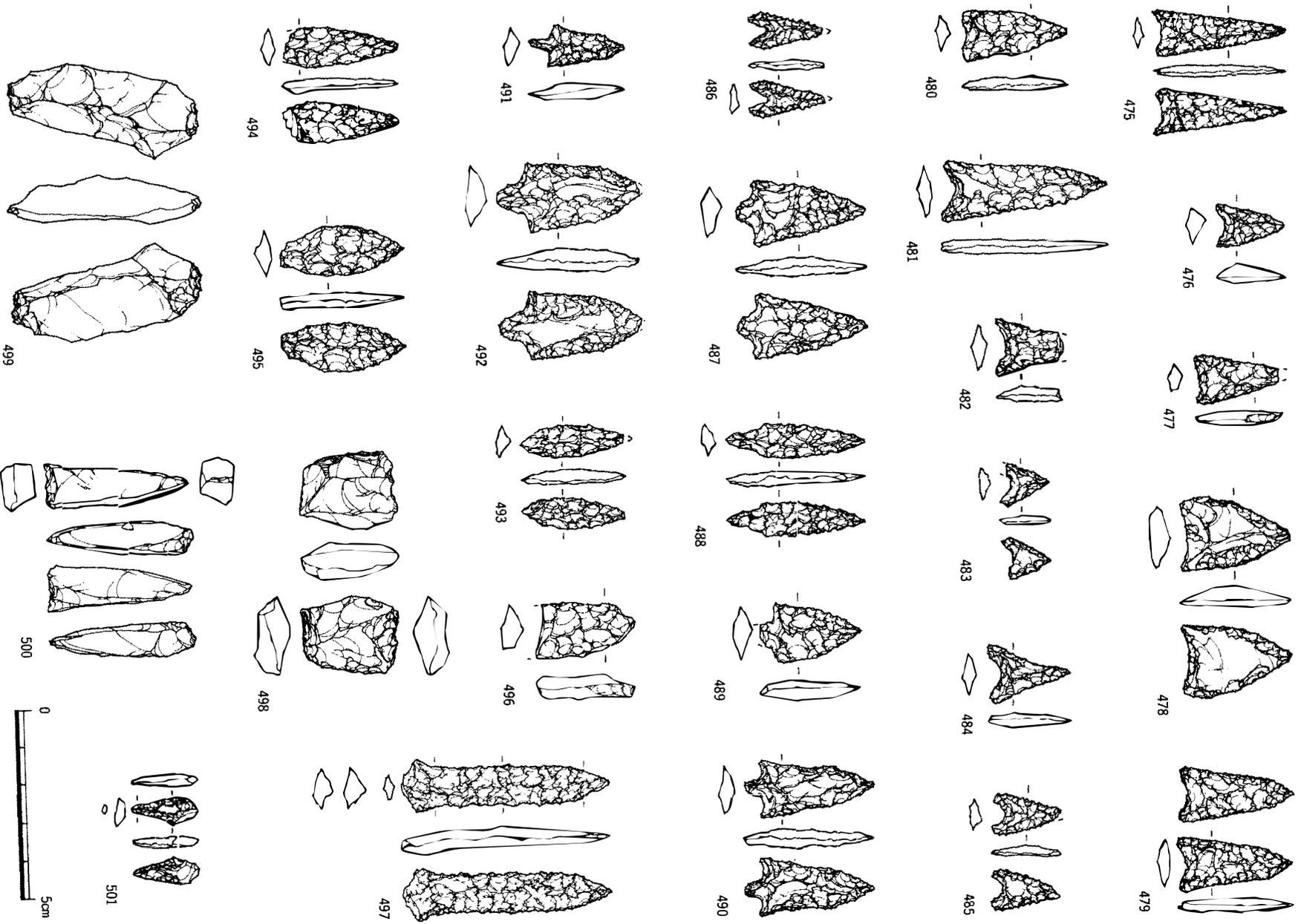
鋸歯縁 側縁部が鋸歯縁状になるもの。有脚式鏃にのみみられる。

その他破損のため分類できない資料もある。

475～478は無肩の凹基鏃である。この類の石鏃は10点みられ、そのうち7点が下呂石製、1点は下呂石とは異なる安山岩質の石材を用い、残る2点はチャート岩製である。475は下呂石製で全面が薄い



第38图 石核·剥片類



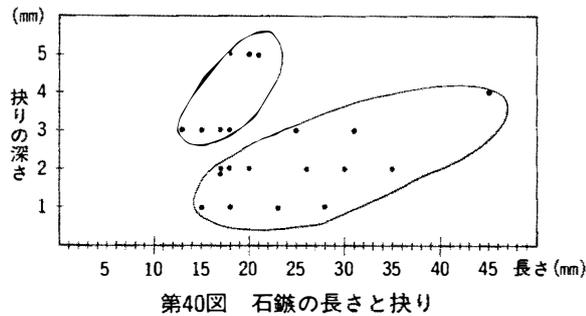
第39図 石鏃・くさび形石器・石錐

調整剥離に覆われた精緻な造りの成品である。基部の形状は、装着のための抉りというより、逆刺としての機能が考えられる。476は下呂石とは異なる安山岩質の石材を用いている。小形であるが厚手で、断面は三角形を呈する。477は風化の浅い下呂石を用いる。右側縁に頭部からファシット状の剥離が入っている。I層の出土であり頭部は新欠する。基部は475同様逆刺としての機能が求められそうである。478はチャート岩製で、他の無肩凹基鋸と比べて大きく、調整も粗い。

479～481は有肩の凹基鋸である。この類の石鋸は5点で、全点が下呂石製である。479は正面基部付近に節理面が残る。480は肩の位置が中央部付近にあり、調整もやや粗雑である。481にも節理面が残る。側縁が若干鋸歯状をなすが、鋸歯の作出方法が後述する鋸歯縁有脚鋸のグループとは異なり不揃いである。

482～484は無肩の有脚鋸である。この類の石鋸は5点みられ、4点が下呂石製、1点がチャート岩製である。482はチャート岩製。頭部が折損しており、鋸身部の長さ次第では凹基鋸の範疇に含まれる可能性もある。折れ面の光沢鈍く、古い折れであろう。483は風化の浅い下呂石製で、両面に素材面を残す。素材の打点は左脚部方向にあり、剥片を斜めに用いている。484は鋸身部が細く長く伸び、調整は脚部まで精緻に及ぶ。

485・486は鋸歯縁の有脚鋸である。この類の石鋸は4点あるが、1点が下呂石製で、残る3点はチャート岩製である。無肩有脚式鋸と比べて細身で脚部も開かない。形態的な統一性がみられる。側縁の鋸歯は裏面の調整剥離のバルブ部を打点とすることにより表裏のネガティブバルブを重ねて意図的に作出されたものである。481の鋸歯縁は、裏面の稜部を打点としており、調整剥離の厚さに左右される不揃いな鋸歯であり、当類の鋸歯縁とは異なる。485は下呂石製である。表裏に素材面を残し、素材の打点は右脚部の方向にある。頭部微かに欠損するが欠損面も風化する。486はチャート岩製。頭部微かに欠損する。



第40図 石鋸の長さ と 抉り

	0.5	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	(g)
凹基無肩式鋸	• • • • •	• •						(Ave. 0.91g) •
凹基有肩式鋸		•	•		•			(Ave. 1.28g)
有脚無肩式鋸	• • • • •							(Ave. 0.57g)
有脚鋸歯式鋸		• • • • •						(Ave. 0.40g)
有茎無肩式鋸			• • •					(Ave. 1.63g)
有茎有肩式鋸		•	•		• • •			(Ave. 2.16g) •
柳葉式鋸		• • •		•				(Ave. 1.25g)

第41図 石鋸の質量

487・488は無肩の有茎式鋸である。この類の石鋸は3点で、1点が下呂石製、2点がチャート岩製である。487はチャート岩製で、表裏の基部付近に素材面を残している。素材を横位に用いているが、表裏の素材面の剥離方向は異なり、打面転移をおこなう剥片剥離か、求心的な剥片剥離によって得られた剥片を素材としている。肩部は作り出されていないが、胴部中央付近で側縁の角度が若干変化し、肩部の兆候はある。

488もチャート岩製で、茎部を作り出しているものの細身で柳葉形を呈している。側縁の数ヶ所に、潰れ状の部分がある。

489～492は有肩の有茎式鋸である。この類の石鋸は8点みられ、2点が下呂石製、6点がチャート岩製である。489は肩部がやや不明瞭であるが胴部上半と下半の境界辺りで側縁の角度

が変化しており、右側縁上半部は正面側にバルヴが残るのに対して下半部は裏面にバルヴが残ることから肩を意識したものであるととらえられる。490は下呂石製。茎部の調整も丁寧に施されている。491はチャート岩製。茎部は両面への大きな剥離で作出されており、長軸線から斜めに傾く。492はチャート岩製。表裏に大きく素材面を残しており、剥片を横位に用いている。頭部微かに欠損する。下呂石製の残る1点は細身で488の有肩タイプである。

493～495は柳葉式鏃である。この類の石鏃は4点みられ、2点の下呂石製、1点のチャート岩製に加えて、シルト岩製のものが1点ある。493はチャート岩製。両面の中央稜部が磨滅している。他の稜・エッジには磨滅が認められないことから、使用も含めて人為的なものであると考えられる。494はシルト岩製。基部は折損している。495は下呂石製。柳葉式鏃の中では幅広であるが調整剥離が全面を覆う。当類の他の資料の最大巾部は鏃身のやや下部に位置するが、これは中央付近にある。

496は欠損品であり分類はできなかったが、鏃身が平行に走ることから有肩の類であったと考えられる。頭部付近にファシット状の剥離が入る。

497は下呂石製。分類基準に従えば有肩の有茎式鏃に属するが、細身で長い鏃身と短かな茎部が特徴的である。II層より出土しており、ローリングのために全面が磨滅する。全面を調整剥離が覆い、素材面を残さない。頭部に微かにファシット状の剥離がみられる。

以上のように形態的な属性から分類した石鏃を質量との関係からみると、有肩有茎式鏃が最も大きく、鋸歯縁有脚式鏃が最も小さい。平均質量で5倍以上の開きがある。また、有肩のものは無肩のものより大きくなる傾向にある。これらの傾向は顕著であり、当遺跡においてはこれらが有機的な関係にあったと考えられる。

両面が調整剥離によって覆われた資料が多く、素材の形状はほとんどわからない。

尚、石鏃未成品と考えられる資料は1点も出土していない。

石錐（第39図）

小形のものが1点のみ出土した（501）。正面に節理を有するチャート岩の剥片を素材としている。素材打点は左方向にある。細長い錐部に細かな調整を加えて、基部には折りとりなどの粗雑な調整がなされる面もみえる。錐部先端部は磨耗する。

くさび形石器（第39図）

相対する二側縁に潰れ状の剥離が発達するものをくさび形石器とした。チャート岩製が4点、下呂石製が3点ある。図示した3点は全て下呂石製である。499は裏面上部に主剥離面が残る厚手の剥片を縦位に用い、右側縁は表裏からの加圧で折断し、断面三角形の縦長の形状にしている。両面ともに下方からバルヴの発達しない大きな剥離面が入る。上下の潰れは裏面に特に著しい。500は角柱状のくさび形石器。側面は、主剥離面・横からの折断面・上からの剥離面・上からの剥離面からなる。上下の潰れ稜は、十字にねじれた位置関係にある。498は刃部がやや巾広の方形を呈する。右側縁は下部よりバルヴの発達しない剥離が入るが、左側縁にも潰れ状の剥離が密にみられ、右側縁裏面にも横からの剥離痕がみられることから、左右の側縁もくさびとして機能していたものと考えられる。

スクレイパー類 (第37図)

スクレイパーとしてとらえられる石器は、468のチャート岩製搔器のみである。折れ面を打点とした、バルブの発達しない寸詰まりで厚手の剥片を素材とする。正面端部の左寄りに集中して大小不揃いの細かな剥離が入る。刃先角は85度以上の急角度で、90度を超える剥離もみられる。また、正面中央を縦走する稜線と両側縁の基部側に磨減がみられ、特に中央稜線の基部に顕著である。スクレイパー類の少なさは、当遺跡の性格を表しているといえよう。

微細な剥離痕を有する剥片 (第37図)

469の1点のみ確認された。両面ポジティブな剥片を素材とし、エッジを一辺だけ残してそれ以外の三方を折り取る。左右は各一回の折断によるが、上部は三回以上の折断作業が行われている。くり返し折断が行われるのは、最初の折れによってできた角度が鋭すぎたためであろうか。残された刃部には大小不揃いな剥離痕が表裏で観察できる。バルブは正面の剥離に残り、裏面には残らない。これら小剥離面の切り合い関係は不規則で、刃部の側面形もギザギザとなり、刃部作出のための剥離というより使用痕である可能性が高い。

粗質安山岩の石核・剥片類 (第42図・第43図)

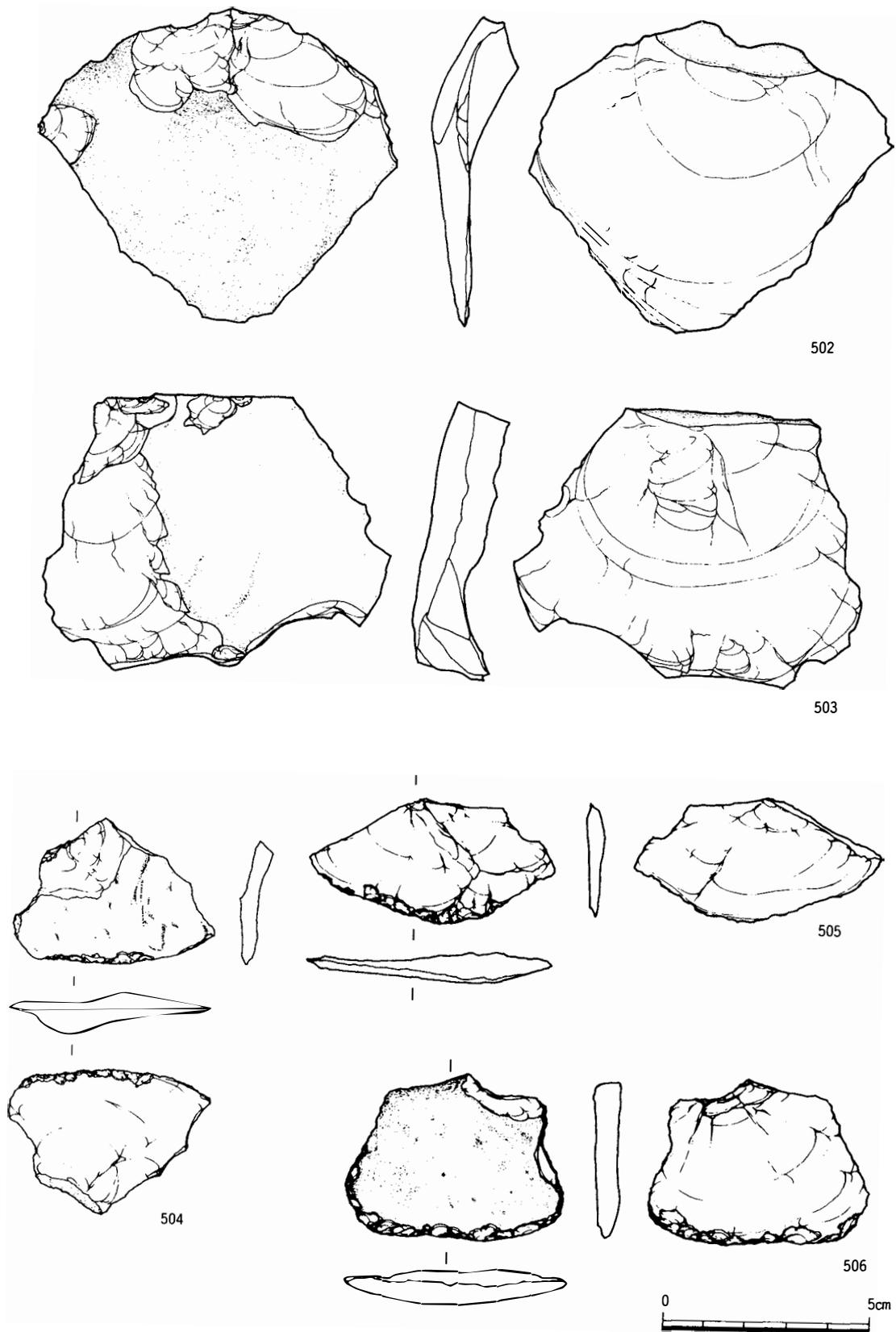
当調査区では、利器の素材としては適さない石材の剥片がまとまった量出土している。その中から石製土掘具の調整剥離やリダクションにともなうと考えられる剥片を除くと、107点の剥片が残る。この剥片の素材はケイ酸度が低く、割れ面のザラついた、主に緑色がかかった安山岩がほとんどである(本報告書では、仮に粗質安山岩と称することにする)。石製土掘具の素材としても使用される石材であるが、石製土掘具の素材としては小さすぎ、他の何らかの目的をもって剥離されたものであろう。後述する「粗石材製石器」も用途の1つとして考えられるが、粗質安山岩製の剥片は大きさ、厚さ等が多様で、その目的を限定することは難しい。使用痕の観察も試みたが、資料は大なり小なりヒンジをおこしており、使用痕としてみとめられそうな小剥離痕はなかった。

今回の調査では用途等の検討はできず、類例の増加を待つのみであるが、この剥片剥離の特徴について述べておきたい。502は円礫の礫面を背面と打面に持つ剥片。頭部調整ともとれる剥離を施し、バルブもバルヴァスカーも発達しない。503は角礫の自然面を背面にもち、打面は節理であろうか平坦な分割面である。頭部調整が施され、バルヴァスカーがみられる。

石核は1点図示した。507は分割礫を素材とし、打面を転移しながら不定形な剥片を剥離していく。右面の作業では、打面と作業面を交替して旧作業面の稜部を打撃しているが、左面の作業は分割面を打面として上と下から剥離を行っている。他にも4点石核が出土しているが、このように剥片剥離が進んだものは本資料を含めて2点で、あとは数枚の剥離を行っただけのものである。石核の素材は分割礫のほか、円礫も1点みられる。

508は石核の素材となった分割礫である。分割礫は全部で5点出土している。分割の仕方に規則性は認められないが、相当のサイズの原石を素材としたか、露頭から搬入されたものと考えられる。一部に剥片を剥離した痕がみられる。

図示しなかった資料を含めた観察から、次のような特徴を指摘することができる。



第42図 粗質安山岩の石核・剥片類、粗石材製石器

①円礫を素材とすることもあるが、多くは分割礫を素材とする。②打面・作業面を固定しないで転移しながら剥片剥離を行う。③頭部調整が発達する。④バルヴ・バルヴァスカーは発達しない。⑤末端はヒンジフラクチャーとなることが多い。⑥得られる剥片は厚さ・大きさ・形状とも多様である。

粗石材製石器（第42図）

利器の素材としては適さない石材の剥片に調整を加えて刃部を作出したものを粗石材製石器と仮称した。前述のスクレイパー類との相違点は石材のみであるが、利器となるチャート岩・下呂石製の剥片でなく、こうした石材を選択するのは用途等にそれなりの相違が存在することも考えられる。また、刃部の剥離はサイズ・切り合いともランダムで、調整剥離とも使用痕とも考えられる。そこでスクレイパー類とは別に一括した。

504は砂岩製剥片の右側縁を3回の折断で整形し、末端部を刃部としている。刃部の剥離は末端部の全縁に及ばず、左にやや偏る。剥離は両面に入り、バルヴは正面側に残るが、切り合い関係は不規則である。刃先部はやや潰れている。正面の大きな面は剥離面であるが他の面と比べて磨耗が激しいことから、石器製作以前の自然為の剥離面と考えられる。自然面を打面とするがバルヴは発達しない。505は粗質安山岩製の薄い剥片を用いる。2枚の平坦面の稜部を打撃して剥離しているが、頭部調整は行われていない。末端を刃部とするが剥離痕は正面側にのみみられ、中央部に集中して全辺には及ばない。刃部の剥離は大小不揃いで、切り合いも規則的ではない。506は風化のため白色化する軟質の安山岩製で、亜円礫の自然面が背面に大きく残る。打面部は折断、バルヴ部は剥離によって除去されている。右側縁部にも折断加工が施される。末端を刃部とし、表裏に剥離が入る。剥離は端部の全辺から側縁の下部にまで及ぶが、剥離の切り合いはランダムで、バルヴも表裏にランダムに残る。

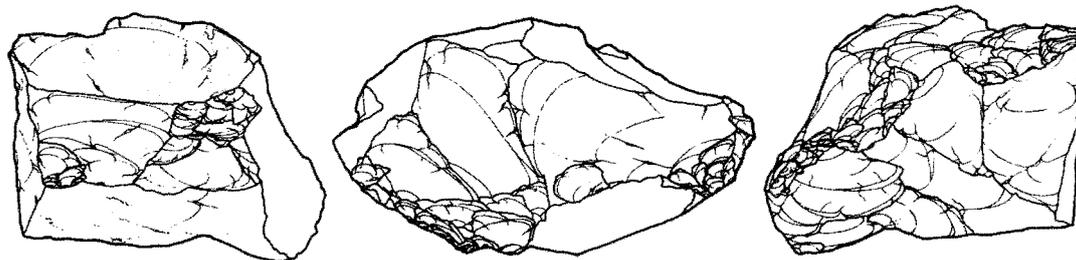
これらの粗石材製石器の素材について考えておきたい。粗石材製石器の素材は、総じて貝殻状の横長剥片である。これは末端部を刃部とすることに関連し、必要な条件である。粗石材製石器の素材剥片は、頭部調整を有するものが少ない。末端部は剥離のため不明確であるが、ヒンジフラクチャーは発達するようである。石材は粗質安山岩以外のものも少なからずみられる。前述した粗質安山岩の剥片剥離のあり方と比較すると、共通する点もあるが相違する点も多い。したがって、粗質安山岩の剥片をその石材的特徴のみから粗石材製石器の素材として考えることは、はなはだ危険であるといわざるをえない。

凹石（第44図）

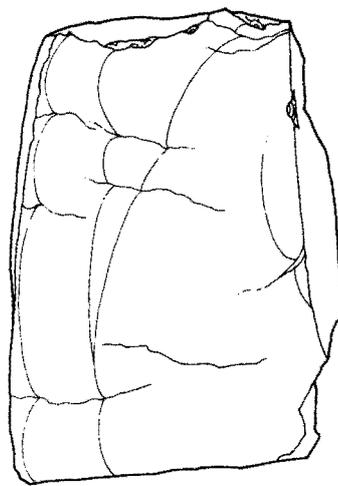
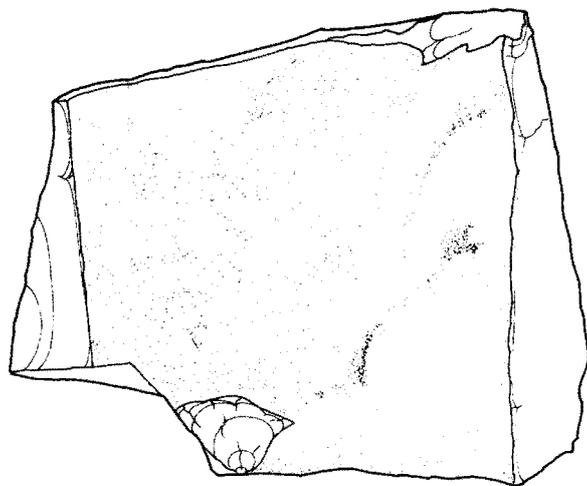
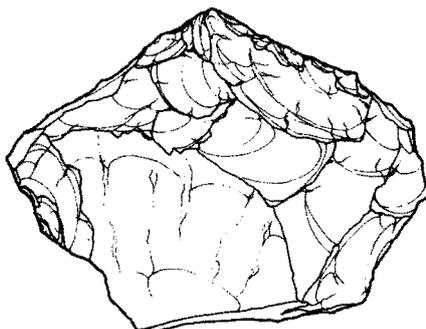
凹石は1点出土した。509は多孔質の安山岩の円礫を用いて、径50×40mm、深さ8mmほどの、大きな楕円形の凹み部をもつ。凹み部は敲打により作出されており、凹みの内壁にはアバタ状の凹凸が残る。しかし凹みの底面はその凹凸が潰れ平坦な面となっている。裏面は磨痕のため平坦となる。上面も凹み部の周囲が平坦面となっており、磨石としての機能も有していたようである。

磨石・敲石類（第44図）

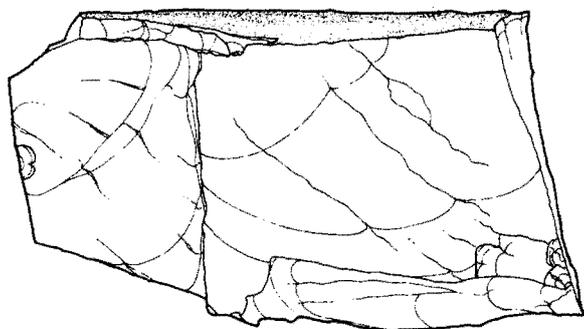
この類の石器は使用の痕跡により定義付けられるものであり、1つの礫が複数の用いられ方をする場合には磨石と敲石類を厳密に区分することはできず、一括してとらえた。



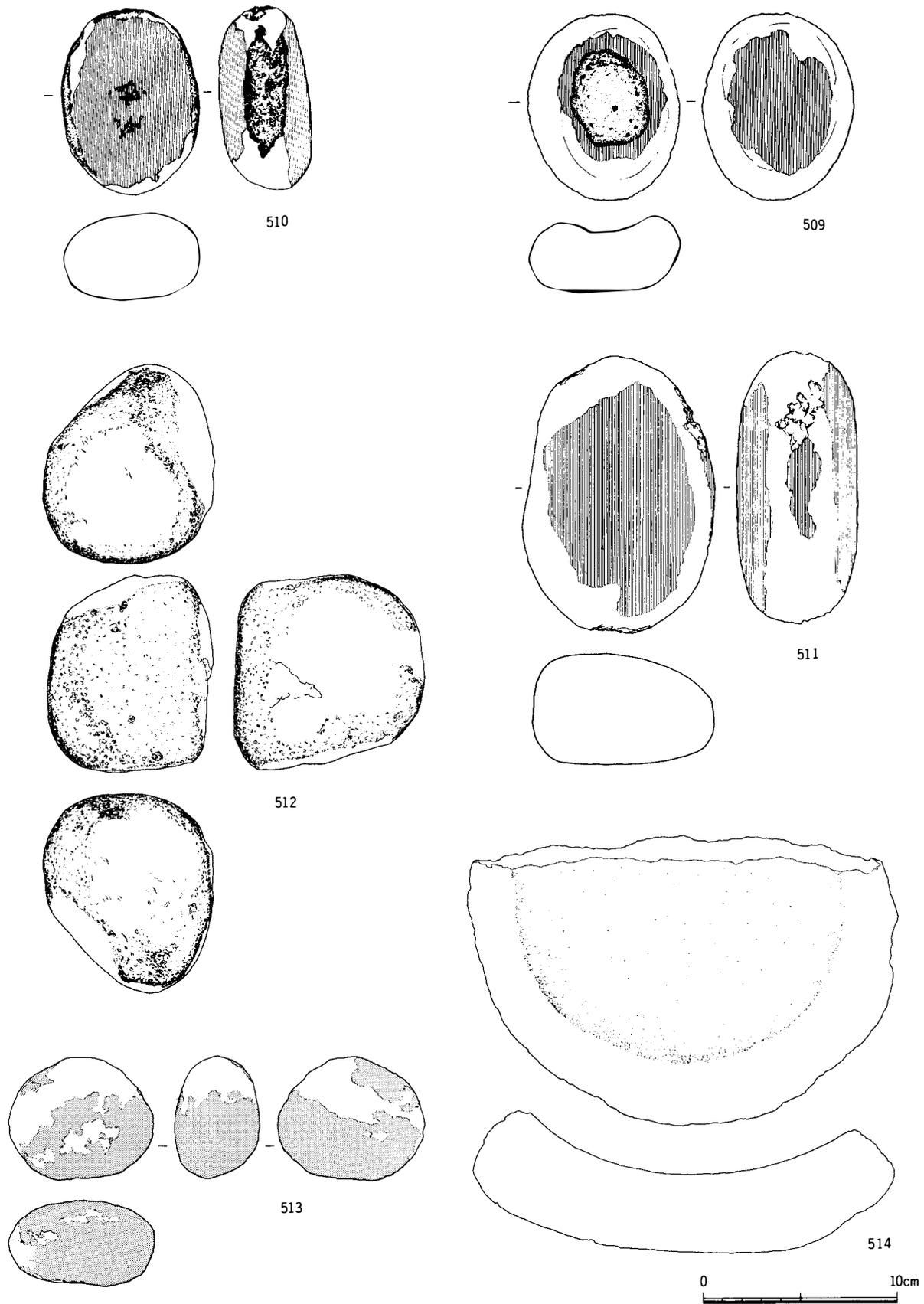
507



508



第43図 粗質安山岩の石核・剝片類



第44図 凹石、磨石・敲石類、石皿

今回の調査で出土した磨石・敲石類は17点あるが、素材礫の形態と使用する部位から3類に細分される。

1類 扁平な円礫を用い、上下の平坦な面を使用するもの。磨石としての機能が主であるが敲打痕もみられる。白く風化する軟質の安山岩を主に用いる。12点出土した。

2類 立方体の垂角礫、もしくは垂円礫を用い、面ではなく角部・稜部を使用するもの。主に敲打痕が残る。4点出土した。石材は、2点が白く風化する軟質の安山岩を用いているが、2点は硬質の安山岩製である。

3類 多孔質の軟質安山岩の円礫を用いる。使用の痕跡は観察できない。1点みられる。

510は1類に属する。磨面と思われる面をストライプのトーンで示した。表裏両面に磨面、両側縁と上部に敲打痕がみられる。風化のためか磨面の擦痕は観察できないが、平滑に潰れている。表裏両面の磨面の中央部に2ヶ所ずつ並んで浅い敲打痕がみられるが、磨面が敲打痕をきっている。511も1類に属する。表裏と右側面が平滑に潰れ、風化のためか擦痕は観察できない。打ち欠けた所が周囲で数ヶ所みられるが、部位・打ち欠きの程度等バラバラであり、人為的なものかどうかは明らかでない。

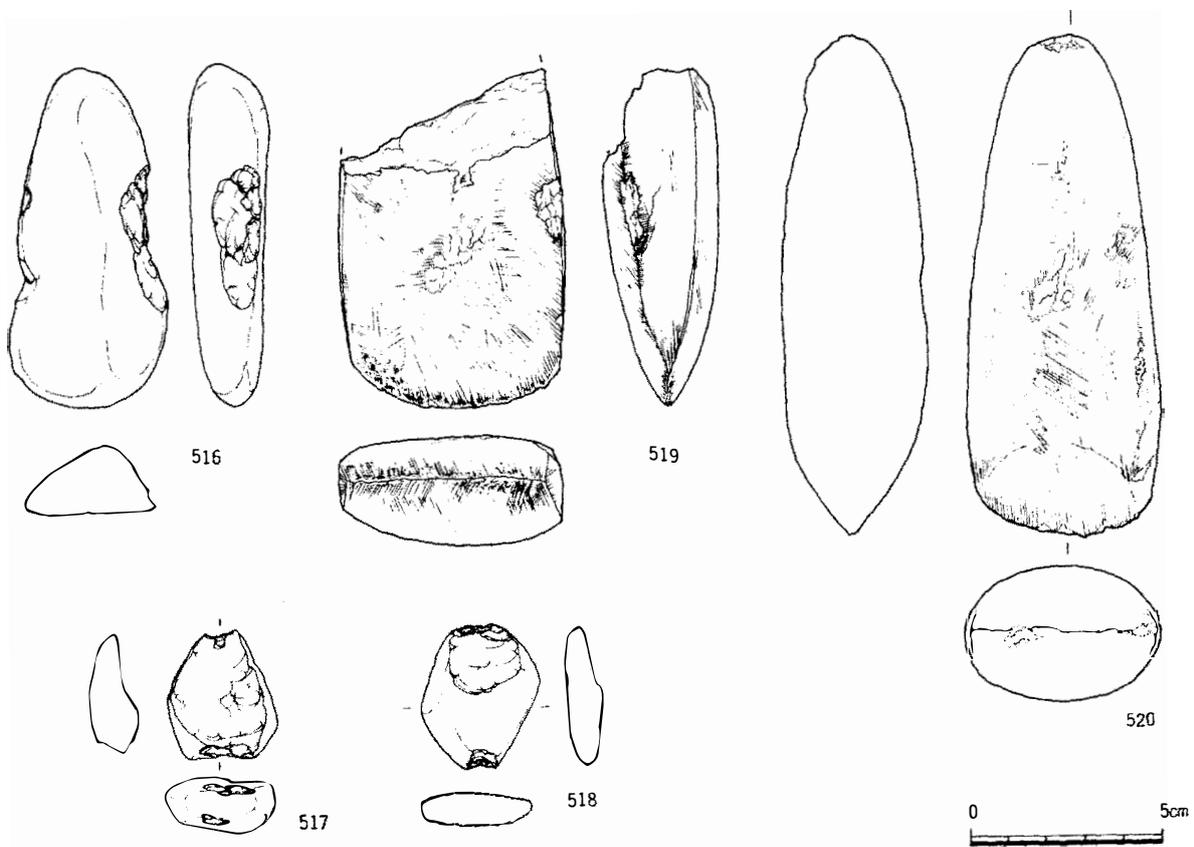
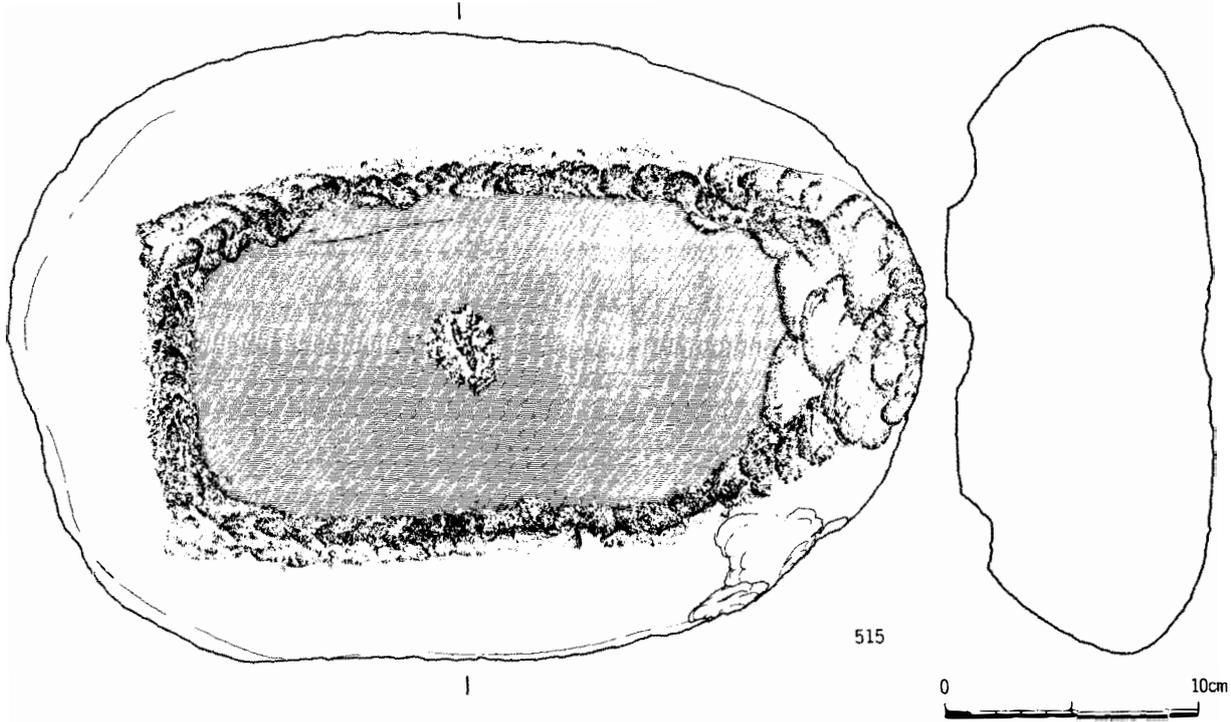
512は2類に属する。角が丸くなる程に敲打が進んでいる。敲打痕は深くクラック状になっており、平坦面にも鼠歯状の削痕が一部にみられる。石器製作用のハンマーであろうか。

3類は513の1点のみである。ドットのトーンで示した部分に砂土が付着している。何らかの使用によりこの部分に脂質が付着している可能性もあり、石器としてとらえた。また、付着した砂土のため敲打・擦痕等使用の痕跡は観察できなかった。

石皿（第44図・第45図）

2点出土した。どちらも多孔質の安山岩を用いている。514は深い皿状の凹みを作成し、皿面は著しく石目が潰れている。また、底面と側面のなす稜が明瞭で、しかもそれが周囲をめぐることから何らかの整形が施されている可能性がある。石質が風化受けやすく観察は困難であるが、側面にアバタ状の凹凸が目立つのに対して底面は平坦であることから、側面を敲打したか底面を擦って整形したのであろう。半分欠損している。515は形態の特異な石器であるが、石皿としてとらえた。55 F区、VII層上面より出土した。上面の中央部に抉るようにして凹みを設け、その周囲の平坦面はやや石の目が潰れている。磨られたためであろうが顕著ではない。そのまた周囲を浅い溝が馬蹄形に巡る。溝は一端が掃き出し口となり、溝の内部は敲打による加工痕がそのままアバタ状の凹凸となって残っている。上面の平坦面のように石の目の潰れはみられない。この溝には石皿の磨る機能はなかったと思われる。裏面は、中央部に敲打による浅く広い凹部がみられるが、その周囲の平坦面には磨られた痕跡はみられない。よって、当石器を石皿の類としてみる場合、主に上面が使用されていたと考えられる。

さ程発達しないが磨面を有すること。一端に掃き出し口が存在すること。多孔質の安山岩を使用していることから、石皿に類似する用途があったと思われるが、従来石皿と称されているものとは形態的に差異が認められる。その最も大きな相違点は、従来の石皿の使用面は凹面であるのに対し、この石皿では凸面となることである。石皿の使用法については、澄田正一氏等により、堅果類の製粉としての用途が考えられている。たしかに凹み状の磨面は、製粉には都合のよい形状である。凹面の上で堅果類を製粉する場合、生じた粉は皿の底部に集められることから、調理人の意図する精度に製粉が



第45圖 石皿、石錘、磨製石斧

可能なのである。しかし、この資料のような凸部を使用する場合、粉が外へこぼれ出る点で明らかに製粉には不適切であるといえる。

そこで、この形状の違いを、対象物の違いが反映したものとしてとらえてみたい。凹状の石皿には不適切で、凸状の石皿において都合のよい対象物として、芋類など軟質のものが考えられる。繰り返し磨ることが不要なものは、凹状の底にたまっては作業の邪魔になる。むしろ外へ流れ出る方が都合がよいのである。そう考えた時に、磨面を囲み掃き出し口を有する溝の存在、溝内面に加工痕が残る状況、磨面の磨耗が発達しないことなどがうまく理解できるのである。しかし、そう解釈した際に、同時に生じる疑問点もある。根菜類は、縄文時代後期においても重要なカロリー源の1つであったと考えられる。その根菜類を磨って利用することがあったのかどうかということである。そうした料理法が存在したのであれば、類似した資料が他にもあって良いはずである。とりあえずは、類例の増加を待ちたい。

石錘（第45図）

3点出土した。全て砂岩製の小垂円礫を素材としている。516は質量88.9gと3点中極立った大きさの石錘である。左側縁の抉り状の素材形態を利用し、右側縁の中央部に裏面より数回の剥離を施した横軸抉りの石錘である。抉り部に磨耗がみられる。517は17.1gで、長軸を打ち欠いている。下端は自然為の折れ面で磨滅激しく、この面から細かな剥離が両面に施される。上端からも大きな剥離が両面に入る。抉り部は磨耗が明瞭に確認できる。518は扁平な小礫の長軸両端を打ち欠いた15.6gの石錘。下端は潰れ状の剥離である。紐ずれ等の痕跡は顕著ではない。

磨製石斧（第45図）

519・520の2点が出土した。519は流紋岩を用いた定角式の磨製石斧である。両刃の刃部形態を呈し、刃先部は使用のためか鈍い光沢を有す。全面に研磨痕がみられるが、胴部で折損する。520は角閃石が目立つ安山岩を用いた乳棒状の石斧である。一部に敲打痕を残すが研磨が全面に及ぶ。しかし研磨痕は顕著ではない。基部は潰れが顕著である。

石製土掘り具（第46図～第51図）

従来打製石斧と称される石器であるが、この時期のものは土掘り具としての機能が考えられることから打製土掘り具・石鍬等と称されることもある。しかし、打製という語を冠する意味は不確かで、鍬は農耕を想起させることから、本報告書では石製以外の土掘り具が存在する可能性も考慮して石製土掘り具と称することにする。

当調査区からは850点の石製土掘り具が出土しており、石器組成の中心をなしている。41点の資料について図示した。素材の背面側を正面とし、側面と、最大厚を測る部位の断面を図示した。ほとんどの資料は素材剥片を横位に用いているが、それ以外のものについては裏面も図示した。刃部の磨耗はその範囲を点線で示した。磨耗のため剥離痕の観察が困難なものは白抜きで、かろうじて可能なものはリング・フィッシャーを点描した。こうした磨耗は刃部、側縁部においてエッジを丸くするが、側縁のエッジには平坦面を作る潰れ状の痕跡もみられる。これらを磨耗面と区別するために、点線の内側

に点描を施した。

石製土掘具は、平面形から短冊形・撥形・分銅形の3種に分類されることが多い。しかし、当遺跡の資料を概観してみると、調整によって形状を意図的に変化させている資料は少なく、ほとんどは素材の形状がそのまま反映している。したがって一部の資料を除いてその形状から整形の意図を読みとることは難しい。そこで、石製土掘具については分類を試みないで「平面形」「素材の腹面」「素材の背面」「整形方法」「使用の痕跡」「リダクション」といった諸属性について図示した資料を中心に概観し、傾向をとらえていこうと考える。

なお、521～525は12Vにおける石製土掘り具集積の資料である。

平面形について

いわゆる分銅形といわれるような、調整によって両側縁の中央部をくびれさせた石製土掘具は526など数点にすぎない。547・555のように、片側が抉り状になったものもあるが、555は素材打点部を除去するための剥離が厚くなったためのものであり、くびれ部の作出を意図したものではないと考えられる。526の資料は大きな剥離で全体の形を作った後、小さな剥離で整えている。刃部は側縁部に磨耗が発達するが、基部は折損している。

最大幅が刃部に位置する、いわゆる撥形の石製土掘具は30点程認められる。そのうちいくらかは素材の形状が反映した、意図しない撥形も含まれるようだが、その判別は困難である。527～531は大小の剥離等によって撥形の形状を作り出している。527は調整が密に幾重にも施されているが、刃部は裏面からの折れのため残らない。この折れは、1回目の折れによって斜めに突出した部分を2回目の折れによって除去したようにもみえることから、意図した折断である可能性が高い。528は折断と調整剥離によって撥形の形状を整えている。基部の剥離は刃部付近の剥離と比べて厚く、幾重にも施される。裏面の刃部付近にも深い剥離が多くみられるがこの剥離は薄く、バルヴ付近の厚さを減ずることが目的であったと思われる。刃部に磨耗は観察できない。529も基部付近に折断面を有する。折断面からの剥離面が他の調整剥離にきられることから、製作の早い段階で折断が施されたことがわかる。刃部微かに磨耗する。刃部近くで折損していた接合資料であるが、各破片は16m離れた地点で出土している。したがって折損後に移動していることが明らかであり、堆積時の折れではなく使用時の折れであると考えられる。530は当遺跡出土の石製土掘具中では最大質量の738.0gである。531はややくびれ気味に胴部で収束する。裏面も調整剥離によって素材の面がほとんど残らない。刃部は側縁部の磨耗が発達する。これら撥形の石製土掘具は530を筆頭に大きなものが多い。石製土掘具を柄に装着する際に、その幅にはある程度の規制が必要となる。したがって基部だけでも規制にあわせるために、このような撥形に整形されたことが考えられる。

いわゆる短冊形としてとらえられるものは、535・536や558など数多く認められるが、素材の形状が強く反映し、撥形との境界があいまいなもの(532・537等)、小判形を呈するもの(548・559等)などとの明確な分類基準を定めることはできなかった。558は両側縁に大小幾重にも剥離を施して細長い優美な短冊形に仕上げられ、稜部が鈍く磨耗する。559も幾重にも剥離を施し、精緻な長楕円形にしあげている。刃部磨耗するが、特に両側縁に顕著である。

素材の腹面について

532は、裏面中央基部寄りにみえる平坦な剥離面を打面として剥離されたもの。特異な横長剥片とも、

大きな板状の剥片から打撃によって折りとられたものとも解釈できる。基部は新しい欠損である。533は両面に自然面が残る。砂岩の垂角礫を用いており、背後の山塊を供給源とする崖錐中にみられる石材と同質である。垂角礫をそのまま原材としたため調整剥離に適する打角を得難く、両側縁に敲打による潰れが発達する。刃部は磨耗する。534の裏面にみえる横位の剥離面はネガティブ面で、基部に残る面が主剥離面である。円礫の稜に沿った縦位の剥離で素材を作出し、横から大きく1枚剥離を施して厚みを減じた後、周縁に簡単な調整を加えている。刃部正面側に磨耗が発達しており、完成品として使用されている。

板状の礫をそのまま利用したものは533以外に2点、縦長の剥片を用いたものは534のみである。ほかは調整剥離によって素材面を残さないものと、平坦な剥離のため剥離方向が不明瞭なものを除いて、ほとんどは素材の打点を横位に用いている。横長の剥片を素材とする場合と、大形の剥片を横位に用いる場合が考えられるが、横長剥片を素材とするものがほとんどであると考えられる。それは裏面のリングの状況と調整による素材の変形度から推察される。

素材の背面について

536の背面は大きく平坦な一枚の剥離面である。右側縁の基部付近に自然面が残る。両側縁に浅い調整剥離を施して製品としているが、バルブ付近はやや深めの剥離が入り厚さを減じている。刃部両面に磨耗が著しい。535は粘板岩を用いており、表裏ともリングの発達しない平坦面である。刃部は斜めに折れているが折れ面も磨耗している。537は薄手の剥片を素材としている。背面は腹面と同方向の剥離面で、両側縁に簡単な調整を施しているが、刃部に使用の痕跡はみられない。538も薄手の横長剥片を用いているが、背面に長軸方向の剥離面が2枚みえる。刃部右側縁を中心に磨耗がみられる。539は調整剥離のために素材面を残さないものである。平面形は小形であるが断面は分厚い三角形を呈する。刃部は全体的に稜が鈍く磨耗するが肩部の磨耗が特に顕著である。540は、基部付近に腹面と同方向の素材剥離面がみられる。刃部表面側に磨耗面がひろがるが、それをきって刃先に剥離が入る。裏面に階段状剥離が発達する。541も腹面には素材面が残るが、調整剥離のために背面には残らない。刃部は両肩部を中心に磨耗がみられるが、磨耗部をきって刃先に剥離が施されており、磨耗部は刃先にも及んでいたと思われる。542は細身で小形の資料であるが、刃部は折損し使用の痕跡は確認できない。中央部にみえる剥離面は素材面であろうが、この剥離面は腹面の剥離方向とは逆である。

背面構成面のあり方を検討すると、850点中自然面を有するものは727点で、約85.5%を占める。残る123点(約14.5%)は自然面を残さず剥離に覆われるが、その剥離面は素材の面であるか調整剥離であるか識別の困難なものもある。その中で535～538・540・542・544・545・551・555など素材面とみて間違いなさそうなものをピックアップしてみると、腹面と同方向の剥離面を有するものが多く、逆方向の542・直交する538などは少数であった。自然面の残るものについては、533と他2点が垂角礫をそのまま用いている以外は、全て円礫を用いている。また、534は縦長に剥離したためであろうか、円礫の緩やかな稜部を縦位にとりこんでいるが、これ以外の資料は円礫の平坦な面をとりこんでいる。礫の曲面は基部もしくは刃部付近にみられる。

素材の腹面・背面の観察から、円礫の平坦な面をとりこんだ横長剥片を素材とする傾向が看取される。こうした円礫の使用部位の限定や、自然面を有する資料の頻度から、1つの円礫から得られる石製土掘具の素材数はそれほど多くはなかったと思われる。そうしたことから作業効率を考えると、石

製土掘具の素材作出までは河原等の円礫がある場所で行われたと考えるのが妥当であろう。また、調査区において石製土掘具の素材を作出したと考えられる石核は全くみられないことも、その可能性を支持する。

円礫平坦面で横長剥片を作出する技術的な検討は、実験等の試みを経て可能であろうが、今回は成し得なかった。ただ、自然面を有する資料が多く、552のように腹面が内湾するものもあることから熱の利用も考えた。しかし、被熱割れと考えられる資料は認められなかった。やはり打撃による剥離のようである。

整形方法について

528・529・543～545は整形に折断を用いたものである。543は基部尖状をなすが、素材の形状を反映したものであり意図した整形ではない。右側縁に2枚の折断面と1枚の剥離面を有し、この面より表裏に調整を加えている。刃部は肩部に磨耗がみられる。544は左側縁に4枚の折断面がみられる。基部側の2枚は裏面からの加圧により折りとられ、その後刃部側に表面からの加圧で2枚の折断面ができる。裏面には折断面からの調整もみられる。表面の基部側の剥離痕は折断面にきられるが、そのリングのまわり方から折断で除去した部分はそれ程大きくはないと思われる。刃部も折損するが、これが意図的であるかどうかは不明。545は板状に剥離された剥片を用い、左側縁は節理面での折断面である。右側縁に2枚、基部にも1枚の折断面がみられる。これらの折断により大体の形を整え、基部の表面側と右側縁の表裏面に調整剥離を加える。そして最後に刃部作出のための剥離を表裏に施す。刃先と刃肩に使用痕がみられる。

幅を調整するために折断を用いる資料は図示したもの以外に3点ほどみられるが、基部を調整する529を除いていずれも流紋岩製である。石材に特性があるのだろうか。

524・525・533・546～550等の側縁部には潰れ状の敲打痕がみられる。546は両側縁の所々に潰れがみられるが、特に右側縁の刃部近くに発達する。ここは素材の打点がある部位で、厚く、調整剥離を施しにくい。幅を減ずるために敲打を施したと考えられる。刃先から右肩に磨耗がみられる。547も両側縁に潰れがみられるが、右側縁打点部に顕著で、抉り状になっている。装着目的の可能性もあろうか。刃部に磨耗みられず基部は折損する。548は打点のある右側縁に広く潰れがみられる。刃先に潰れ状の使用痕跡がある。549も打点のある右側縁に潰れが発達する。直線的な刃部であるが磨耗は両肩部にみられる。550は閃緑岩と思われる石材を用いる。この石材を用いるものは当資料の1点のみである。やはり打点のある右側縁の、特に打点部位に潰れが発達する。刃先に潰れ状の痕跡がみられる。

側縁部の潰れは装着との関連が考えられるが、当調査区出土の資料は主に厚手の砂岩製土掘具の素材打点側に発達しており、潰れ面の作出が目的というより整形の一環として考えた方がよからう。ただし、この潰れ調整が幅を減じさせることが目的であるならば、広い意味で装着目的ととらえることもできる。

リダクションについて

531・539・541・551～554・557等の刃部には、使用の痕跡をきる剥離痕がみられる。551は両端とも刃部として使用されているが下端には大きな剥離が施され、残る部分に磨耗がみられる。552は礫面に沿って内側に反る横長剥片を素材とし、表面側に擦痕が発達する。553は両端に刃部を有する。磨耗は両面にみられるが、特に刃部の右側縁に顕著である。刃先に剥離がみられるが、その稜部も磨耗して

いる。554も両端に刃部を有する。両端とも裏面に磨耗が顕著であるが、上端は表面にも磨耗した面が残る。

これらの資料のように、使用の痕跡をきる剥離痕は少なからず認められる。ただ、その剥離痕が使用によるものなのか刃部再生のためのリダクションなのかその判別は難しい。しかし、470のようなリダクションにより作出された剥片も少ないながらみられることから、リダクションは明らかに行われていたものと考えられる。470は線状打面の薄手の剥片で、素材は軟質の安山岩である。表面頭部に磨耗の痕跡がみられる。

リダクションは主に刃先部に施され、側縁部に施される例はない。

使用痕について

刃部が認められる資料は561点あり、その約75.5%にあたる424点に使用の痕跡が認められた。ただし、観察は肉眼によるものであり、石材によっては使用痕の観察が困難なものもある。リダクションも行われており、実際はより多くのものが使用されていたのであろう。当調査区からは850点と多量の石製土掘具が出土しているが、このような使用頻度から、石製土掘具製作作業場ではなく、使用する場であったと考えられる。

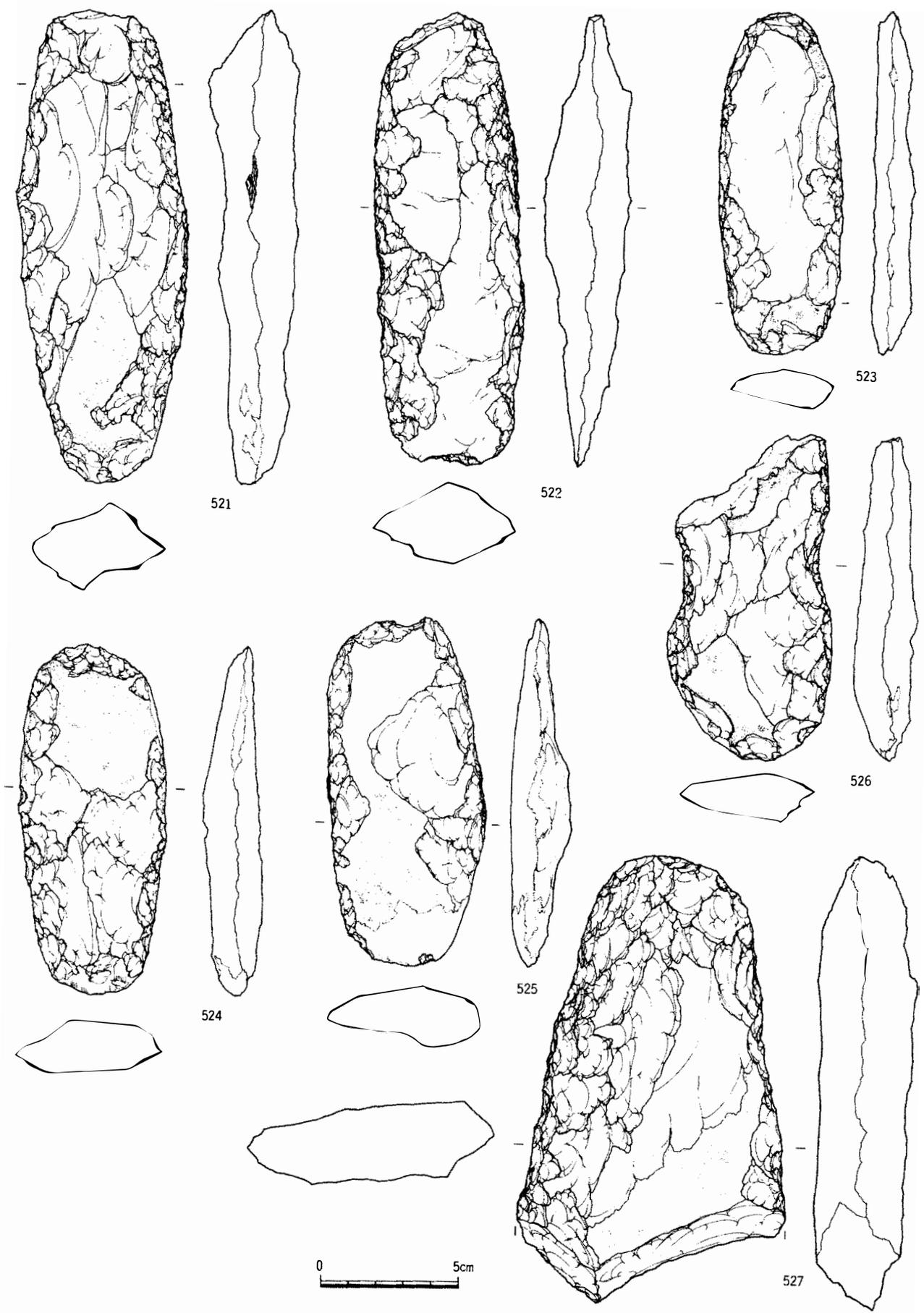
555は両端に磨耗みられるが、上端の刃部はリダクションを受ける。下端刃部の磨耗は著しく、両面の刃先・側縁部に及ぶ。556は側縁部に磨耗が顕著な例。557は側縁部に磨耗顕著であるが、表面の広い面で磨耗みられるものである。

使用の痕跡は535・552・553のような刃先から垂直に走る擦痕状のものと、548のような潰れ状のもの。534・536・555・557・559等にみられる擦痕も潰れも発達しない磨耗と3タイプある。そのうち潰れが発達するものは548の1点、擦痕の発達するものも一部に過ぎない。軟質の安山岩など石材によっては、風化により擦痕等観察できない場合もあるが、ほとんどが磨耗である。これらの相違の要因として、使用場所等が考えられる。第9章に述べる西乙原遺跡出土の石製土掘具は潰れが目立つ。西乙原遺跡は崖錐堆積物上の遺跡であり、段丘上にのる当遺跡との立地の違いが使用痕跡の違いに反映していることが考えられる。当遺跡では段丘の複雑な堆積の中で粗砂が帯状に広がる状況から、一部に擦痕の発達する資料がみられることも理解可能である。

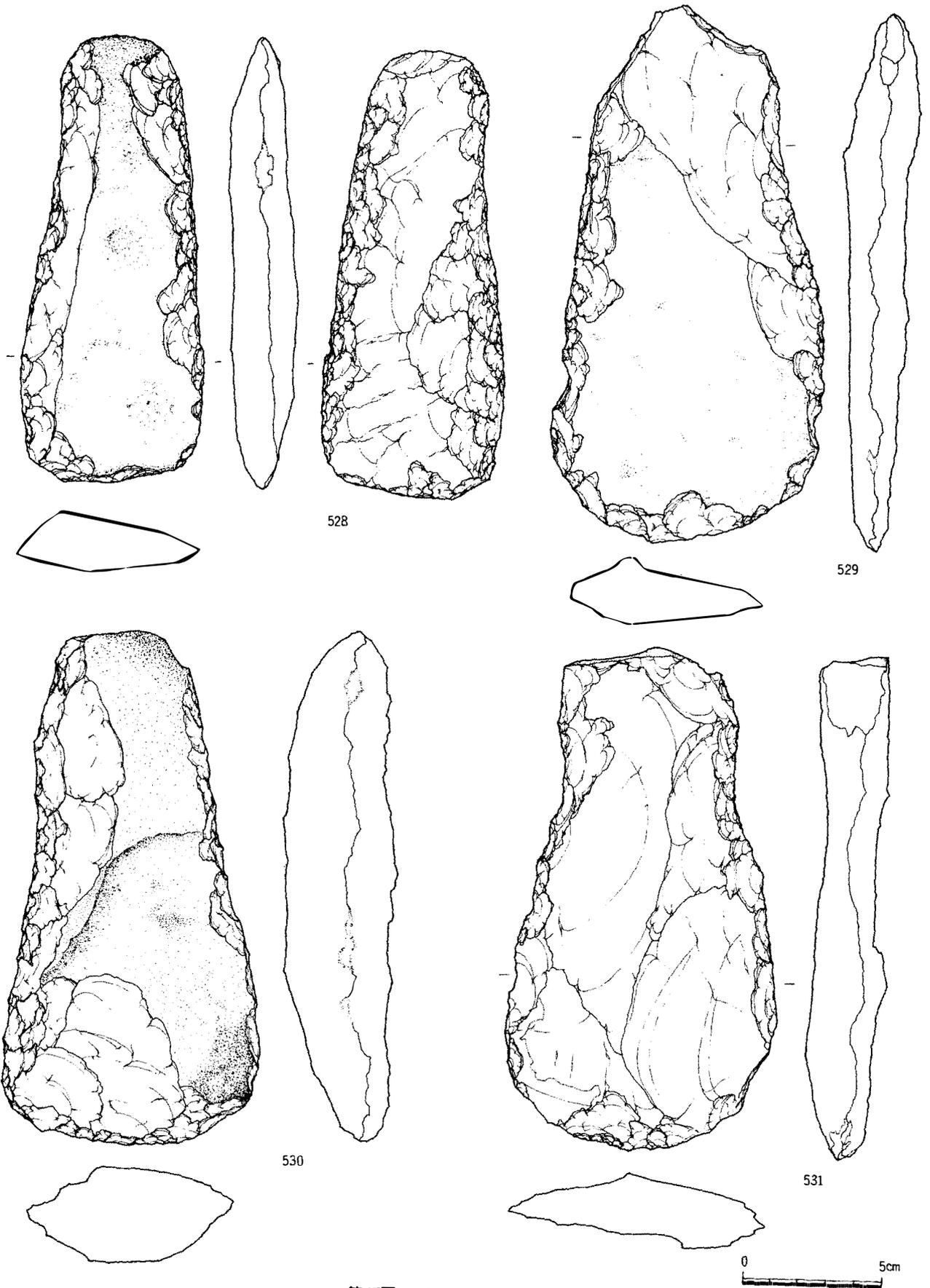
使用痕の部位について、表裏の面に発達するものと、側縁部に顕著なものがみられる。これらは使用方法の相違によるものと考えられる。表裏の面に発達するものは鍬タイプの使用、側縁部に発達するものは掘り棒タイプの使用が想定されるが、実験等による確認が必要であろう。刃先形が直線的なものと、小判形に丸くなるものがあるが、刃先形と使用痕部位の相関性は認められなかった。

サイズについて

560は折損するものの相当の大きさであったろうと思われる。質量・長さは測定不能だが、幅は11cmと当調査区最大級の資料である。一方、539～542・561などは小形の石製土掘具である。第52図・第53図は当調査区出土の石製土掘具の、折損しない計測可能な資料について質量と最大幅をグラフ化したものであるが、質量のバラつきが大きい。一方、幅のバラつきは小さく、装着の際の規制が働いたことは、最大幅8.0cm以上の資料17点中8点が撥形を呈すること（撥形の石製土掘具は、全部で30点足らずと全体の3%程である）からも推察される。



第46図 石製土掘具



528

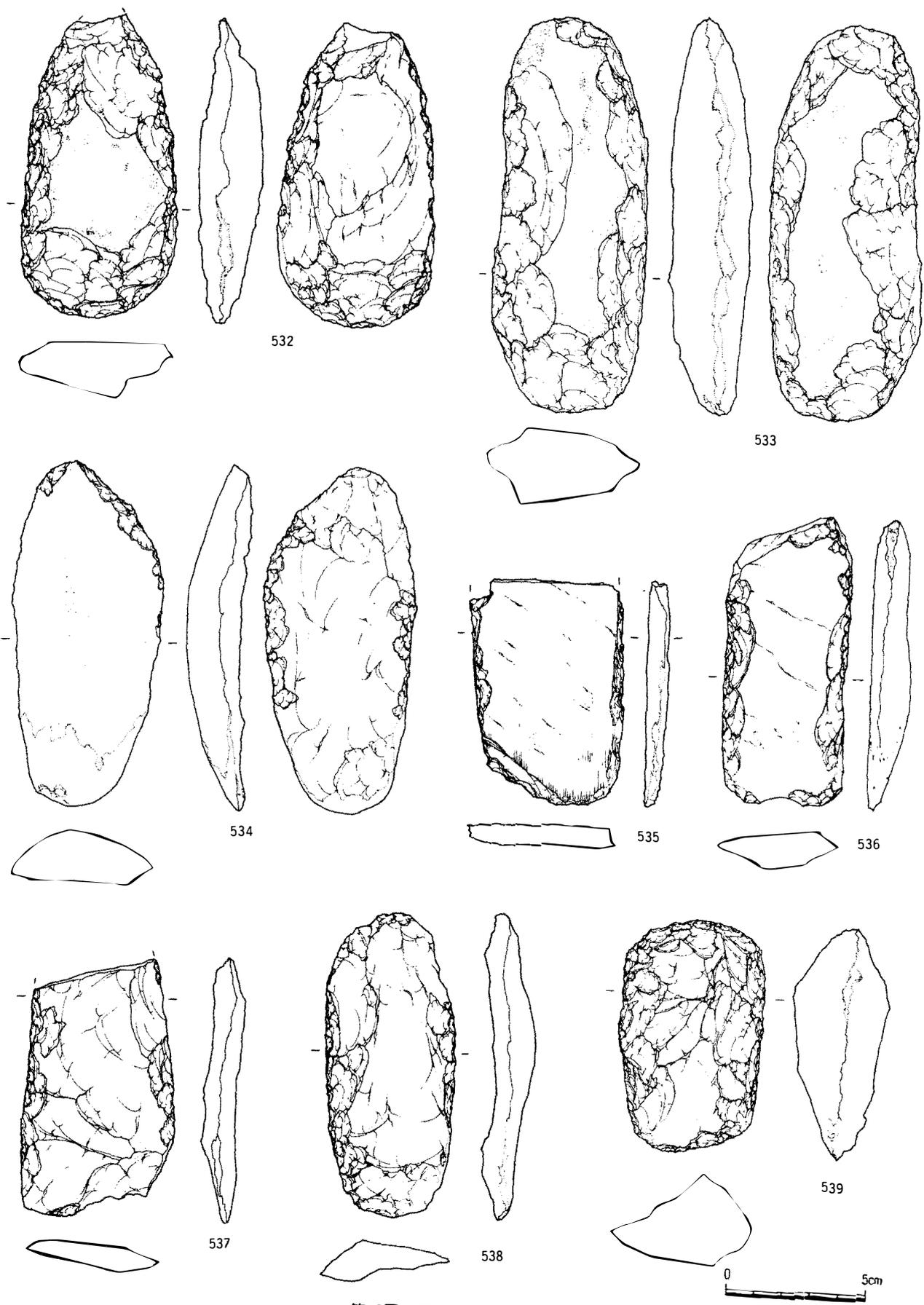
529

530

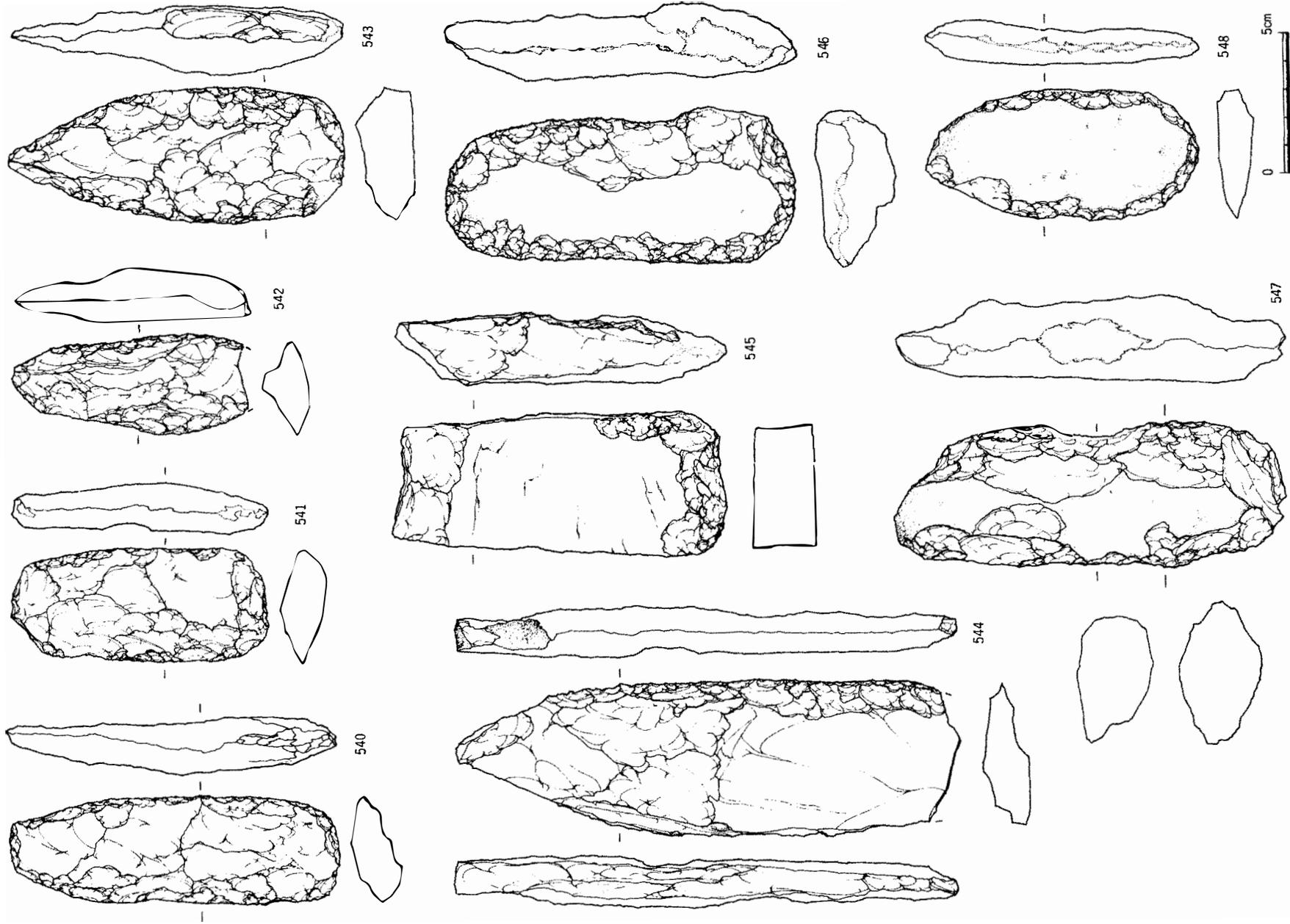
531

0 5cm

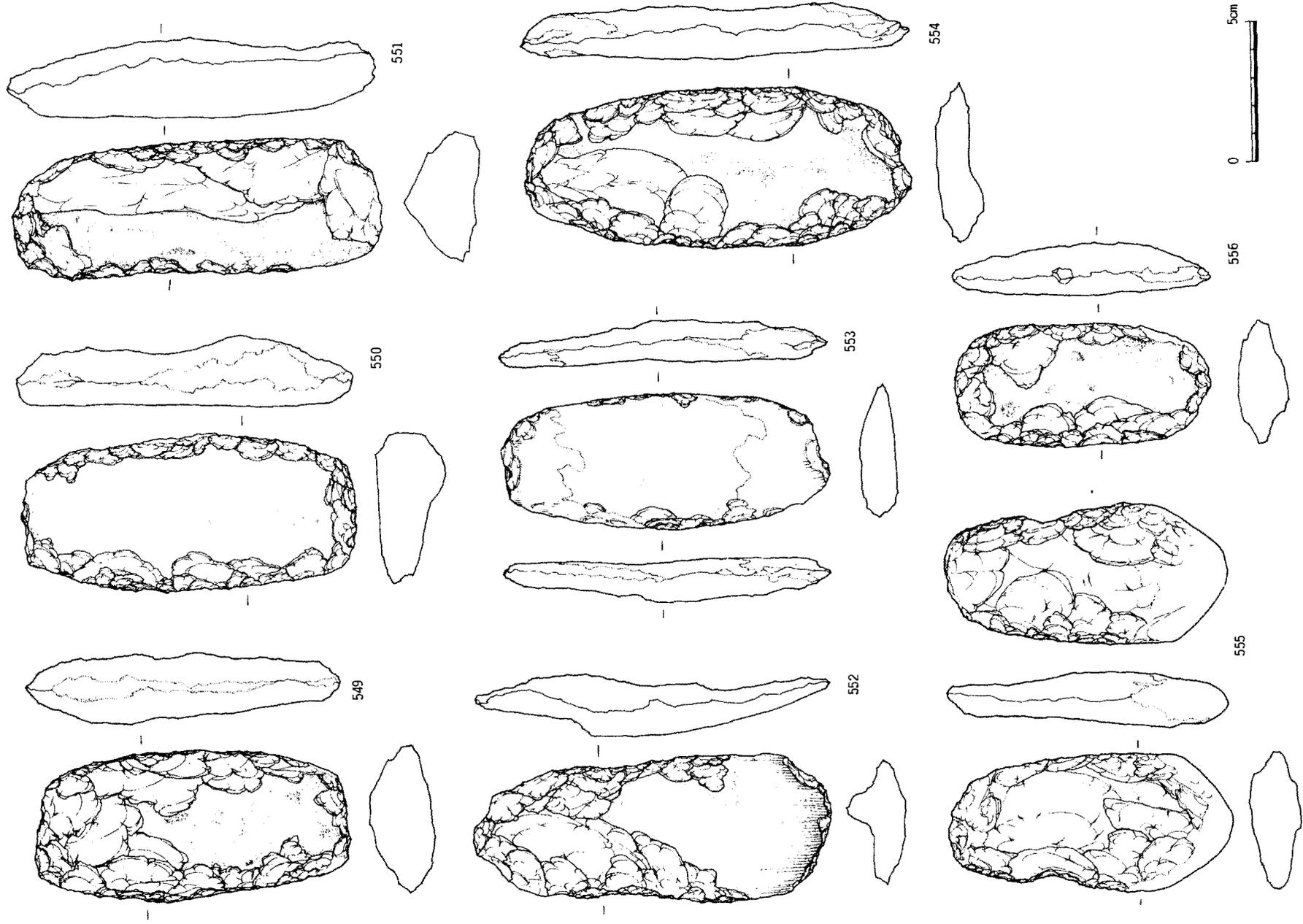
第47図 石製土掘具



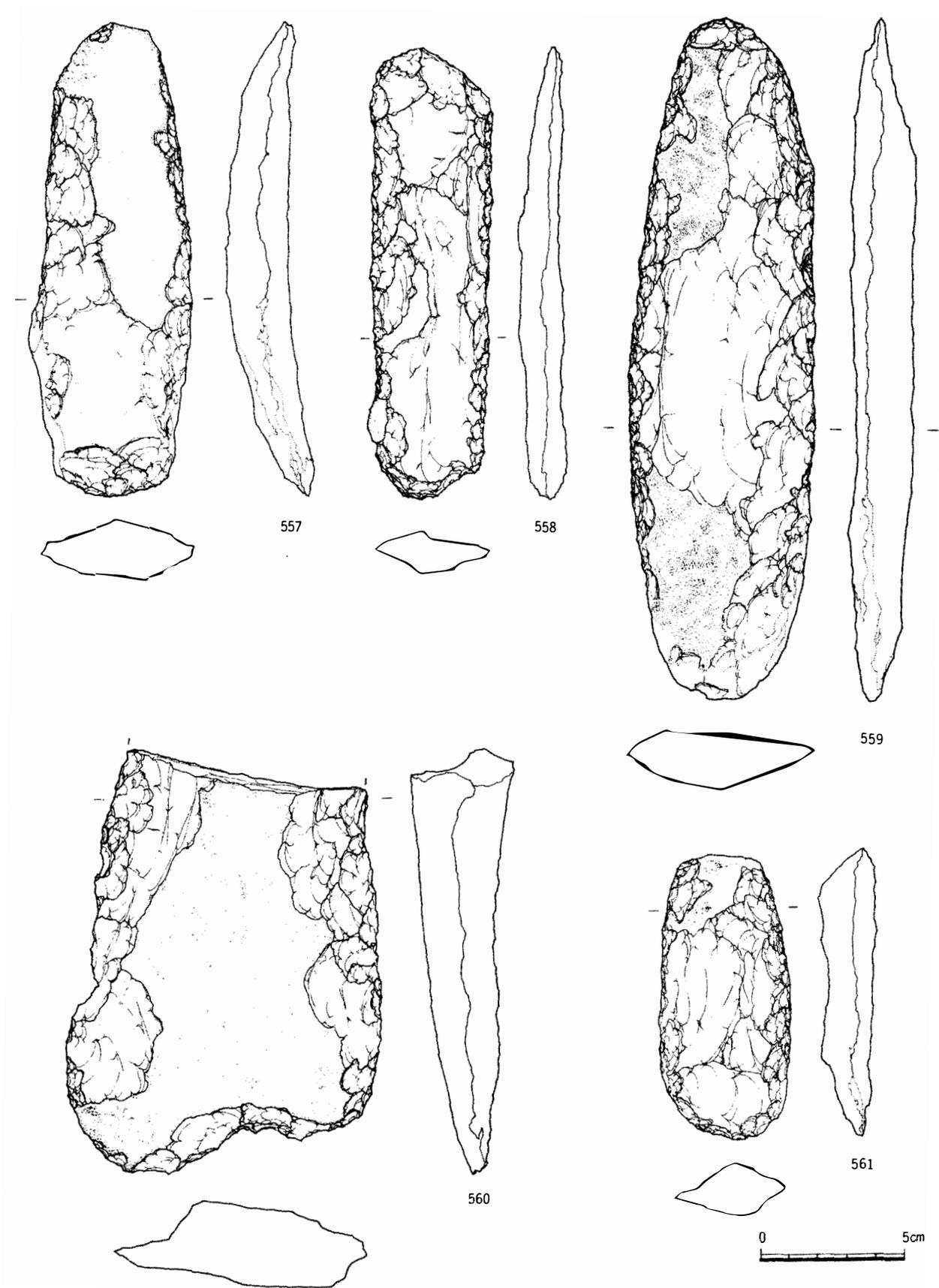
第48圖 石製土掘具



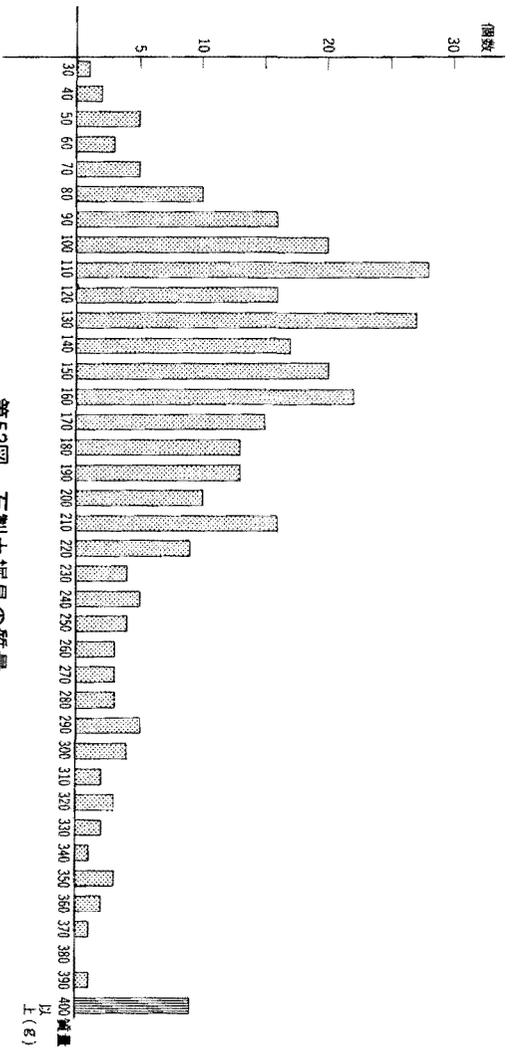
第49圖 石製土掘具



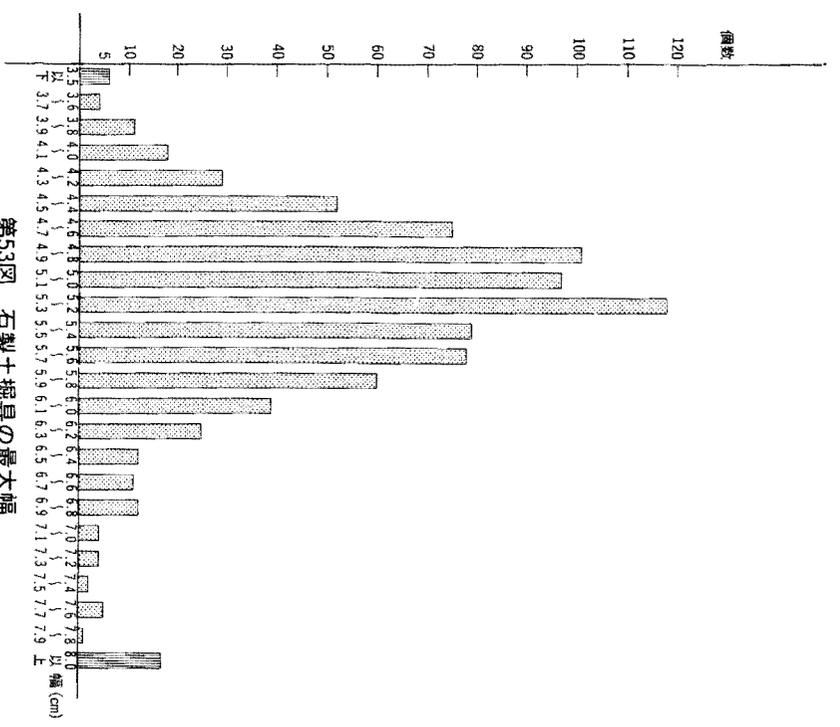
第50図 石製土掘具



第51図 石製土掘具



第52図 石製土掘具の質量



第53図 石製土掘具の最大幅

表2 石製土掘具観察表(1)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石 材	備 考
1	521	12Va	VH	17.3	6.2	3.5	358.2	ネ シ	安山 岩	
2	522	12Va	VII	16.3	5.3	2.8	245.8	ネ シ	安山 岩	
3	523	12Va	VII	12.4	4.5	1.4	108.7	ネ シ	安山 岩	
4	524	12Va	VII	12.7	5.3	2.0	181.9	ネ シ	安山 岩	
5	525	12Tb	VII	12.6	5.5	2.1	174.9	ネ シ	安山 岩	
6		SK92	—	(12.4)	6.5	3.1	(275.1)	ネ シ		
7		SX4	—	10.2	4.8	1.6	89.2	ネ シ	安山 岩	
8		SX4	—	(7.6)	5.2	2.1	(98.8)	ネ シ	安山 岩	
9		6W	VI	12.3	3.1	2.5	173.3	ネ シ	安山 岩	
10		7Qb	VI	12.7	4.6	2.0	169.1	ネ シ	安山 岩	
11		9W	VIII	(10.7)	6.1	1.5	(73.2)	ネ シ	凝灰 砂岩	
12		8Td	VI	(8.3)	4.9	2.0	(90.1)	ネ シ	凝灰 砂岩	
13		9V	VII	11.4	5.1	2.1	175.4	ネ シ	安山 岩	
14	533	9Ta	VI	12.4	5.1	1.8	152.0	ネ シ	安山 岩	
15		9V	VI	12.7	5.2	3.1	265.2	ネ シ	安山 岩	
16		9U	VI	(9.3)	6.0	1.8	(145.5)	ネ シ	安山 岩	
17		9W	VIII	(8.8)	5.6	2.7	(167.2)	ネ シ	凝灰 砂岩	
18		9V	VI	(4.6)	4.2	1.2	(24.1)	ネ シ	安山 岩	
19		10Y	VI	13.2	5.4	2.2	197.6	ネ シ	安山 岩	
20		10Yc	VI	12.0	5.5	2.6	194.8	ネ シ	安山 岩	
21		10Ya	VI	12.5	4.2	1.4	88.1	ネ シ	凝灰 砂岩	
22		10Ya	VI	12.3	5.0	2.1	169.2	ネ シ	安山 岩	
23		10Y	VII	12.7	5.7	2.7	204.6	ネ シ	安山 岩	
24		10Xa	VI	10.2	4.0	1.7	83.8	ネ シ	安山 岩	
25		10Y	VI	9.7	4.4	2.0	100.6	ネ シ	安山 岩	
26		10Yc	VI	12.4	5.9	2.5	183.9	ネ シ	安山 岩	
27		10W	VIII	(17.1)	7.6	1.8	(236.9)	ネ シ	安山 岩	接合 10W VIII
28		10Xb	VI	(10.2)	6.0	2.0	(170.6)	ネ シ	安山 岩	
29		10V	VI	(7.2)	5.3	2.1	(135.2)	ネ シ	凝灰 砂岩	
30		10V	VII	(8.8)	6.5	2.4	(111.8)	ネ シ	凝灰 砂岩	
31		10Yb	—	(9.0)	4.1	2.0	(94.2)	ネ シ	安山 岩	
32		10X	VII	(9.0)	5.0	1.8	(107.8)	ネ シ	安山 岩	
33		11V	VII	11.0	5.2	3.1	206.2	ネ シ	安山 岩	
34		11U	VI	12.7	5.2	2.4	208.2	ネ シ	凝灰 砂岩	
35		11W	VII	11.0	5.4	2.2	156.1	ネ シ	安山 岩	
36		9Ta	VI	14.3	5.4	2.8	290.8	ネ シ	安山 岩	
37		11T	VI	16.9	5.9	1.7	226.6	ネ シ	安山 岩	接合 11T VI
38		11U	VI	14.2	4.8	1.4	106.6	ネ シ	安山 岩	接合 11W
39		11U	VI	(6.8)	4.9	1.7	(78.3)	ネ シ	安山 岩	
40		12Ub	VI	15.2	6.5	2.6	255.9	ネ シ	安山 岩	
41		12X	VI	12.2	4.6	2.5	167.7	ネ シ	安山 岩	
42		12Wa	VI	12.4	5.7	2.5	226.7	ネ シ	安山 岩	
43		12M	VII	13.3	5.3	2.6	199.4	ネ シ	安山 岩	接合 12U
44		12N	VI	(11.4)	4.9	1.3	(95.0)	ネ シ	安山 岩	
45		11U	VI	(8.9)	4.3	1.1	(62.2)	ネ シ	安山 岩	
46		12X	VI	(7.0)	5.0	1.2	(67.3)	ネ シ	安山 岩	
47		12W	VI	(5.6)	3.8	2.1	(59.1)	ネ シ	凝灰 砂岩	
48		12V	VII	(6.7)	5.1	1.5	(54.0)	ネ シ	凝灰 砂岩	
49		12Ub	—	(5.5)	4.9	1.9	(76.5)	ネ シ	安山 岩	
50		13V	VII	13.1	4.6	1.7	118.5	ネ シ	安山 岩	
51		13Sa	VI	14.8	5.3	3.3	300.8	ネ シ	安山 岩	
52		13Ua	VI	12.5	4.7	3.0	211.8	ネ シ	安山 岩	
53		13U	VI	10.7	4.5	1.9	114.9	ネ シ	安山 岩	
54		13W	VI	11.1	9.6	2.7	292.7	ネ シ	安山 岩	
55		13Ub	VI	12.4	6.0	2.2	211.6	ネ シ	安山 岩	
56		13S	VI	13.5	5.7	2.5	198.5	ネ シ	安山 岩	
57	547	13Sa	VI	14.1	5.2	3.0	283.6	ネ シ	安山 岩	
58		13U	VI	11.9	5.5	2.8	216.7	ネ シ	安山 岩	
59		13W	VI	(11.4)	5.5	2.3	(185.6)	ネ シ	凝灰 砂岩	接合 11U VI
60		13V	VI	(11.3)	5.5	1.9	(172.8)	ネ シ	安山 岩	
61		13Ub	VI	(10.7)	4.8	2.2	(146.0)	ネ シ	安山 岩	
62		13Xc	VI	(9.6)	5.9	2.3	(170.8)	ネ シ	安山 岩	
63		13V	VI	(9.2)	4.8	1.3	(77.9)	ネ シ	安山 岩	
64		13V	VI	(9.4)	4.9	1.8	(117.9)	ネ シ	安山 岩	
65		13V	VI	(8.2)	5.3	1.2	(50.4)	ネ シ	安山 岩	
66		13Sd	VI	(6.6)	5.9	1.1	(52.8)	ネ シ	安山 岩	
67		13Ud	VI	(5.3)	5.3	1.7	(83.9)	ネ シ	凝灰 砂岩	
68		13Uc	VI	(6.5)	4.2	1.7	(59.3)	ネ シ	安山 岩	
69		13Ta	VI	(5.1)	5.6	1.3	(42.0)	ネ シ	安山 岩	
70		13Vc	VI	(5.5)	5.0	1.2	(41.3)	ネ シ	安山 岩	
71		13Ua	VI	(5.0)	4.5	1.6	(40.0)	ネ シ	安山 岩	
72		13V	VI	(5.7)	5.4	1.4	(52.9)	ネ シ	安山 岩	
73	550	14T	VII	12.0	5.5	2.6	222.5	ネ シ	安山 岩	
74		14V	VI	12.4	5.6	2.7	194.9	ネ シ	凝灰 砂岩	
75		14V	VI	9.2	4.5	1.2	70.9	ネ シ	安山 岩	
76		14Ta	VI	8.4	4.6	2.9	96.7	ネ シ	安山 岩	
77		14U	VI	(8.3)	4.2	1.7	(90.9)	ネ シ	安山 岩	
78		14Sd	VI	(11.7)	5.4	2.6	(187.0)	ネ シ	安山 岩	
79		14Rd	VI	(8.8)	3.9	0.9	(47.5)	ネ シ	安山 岩	
80		15Y	VI	12.9	5.7	2.4	203.6	ネ シ	安山 岩	

石製土掘具観察表(2)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石材	備考
81		15Ua	VI	12.0	5.4	2.5	202.7	ネシ	安山岩	
82		15Sd	VI	14.2	5.8	3.2	307.2	ネシ	安山岩	
83		15S	VII	10.4	4.3	1.4	82.4	ネシ	安山岩	
84		15Ta	VI	8.8	4.2	1.2	43.9	ネシ	安山岩	
85		15Ua	VI	16.4	6.4	2.3	338.1	ネシ	砂岩	接合 15U
86		15Va	VI	15.1	5.4	2.9	299.5	ネシ	砂岩	接合 15U
87		15Ta	VI	14.5	6.0	2.0	194.1	ネシ	安山岩	接合 13V VI
88		15Tc	VI	11.6	5.1	1.5	124.3	ネシ	安山岩	接合 15T
89		15Vc	VI	(10.7)	4.5	2.0	(112.5)	ネシ	安山岩	
90		15T	VII	(11.4)	4.4	1.7	(98.3)	ネシ	安山岩	
91		15V	VI	(10.9)	6.9	3.4	(277.6)	ネシ	安山岩	
92		15Tb	VI	(10.4)	5.5	2.9	(186.4)	ネシ	安山岩	
93		15Y	VI	(9.2)	4.7	1.8	(107.1)	ネシ	安山岩	
94		15Ua	VI	(7.9)	4.8	1.8	(81.1)	ネシ	安山岩	
95		15Vb	VI	(9.5)	4.5	1.2	(59.0)	ネシ	安山岩	
96		15S	VII	(7.7)	3.9	1.4	(48.1)	ネシ	安山岩	
97		15Ua	—	(4.3)	4.6	1.6	(38.1)	ネシ	安山岩	
98		15S	VI	(5.9)	4.8	3.1	(81.0)	ネシ	安山岩	
99		15V	VII	(7.2)	5.2	2.5	(147.8)	ネシ	安山岩	
100		15N	VI	(6.3)	5.2	2.0	(57.8)	ネシ	安山岩	
101	534	16Rb	VI	12.5	5.4	2.2	159.5	ネシ	安山岩	
102	555	16Rd	VI	10.1	5.0	2.9	118.7	ネシ	安山岩	
103		16Ud	VI	11.6	6.1	1.8	107.1	ネシ	砂岩	
104		16Sb	VI	11.3	5.1	2.3	161.4	ネシ	安山岩	
105		16Ud	VI	12.9	5.3	2.6	215.9	ネシ	安山岩	
106		16S	VIII	12.3	5.9	1.7	113.9	ネシ	安山岩	
107		16S	VIII	14.0	4.5	2.2	133.1	ネシ	安山岩	
108		16Ra	VI	(11.9)	5.3	2.5	(198.2)	ネシ	安山岩	
109		16Rc	VI	(11.9)	5.8	2.3	(189.7)	ネシ	安山岩	
110		16Td	VI	(13.7)	6.6	3.9	(267.3)	ネシ	安山岩	
111		16Td	VI	(10.1)	5.3	1.6	(112.6)	ネシ	安山岩	
112		16Ua	VI	(10.6)	4.5	1.7	(112.7)	ネシ	安山岩	
113		16Rc	VI	(9.1)	5.1	1.9	(97.5)	ネシ	安山岩	
114		16Rc	VI	(9.0)	5.6	2.9	(194.2)	ネシ	安山岩	
115		16Rc	VI	(9.2)	5.9	1.7	(135.2)	ネシ	安山岩	
116		16Rd	VI	(10.4)	6.1	2.7	(187.3)	ネシ	安山岩	
117		16Td	VI	(11.2)	4.7	2.1	(118.0)	ネシ	安山岩	
118		16Sa	VI	(7.0)	5.2	1.9	(100.1)	ネシ	安山岩	
119		16Sa	VI	(7.2)	4.9	2.6	(112.7)	ネシ	安山岩	
120		16Dd	VI	(6.3)	5.0	2.7	(98.7)	ネシ	安山岩	
121		16Va	VI	(5.8)	6.4	1.1	(62.0)	ネシ	安山岩	
122		16Wa	VI	(3.5)	4.1	1.0	(19.3)	ネシ	安山岩	
123		16Tc	VI	(4.3)	4.6	2.0	(43.7)	ネシ	安山岩	
124		17Sc	VI	16.9	6.7	3.2	323.0	ネシ	安山岩	
125		17Qb	VI	(13.3)	5.4	2.6	(257.4)	ネシ	安山岩	
126		17Sb	VI	11.2	4.8	2.0	136.9	ネシ	安山岩	
127		17Sb	VI	12.3	5.3	2.4	187.3	ネシ	安山岩	
128		17Ua	VI	12.8	4.8	1.8	158.0	ネシ	安山岩	
129		17Xb	VI	11.2	5.2	2.5	196.5	ネシ	安山岩	
130		17Qd	VI	10.4	4.5	2.9	106.8	ネシ	安山岩	
131		17Ta	VI	10.8	4.8	2.1	160.5	ネシ	安山岩	
132		17Qc	VI	12.9	5.8	2.2	185.3	ネシ	安山岩	
133		17Qc	VI	11.2	5.7	1.9	159.3	ネシ	安山岩	
134		17Qc	VI	10.7	4.9	2.1	166.6	ネシ	安山岩	
135		17Sa	VI	8.8	5.1	1.6	103.7	ネシ	安山岩	
136		17Vb	VI	10.8	4.3	2.1	119.8	ネシ	安山岩	
137		17Qc	VI	11.1	4.8	1.7	116.5	ネシ	安山岩	
138		17Ta	VI	13.6	4.9	2.0	178.5	ネシ	安山岩	
139		17Qc	VI	(11.5)	4.7	1.4	(102.5)	ネシ	安山岩	接合 17Q
140		16Ra	VI	18.1	5.8	2.4	293.1	ネシ	安山岩	接合 17R
141		17Qd	VI	(11.7)	6.0	1.8	(188.3)	ネシ	安山岩	
142		17Ra	VI	(10.9)	6.0	3.1	(233.5)	ネシ	安山岩	
143		17Ta	VI	(11.4)	7.3	2.2	(199.4)	ネシ	安山岩	
144		17Qc	VI	(12.6)	5.6	3.0	(242.5)	ネシ	安山岩	
145		17Sb	VI	(9.9)	5.2	2.1	(146.6)	ネシ	安山岩	
146		17Rc	VI	(9.6)	5.8	1.9	(144.6)	ネシ	安山岩	
147		17Qd	VI	(9.3)	5.2	2.9	(123.7)	ネシ	安山岩	
148		17Tc	VI	(7.9)	4.8	2.1	(87.0)	ネシ	安山岩	
149		17Sd	VI	(7.8)	4.7	1.8	(82.0)	ネシ	安山岩	
150		17Sb	VI	(7.4)	5.7	2.4	(114.2)	ネシ	安山岩	
151		17Qb	VI	(5.7)	5.7	2.0	(78.2)	ネシ	安山岩	
152		17W	VI	(5.8)	5.4	1.6	(56.4)	ネシ	安山岩	
153		17Td	VI	(4.7)	5.5	1.2	(37.5)	ネシ	安山岩	
154		17Tc	VI	(6.1)	4.4	1.5	(50.4)	ネシ	安山岩	
155		17Qd	VI	(12.2)	5.5	2.1	(176.3)	ネシ	安山岩	
156		18Rc	VI	12.6	5.0	3.3	210.9	ネシ	安山岩	
157		18Qb	VI	13.1	5.2	1.6	143.2	ネシ	安山岩	
158		18Qc	VI	11.0	5.1	1.9	144.8	ネシ	安山岩	
159		18Qa	VI	11.8	5.9	1.8	125.7	ネシ	安山岩	
160		18Ub	VI	(11.5)	6.9	3.2	(247.4)	ネシ	安山岩	

石製土掘具観察表(3)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石材	備考
161		18Qb	VI	11.9	4.7	2.1	116.9	ネ	流紋	岩
162		18Sd	VI	(12.6)	6.3	2.7	(253.3)	シ	砂	岩
163		18Rd	VI	(10.8)	4.6	1.6	(117.1)	シ	緑山	岩
164		18Qa	VI	(10.3)	6.1	2.7	(173.8)	シ	安山	岩
165		18W	VI	(9.3)	5.4	1.5	(111.1)	シ	安山	岩
166		18Sa	VI	(9.2)	5.8	1.8	(104.5)	シ	安山	岩
167		18Sd	VI	(10.7)	5.6	2.2	(166.5)	ネ	流紋	岩
168		19Pd	VI	10.0	4.6	1.8	117.6	シ	安山	岩
169		19P	VII	12.8	5.3	1.7	146.7	ネシ	安山	岩
170	538	19Rc	VI	10.9	4.7	1.6	74.3	ネ	安山	岩
171		19Ra	VI	15.9	6.1	1.8	193.1	シ	安山	岩
172		19Pd	VI	(12.6)	6.8	2.8	(356.4)	シ	安山	岩
174		19Qa	VI	(6.3)	5.0	1.2	(49.6)	ネ	安山	岩
175		19Pd	VI	(4.1)	5.0	1.1	(27.1)	シ	安山	岩
176		19Pb	VI	(6.6)	6.3	1.8	(70.0)	シ	安山	岩
177		19W	VI	(5.3)	5.1	1.3	(56.5)	シ	安山	岩
178		19Sa	VI	(2.1)	4.8	0.8	(9.1)	シ	安山	岩
178		20Pb	VII	12.6	5.8	2.8	250.0	シ	安山	岩
179		20Ra	—	11.4	4.8	2.1	130.3	シ	安山	岩
180		20T	VII	11.4	4.4	2.9	100.5	シ	安山	岩
181		20Pb	VII	10.5	4.2	2.2	108.6	ネシ	安山	岩
182		20Qd	VI	10.7	5.2	2.1	136.5	シ	安山	岩
183		20Uc	VI	(11.3)	5.3	1.7	(147.0)	シ	安山	岩
184	526	20Rc	VI	(11.9)	5.9	2.0	(150.4)	ネシ	安山	岩
185		20T	VII	(12.1)	5.8	2.5	(242.2)	シ	安山	岩
186		20Fc	VI	(10.1)	5.5	1.7	(116.3)	シ	安山	岩
187		20Sa	VI	(8.1)	4.5	1.6	(76.2)	シ	安山	岩
188		20Sa	VI	(9.2)	6.0	2.8	(154.6)	シ	安山	岩
189		20T	VII	(9.3)	5.7	2.1	(123.3)	シ	安山	岩
190		20Qc	VI	(7.9)	4.8	1.1	(67.8)	シ	安山	岩
191		20Pa	VI	(8.0)	5.3	1.8	(86.1)	シ	安山	岩
192		20Rd	VI	(8.3)	5.7	1.9	(124.9)	ネ	安山	岩
193		21P	VII	11.0	5.3	1.8	142.1	ネシ	安山	岩
194		21Pb	VII	11.8	4.7	2.2	131.3	ネ	安山	岩
195		21Qd	VI	9.9	4.9	1.9	114.0	ネシ	安山	岩
196		21Sb	VI	9.5	4.6	1.4	72.7	シ	安山	岩
197		21Qc	VI	14.6	5.6	2.3	211.1	シ	安山	岩
198		21P	VII	12.8	5.5	1.7	159.4	ネシ	安山	岩
199		21T	VI	12.2	4.8	1.8	134.2	ネ	安山	岩
200		21V	VII	14.8	6.2	2.6	318.9	シ	安山	岩
201		21Td	VI	(9.1)	6.3	2.1	(151.2)	ネ	安山	岩
202		21Rd	VI	(10.0)	7.1	1.7	(146.9)	シ	安山	岩
203		12Xb	VI	(8.7)	5.7	2.1	(131.5)	シ	安山	岩
204		21Sb	VII	(12.9)	8.7	2.5	(267.1)	シ	安山	岩
205		21Qd	VI	(9.5)	4.8	1.5	(92.0)	ネ	安山	岩
206		21Sc	VI	(8.8)	4.6	1.7	(75.7)	シ	安山	岩
207		21Qc	VI	(6.8)	4.9	1.6	(50.3)	ネ	安山	岩
208		22Ta	VI	11.7	4.7	2.0	147.6	ネ	安山	岩
209	532	22Sa	VI	11.0	5.5	2.2	162.3	シ	安山	岩
210		22Pd	VI	11.7	4.9	2.1	133.2	ネ	安山	岩
211		22Ua	VI	11.7	5.2	2.9	198.1	ネシ	安山	岩
212		22Qa	VI	9.9	4.4	1.4	80.9	シ	安山	岩
213		22Rd	VI	16.1	7.6	2.6	398.8	シ	安山	岩
214		22Sa	VI	(9.6)	5.8	2.2	(146.9)	ネ	安山	岩
215		22T	表採	(9.2)	4.5	1.7	(91.1)	ネ	安山	岩
216		22P	VII	(8.1)	4.8	2.7	(122.7)	ネシ	安山	岩
217		23O	VII	11.9	5.6	1.7	134.3	ネ	安山	岩
218		23T	VI	10.7	4.8	1.8	129.6	シ	安山	岩
219		23Tb	—	11.2	6.0	3.1	228.3	シ	安山	岩
220		23U	VII	(9.8)	4.9	1.4	(96.6)	シ	安山	岩
221		23O	VII	(10.9)	6.7	2.9	(267.6)	シ	安山	岩
222		23T	VI	(7.1)	5.3	1.6	(73.7)	シ	安山	岩
223		23O	VII	(6.7)	5.2	2.6	(111.6)	シ	安山	岩
224		23V	VII	(7.3)	5.4	2.0	(85.5)	ネ	安山	岩
225		23V	VII	(4.3)	4.7	1.3	(34.7)	シ	安山	岩
226		23Y	VII	(5.5)	4.1	1.8	(43.2)	ネ	安山	岩
227		24P	VII	12.1	5.5	2.1	144.6	ネ	安山	岩
228	551	24O	VII	13.3	4.8	3.9	216.3	シ	安山	岩
229		24O	VII	11.7	5.4	3.0	192.5	ネ	安山	岩
230		24S	VI	(11.8)	7.6	2.7	(271.6)	シ	安山	岩
231		24S	VII	(7.6)	5.4	1.9	(90.1)	シ	安山	岩
232		24T	VII	(6.4)	5.0	1.6	(53.9)	ネ	安山	岩
233		24T	VII	(8.9)	5.8	1.8	(147.0)	シ	安山	岩
234		24V	VI	(9.6)	8.4	1.8	(228.1)	シ	安山	岩
235		24S	VI	(11.4)	7.6	2.4	(262.6)	シ	安山	岩
236	552	25Q	VII	12.9	5.3	2.3	148.3	シ	安山	岩
237	543	25P	VII	11.9	4.8	2.3	138.5	ネ	安山	岩
238		25P	VII	11.6	4.7	2.5	167.2	シ	安山	岩
239		25Vb	—	10.0	4.5	2.3	116.6	ネ	安山	岩
240		25V	VII	10.6	5.5	1.9	121.2	ネシ	安山	岩

石製土掘具観察表(4)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石	材	備考
241		25V	VI	(12.5)	9.1	2.1	307.6	シ	安山	岩	
242		25Q	VIII	(12.3)	6.0	2.3	(195.4)	シ	安山	岩	
243		25P	VIII	(11.0)	6.3	2.8	(260.4)	ネ	安山	岩	
244		25O	VI	(10.6)	5.9	2.1	(190.9)	シ	安山	岩	
245		25P	VII	(9.3)	5.8	2.7	(197.9)	シ	安山	岩	
246		25O	VIII	(10.0)	5.9	1.9	(129.3)	シ	安山	岩	
247		25Sa	VIII	(9.3)	5.4	2.8	(142.8)	ネ	安山	岩	
248		25U	VII	(8.2)	5.2	3.8	(170.6)	ネ	凝灰質砂	岩	攪乱
249		25P	VII	(7.5)	7.0	1.6	(117.7)	シ	安山	岩	
250		25T	VI	(7.5)	7.3	2.5	(150.3)	シ	安山	岩	
251		25Sa	VI	(5.8)	5.8	2.9	(72.5)	ネ	安山	岩	
252		25Pd	VI	(4.5)	5.0	1.9	(52.0)	シ	安山	岩	
253		25Sa	VI	(1.6)	4.5	1.0	(14.2)	ネ	安山	岩	
254		25Oa	VI	(8.3)	4.6	2.2	(108.4)	シ	安山	岩	
255		25O	VII	(9.0)	4.7	1.8	(108.8)	ネ	安山	岩	
256		25Sa	VI	(6.8)	5.4	1.1	(47.8)	シ	安山	岩	
257		26Rc	VI	10.1	4.8	2.3	153.2	ネ	安山	岩	
258		26Qa	VI	12.0	4.8	2.4	158.5	ネ	安山	岩	
259		26U	VI	10.9	5.2	2.1	168.5	シ	安山	岩	
260	549	26O	VII	11.4	5.4	2.3	192.9	シ	安山	岩	
261		26O	VI	10.3	4.7	1.6	111.0	シ	安山	岩	
262		26P	VIII	11.0	5.7	3.7	181.7	シ	安山	岩	
263		26Rc	VI	15.7	5.4	2.2	263.1	シ	安山	岩	接合 27R
264		26Rd	VI	(10.0)	5.0	1.8	(104.7)	ネ	安山	岩	
265		26Pb	VI	(10.0)	5.3	2.3	(167.2)	シ	安山	岩	
266		26Pb	VI	(7.5)	6.1	4.2	(188.0)	ネ	安山	岩	
267		26Pb	VI	(11.2)	5.1	1.5	(80.6)	シ	安山	岩	
268		26Rd	VI	(8.3)	5.5	2.9	(124.0)	シ	安山	岩	
269		26Ob	VI	(7.5)	5.0	1.9	(113.9)	ネ	安山	岩	
270		25Pc	VI	(6.7)	5.2	1.9	(87.7)	ネ	安山	岩	
271		26Ob	VI	(7.0)	5.4	2.1	(108.9)	ネ	安山	岩	
272		26Pd	VI	(7.3)	4.6	2.1	(78.8)	ネ	安山	岩	
273		26Pa	VI	(6.7)	4.6	1.5	(50.6)	ネ	安山	岩	
274		26Qc	VI	(6.8)	5.3	1.7	(73.9)	シ	安山	岩	
275		26Qb	VI	(5.4)	5.6	1.6	(59.2)	シ	安山	岩	
276		26Pd	VI	(4.6)	4.7	1.3	(40.6)	シ	安山	岩	
277		26Rc	VI	(4.0)	4.9	0.9	(25.7)	シ	安山	岩	
278		26Qc	VI	(7.9)	5.9	1.9	(121.1)	シ	安山	岩	
279	528	27Sa	VI	16.2	6.6	2.4	316.0	シ	安山	岩	
280	544	27Sc	VI	17.9	5.5	1.9	188.3	ネ	安山	岩	
281		27Pd	VI	14.4	5.7	2.3	218.6	シ	安山	岩	
282		27Oa	VI	14.3	5.3	3.0	232.7	ネ	安山	岩	
283		27Oc	VI	11.5	4.5	2.1	145.3	シ	安山	岩	
284		27Qc	VI	12.0	5.2	2.1	155.2	シ	安山	岩	
285	561	27Oc	VI	10.0	4.5	1.8	99.9	ネ	安山	岩	
286	556	27Pa	VI	9.2	4.4	1.9	108.8	シ	安山	岩	
287	548	27Ob	VI	9.8	4.6	1.5	88.6	シ	安山	岩	
288	541	27Ob	VI	9.1	3.0	1.7	82.2	シ	凝灰質砂	岩	
289		27Ob	VI	11.4	5.2	1.7	115.4	ネ	安山	岩	
290		27Rc	VI	(10.4)	4.9	2.3	(135.1)	ネ	安山	岩	
291		27O	VI	(10.8)	5.0	2.1	(161.1)	シ	安山	岩	
292		27N	VII	10.4	5.6	2.5	155.7	シ	安山	岩	
293		27Qa	VI	(9.7)	5.5	2.1	(171.5)	シ	安山	岩	
294		27Pa	VI	(8.8)	4.9	1.8	(96.9)	ネ	安山	岩	
295		27Pd	VI	(8.7)	6.3	1.9	(105.0)	ネ	凝灰質砂	岩	
296		27N	VII	(6.0)	4.7	2.3	(87.7)	シ	安山	岩	
297		27Oc	VI	(7.4)	5.2	2.0	(102.3)	シ	凝灰質砂	岩	
298		27Sa	VI	(6.9)	4.6	2.2	(98.8)	シ	安山	岩	
299		27Qc	VI	(7.2)	5.3	2.5	(78.2)	シ	安山	岩	
300		28Pb	VI	11.5	8.2	2.7	178.0	ネ	安山	岩	
301		28Pb	VI	11.1	4.8	1.3	100.6	シ	安山	岩	
302		28Nc	VI	11.4	5.7	2.6	214.1	シ	安山	岩	
303		28Sc	VI	(12.0)	5.2	1.4	(121.1)	シ	安山	岩	
304		28Sa	VI	(12.3)	6.1	2.9	(214.0)	シ	安山	岩	
305		28V	VII	9.8	4.1	2.3	98.6	ネ	安山	岩	
306		28Sa	VI	9.5	4.9	1.9	104.2	ネ	安山	岩	
307		28Rb	VI	15.2	5.8	3.4	321.9	シ	安山	岩	
308		28Pd	VI	(11.4)	5.6	2.2	(185.9)	シ	安山	岩	
309		28Pd	VI	(10.4)	5.4	2.0	(167.6)	シ	安山	岩	
310		28Uc	VI	(9.8)	5.4	1.7	(113.3)	ネ	凝灰質砂	岩	
311		28Pd	VI	(8.8)	5.4	1.8	(99.1)	シ	安山	岩	
312		28Na	VI	(9.0)	4.6	1.7	(97.8)	ネ	安山	岩	
313		28Qa	VI	(8.8)	5.5	1.8	(101.3)	シ	安山	岩	
314		28Pb	VI	(7.8)	5.4	1.8	(99.8)	シ	安山	岩	
315		28Oc	VI	(5.5)	5.2	1.8	(60.3)	ネ	安山	岩	
316		28Nc	VI	(5.5)	4.8	2.0	(61.7)	シ	安山	岩	
317		28Sa	VI	(8.9)	5.4	2.0	(103.4)	シ	安山	岩	
318		28T	VI	(8.2)	5.3	1.9	(122.1)	シ	安山	岩	
319		29Ra	VI	17.9	5.8	3.2	320.9	ボ	安山	岩	
320		29Sb	VI	15.7	5.8	2.6	243.2	ネ	凝灰質砂	岩	

石製土掘具観察表(5)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石 材	備 考
321		29Ub	VI	12.8	5.8	2.7	247.1	シ	安山岩	
322		29Qb	VI	11.8	5.4	2.8	202.8	シ	砂	
323		29Pe	VI	8.5	4.8	1.9	91.6	シ	凝灰質砂	
324		29Rv	VI	12.4	5.3	1.7	134.3	シ	流紋山岩	
325		29Qb	VI	10.0	4.7	1.7	91.9	ネ	安山岩	
326		29Qb	VI	14.4	4.9	2.9	227.1	ボ	安山岩	接合 29Q
327		29Rc	VI	(11.8)	5.0	1.6	(122.9)	シ	砂	
328	527	24W	VI	(16.2)	9.4	3.6	(594.2)	シ	安山岩	
329		29Nb	VI	(10.4)	5.9	3.6	(254.4)	ネ	安山岩	
330		29Sa	VI	(11.8)	5.2	2.8	(215.2)	シ	安山岩	
331		29Tc	VI	(12.1)	6.2	1.8	(163.1)	ネ	安山岩	
332		29Q	VI	(9.4)	5.5	2.1	(156.5)	シ	安山岩	
333		29Rb	VI	(7.7)	6.2	2.2	(142.2)	シ	安山岩	
334		29Sa	VI	(5.7)	5.5	2.1	(74.7)	シ	砂	
335		29Ta	VI	(7.6)	5.1	1.4	(79.7)	ネ	流紋山岩	
336		29N	VI	(10.5)	5.2	2.5	(158.8)	シ	安山岩	
337		29Pc	VI	(6.1)	5.5	2.1	(109.2)	シ	安山岩	
338		30Pd	VI	13.2	6.6	3.1	352.7	ネ	流紋山岩	
339	558	30M	VI	15.9	4.3	1.4	118.0	ネ	流紋山岩	
340		30Qc	VI	11.8	5.7	2.7	197.7	ネ	安山岩	
341		30Sa	VI	10.3	5.0	2.2	128.0	シ	安山岩	
342		30Pa	VI	10.9	5.0	2.1	160.9	シ	安山岩	
343		30Nb	VI	11.1	4.6	1.9	110.3	シ	安山岩	
344		30Ob	VI	14.6	5.0	2.1	189.6	シ	安山岩	接合 30O
345	531	30T	VI	18.3	9.7	2.7	517.7	ネ	安山岩	接合 28S
346		30Oa	VI	(12.4)	5.8	2.8	(230.8)	ネ	安山岩	
347		30O	VI	(9.6)	5.8	3.0	(186.1)	シ	安山岩	
348		30Sd	VI	(8.6)	4.9	2.3	(122.1)	シ	砂	
349		30P	VI	(8.6)	5.2	1.7	(83.6)	ネ	流紋山岩	
350		29U	VI	(3.9)	5.0	1.4	(29.0)	シ	安山岩	
351		30Sb	VI	(4.2)	5.0	1.6	(43.5)	シ	安山岩	
352		30Rc	VI	(7.6)	4.8	2.2	(86.2)	ネ	流紋山岩	接合 30R
353		30N	VI	(9.1)	5.7	1.6	(120.4)	シ	安山岩	
354		30Rc	VI	(11.0)	6.0	3.1	(262.9)	シ	安山岩	
355		30Pa	VII	(5.5)	6.0	2.3	(85.4)	シ	流紋山岩	
356		31N	VI	11.0	5.3	2.4	173.3	シ	流紋山岩	
357		31L	VI	11.2	4.7	2.0	120.3	ネ	流紋山岩	
358		31M	VI	10.6	5.0	2.0	125.6	ネ	安山岩	
359		31P	VI	11.9	5.4	2.0	118.7	シ	安山岩	
360		31N	VI	9.8	4.6	2.1	106.5	シ	流紋山岩	
361		31P	VI	11.6	6.3	2.1	162.3	シ	安山岩	
362		31T	VI	13.0	6.3	3.1	291.1	シ	砂	
363		31P	VI	(8.2)	5.9	1.3	(81.1)	ネ	砂	
364		31P	VI	(9.1)	5.3	1.4	(87.8)	シ	安山岩	
365		31O	VI	(8.3)	6.1	1.8	(77.2)	シ	安山岩	
366		31O	VI	(6.3)	5.7	2.0	(86.0)	シ	安山岩	
367		32R	VI	21.2	6.8	3.9	501.6	シ	安山岩	
368		32S	VII	13.9	6.2	2.5	271.3	シ	安山岩	
369		32M	VI	12.2	5.3	2.7	215.4	ネ	安山岩	
370		32M	VI	10.5	5.3	1.8	111.6	ネ	砂	
371		32Y	VI	9.4	4.7	1.3	77.8	シ	安山岩	
372		32O	VII	9.4	5.1	3.1	152.5	ボ	凝灰質砂	
373		32M	VI	10.0	6.7	2.1	170.9	シ	流紋山岩	
374		32N	VII	8.0	5.1	2.2	113.5	ネ	安山岩	
375	539	32N	VI	8.3	5.0	3.5	163.8	ネ	凝灰質砂	
376		32O	VI	9.7	5.3	2.4	131.9	ネ	砂	
377		32O	VII	11.5	4.8	2.6	159.7	シ	凝灰質砂	砂岩接合 32O VII
378		32N	VII	(8.9)	5.9	1.5	(94.0)	シ	流紋山岩	
379		32Q	VI	(10.1)	5.3	2.4	(110.2)	シ	流紋山岩	
380		32N	VII	(11.5)	5.6	2.3	(151.3)	シ	流紋山岩	
381		32P	VI	(11.4)	6.3	1.8	(160.2)	シ	安山岩	
382		32P	VI	(9.0)	5.4	2.6	(139.7)	ネ	安山岩	
383		32M	VI	(6.9)	5.8	1.5	(67.8)	シ	砂	
384		32O	VI	(5.8)	5.3	2.9	(87.0)	ボ	安山岩	
385		32N	VII	(6.6)	5.0	2.2	(96.9)	ボ	安山岩	
386		32O	VI	(6.4)	4.8	1.7	(62.0)	シ	安山岩	
387		32N	VI	(8.3)	4.8	2.3	(117.9)	ネ	流紋山岩	
388		32M	VI	(8.2)	4.5	1.5	(60.4)	ネ	砂	
389		32O	VI	(5.0)	5.3	2.1	(56.7)	ネ	流紋山岩	
390		32P	VII	(6.9)	6.6	2.0	(106.1)	シ	流紋山岩	
391		31N	VI	(8.4)	5.1	2.8	(156.9)	シ	安山岩	
392		32N	VI	(6.3)	5.2	2.4	(78.2)	ネ	安山岩	
393		32N	VII	(7.3)	5.9	2.2	(93.9)	ネ	流紋山岩	
394		32N	VII	(6.2)	5.1	2.7	(110.0)	シ	安山岩	
395		33O	VI	12.6	5.5	2.2	106.3	ネ	安山岩	
396		33N	VI	12.1	5.7	1.9	123.7	ネ	安山岩	
397		33N	VI	11.0	5.6	2.1	169.8	ネ	流紋山岩	
398		33Q	VI	11.8	4.9	2.3	131.4	ネ	流紋山岩	
399		32O	VII	10.2	5.1	2.2	126.7	ネ	砂	
400		33P	VI	8.3	3.8	1.6	66.9	シ	砂	

石製土掘具観察表(6)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背 面	石 材	備 考
401	553	33O	VI	11.8	4.8	1.5	104.4	シ	安山岩	接合 33O ベルト
402		32R	VI	11.4	5.0	1.7	124.0	シ	安山岩	接合 33R VI
403		33N	VI	(14.9)	6.9	3.4	(455.5)	ネ	流紋岩	
404		33M	VI	(9.9)	4.6	1.8	(93.4)	シ	砂岩	
405		33P	VI	(7.8)	5.0	2.8	(117.0)	ネシ	流紋岩	
406		33M	VII	(8.7)	6.7	2.3	(134.3)	ネ	流紋岩	
407		33P	VI	(7.2)	6.0	2.3	(124.4)	シ	安山岩	
408		33M	VI	(5.1)	5.8	1.5	(57.7)	ネ	安山岩	
409		33M	VI	(5.9)	4.7	2.3	(76.0)	シ	安山岩	
410		33M	VI	(3.3)	5.4	1.6	(29.5)	シ	安山岩	
411		33O	VII	(13.7)	6.9	3.2	(329.0)	ネ	流紋岩	
412		33P	VI	(7.8)	5.6	2.5	(120.6)	ネ	流紋岩	
413		33O	不明	(6.6)	5.6	2.0	(95.0)	シ	安山岩	ベルト
414		33L	VI	(8.5)	6.1	2.3	(142.9)	ネ	安山岩	
415		34L	VI	12.1	5.9	2.5	228.3	シ	安山岩	
416		34P	VI	11.7	6.1	2.5	165.0	ネシ	泥岩	
417		34N	VI	11.8	4.6	1.8	131.3	ネシ	流紋岩	
418		34O	VI	11.6	4.8	2.6	132.9	シ	流紋岩	
419		34	VI	10.7	5.0	3.1	185.3	ネ	安山岩	
420		34O	VI	11.4	4.7	2.4	152.2	シ	安山岩	
421		34N	VI	11.1	5.3	1.8	131.9	シ	砂岩	
422		34N	VI	10.6	5.1	1.8	129.2	シ	流紋岩	
423		34L	VI	7.4	4.5	1.7	50.9	ネシ		
424		34R	VI	8.7	3.5	1.9	41.8	シ	砂岩	
425		34N	VI	12.9	5.4	1.8	177.5	シ	砂岩	接合 34N VI
426		33N	VI	13.5	5.2	2.1	182.4	シ	安山岩	接合 34N VI
427		34P	VI	(12.4)	6.9	3.0	(328.1)	シ	安山岩	
428		34P	VI	(11.9)	6.1	2.2	(160.2)	シ	安山岩	
429		34P	VII	(10.9)	5.8	2.2	(144.5)	シ	流紋岩	
430		34M	VI	(11.8)	4.8	2.1	(131.1)	ネ	安山岩	
431		34M	VI	(13.4)	5.3	2.4	(183.4)	シ	安山岩	
432		34L	VI	(9.7)	4.7	1.6	(89.3)	ネシ	安山岩	
433		34O	VII	(8.9)	5.7	1.7	(108.2)	シ	安山岩	
434		34R	VI	(7.1)	5.3	1.3	(58.1)	シ	安山岩	
435		34L	VI	(8.6)	4.8	1.5	(75.5)	シ	安山岩	
436		34M	VI	(8.2)	5.4	1.2	(48.9)	シ	安山岩	
437		34K	VI	(4.0)	5.3	1.3	(39.6)	シ	流紋岩	
438		34L	VI	(4.9)	4.9	2.1	(57.0)	シ	凝灰砂岩	
439		34N	VI	(7.9)	5.1	1.9	(101.2)	シ	安山岩	
440		34Q	VI	(7.1)	5.7	2.6	(119.3)	シ	砂岩	
441		34L	VII	(6.9)	4.7	1.8	(85.7)	ネ	流紋岩	
442		35O	VI	19.4	6.4	3.6	563.4	ネ	流紋岩	
443		35O	VI	15.6	6.0	3.2	351.6	ネシ	安山岩	
444		35O	VI	14.9	5.3	2.3	218.5	ネ	安山岩	
445		35M	VI	11.3	4.4	2.6	143.9	ネシ	安山岩	
446		35L	VI	9.9	6.3	3.1	183.2	ネ	凝灰砂岩	
447		35Q	VII	10.4	4.8	2.1	131.3	シ	流紋岩	
448		35N	VI	10.5	5.4	2.3	175.2	シ	安山岩	
449		35Q	VI	10.3	5.6	2.3	163.6	シ	砂岩	
450		35P	VI	10.6	5.3	2.0	125.4	シ	流紋岩	
451		35O	VI	11.0	4.5	1.9	117.2	ネ	安山岩	
452		35M	VI	9.4	4.4	1.5	70.8	シ	安山岩	
453		35M	VI	13.7	5.7	2.6	244.4	ネ	安山岩	接合 35N VI
454		35Q	VI	(10.5)	4.7	2.4	(110.8)	ネ	安山岩	
455		35K	VI	(10.7)	6.6	2.0	(188.5)	シ	安山岩	
456		35P	VII	(9.9)	5.1	2.0	(116.6)	シ	安山岩	
457		35L	VI	(9.0)	5.3	2.1	(136.4)	シ	砂岩	
458		35U	VI	(9.1)	5.2	1.7	(102.1)	シ	砂岩	
459		35Q	VII	(10.4)	6.2	1.8	(120.0)	シ	安山岩	
460		35P	VI	(9.7)	5.9	2.9	(210.1)	シ	安山岩	
461		35I	VI	(7.9)	5.9	2.6	(136.2)	シ	安山岩	
462		35N	VI	(7.0)	5.0	2.4	(101.6)	ネ	安山岩	
463		35L	VI	(7.7)	5.1	1.6	(98.0)	シ	安山岩	
464		35M	VI	(7.3)	5.1	1.3	(67.5)	ネ	安山岩	
465		35O	VI	(6.2)	5.2	1.8	(85.8)	シ	安山岩	
466		34R	VI	(6.2)	5.3	2.7	(97.4)	ネ	安山岩	
467		35L	VI	(4.5)	4.5	1.8	(22.8)	ネ	安山岩	
468		35N	VI	(3.6)	5.1	1.4	(28.6)	シ	安山岩	
469		35L	VI	(3.8)	4.8	1.5	(27.8)	シ	安山岩	
470		35L	VI	(8.8)	4.5	1.6	(81.1)	ネ	流紋岩	
471		35J	VI	(7.5)	5.3	1.6	(87.0)	シ	砂岩	
472		35J	VI	(7.8)	5.2	1.6	(71.8)	シ	流紋岩	
473		35I	VI	(7.8)	4.9	2.9	(113.1)	ボ	安山岩	
474		35Q	VII	(6.0)	5.9	1.3	(77.1)	シ	砂岩	
475		35O	VI	(3.7)	5.0	1.3	(36.0)	シ	砂岩	
476		36M	VI	14.5	6.0	3.7	365.3	ネシ	砂岩	
477		36M	VI	11.9	5.5	2.4	191.5	ネシ	砂岩	
478		36J	VI	10.9	5.0	2.4	170.6	シ	安山岩	
479		36Q	VI	10.6	4.0	1.8	90.2	ネ	安山岩	
480		36L	VI	10.0	5.7	1.8	130.4	シ	安山岩	

石製土掘具観察表(7)

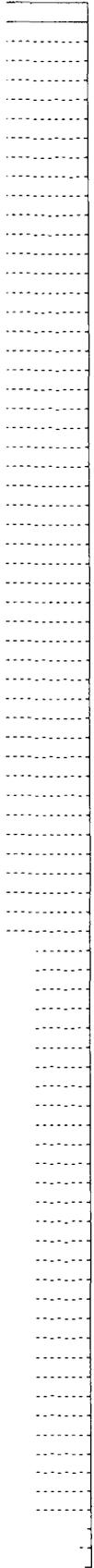
No	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石 材	備 考
481		36N	VI	13.4	6.1	2.8	259.8	シ	砂安山岩	接合 36N VI
482		36N	VI	15.4	5.2	2.1	216.2	シ	砂安山岩	接合 36N VI
483		36P	VI	(13.3)	5.1	2.4	(186.8)	ネ	砂安山岩	
484		36Q	VII	(10.3)	5.5	1.9	(159.3)	シ	砂安山岩	
485		36J	VI	(8.4)	4.8	1.7	(79.8)	シ	砂安山岩	
486		36O	VI	(9.6)	5.3	1.6	(108.0)	シ	砂安山岩	
487		30R	VI	(3.9)	4.6	1.9	(34.1)	ネ	流紋岩	
488		36K	VI	(10.3)	5.2	2.3	(147.9)	ネ	流紋岩	
489		36P	VI	(10.8)	4.9	2.2	(141.4)	ネ	安山岩	
490		36Q	VII	(9.5)	5.3	2.1	(117.4)	シ	安山岩	
491		36L	VII	(9.4)	4.6	2.5	(133.2)	ネ	安山岩	
492		37P	VI	19.9	5.7	3.0	339.9		安山岩	
493		37I	VI	16.8	6.8	2.1	287.6	シ	安山岩	
494		37P	VII	14.4	5.0	2.5	169.0	シ	砂安山岩	
495		37P	VII	14.2	4.4	2.2	150.7	シ	砂安山岩	
496		37P	VII	15.2	6.0	2.0	229.8	シ	砂安山岩	
497		37O	VI	11.8	4.7	2.1	148.9	シ	凝灰質砂	
498		37Q	VI	16.6	7.0	2.9	418.8	ネ	流紋岩	
499		37N	VI	12.0	4.4	2.3	168.4	シ	泥岩	
500		37N	VI	12.5	5.1	3.3	138.1	シ	砂安山岩	
501		37N	VI	(9.9)	5.0	1.5	(109.2)	ネ	流紋岩	
502		37J	VI	9.7	4.8	1.9	114.2	ネ	流紋岩	
503		38N	VI	12.2	5.0	1.8	178.7	シ	安山岩	接合 37O VI
504		37O	VI	(10.4)	5.2	2.2	(157.3)	ネ	安山岩	
505		37M	VI	(11.5)	5.1	1.2	(86.0)	ネ	安山岩	
506		37I	VI	(8.5)	5.3	2.3	(146.2)	シ	安山岩	
507		37Q	VI	(8.8)	5.8	2.6	(166.2)	シ	安山岩	
508		37H	VI	(9.0)	4.7	1.1	(77.7)	シ	安山岩	
509		37J	VI	(8.3)	4.6	1.3	(62.3)	ネ	安山岩	
510		37J	VI	(7.9)	3.9	1.8	(62.2)	ネ	安山岩	
511		37K	VI	(7.5)	4.5	1.5	(66.2)	ネ	安山岩	
512		37K	VI	(5.9)	5.9	1.6	(73.3)	シ	砂安山岩	
513		37P	VI	(5.6)	4.6	1.8	(59.6)	シ	砂安山岩	
514		37J	VI	(8.2)	4.8	1.8	(81.6)	シ	安山岩	
515		37N	VI	(5.8)	5.8	1.9	(76.0)	シ	安山岩	
516		37K	VI	(8.1)	4.7	1.5	(55.4)	ネ	安山岩	
517		37J	VI	(6.6)	3.7	1.1	(32.0)	シ	安山岩	
518		37I	VI	(4.4)	4.2	1.2	(37.6)	ネ	安山岩	
519		37L	VI	(8.9)	5.6	1.1	(67.3)	ネ	安山岩	
520		37I	VI	(2.3)	4.3	1.9	(39.7)	シ	安山岩	
521		37M	VI	(8.5)	4.7	1.8	(92.4)	ネ	凝灰質砂	
522		37N	VI	(9.0)	6.3	3.1	(264.9)	シ	安山岩	
523		38P	VII	16.6	6.3	3.1	378.1	ネ	砂安山岩	
524		38P	VII	16.3	5.6	2.9	278.4	ネ	砂安山岩	
525		38Q	VI	13.5	4.6	1.1	94.8	シ	砂安山岩	
526		38K	VI	10.8	4.8	1.9	95.4	シ	流紋岩	
527		38K	VI	9.7	4.7	1.9	108.1	シ	流紋岩	
528		38K	VI	13.6	4.9	2.2	156.0	ネ	流紋岩	接合 38J VI
529		38P	VII	9.5	4.8	1.9	100.7	ネ	流紋岩	
530		38Q	VII	(11.9)	5.6	2.5	(170.7)	シ	流紋岩	
531		38M	VI	(12.1)	6.0	2.9	(235.5)	ネ	流紋岩	
532		38L	VI	(10.6)	5.7	2.1	(160.5)	ネ	安山岩	
533		38P	VII	(10.3)	4.9	1.9	(119.4)	ネ	安山岩	
534		38P	VII	(9.2)	5.8	2.0	(107.9)	ネ	安山岩	
535		38Q	VII	(10.2)	4.9	2.6	(157.5)	シ	安山岩	
536		38P	VI	(10.8)	5.6	1.4	(108.0)	ネ	安山岩	
537		38P	VII	(10.0)	5.5	2.1	(166.8)	シ	砂安山岩	
538		38M	VI	(9.8)	5.2	1.9	(114.8)	シ	流紋岩	
539	537	37L	VI	(9.9)	5.5	1.2	(78.4)	シ	安山岩	接合 38L VI
540		38K	VI	(10.1)	4.5	1.8	(87.9)	シ	砂安山岩	
541		38P	VI	(12.5)	5.6	1.7	(150.0)	シ	砂安山岩	
542		38P	VII	(10.5)	6.5	3.7	(263.1)	ネ	砂安山岩	
543		37P	VI	(6.9)	5.7	3.2	(136.5)	ネ	砂安山岩	
544		38J	VI	(6.0)	6.0	3.0	(65.5)	ネ	安山岩	
545		38I	VI	(7.9)	5.7	1.2	(58.9)	シ	安山岩	
546		38J	VII	(6.7)	4.0	1.7	(50.9)	ネ	流紋岩	
547		38P	VI	(5.1)	4.7	1.5	(38.8)	ネ	砂安山岩	
548		38M	VI	(4.0)	4.7	1.5	(29.9)	ネ	安山岩	
549		38L	VI	(8.8)	5.4	1.6	(98.6)	シ	砂安山岩	
550		38F	VI	(5.0)	5.6	2.3	(103.4)	シ	砂安山岩	
551		38Q	VII	(6.0)	4.1	0.7	(14.3)	ネ	安山岩	
552		39K	VI	12.1	4.5	2.0	129.7	シ	安山岩	
553		39I	VI	11.8	4.6	1.4	97.0	シ	安山岩	
554		39K	VI	11.0	4.5	1.4	85.9	シ	砂安山岩	
555		39K	VI	10.9	4.9	2.4	133.9	シ	安山岩	
556		39J	VI	17.2	6.4	2.7	367.0	ネ	砂安山岩	接合 39J VI
557		SE01	-	12.0	5.1	2.1	123.3	ネ	安山岩	接合 SE01
558		39K	VI	(10.0)	3.9	1.6	(62.5)	シ	安山岩	
559		39K	VI	(11.3)	6.2	2.2	(193.0)	シ	安山岩	
560		39J	VI	(10.3)	5.7	2.9	(214.8)	シ	砂安山岩	

石製土掘具観察表(8)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石材	備考
561		39K	VI	(9.4)	5.3	2.1	(136.5)	シ	砂岩	
562		39I	VI	(9.5)	5.5	1.9	(123.7)	シ	流紋岩	
563		39J	VI	(9.5)	4.9	1.6	(66.5)	シ	凝灰質砂岩	
564		39P	VI	(7.5)	6.2	2.8	(124.5)	シ	山紋岩	
565		39K	VI	(7.9)	4.5	2.4	(96.4)	ネ	安流山	
566		39K	VI	(6.7)	4.9	2.2	(106.4)	ネ	安山	
567		39K	VI	(6.9)	4.8	2.6	(94.8)	シ	安山	
568		39K	VI	(9.4)	5.9	2.7	(153.7)	シ	安砂	
569		39	VI	(6.4)	4.2	1.1	(31.4)	ネ	安山	
570		39M	VI	(9.7)	5.8	2.7	(187.1)	ネ	安山	
571		39L	VI	(8.2)	7.8	3.5	(283.8)	シ	安流	
572		40I	VI	13.0	5.7	2.6	200.7	シ	安砂	
573		40P	VII	11.8	5.2	1.9	135.2	シ	安流	
574		40J	VI	10.1	5.2	2.4	176.0	シ	凝灰質砂	
575		40Q	VII	11.7	5.1	2.3	165.9	シ	安山	
576		40Q	VII	11.9	4.8	2.4	165.1	シ	安山	
577		40J	VI	13.0	4.6	2.4	148.1	ネ	安山	接合 40J VI
578	529	40O	VI	19.4	9.6	2.4	469.5	シ	安砂	接合 44N VI
579		14	VI	(5.8)	6.2	1.5	(59.1)	シ	流紋	
580		40K	VI	(9.9)	5.7	2.4	(157.9)	ネ	砂岩	
581		40M	VI	(9.4)	6.3	3.7	(242.5)	シ	砂岩	
582		40M	VI	(7.0)	5.8	3.0	(147.7)	シ	砂岩	
583		40M	VI	(8.4)	5.1	1.2	(65.2)	シ	流紋	
584		14Sa	—	(9.1)	4.8	1.9	(100.8)	シ	流紋	
585		40P	VII	(7.5)	5.7	2.3	(107.4)	シ	流紋	
586		40I	VI	(7.7)	4.9	1.5	(69.2)	ネ	流紋	
587		40M	VI	(7.7)	4.6	2.9	(72.7)	シ	安山	
588		40J	VI	(6.5)	5.2	1.9	(73.3)	シ	安砂	
589		40M	VI	(5.8)	4.1	1.2	(37.3)	ネ	安山	
590		40Jb	VI	(4.9)	4.6	1.6	(42.2)	シ	安砂	
591		40K	VI	(3.5)	4.5	1.9	(17.0)	シ	砂岩	
592		40M	VI	(12.1)	5.7	2.7	(262.3)	シ	砂岩	
593		40Q	VI	(9.1)	5.7	1.8	(135.4)	シ	砂岩	
594		40Q	VII	(7.3)	6.5	2.3	(162.2)	シ	安山	
595		41K	VI	12.6	6.0	2.7	224.6	シ	安砂	
596		41L	VI	13.8	5.2	2.1	213.4	シ	砂岩	
597		41H	VI	9.8	5.1	2.1	115.5	シ	流紋	
598		41K	VI	10.3	4.9	1.6	104.7	ネ	流紋	
599		41M	VI	(10.0)	5.2	1.7	(130.8)	シ	安山	
600		41K	VI	11.0	4.8	2.7	151.2	ネ	安流	
601		41M	VII	(14.1)	6.1	1.9	(195.7)	シ	砂岩	
602		41H	VI	17.9	7.4	2.9	423.2	シ	安山	接合 41H VI
603		41N	VI	15.5	5.6	2.5	236.6	ネ	安山	接合 41M VI
604	560	41R	VI	(14.9)	10.9	3.4	(565.8)	シ	安砂	
605		41M	VI	(8.4)	4.3	1.8	(75.2)	ネ	安山	
606		41H	VI	(9.1)	5.0	1.9	(95.1)	シ	安山	
607		41K	VI	(10.3)	5.4	1.5	(116.8)	ネ	安流	
608		41H	VI	(12.1)	7.4	2.9	(281.3)	ネ	流紋	
609		41K	VI	(9.1)	5.7	2.8	(183.9)	シ	流紋	
610		41M	VI	(8.1)	4.8	1.5	(69.7)	シ	泥安	
611		41M	VI	(6.5)	5.0	1.5	(64.4)	シ	安山	
612		41N	VI	(7.1)	4.9	1.9	(84.0)	シ	安山	
613		42I	VI	12.1	5.3	1.6	139.8	ネ	安流	
614		42I	VII	10.1	4.3	1.7	94.7	ネ	流紋	
615		42P	VII	9.8	3.9	2.5	83.0	ネ	泥流	
616		42I	VI	(12.3)	7.2	3.0	(271.5)	ネ	流紋	
617		42I	VI	(9.1)	5.4	2.2	(146.2)	ネ	安山	
618		42L	VI	(9.6)	6.0	2.2	(175.4)	ネ	安山	
619		42L	VI	(9.7)	4.8	2.6	(147.5)	ネ	安砂	
620		42I	VI	(8.2)	5.9	1.8	(119.7)	ネ	流紋	
621		42I	VI	(7.3)	5.1	2.1	(72.4)	シ	安砂	
622		42J	VI	(6.7)	4.2	2.4	(80.1)	シ	安山	
623		42I	VI	(4.3)	5.5	2.2	(75.1)	シ	安砂	
624		42H	VI	(4.5)	4.7	1.0	(29.2)	シ	安山	
625		42K	VI	(4.1)	4.9	1.4	(29.9)	シ	安山	
626		43N	VI	10.8	4.7	2.2	136.0	ネ	安山	
627		43N	VI	9.2	6.6	2.3	169.8	シ	安砂	
628		43N	VII	11.6	4.8	2.3	148.4	ネ	安山	
629		43N	VII	10.5	5.2	1.6	90.9	ネ	安山	
630		43I	VI	9.2	4.7	1.7	91.1	シ	安山	
631		43I	VI	10.9	5.1	1.6	116.0	シ	安砂	
632		43H	VI	10.7	3.5	2.1	87.3	ネ	凝灰質砂	
633		43I	VII	(9.8)	5.8	1.5	(121.0)	シ	砂岩	接合 40O VII
634		43I	VI	(9.7)	3.8	1.4	(74.0)	シ	砂岩	
635		43II	VI	(10.6)	5.1	2.5	(181.9)	ネ	安山	
636		43H	VI	(8.9)	6.4	1.5	(89.5)	ネ	安山	
637		43I	VI	(10.5)	5.8	3.0	(188.6)	シ	安山	
638		43P	VI	(7.3)	7.2	1.5	(96.6)	シ	安砂	
639		43I	VI	(7.0)	6.3	2.8	(124.2)	シ	安山	
640		43K	VI	(6.2)	6.9	2.2	(120.3)	ネ	安流	
640		43M	VI	(6.6)	5.5	1.9	(83.9)	ネ	流紋	

石製土掘具観察表(9)

No.	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石材	備考
641		43M	VI	(8.0)	4.8	1.6	(77.0)	ネ	安山岩	
642		43C	VII	(6.6)	4.9	1.6	(51.6)	ネシ	流紋岩	
643		43I	VI	(6.3)	4.5	2.1	(68.4)	ネ	流紋岩	
644		43N	VI	(5.2)	4.6	1.7	(53.5)	ネシ	砂岩	
645		43N	VI	(5.1)	4.8	1.5	(50.8)	ネシ	流紋岩	
646		43L	VI	(6.4)	5.0	1.1	(34.3)	ネ	流紋岩	
647		43I	VI	(4.8)	5.7	1.6	(49.2)	ネ	安山岩	
648		43O	VII	(4.8)	4.5	1.9	(53.4)	ネシ	安山岩	
649		43I	VI	(4.8)	8.4	1.1	(35.4)	ネシ	安山岩	
650		43J	VI	(3.9)	5.1	1.3	(27.9)	ネシ	流紋岩	
651		43M	VI	(4.5)	4.5	1.2	(33.0)	ネ	流紋岩	
652		44J	VI	16.9	8.5	3.3	587.1	ネシ	砂岩	
653		44J	VI	11.3	4.9	2.2	105.6	ネシ	流紋岩	
654		41M	VI	(9.7)	4.6	1.7	(92.5)	ネシ	安山岩	
655		44J	VI	(9.7)	4.8	2.1	(129.6)	ネシ	安山岩	
656		44M	VI	(7.6)	5.7	2.0	(154.0)	ネシ	安山岩	
657		44K	VI	(10.7)	8.1	3.0	(321.2)	ネシ	安山岩	
658		44N	VI	(10.5)	6.1	2.6	(207.0)	ネ	安山岩	
659		44J	VI	(7.8)	5.9	1.2	(75.5)	ネ	流紋岩	
660		44J	VI	(5.5)	4.1	1.6	(39.2)	ネシ	流紋岩	
661		44K	VI	(4.6)	5.3	1.2	(36.7)	ネシ	砂岩	
662		44L	VI	(4.2)	4.6	0.9	(17.7)	ネシ	凝灰質砂岩	
663		44I	VI	(2.6)	3.5	0.6	(5.4)	ネシ		
664		44J	VI	(8.3)	4.6	1.3	(62.4)	ネ	流紋岩	
665		45I	VI	(9.9)	4.3	1.9	(104.8)	ネシ	安山岩	
666		45I	VI	9.9	4.3	1.2	(56.6)	ネシ	安山岩	
667		45K	VI	(9.3)	4.1	1.5	(61.4)	ネ	安山岩	
668	540	43L	VI	7.8	3.8	1.9	101.8	ネ	流紋岩	接合 45K VI
669		45K	VI	15.9	5.1	1.8	151.3	ネ	流紋岩	接合 45K VI
670		45L	VI	12.0	4.2	2.3	146.4	ネシ	安山岩	接合 44I VI
671		45L	VI	10.8	4.5	1.9	124.4	ネシ	安山岩	接合 45I VI
672		45I	VI	(8.0)	5.6	1.7	(89.8)	ネ	流紋岩	
673		45I	VI	(4.5)	5.1	1.3	(31.3)	ネ	流紋岩	
674		45L	VI	(8.0)	5.0	2.2	(86.4)	ネシ	流紋岩	
675		45I	VI	(5.2)	4.5	1.8	(45.8)	ネシ	凝灰質砂岩	
676		45Q	VI	(6.4)	4.9	1.2	(52.0)	ネシ	流紋岩	
677		45G	VI	(4.7)	5.2	1.1	(34.1)	ネ	安山岩	
678		45K	VI	(5.8)	4.4	1.5	(40.2)	ネシ	安山岩	
679		45I	VI	(8.9)	6.0	1.5	(106.7)	ネシ	砂岩	
680		45M	VI	(3.8)	5.6	1.1	(38.1)	ネシ	凝灰質砂岩	
681		46G	VI	9.1	4.7	2.2	99.8	ネシ	安山岩	
682		46M	VI	11.2	5.2	2.4	122.3	ネシ		
683		46S	VI	(13.5)	7.6	3.5	(458.5)	ネシ	砂岩	
684		46J	VI	(12.0)	5.7	1.9	(173.3)	ネ	安山岩	
685		46G	VI	(9.4)	4.9	1.9	(119.5)	ネシ	安山岩	
686		46J	—	(8.5)	5.3	1.3	(71.2)	ネシ	砂岩	
687		46J	VI	(9.1)	5.1	1.9	(141.3)	ネシ	砂岩	
688		46N	VI	(3.6)	4.6	1.7	(30.6)	ネシ	流紋岩	
689		46H	VI	(10.3)	5.7	2.0	(138.3)	ネ	安山岩	接合 45G VI
690		46K	VI	(9.7)	9.0	9.3	(324.9)	ネシ	安山岩	
691		47P	VI	(14.3)	9.3	3.2	(644.0)	ネシ	安山岩	
692		47J	VI	(11.3)	6.4	2.2	(195.0)	ネシ	安山岩	
693		47P	VI	(11.3)	5.1	1.8	(123.9)	ネ	安山岩	
694		47F	VI	(9.8)	5.3	1.5	(83.3)	ネシ	安山岩	
695		47F	VI	(9.7)	5.2	1.3	(76.6)	ネシ	安山岩	
696		47F	VI	(14.8)	5.7	2.1	(164.0)	ネシ	安山岩	接合 47F VI
697		47G	VI	(7.2)	6.1	2.7	(106.2)	ネシ	安山岩	
698		47F	VI	(8.6)	5.3	2.5	(98.3)	ネシ	安山岩	
699		47J	VI	(6.3)	5.1	2.1	(80.8)	ネシ	流紋岩	
700		47M	VI	(6.3)	5.6	1.6	(81.6)	ネシ	安山岩	
701		47H	VI	(6.0)	6.9	2.2	(79.7)	ネ	安山岩	
702		47O	VI	(6.5)	4.6	2.1	(42.0)	ネ	安山岩	
703		47O	VI	(5.2)	5.4	2.3	(77.9)	ネシ		
704		47F	VI	(4.9)	4.4	1.2	(27.4)	ネシ		
705		47I	VI	(2.0)	3.6	1.0	(8.0)	ネシ		
706		48J	VI	16.9	5.8	2.4	266.9	ネ	流紋岩	
707	554	48I	VI	13.9	6.7	1.7	212.5	ネシ	安山岩	
708		48E	VI	9.5	5.6	2.8	181.7	ネシ		
709		48J	VI	8.8	4.9	2.9	93.1	ネシ	安山岩	
710		48I	VI	(10.0)	4.3	1.2	(67.8)	ネ	安山岩	
711		48F	VI	(8.9)	5.6	2.7	(155.4)	ネ	安山岩	
712		48J	VI	(10.4)	4.8	2.5	(156.7)	ネシ	流紋岩	
713	542	48G	VI	(8.5)	3.6	1.8	(57.2)	ネシ	砂岩	
714		48I	VI	(7.0)	5.4	1.9	(72.0)	ネシ	流紋岩	
715		48G	VI	(4.1)	3.9	1.0	(23.0)	ネシ	流紋岩	
716		49T	VII	13.7	5.9	3.3	341.4	ネシ	砂岩	
717		49J	VI	10.1	4.8	2.8	175.5	ネシ	砂岩	
718		49G	VI	10.6	5.3	2.2	133.4	ネ	安山岩	
719		49N	VI	14.3	5.5	2.6	203.6	ネ	安山岩	接合 49N VI
720		49G	VI	(8.0)	4.3	1.4	(58.0)	ネシ	安山岩	



石製土掘具観察表(11)

No	図面番号	出土区	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	背面	石材	備考
801		54G	VI	8.3	4.7	1.4	59.8	ネ	流紋岩	
802		55F	VI	9.8	5.1	2.4	133.7	ネシ	流紋岩	
803		55F	VII	9.8	5.1	1.9	114.4	ネ	流紋岩	
804		55F	VI	10.2	5.1	1.9	141.1	ネシ	安山岩	
805		55G	VI	15.5	6.1	5.5	246.6	シ	安山岩	接合 56F VI
806	530	56E	VI	18.6	9.3	4.0	738.0	シ	砂岩	
807		56E	VI	10.3	4.3	1.7	91.0	シ	砂岩	
808		56E	VI	(11.7)	9.1	1.9	(214.5)	シ	砂岩	
809		56G	VI	(8.7)	5.2	2.2	(134.0)	ネ	安山岩	
810		56D	VI	(8.9)	6.3	2.6	(185.2)	シ	安山岩	
811		56F	VI	(8.4)	5.1	2.8	(134.5)	シ	安山岩	
812		56E	VI	(6.8)	5.3	1.6	(73.8)	ネ	安山岩	
813		57F	VI	14.6	5.8	3.9	412.1	ネシ	砂岩	
814	536	57D	VII	10.5	4.5	1.3	86.6	ネ	凝灰質砂岩	
815		57F	VI	13.6	5.2	2.6	171.8	ネシ	安山岩	接合 56F VI
816		57E	VI	13.0	5.0	2.5	170.6	ネシ	安山岩	接合 57D VI
817		57E	VI	(6.8)	4.5	2.1	(69.7)	ネシ	安山岩	
818		57E	VI	(3.7)	4.5	1.3	(25.6)	シ	安山岩	
819		58F	VI	18.1	6.2	1.9	273.8	ネシ	流紋岩	
820		58F	VI	13.0	4.9	1.4	126.7	シ	砂岩	
821		58E	VI	12.6	4.9	2.6	188.7	ネシ	安山岩	
822		58D	V	7.5	6.0	3.4	149.5	シ	安山岩	
823		38Q	VI	(10.3)	5.3	3.0	(219.0)	シ	安山岩	
824		59C	VI	11.8	5.0	2.4	201.5	シ	流紋岩	
825		59C	VI	(7.9)	4.1	2.1	(85.5)	ネ	凝灰質砂岩	
826		59D	VI	(12.3)	7.1	4.4	(335.9)	ネ	安山岩	
827		59C	VI	(4.0)	5.3	1.3	(37.3)	ネシ	流紋岩	
828		60D	V	11.0	4.8	1.4	106.1	シ	流紋岩	
829		60C	VI	11.6	4.6	2.3	139.2	ネ	凝灰質砂岩	
830		60D	VI	(8.9)	6.9	1.6	(111.7)	シ	砂岩	
831		61D	VI	9.5	4.3	1.6	61.1	ネ	流紋岩	
832		61D	VII	(10.1)	5.1	1.7	(95.7)	シ	流紋岩	
833		61D	VII	(6.3)	4.0	1.0	(36.4)	シ	安山岩	
834	546	—	VII	12.6	5.6	2.8	218.2	シ	安山岩	
835		—	VII	10.1	4.6	1.8	118.5	ネシ	流紋岩	
836		—	VI	(5.6)	4.9	1.4	(51.9)	シ	砂岩	
837		12V	VII	11.6	5.8	2.56	184	シ	砂岩	
838		18W	VII	10.1	5.3	183	114	シ	砂岩	
839		43M	VI	12.6	5.7	1.56	134	ネシ	流紋岩	
840		32M	VI	11.8	5.0	2.59	131	ネ	流紋岩	
841		14U	VII	16.4	5.7	3.42	490	シ	安山岩	
842		44M	VI	4.6	5.9	1.4	52	ネ	安山岩	
843		58F	VI	12.8	4.4	1.76	124	ネ	安山岩	
844		47L	VI	8.8	4.1	1.92	100	シ	安山岩	
845		14V	VII	9.9	4.9	1.39	93	ネ	安山岩	
846		57D	VII	13.1	5.4	1.96	181	ネ	安山岩	
847		52L	VI	16.1	13.8	3.02	490	シ	砂岩	
848		58E	VI	14.8	6.8	2.63	282	シ	安山岩	
849		46N	VI	10.1	4.5	2.11	132	シ	安山岩	
850		49G	VI	8.8	5.5	1.69	106	シ	流紋岩	

※折損により本来の長さ、質量を計測できなかったものには数値に () を付した。

※背面の項について。

ネは背面が素材のネガティブな剥離面に覆われるもの。

シは背面が自然面に覆われるもの。

ネシは背面が自然面と素材のネガティブな剥離面に覆われるもの。

ポは背面が素材のポジティブな剥離面に覆われるもの。

第3節 V層上面検出の遺構

調査区北部ではII層の水田敷を除去した面において、南部ではIII層の崖錐堆積物を除去した面で、それぞれ遺構を検出した。砂地に掘り込まれた土坑は色調が遺構周辺に滲みだし、検出状況では自然為のしみと人為的な遺構との判別が困難なものもあった。そうしたものについては逐一半裁し、人為的な掘り込みとして認められそうなものを判別した。土坑は大小のグループに大別でき、口径60cm以上のものにはSKナンバーを、20cm内外の小土坑にはPナンバーを、北から順に付していった。

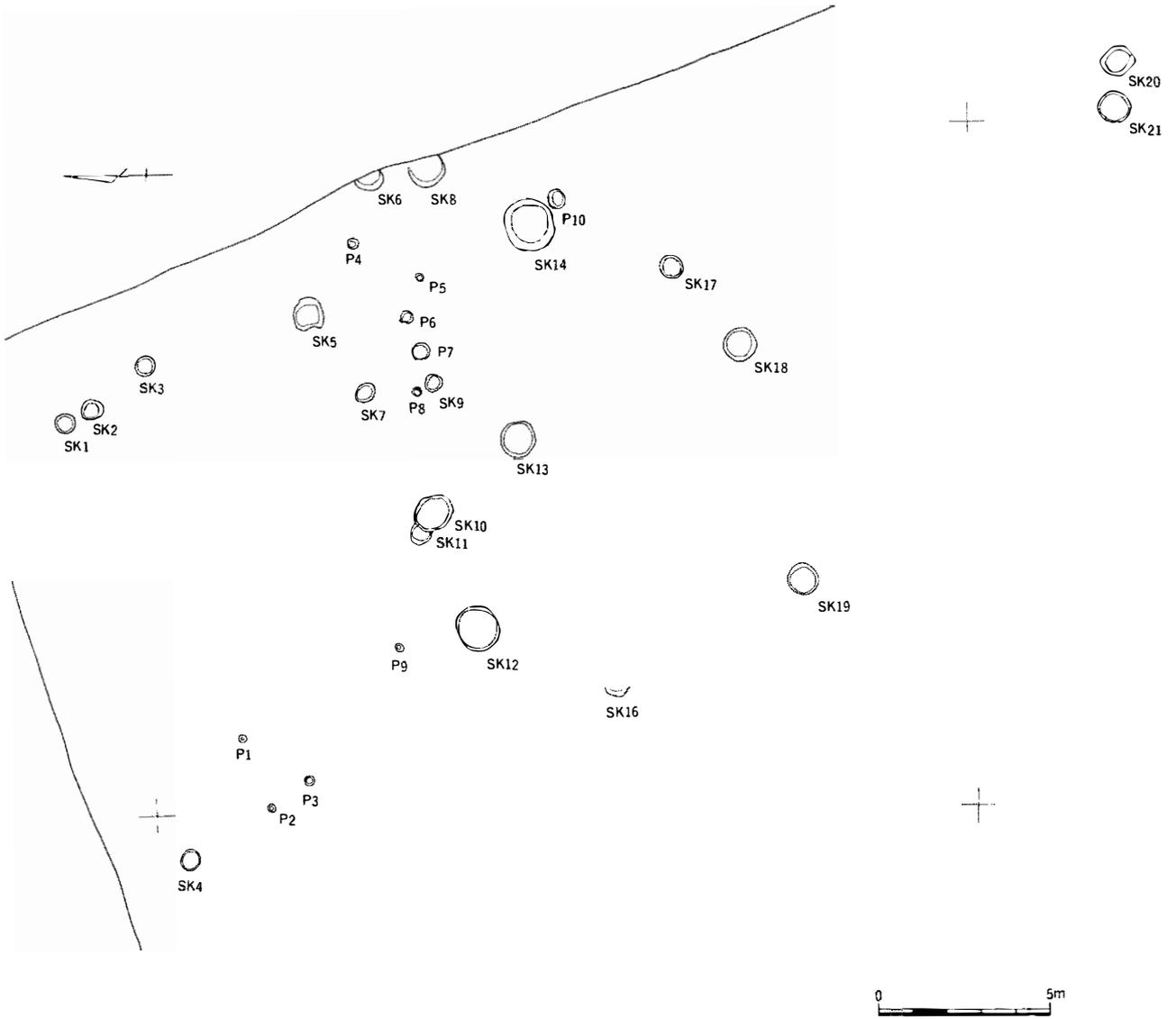
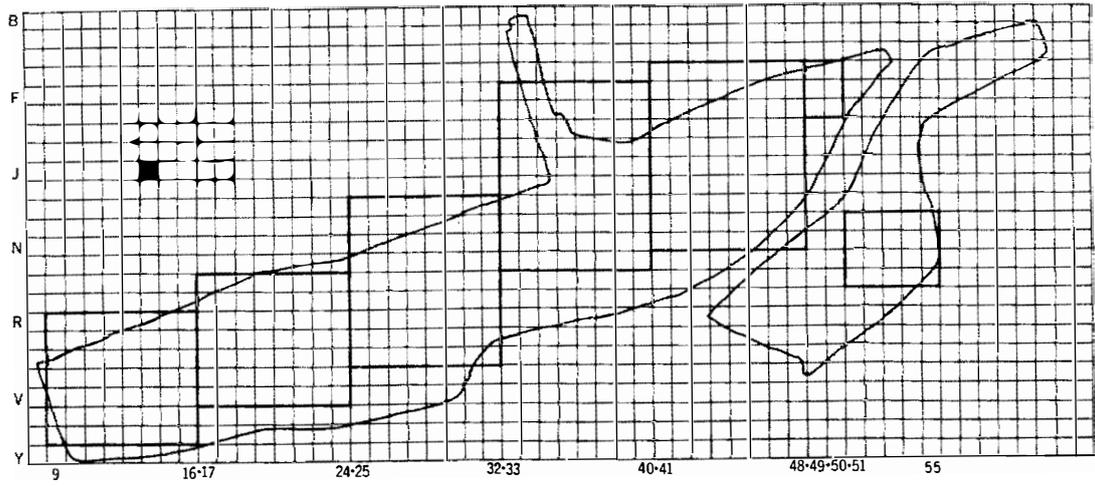
遺構の様相は区域によって若干の相違があるようである。調査区を8グリッドずつ便宜的に区分けして北から順に見ていくこととする。尚、断面図中のレベルは特別に記されているもの以外は、十字の位置で標高215.500mである。

9～16グリッドの様相（第54図・第60図）

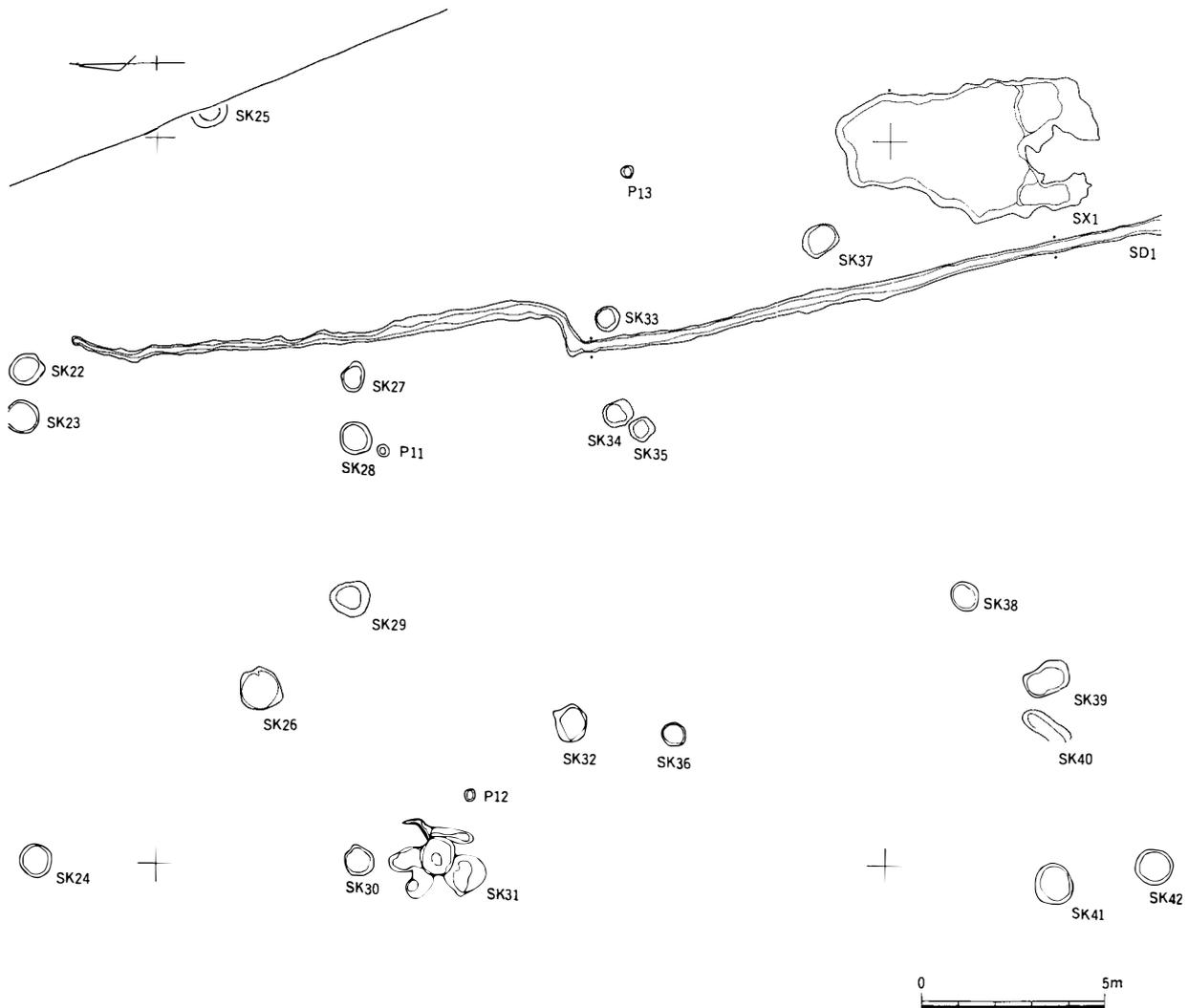
径20～140cmほどの、大小の土坑・小土坑が散在する。この区域の土坑埋土は、暗褐色シルト質壤土である。小土坑は、底部からの立ち上がりが明瞭で底面が平坦になるもの（P4・P3）と、壁面が開き底面丸く鍋底状になるタイプ（P10・P5）がある。3基ほどの小土坑が並ぶこともあるが、多くは規則的には並ばず、同一列に両者が見られることもある。P4、P10の埋土中には角礫が立位で入っている。

一方、径70cm以上の土坑は比較的形態が揃っている。土坑の深さ、底面のレベルにばらつきがあるものの、多くは平底で壁は垂直に立ち上がるタンブラー形の土坑である。その中で、埋土中に礫を伴うものが4基ある。SK10は、それより浅いSK11に切られており、これらの土坑が時期差をもって存在したことを示している。SK10の底面中央には大小の角礫・円礫が重なるようにして入っている。埋土は均一でしまりがいい。SK13は土師皿等の遺物が伴う。埋土の中位から、大小の円礫・板状の角礫がランダムに出土した。礫は土坑中央に向かって傾く傾向があり、土坑内容物の空洞化に伴う崩落の可能性もある。礫には被熱赤化するものもみられる。特に板状の角礫に顕著であり、すすも附着する。土師皿等の遺物は、出土レベルにばらつきがあるものの総じて礫より高く、遺物が礫の上に重なることはあっても礫が遺物の上を覆うことはない。レベル的に礫より下にあるものも、礫のない箇所の落ち込みと考えられる。したがって礫と遺物の前後関係から遺物は埋納されたものとは考え難く、むしろ祭礼的な用いられ方をしたものとしてとらえられる。出土した遺物は山茶碗3点、土師皿5点、青磁2点、近世陶器1点であり、時期差もあるがそれは上記の様な遺物のあり方から理解できる。山茶碗は2点図示した（565・566）。565は尾張型の皿である。直線的な体部を形成し、口縁部は丸く仕上げられている。底部外面に回転糸切り痕と板目、底部内面に静止指ナデ調整が認められる。566は尾張型の碗である。体部は丸みを帯びており、口縁部はやや外反する。また、外面には煤が付着する。青磁は1点出土した（567）。碗の体部破片である。外面に鎬蓮弁文が施されている。土師皿は3点図示した（562～564）。いずれも手づくねである。底部は扁平であり、体部はわずかにつまみ上げられることにより形成され、口縁端部は突がり気味に調整される。562は底部内面の周縁が輪状に浅く凹んでいる。また、いずれも体部内外面は横方向に指ナデ調整され、底部内外面は指圧痕を丁寧にナデ消してある。SK19は土坑底部に円礫・角礫が入っているが、被熱の痕跡はみられなかった。

SK14は、底部に平坦面あるものの立ち上がりは不明瞭で壁面は開く。口径も150cmと大きく、深皿



第54図 9～16グリッド遺構分布図



第55図 17～24グリッド遺構分布図

状を呈する。他のタンブラー形の土坑とは、やや形態を異にしている。土坑上面ほぼ一定のレベルで礫が出土した。中央の平坦な円礫は、上面中央部に何らかの剥落痕が観察できる。その礫の周囲を小円礫・角礫が囲う。礫に赤化等の痕跡は看取されなかった。

17～24グリッドの様相（第55図・第60図）

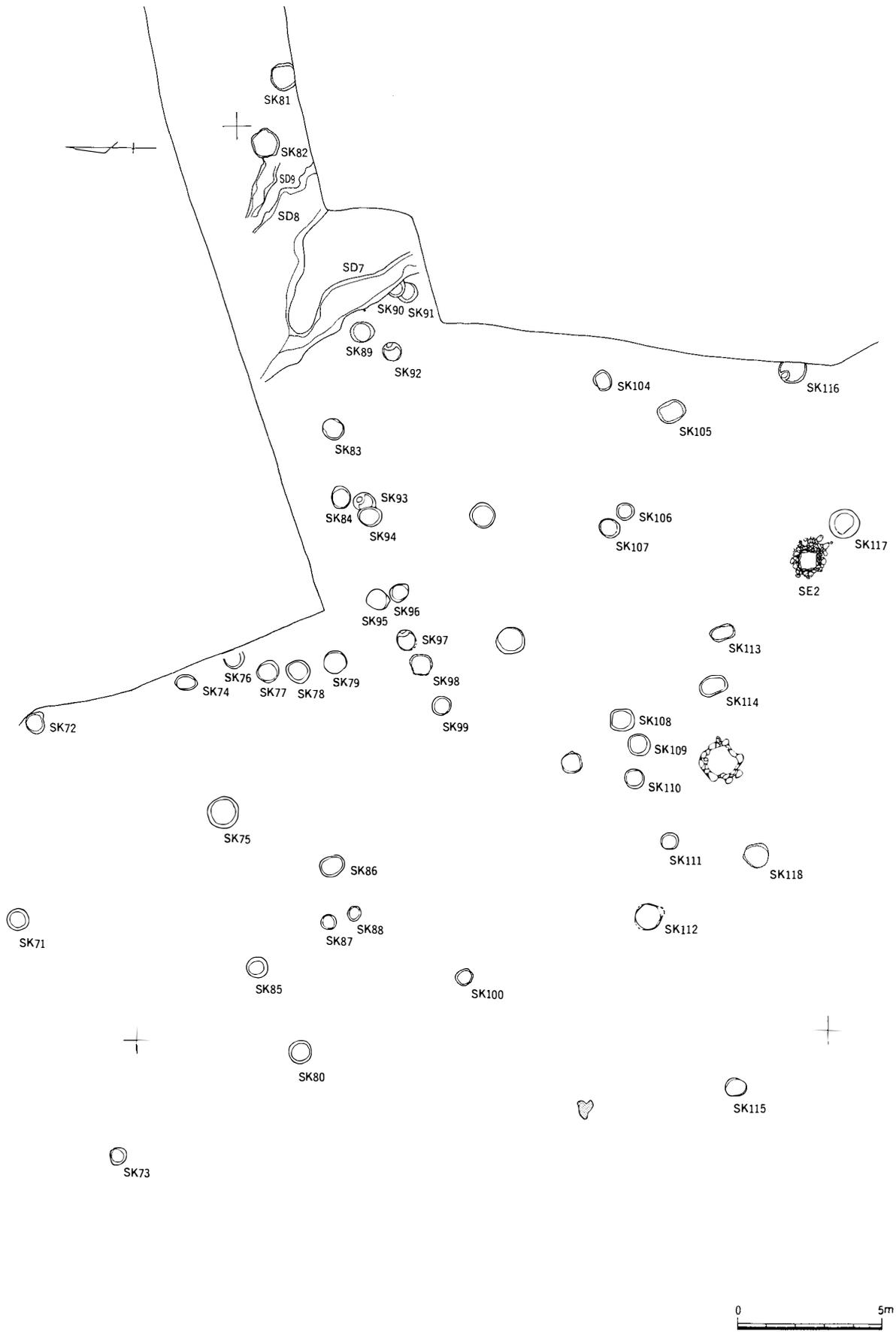
この区域も大小の土坑が散在しており、タンブラー形を呈するものが主体を占め、深さ、底面のレベルがばらつくなど8～16グリッドの様相と類似する。SK39はタンブラー形の土坑であるが、深さ80～90cmと深く、壁面で検出されたためその遺構面が水田敷きの直下であることが確認されている。

この区域の土坑の中には7基の礫を伴う土坑があり、それ以外の遺構として溝状遺構(SD1)、性格不明の不定形な遺構(SX1)などがみられる。

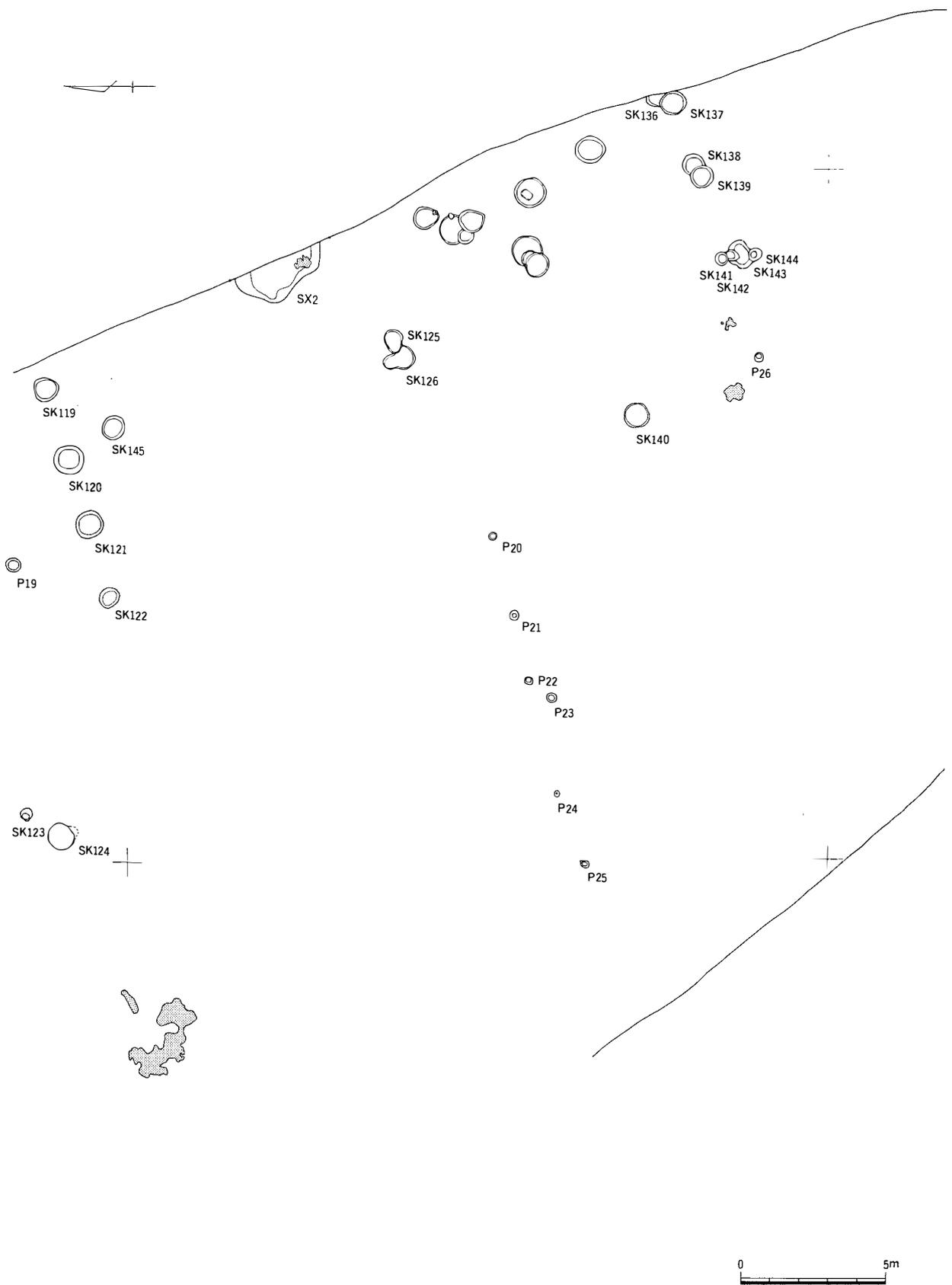
SD1は南北に走る溝状の遺構である。深さ10cm足らずと極めて浅く、両端消え入るようにとぎれている。このことから、遺構面は検出面より高く、南北に長く続いていたものと思われる。途中2カ所でクランク状に西方へ折れる。断面は丸底で、埋土はグライ化した褐灰色のシルト質壤土である。底部付近には淡褐色砂土がラミナ状に入ることから水路としての機能を持っていたと考えられる。底



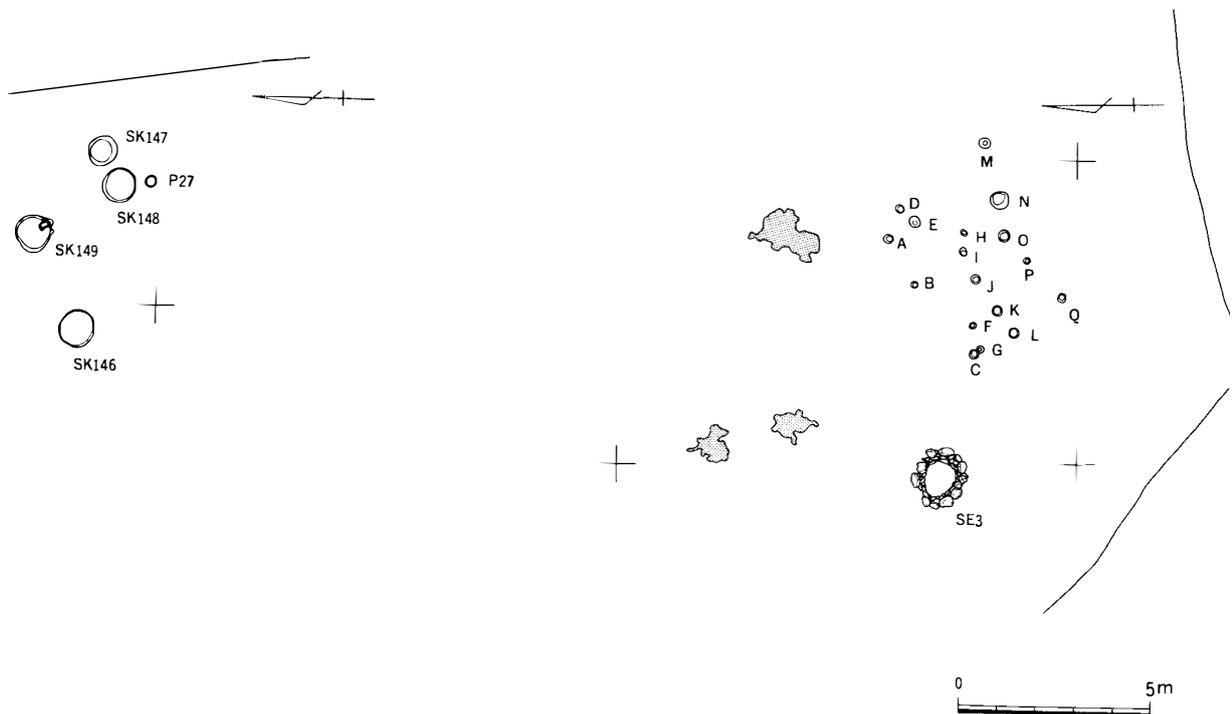
第56図 25~32グリッド遺構分布図



第57図 33~40グリッド遺構分布図



第58図 41~48グリッド遺構分布図



第59図 49～50グリッド・51～55グリッド遺構分布図

面のレベルは12m離れた20Rと23Qでそれぞれ215.530mと215.500mで、わずかに北から南へ低くなっている。

S X 1は平面形が不整形で、長軸6mと他の土坑とは形態を異にしている。最下面には凹凸があるが、暗褐色砂土が堅くしめかためられて平坦面が造られる。この上面には鉄分が沈着している。埋土はグライ化した褐灰色シルト質壤土である。埋土がSD 1と同質のものであること、底部が堅くしめられ鉄分の斑紋がみられることから、水路に関連する施設であると考えられる。埋土より山茶碗2点、瀬戸美濃（連房）陶器片が1点出土している。山茶碗底部破片は、底部外面に回転糸切り痕、底部内面に静止指ナデ調整が認められる。なお、高台は欠落している。570は鉢である。断面台形の高台を有し、体部下方は丸みを帯びている。全面に灰釉が施されるが、高台接地面は拭い取られている。また、内面には銅緑釉が流し掛けられている。

この区域において検出された礫を伴う7基の土坑は、散在して分布上まとまりはみられない。S K 25・S K 34・S K 31は、土坑下底部に礫がみられるものである。S K 30にも礫が入るが、この周辺は崖錐堆積物が厚く、埋土も礫も崖錐堆積物中にみられるものであることから、礫が意図的に入れられたものではないと考えられる。S K 34では円礫・角礫が北西側に偏ってランダムに堆積している。S K 25では底部付近に平坦な割石が出土し、同レベルで石製土掘り具1点と山茶碗1点が出土している。S K 31の周囲には黒褐色の埋土に崖錐礫が多く入る平面形・断面形とも不定形な皿状の土坑もしくは落ち込みがあり、その間に、割り込むようにして掘り込まれている。平面形は隅丸の長方形を呈し、断面形は平坦な底面から壁が開き気味ながら直線的に立ち上がる。不定形な土坑内に入る礫は崖錐中の角礫である。S K 31の埋土にも若干みられるが、両者の埋土は異なっている。S K 31の埋土は3層に分層でき、上・中層は炭化物が多く入る褐色シルト質土で、中層には焼土塊も混じる。下層は暗褐

色シルト質壤土で炭化物は混らない。土坑中央下層上面に、平坦な円礫が置かれている。

S K 23・S K 26は、土坑上面に礫を並べるものである。S K 23は上面には円礫が配置されるが土坑内には角礫が目立ち、礫総数57点中円礫は18点であった。また、上面には人頭大の、大ききの揃った礫を並べるが土坑内は不統一であり、外観を意識しているように見える。礫は被熱して赤化しているもの、被熱剥離の観察できるものなどがあるが、赤化礫でも割れ面は赤化しておらず、火の使用は一回性のものであったと考えられる。割れ礫の接合も多く確認できるが、土坑内の離れた場所の礫同士が接合するものや完形まで接合できないものが目立つことから、火の使用後に礫が移動していることがわかる。すなわち、火の使用は土坑外の場所であったと考えられる。他の遺構との同時性を検討するために遺構間で礫の接合も試みた。接合関係が認められれば火の使用場所の同一性、同時性が明らかとなる。しかし、結局接合関係は認められなかった。礫は土坑上部で出土し、礫の下から山茶碗片が出土した。また、炭化物片が埋土中に散在するが、焼土は見られなかった。S K 26は礫総数70点、うち37点が円礫で、S K 23より総じて大きな礫を用いる。赤化礫はみられないものの煤が付着するものや被熱剥離の観察されるものなどがある。炭化物は土坑上部に少量あるのみで、焼土もみられない。礫は各々が水平の状態、土坑底部にまでつまっている。伴う遺物として、土坑底部より内面にベンガラが付着した陶器片が出土している(568)。水注の肩部片であると考えられる。外傾気味の体部から丸みを帯びた肩部を形成している。肩部外面には棒状工具による2条の平行沈線とその間に規則性のない格子文が描かれている。体部外面には灰釉が刷毛塗りされている。S K 23・S K 26とも、底部が垂直に立ち上がるタンブラー形を呈する。

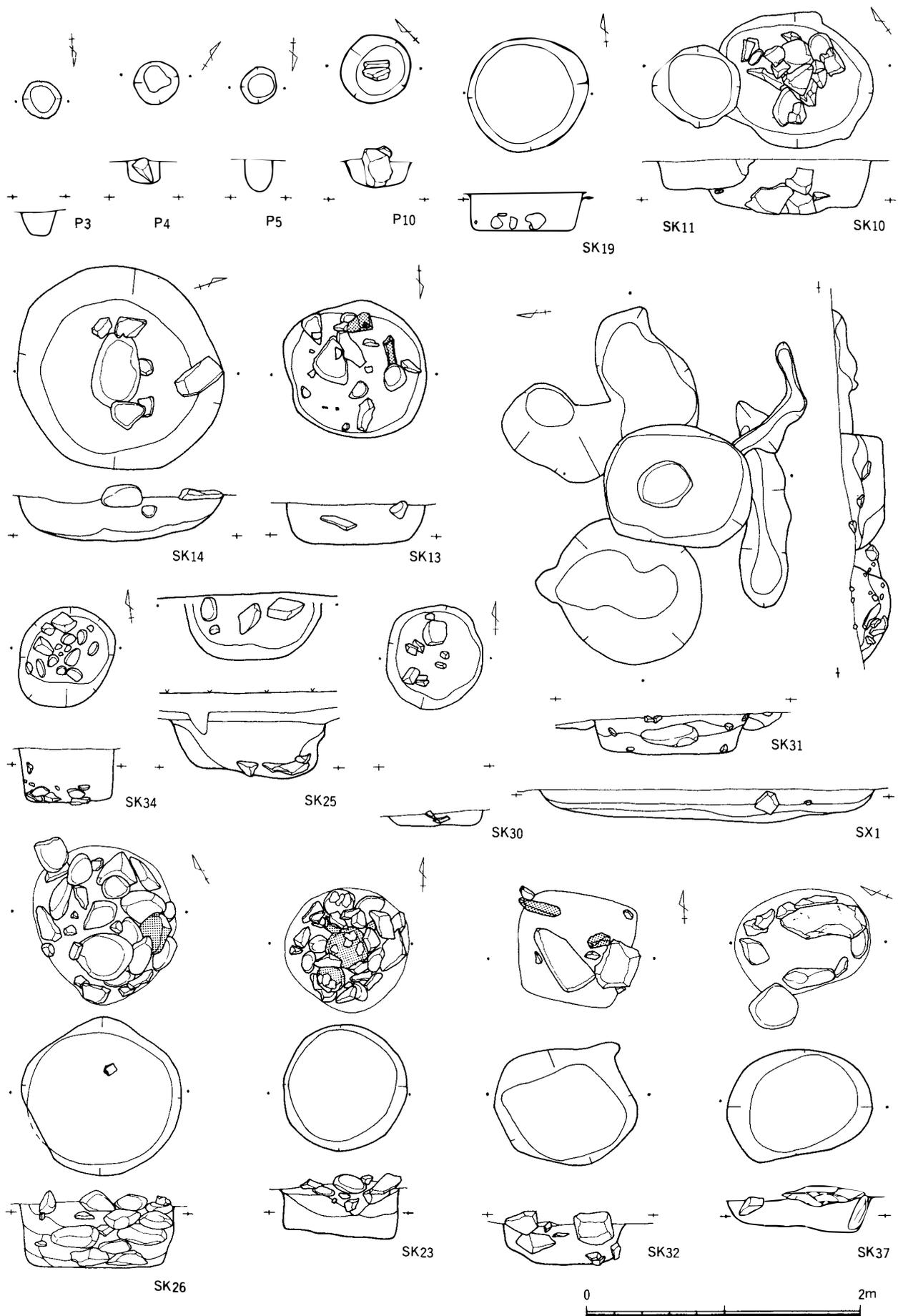
S K 32・S K 37は、土坑周囲を大きな角礫を立てて囲むものである。S K 32にはプランに沿わない礫もみられるが、そうした礫は横位、斜位で出土しており、崩落したものであると思われる。礫28点中円礫は4点で、他は崖錐堆積物に見られる砂岩の角礫・亜角礫である。赤化し煤の付着した拳大の角礫がみられ、埋土中には爪先大の炭化物片や粘土化した灰も目立つ。煤は礫の両面に見られることから、火の使用の後、土坑内に設置されたものと考えられる。埋土中、側壁沿いにローリングを受けた陶器片、底部近くより土錘が出土している(571)。土錘は体部中ほどに最大径をもち両端は面取り調整されている。質量は14.0gである。S K 37は土坑西壁を円礫で、東壁を割石で囲う。礫に被熱の痕跡はみられず、炭化物も少量散在する程度である。遺物は伴わなかったが、骨が土坑底部付近より出土しており、土壙墓であることが確認された。骨は遺存状態が悪く骨端部を欠き、骨幹部の緻密質の厚い部分がかろうじて形を保つ程度であった。長さ17.0cm、最大幅2.8cm、狭い部位で2.0cm程である。上腕骨であると考えられる。

S K 27からは山茶碗1点(569)が出土している。比較的丁寧なつくりで、体部下半はやや丸みを帯びている。高台は断面逆三角形の形状を呈し、高台接地面には靱殻痕が付着している。また、底部外面の回転糸切り痕はナデ消されている。

25～32グリッドの様相(第56図・第61図)

24グリッド以北とは様相が異なってくる。まず、小土坑がほとんどみられなくなり、口径70cm以上で内部が口径部より広いフラスコ形の土坑が新たに表れる。フラスコ形土坑の中には列をなして規則的に並ぶものもみられる。

この区域ではS D 2～6の5本の溝状遺構が確認された。S D 2～4は南北方向、S D 5・6は東



第60図 V層上面遺構図

西方向に走り白山神社の南で集合し、東へ流れる。SD3と4、SD5と6は重なるように流れており、作り替えが行われたものと考えられる。これらの溝状遺構とフラスコ形土坑との切り合いが5ヶ所で確認されるが、いずれも溝状遺構がフラスコ形土坑を切っている。埋土はグライ化した褐灰色土である。SD3では平坦な底面に褐灰色砂土が敷かれ、堅くしめられている。SX1と同様の状況である。合流地点におけるセクションから次のような状況が読みとれる。北から流れてくるSD3は最も広く大きな溝であるが一旦埋没し、その後は東西の溝の使用が盛んとなる。SD5の部分には開析と堆積を繰り返した不整合面がみられる。

SK50～53は列状に並ぶ。平坦な底部から明瞭な立ち上がりを見せるが、壁は外に開く洗面器状の土坑である。この列の延長上にあるがやや離れるSK48は、フラスコ形土坑である。SK55～58は東西に2m程の間隔で並ぶ。いずれもフラスコ形土坑の範疇でとらえられ、サイズも底面のレベルも一定に揃う。SK63～66とSK67～70、東西に並ぶ2列の隣接したフラスコ形土坑列がある。SK63と67、SK64と68がそれぞれにきり合い、SK63～66列が先行することが認められる。SK59～SK62は南北に並ぶ。

33～40グリッドの様相（第57図・第61図・第62図）

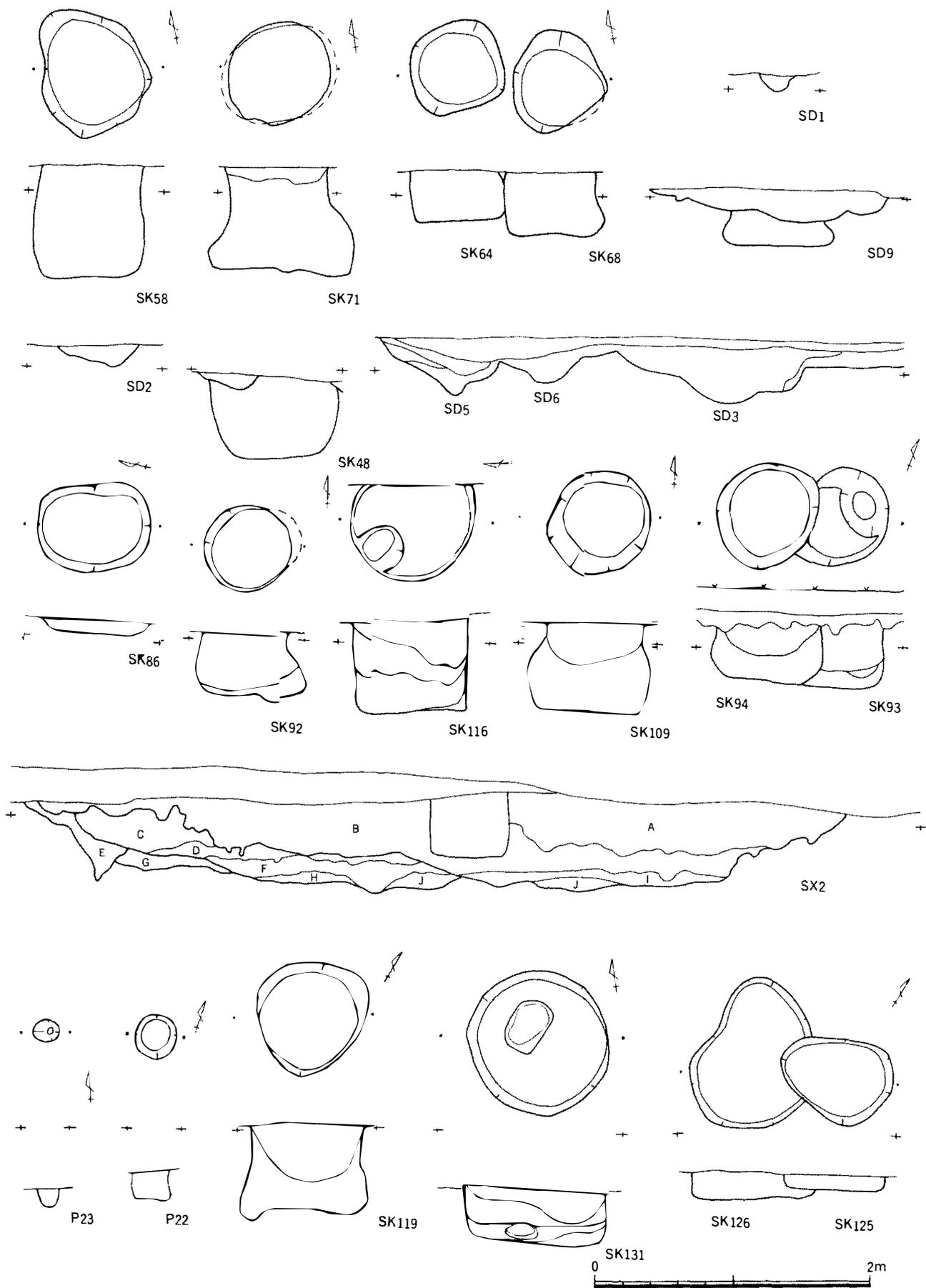
当区域は崖錐堆積物が全面を覆い、それを除去した段階で遺構を検出した。プランは明瞭だが極めて浅い皿状のもの（SK86等）もあり、埋土に崖錐堆積物と同質の黄褐色シルト質壤土が入ることからこれらの遺構面は崖錐堆積物の上にあったと考えられる。径70cm以上の土坑のみが確認されたが、崖錐堆積物下まで到達しない小さな土坑が検出できなかったことに起因する可能性もある。形態の明らかなものについてはタンブラー形（SK116等）とフラスコ形（SK92・94・93・109等）に分けられる。タンブラー形土坑の配置はランダムで、全面に散らばるのに対してフラスコ形土坑は調査区東部に偏り、列をなして並ぶ。独立配置のフラスコ形土坑もあるが少ない。土坑列の多くはSK96～99のように東西に並ぶが、SK76～79のように南北に連なるものもみられる。

また、当区域において石組みの井戸が2基確認された（SE1・2）。どちらも円礫を段々に積み上げていく。礫のサイズにはバラエティがあるが、段の厚みをそろえるために礫を横位に用いたり縦位に用いたりしている。埋土は黒褐色砂質土で、他の土坑とは異なり崖錐堆積物が入らない。埋土上部よりローリングを受けた石製土掘り具が出土したのみで、時期を特定できる遺物は出土しなかった。基底部には径40cm程のやや平坦な円礫を縦位で用いている。口径部は円形のプランであるが、下底部へ行くにしたがって狭くなるとともに方形となる。SE1は深さ150cm、上部径85cm、底部径60cm。SE2は深さ140cm、上部径105cm、底部径60cm。段丘構成礫層まで掘り抜いており、底部施設は認められなかった。現在、湧水はみられない。SE2は上部東壁が崩落しており、崩落礫は埋土中～上部にあった。埋没時に崩落したものと考えられる。

41グリッド～の様相（第58図・第59図・第61図・第62図）

フラスコ形土坑列は1列（SK119～122）、単独で2基、いずれもグリッド41列において検出された。フラスコ形土坑はこれを南限とする。以南においては底部のみ検出されたものが多く判然としないが、タンブラー形が主であったようである。土坑列もみられない。当区域の西部では小土坑もポツリポツリみられるが、規則的には並ばない。

調査区の東端において、骨片・焼土塊を伴う不定形な落ち込み状の遺構が確認された（SX2）。径



第61图 V層上面遺構図

6 m程で、不定形な皿状を呈し底面に凹凸みられる。水田敷直下の崖錐面より掘り込まれており、タンブラー形の土坑も断面に見えることから、時間的には崖錐堆積後、タンブラー形土坑形成以前という位置づけができる。複雑な堆積状況を呈し、いくつかの不整合な面もみられる。炭化物がF層以下の土坑底部に散漫に散らばり、赤化した焼土塊が底部南半のI層に入る。ただし面的に広がるものではなく、出土にレベル差も見られる。同層、焼土と分布を同じくして骨片の小片も散漫に出土した。G層より陶器片が出土している。

水路の東側、崖錐堆積物の最下層において、大小の炭化物片、焼土塊の集中部を検出した。炭化物片はおよそ150cm×150cmの範囲に集中するが疎密もみられる。この集中部の東南西三方を囲むように黒く焼けしまった焼土塊が出土する。赤化した焼土塊も一部に分布するものの、小さく少ない。この焼土塊まで炭化物片の広がりはおさまる。焼土塊、炭化物片とも相当のレベル差をもって出土しているが、掘り込み等は伴わない。

水路の西側、崖錐堆積物の下からは、3基の焼土集中部、小土坑列、1基の井戸（SE3）が検出された。これらの遺構はV・VI層が落ち込む谷状地形の東でみつまっている。

3基の焼土集中部はいずれも同様の様相を呈する。100cmから150cm四方の範囲に、赤化した焼土塊は散らばるように広がり、断面でも、焼土塊が20cm強の上下幅で、検出面の崖錐堆積物下層の土とともに攪拌されているようにして広がる。掘り込みらしい遺構も伴わない。炭化物片は焼土部分とは分布を異にしながら少量みられるが、水路東の焼土集中部と比べて炭化物片小さく、焼土塊も赤化するなど相違点が目立つ。

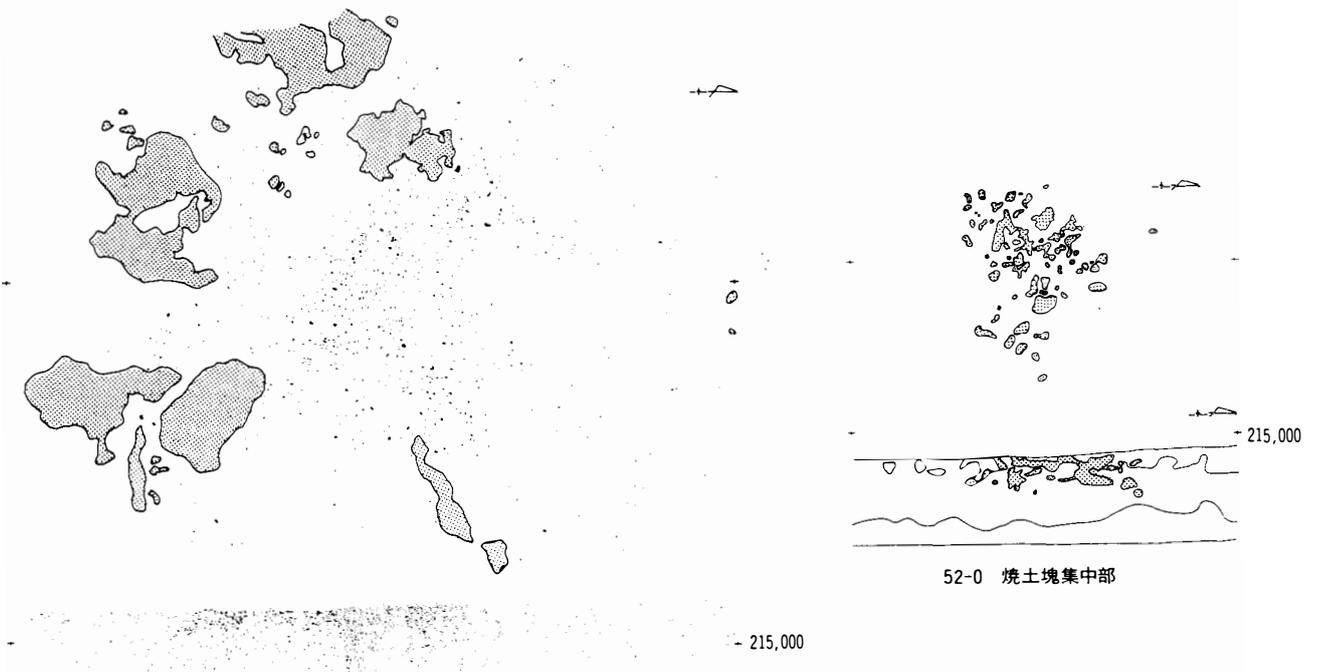
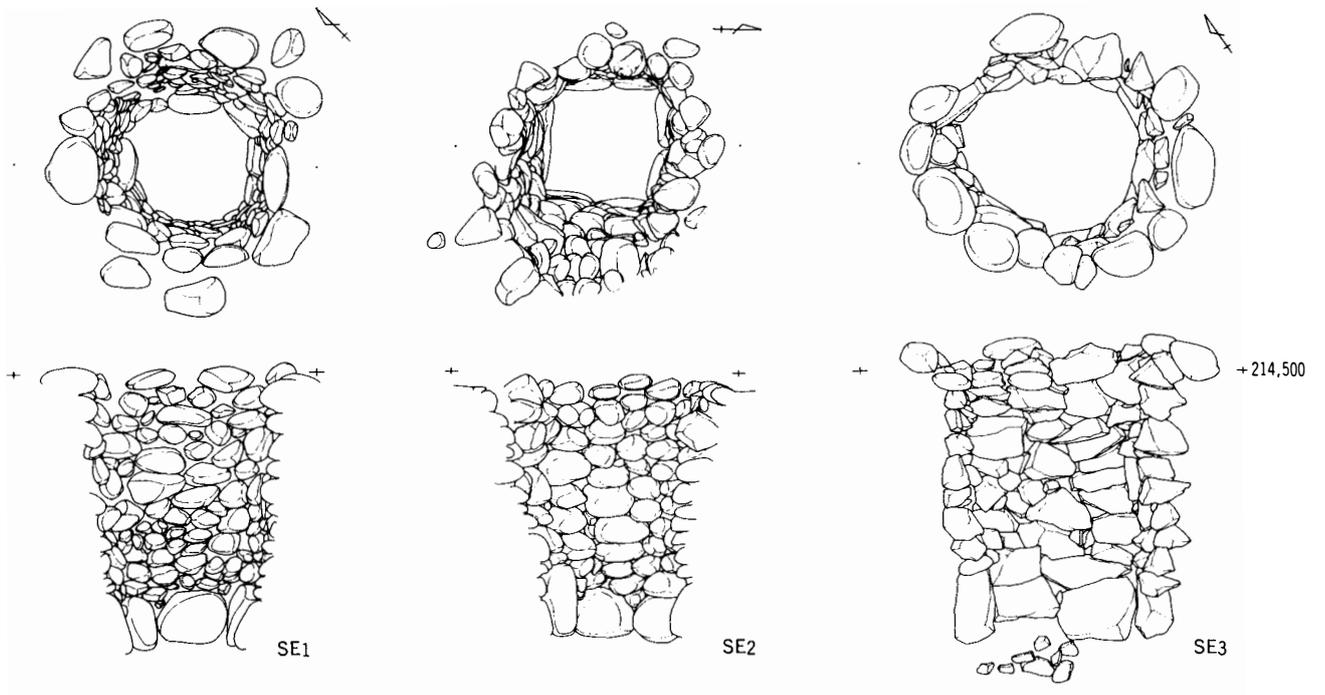
SE3は、上面のみ円礫で覆うが、以下は角礫を横位に用いてやや乱雑ながらも水平に積み重ねている石組みの井戸である。平面形は細長い二等辺三角形を呈している。段丘構成礫層まで掘り抜き、底部施設はみられなかった。基底部には大きめの角礫を縦位で用いている。現在湧水はない。埋土は暗褐色の砂土で、小円礫、小角礫を少量含む。しまりや土色の微妙な違い等によって分層もできるが、ほぼ同質の埋土で埋まっている。埋土中より、ローリングを受けた石製土掘り具が3点出土したものの、時期を特定できる資料は得られなかった。深さ160cm、口径部長軸100cm、口径部短軸80cm、底部長軸90cm、底部短軸75cmである。

■径20cm内外、底部平坦、底面レベルほぼ同一の、形態的にも共通性のある小土坑群が検出された。柱穴と考えられ、規則的に並ぶように見えるが構築物を想定することはできない。

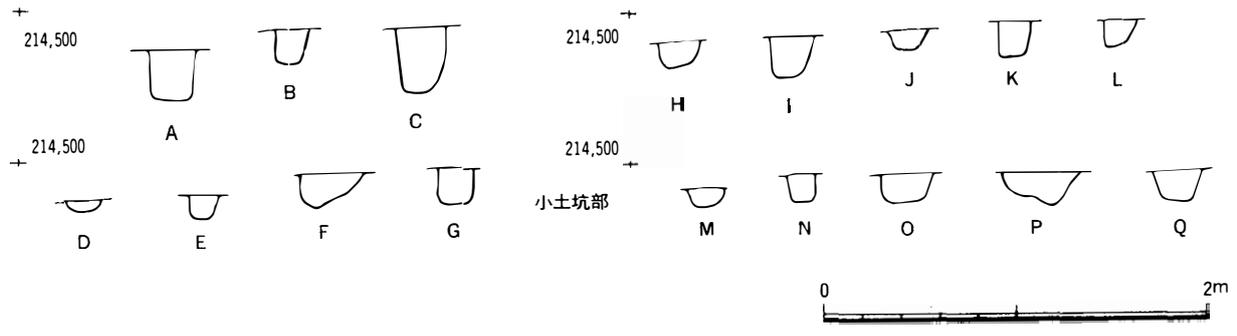
ま と め

以上V層上面で検出した遺構について調査区を5つの区域に分け、それぞれの区域の様相についてみてきたが、全体を概観してまとめたい。当調査区で確認された遺構は、小土坑27基、小土坑群1ヶ所、礫を伴わない土坑（フラスコ形・タンブラー形）137基、礫を伴う土坑12基、溝状遺構5条、井戸3基、焼土集中部4ヶ所、SX1、SX2等であった。しかし、これらの遺構は同時に存在したのではなく、時間的な前後関係が認められ、土地利用に変遷があったであろうことがうかがえる。遺構面、切り合い関係、埋土等によって、大きく4つの段階に遺構形成時期は区分される。

まず第一が、崖錐堆積物下を遺構面とする井戸、水路西の小土坑群、焼土集中部の段階である。井戸、小土坑については埋土に崖錐堆積物が全く含まれないことから、崖錐堆積時以前にはすでに埋没



41・42-N炭化物・焼土塊集中部



第62図 V層上面遺構図

していたものと考えられる。この段階では生活空間としての土地利用が推測される。また、この段階の遺構は、調査区南部を中心として広がる。

そして崖錐堆積物を遺構面とする一群が続く。これらについては、S X 2 がタンブラー形の土坑に切られること、溝がフラスコ形の土坑を切ること、タンブラー形の土坑とフラスコ形の土坑の埋土が同一であること、溝とS X 1 の埋土が同一であることから、段階2～4の3時期に区分される。

段階2はS X 2 の形成される段階であるが、他には同一段階の遺構として確認できるものはなく、この段階の様相についてまで言及することはできない。

段階3はタンブラー形、フラスコ形土坑の残される段階であるが、この段階においてもタンブラー形、フラスコ形土坑の利用方法を明らかにすることはできなかった(S K123等5基の土坑を無作為に選び埋土の水洗選別を行ったが、少量の腐植が認められたのみで機能を検討できるような資料は得られなかった。タンブラー形土坑が調査区の全域に見られ、ほとんどがランダムに分布するのに対し、フラスコ形土坑はグリッド25～41の区域に限られ、列をなして並ぶものが多いことから両者の利用方法には相違点があったことも考えられる)。ただ、生活域とも水田域とも異なる利用がなされていたようである。

段階4の水路とS X 1 は、埋土にグライ化した土壌が入ることから水田耕作に伴うものであると考えられる。

以上、土地利用の変遷について遺構から見てきたが、不明瞭な点が多いながらも生活域から崖錐の堆積等を経て、いつしか水田域へと移り変わったことは明らかとなった。しかし、いくらかの問題点も残る。1つは各段階の年代について土坑内の陶器片などはローリングを受けた小片であることが多く、遺構に確実に伴うと考えられる遺物はほとんど認められなかったため、遺構の帰属時期が不明確であること。2つめは、調査区北部で見られた礫を伴う土坑がこれらの段階の何処に位置づけられるのかという問題である。これらの遺構が検出された区域では崖錐の堆積は顕著ではないが、調査区西部に位置するS K31が切る不定形な落ち込み中に崖錐堆積物が見られることから段階2以降であると考えられる。S K13・S K26に伴う遺物から、12世紀後半から13世紀の年代が与えられる。

これらの礫を伴う土坑は、その形態、礫のあり方から3種に分類される。1つは土坑下部に礫が入るもの、S K10・34・30・25・19・31がそうである。これらの土坑に伴う礫は角礫が多く、入り方もランダムである。被熱の痕跡は認められず、遺物・炭化物も伴わない。この類にあってS K31は礫のあり方、被熱等の面で異質である。むしろ次の類に近い。2つめは土坑上部に礫が敷設されたように並ぶもの。S K13・14・23・26がそうである。礫の被熱はS K13・23・26においては明らかであり、S K14の礫にみられる剥落も被熱の可能性はある。もう1つは土坑壁を礫が囲むものである。礫に被熱の認められるS K32、認められないS K37がある。長方形のプランを呈し、S K37では骨片も出土していることから土壇墓であることが確認された。S K32もS K37との形態の類似等から火葬墓と考えてよいであろう。

第4節 古代以降の遺物

包含層出土遺物

灰釉陶器

皿 (572、573)

572はやや厚手で丸みを帯びた体部を形成している。573はいわゆる三日月高台でやや外側に開いている。底部外面の回転糸切り痕はナデ消されており、体部外面下方はへら削り調整が施されている。また、いずれも灰釉が漬け掛けされている。なお、572は猿投産、573は美濃産と推定される。

碗 (574～577)

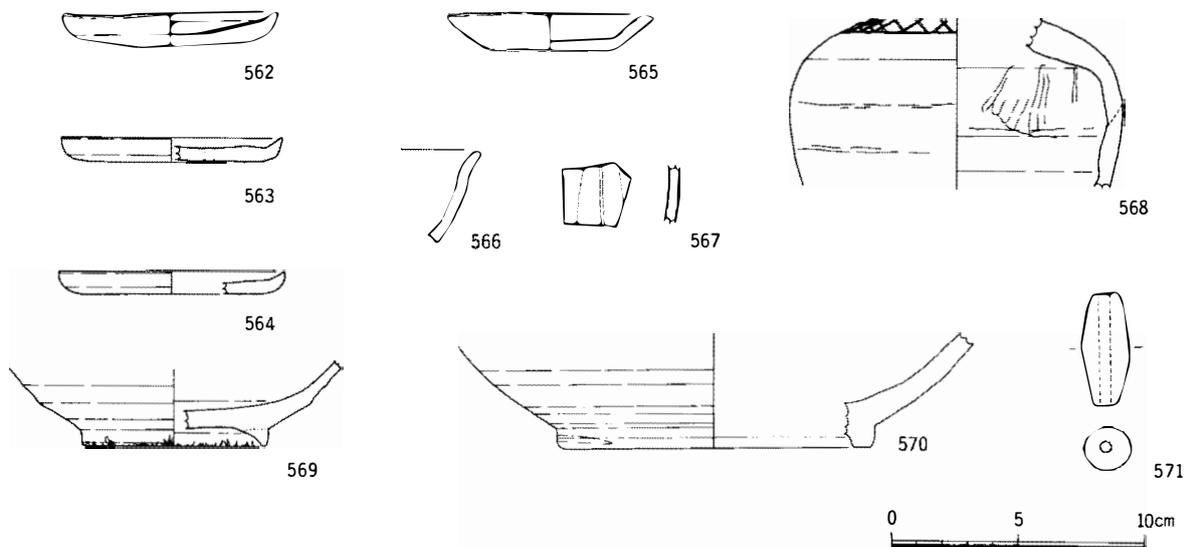
574、575は体部下方が丸みを帯びており、口縁部はやや外反している。575は体部外面下方にへら削り調整、上方はナデ調整が施されている。576は574、575よりやや体部の立ち上がりが強く、口縁部は短く外反する。577はやや厚手で高く、外に開く高台を有し、接地面は丸く仕上げている。また底部外面の回転糸切り痕はナデ消されている。いずれも胎土が緻密であるため美濃産と推定され、灰釉が体部内外面に漬け掛けされている。

広口瓶 (578、579)

578は頸部片、579は底部片である。頸部は体部との接合部より外傾気味に立ち上がり、中央付近よりラッパ状に広がる。また、頸部下半はへら削り調整、上半はナデ調整が施されており、内外面とも灰釉が刷毛塗りされている。底部は断面台形で厚手の高台を有し、高台内周縁部は輪状に凹んでいる。体部外面および高台外面には灰釉が刷毛塗りされている。

その他 (580)

皿の形状であり、内外面に灰釉が施されている。口縁端部を外傾して面取りし、1箇所へらで切込んで、また別の箇所は指でつまみあげて輪花を施している。



第63図 古代以降の遺物（遺構内出土）

山茶碗

碗 (581~583)

581は体部下方が丸みを帯び、口縁部がやや肥厚し面取り気味に調整されている。582は体部外面のロクロ目が顕著であり、口縁部は丸く仕上げられている。583は厚手の高台を有し、接地面には靱殻痕が付着している。581、582は尾張型、583は東濃型の山茶碗である。

壺? (584)

高台は幅広で低く、底部外面に回転糸切り痕が残る。体部は丸みを帯び、立ち上がりが強い。体部外面はナデ調整が施され、胎土中に白色粒が認められる。

白磁

碗 (585、586)

585はIV類の口縁部破片である。玉縁を有し、玉縁直下はへら状工具により調整されている。586は内面にへら状工具により花文が描かれており、外面はへら削り調整が施されている。

青白磁

合子 (587)

口縁端部は面取りしてあり、体部外面は丸ノミ状工具により横位と縦位に沈線が施されている。また、口縁部内外面および体部内面は露胎である。

古瀬戸

折縁中皿 (588)

体部はやや丸みを帯び、口縁部は外折している。体部内面および口縁部内外面に灰釉が施されている。

瀬戸美濃 (大窯)

菊皿 (589)

体部が花卉状であり、全面に長石釉が施されている。花卉は指で丁寧に凹凸をつけて施されたと推定される。

天目茶碗 (590)

口唇部がほぼ直立し、口縁部はわずかに外反する。全面に鉄釉が施される。

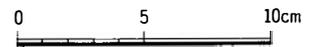
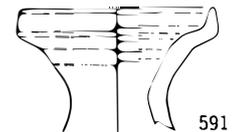
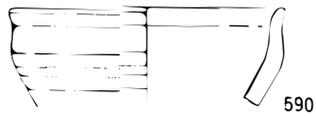
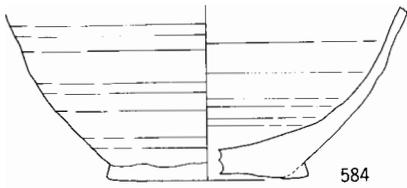
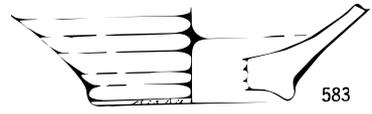
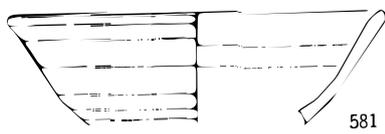
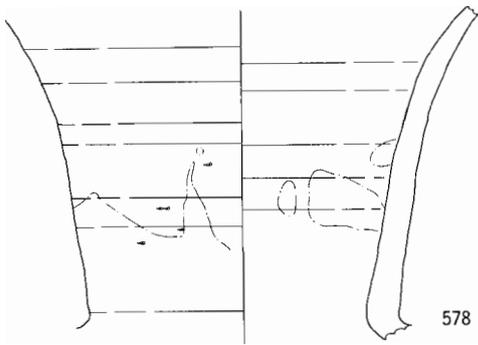
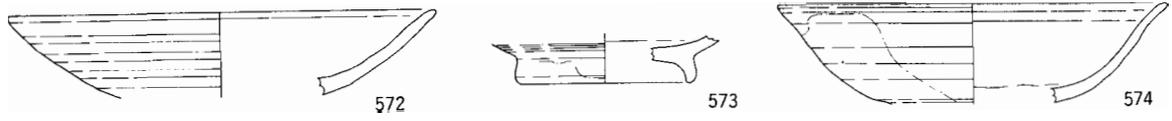
徳利 (591)

頸部下半は内傾気味であり、上半は大きく外反する。また、口縁端部はほぼ直立し、先端ほど器壁が薄くなる。全面に鉄釉が施されている。

瀬戸美濃 (連房)

柳茶碗 (592)

やや外側に開く削り込み高台を有し、高台脇の削り幅は広い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部



第64図 古代以降の遺物

は内弯気味である。高台周辺を除き灰釉が施され、体部外面には鉄絵による文様が描かれる。

腰鑄湯呑 (593、594)

いずれも体部下方は丸みを帯び、上方はほぼ直立する。体部外面上方には4本の沈線が施されており、593はへら削り調整により一番下位の沈線が一部消えている。また、いずれも体部外面下半は鉄釉、それ以外は灰釉が施されている。

尾呂茶碗 (595)

体部下半は丸みを帯び、上半はほぼ直立する。体部外面のロクロ目は顕著である。口縁部内外面にうのふ釉、体部内外面に飴釉が施されている。

広東茶碗 (596)

体部は直線的に開き、口縁部は丸く仕上げられている。全面に透明釉が施されている。

灯明皿 (597)

棧付の受皿である。棧部はほぼ直立し、1箇所が細く切込まれる。底部外面には回転へら削り痕が残り、体部はやや丸みを帯びている。全面に鑄釉が施されるが、底部外面は拭い取られている。また、棧端部および体部外面中ほどに重ね焼き痕が残る。

壺? (598)

底部外面に回転糸切り痕が残り、体部は直立する。体部外面はロクロ目が顕著であり、薄く鉄釉が施されている。

徳利 (599)

体部は全体に丸みを帯びており、撫で肩を呈する。全面に灰釉が施されている。

乗燭 (600、601)

600は直線的な体部を形成し、口縁部は外反する。口縁部内外面、および体部内面に飴釉、それ以外に鑄釉が施される。601の体部は内反り気味であり、口縁端部は外傾して面取りされる。口縁部内外面、および体部内面に灰釉が施され、それ以外は露胎である。いずれも底部外面に回転糸切り痕が残り、底部内面の芯は欠落している。

十能 (602)

皿部と把手からなる。皿部上半は内弯しており、端部は丸く仕上げられている。また、皿部外面はへら削り調整が施されている。把手は接合部より端部にかけてラッパ状に環状に開く。皿部内面および外面の一部に鑄釉が施される。

伊万里

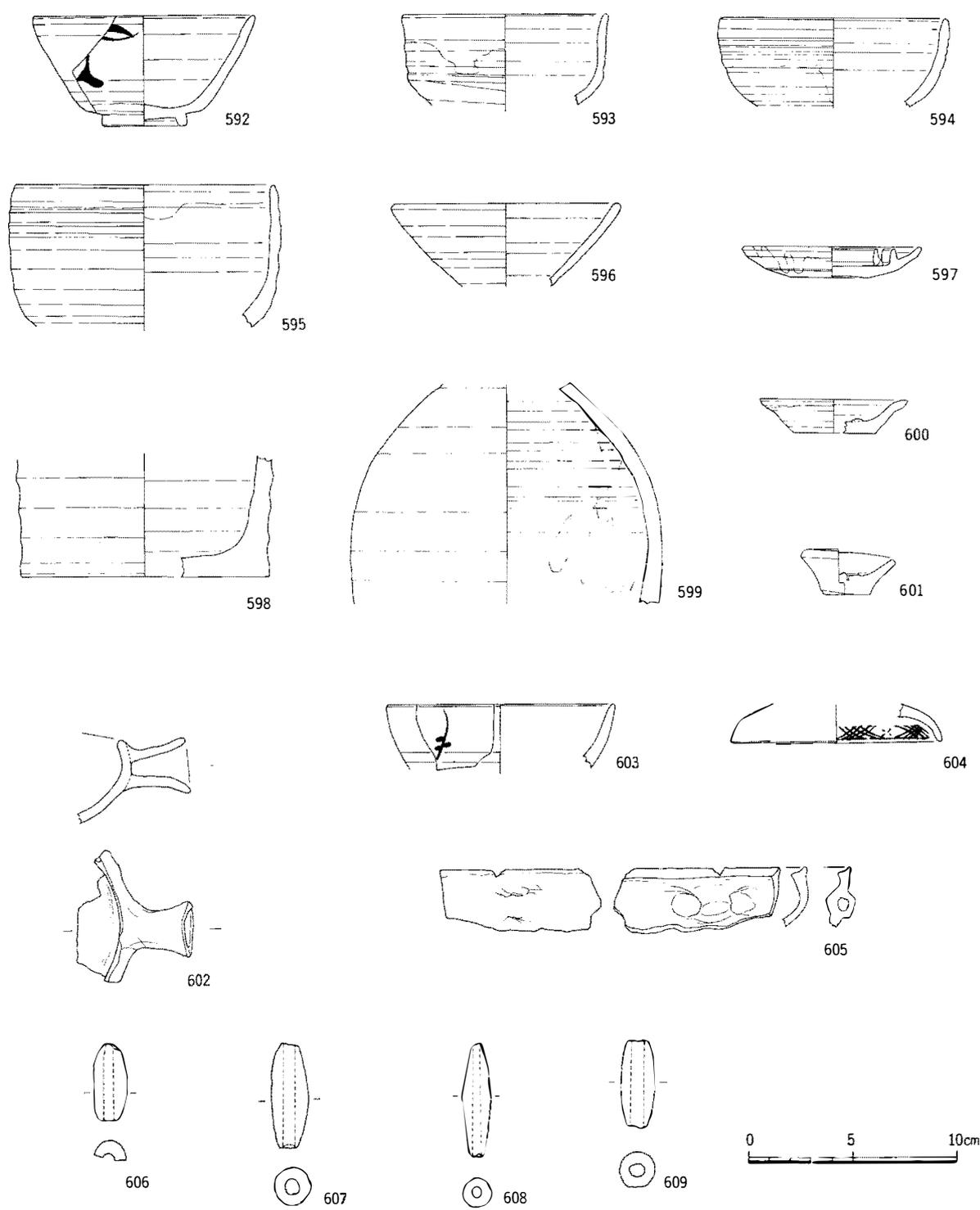
染付碗 (603)

体部はやや丸みを帯びており、口縁部にいたる。体部外面に草花文が描かれている。

染付蓋 (604)

笠部が浅い形状の蓋であり、外面は青磁釉、内面は呉須により斜交線が描かれ、透明釉が施されている。

その他



第65図 古代以降の遺物

焙烙 (605)

土師質で内面に耳を有する。体部は丸みを帯びており、口縁部は肥厚し、端部は面取りされ中央がやや凹む。

土錘 (606～609)

いずれも最大径を体部中ほどにもつ形態である。また、604以外は両端が未調整である。

小 結

本遺跡からは須恵器は出土しておらず、灰釉陶器以降の遺物が中心である。そして19世紀まで少量ながらも連続して遺物がみられる。出土遺物総数は31.20個体であり、計測可能な破片数は318点であった。¹⁾破片数が少ないため、算出された数値がどれほど具体的な遺跡の様相を示すのか疑問が残るが、遺跡の性格の概要把握を目的とすることを理解しておきたい。

時期の設定はおよそ100年を基本単位として10世紀初頭から19世紀中頃までを10期に区分した。区分方法は遺物の出土状況や遺構の切りあい関係などは考慮しておらず、基本的に出土遺物の各生産地の編年的研究に依拠している。²⁾以下、次のように分類した。

I 期	10世紀初頭～10世紀末	(黒笹90号窯式～折戸53号窯式)
II 期	11世紀初頭～11世紀末	(東山72号窯式～百代寺様式)
III 期	11世紀末～12世紀後半	(西坂1号窯式～浅間窯下1号窯式)
IV 期	12世紀後半～13世紀後半	(丸石3号窯式～白土原1号窯式)
V 期	13世紀後半～14世紀後半	(明和1号窯式～大畑大洞4号窯式)
VI 期	14世紀後半～15世紀末	(大洞東1号窯式～生田1号窯式)
VII 期	15世紀末～16世紀末	(主に大窯期)
VIII 期	17世紀初頭～17世紀末	(本業焼第I段階)
IX 期	17世紀末～18世紀後半	(本業焼第II段階)
X 期	18世紀後半～19世紀中頃	(本業焼第III段階)

第66図は上述した時期分類に従い、各時期の出土遺物の個体数をグラフ化したものである。これによるとI期からV期までは安定して遺物が出土しているが、VI期以降減少化傾向にありIX期以降再び遺物量が増加している。換言すれば、個体数のピークは中世と近世にそれぞれ1回ずつIV期とX期に存在し、その間にあたるVII期とVIII期は極わずかしか出土していないといえる。

出土遺物の主なものは灰釉陶器、山茶碗、瀬戸美濃陶器などである。灰釉陶器、山茶碗は胎土の違いで大きく2つに分類できる。一つは粗雑で径1mm～2mm程度の砂粒を含み、長石分の吹出しがみられるもの(尾張型)であり、もう一つは緻密で砂粒や長石分の吹出しが顕著にみられないもの(東濃型)である。灰釉陶器においては両者の比率は約2:1であり、山茶碗は1:1とほぼ同数であった。中国陶磁の出土数はわずかであるが、III期～VI期まで各時期みられる。そのなかで、III期における青白磁の合子片が出土したことは特記すべきことであろう。また、本遺跡で出土した土師皿は現在まで岐阜県下では検出されていない形態のものであり、北陸地方においてコースター型と呼ばれるタイプで、

北陸では13世紀中頃に位置付けられている。³⁾13世紀中頃は本遺跡の時期区分でIV期にあたり、遺物量が最も多い時期である。また、古瀬戸はV期～VI期にかけて出土し、天目茶碗や平碗、緑釉小皿、折縁中皿、播鉢、有耳壺などが出土している。VII期以降は主に瀬戸美濃産の陶磁器が主流となるが、IX期に若干数のみ伊万里焼の碗、湯呑類がみられる。

次に時期別の食器組成を考えると、I期～V期までは主に碗、皿を中心とする供膳具が大半を占め、供膳具以外はわずかに山茶碗の鉢、常滑・古瀬戸の壺、あるいは甕が少量出土した程度である。しかしVI期に至り、調理具や貯蔵具、茶器など供膳具以外の用途の器種が幾つか出土している。また、IX期～X期にかけては、尾呂茶碗・柳茶碗・鎧茶碗・灰釉丸碗・広東茶碗・腰鑄湯呑・筒型湯呑・菊花皿・折縁皿・灯明皿・播鉢・練鉢・控鉢・焙烙・蓋など多種多様な用途に対応する器種がみられ、中世から近世にいたる過程で人々の生活様式が変化したことが窺える。

1) 個体数算出の手法は1/12口縁部計測法により残存率を小数点以下第1位まで求め、それを12で割り個体数を導き出した。そのうち、残存率が0.3以下のものは分類、口径の判断が難しいため割愛した。また、土鉢は1/2以上残存しているものを1個体とした。なお、破片数は計測に使用した口縁部が残存している破片の合計数を示す。

2) 檜崎彰一、斎藤孝正「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』2 1983
前川要「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして—」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III 1984

田口昭二「山茶碗」『考古学ライブラリー17 美濃焼』ニュー・サイエンス社 1983

藤澤良祐「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 1982

瀬戸市史編纂委員会「古瀬戸窯」『瀬戸市史 陶磁史篇』二 1981

藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986

瀬戸市歴史民俗資料「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」VIII 1989

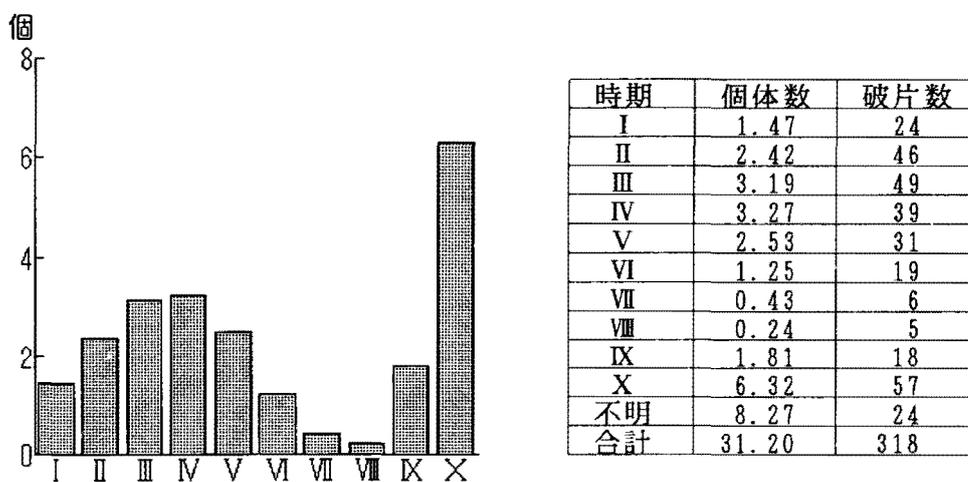
横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」

『九州歴史資料研究館論集』4 1978

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

3) 鶴巻康志「越後における中世土師器の動向」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会1992



第66図 時期別個体数

表3 勝更白山神社周辺遺跡 古代以降の遺物観察表 ()は復元値を示す

番号	遺構	産地	器種	法量 (cm)			釉薬	備考
				口径	底径	器高		
562	S K10	土師器	皿	8.6	-	1.4		
563	S K10	土師器	皿	(8.8)	(8.0)	1.0		
564	S K10	土師器	皿	(9.0)	(8.6)	0.9		
565	S K10	山茶碗	皿	(8.1)	(4.5)	1.5		尾張
566	S K10	山茶碗	碗	-	-	-		東濃
567	S K10	青磁	碗	-	-	-		外面に鑄蓮弁文
568	S K23	古瀬戸	水注?	-	-	-	灰釉	内面にベンガラ付着
569	S K27	山茶碗	碗	-	7.4	-		東濃
570	S X 1	瀬戸美濃	鉢	-	(12.2)	-	灰釉+銅緑釉	
571	S K32	灰釉陶器	土錘	-	-	-		完形、14.1g
572	包含層	灰釉陶器	皿	(7.2)	-	-	灰釉	猿投
573	包含層	灰釉陶器	皿	(17.0)	-	-	灰釉	美濃
574	包含層	灰釉陶器	碗	(15.4)	-	-	灰釉	美濃
575	包含層	灰釉陶器	碗	(14.0)	-	-	灰釉	美濃
576	包含層	灰釉陶器	碗	(16.0)	-	-	灰釉	美濃
577	包含層	灰釉陶器	碗	-	(6.6)	-	灰釉	猿投
578	包含層	灰釉陶器	長頸壺	-	-	-	灰釉	猿投
579	包含層	灰釉陶器	長頸壺	-	(12.6)	-	灰釉	猿投
580	包含層	灰釉陶器	皿	(15.7)	-	-	灰釉	猿投? 16Cの皿の類か?
581	包含層	山茶碗	碗	(15.0)	-	-		尾張
582	包含層	山茶碗	碗	(16.4)	-	-		尾張
583	包含層	山茶碗	碗	-	(8.2)	-		東濃
584	包含層	山茶碗	壺?	-	8.0	-		尾張
585	包含層	白磁	碗	-	-	-		太宰府分類IV類

番号	遺構	産地	器種	法量 (cm)			釉薬	備考
				口径	底径	器高		
586	包含層	白磁	碗	-	-	-		内面に花文
587	包含層	青白磁	合子	-	-	-		
588	包含層	古瀬戸	折縁中皿	(12.2)	-	-	灰釉	
589	包含層	瀬戸美濃	菊皿	-	-	-	灰釉	
590	包含層	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.0)	-	-	鉄釉	
591	包含層	瀬戸美濃	德利	(7.6)	-	-	鉄釉	
592	包含層	瀬戸美濃	柳茶碗	10.8	4.0	5.3	灰釉+鉄絵	
593	包含層	瀬戸美濃	腰鎗茶碗	(10.0)	-	-	灰釉+鉄釉	
594	包含層	瀬戸美濃	腰鎗茶碗	(11.2)	-	-	灰釉+鉄釉	
595	包含層	瀬戸美濃	尾呂茶碗	(12.6)	-	-	飴釉	
596	包含層	瀬戸美濃	広東茶碗	(11.0)	-	-	透明釉+呉須	
597	包含層	瀬戸美濃	灯明皿	8.6	3.6	1.5	錆釉	
598	包含層	瀬戸美濃	壺?	-	(12.0)	-	錆釉	
599	包含層	瀬戸美濃	德利	-	-	-	灰釉	
600	包含層	瀬戸美濃	乗燭	(7.1)	4.0	1.7	飴釉	
601	包含層	瀬戸美濃	乗燭	4.6	2.3	2.2	灰釉	
602	包含層	瀬戸美濃	十能	-	-	-	錆釉	
603	包含層	伊万里	染付碗	(11.0)	-	-	透明釉+呉須	
604	包含層	伊万里	染付蓋	(10.2)	-	-	透明釉+呉須	
605	包含層	土師器	焙烙	-	-	-		
606	包含層	土師器	土錘	-	-	-		半分欠損、
607	包含層	土師器	土錘	-	-	-		完形、13.8g
608	包含層	土師器	土錘	-	-	-		一部欠損、9.4g
609	包含層	土師器	土錘	-	-	-		完形、11.2g

第5章 ま と め

第1節 縄文時代の様相

(1) 時期別・石器別の分布状況

本遺跡から出土した土器片は16,000点余におよぶが、その多くは時期比定困難な無文土器、縄文土器、および土器小片であった。時期比定可能な土器は、縄文中期末～弥生時代までの時間幅を有するが、いずれの時期にもまとまった量が出土している。また、時期毎の遺物量の増減は顕著ではなく、欠如もしくは資料数の少ない時期もあるが、ある特定の時期に遺物が偏るような状況はみられない。こうした状況から、縄文中期末から弥生時代まで断続的に、少量の土器が残されるような状況に当遺跡はあったのだと考えられる。

以下、各時期の遺物分布状況について概観していく。なお、ドットは破片数を示すが、堆積時以降に折損したと考えられる接合資料は1点とした。

第I期 中期末に属すると考えられる土器片は150点ほど確認した。そのほとんどは54G区VII層を中心に、周囲のグリッドから出土している。集中部にトレンチを設定したが遺構は確認できなかった。32N・37Qにもまとまりがみられるが、これらは各々一個体の破片の集中である。他には調査区南半に散在する程度である。これら散在する土器片は、VI層からも出土している。

第II期 後期初頭に属すると考えられる土器片は230点ほど確認した。47H・Iグリッドとその周囲、56F付近に集中部があり、特に47H・Iグリッドは集中密度が高く、トレンチを設定して遺構の確認を行った。その結果、焼土塊のみ検出できた。56F付近のまとまりは、一部I期の分布と重なりながら隣接する。第I期同様調査区南半に出土は偏るが、33N・33Q・26Oグリッド付近にも出土がみられるようになる。

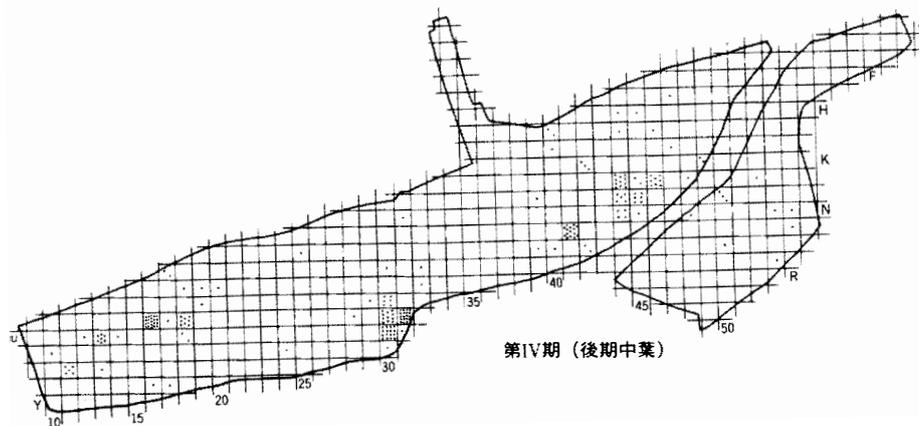
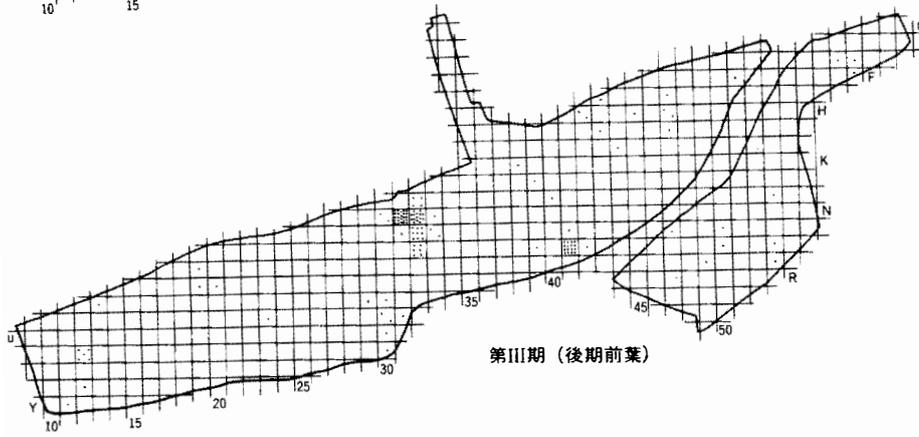
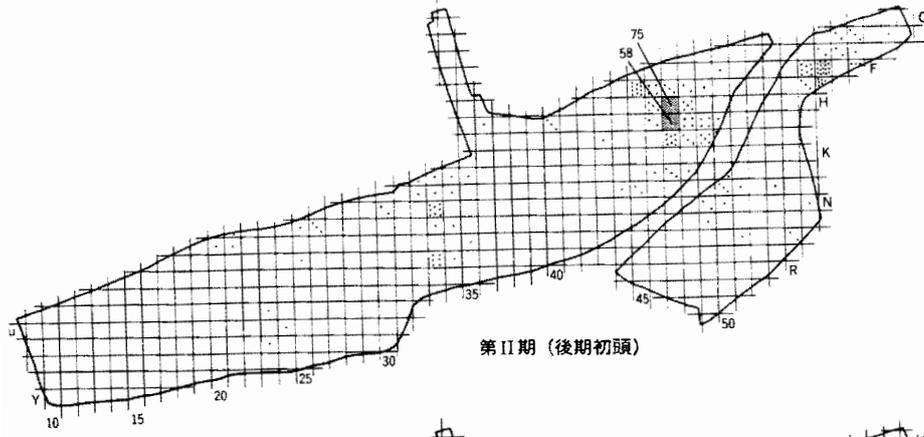
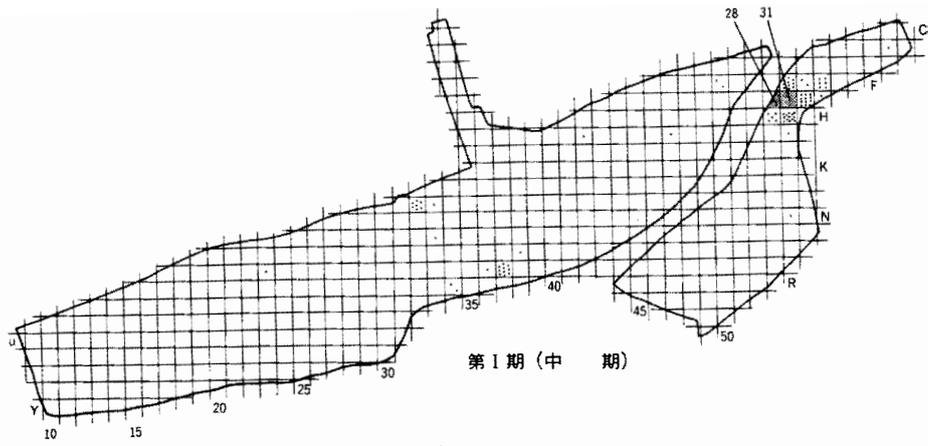
第III期 後期前葉に属すると考えられる土器片は130点ほど確認した。31・32Nグリッドと41Pグリッドにやや集中する箇所がみられるほかは、調査区の全域に疎密をもちながら出土している。

第IV期 後期中葉に属すると考えられる土器片は210点ほど確認した。16Tグリッド、31・32Tグリッドと44Lを中心とするグリッド等にまとまってみられるが、もはや集中部と呼べるような出土状況は呈していない。これらのまとまり以外でも、調査区の全域に散在する状況がみられる。

第V期 後期後葉に属すると考えられる土器片は250点ほど確認した。この時期も、調査区の全域においてやや密なまとまりをもって出土しており、集中する箇所が47・48Sグリッドにみられる。この集中部をのぞけば、大体の分布は第IV期と類似する。調査区の西部に出土がやや偏る傾向がみられる。

第VI期 晩期に属すると考えられる土器片は450点ほどを確認した。16Xグリッドを中心に集中する箇所があるが、それ以外はスポットをなさないで、23グリッド列以南全体に分布している。当該期の資料は量的には多く確認しているが、多時期と比較して接合率が低い。このような出土状況とあわせて考えて、堆積状況や空間の利用状況等が、前時期までと異なっていたことも考えられる。

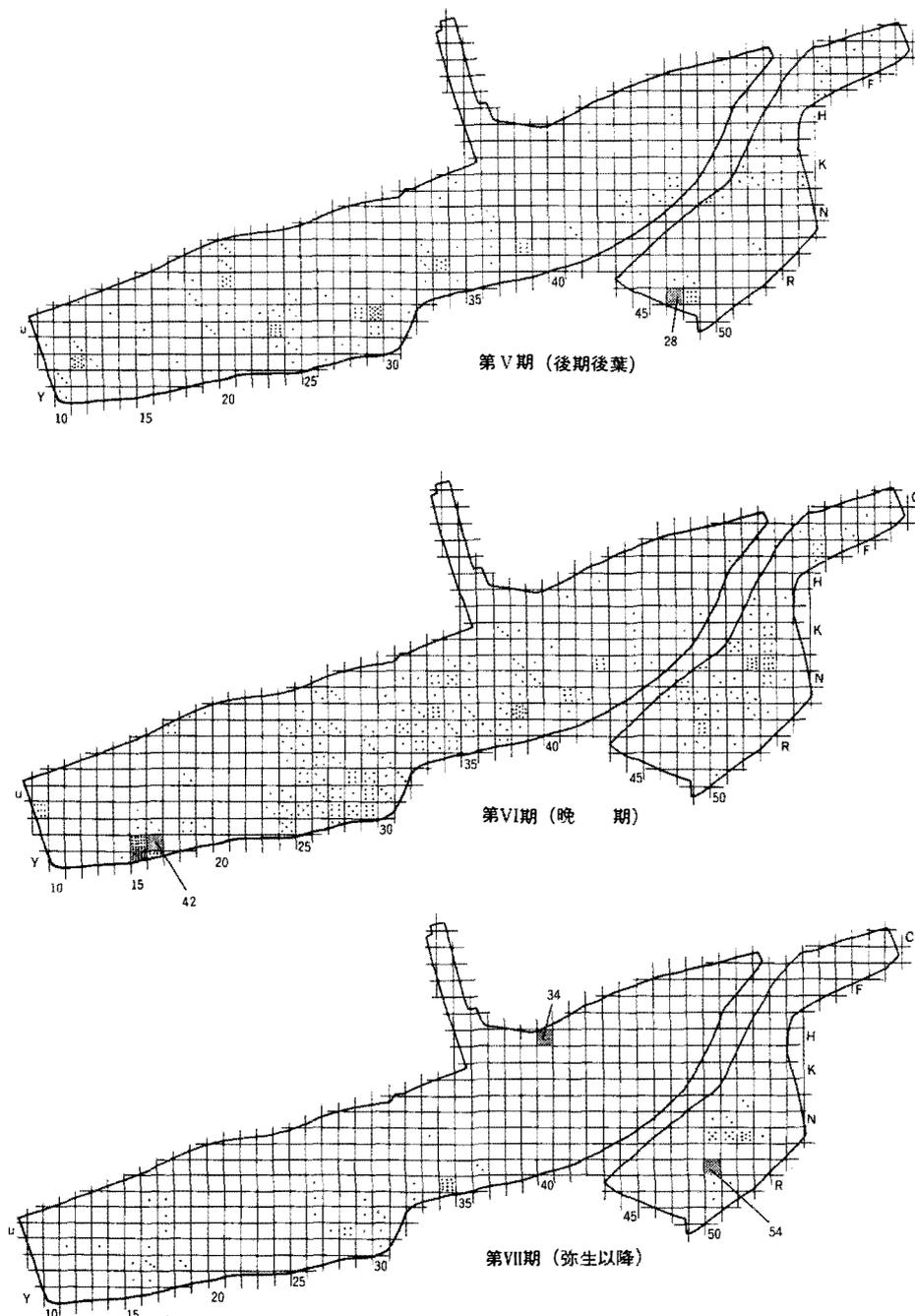
第VII期 弥生時代以降に属すると考えられる土器片は160点ほど確認した。40H・50Qグリッドにみられる以外はやや密なまとまりで出土している。VI期の分布と一致している。



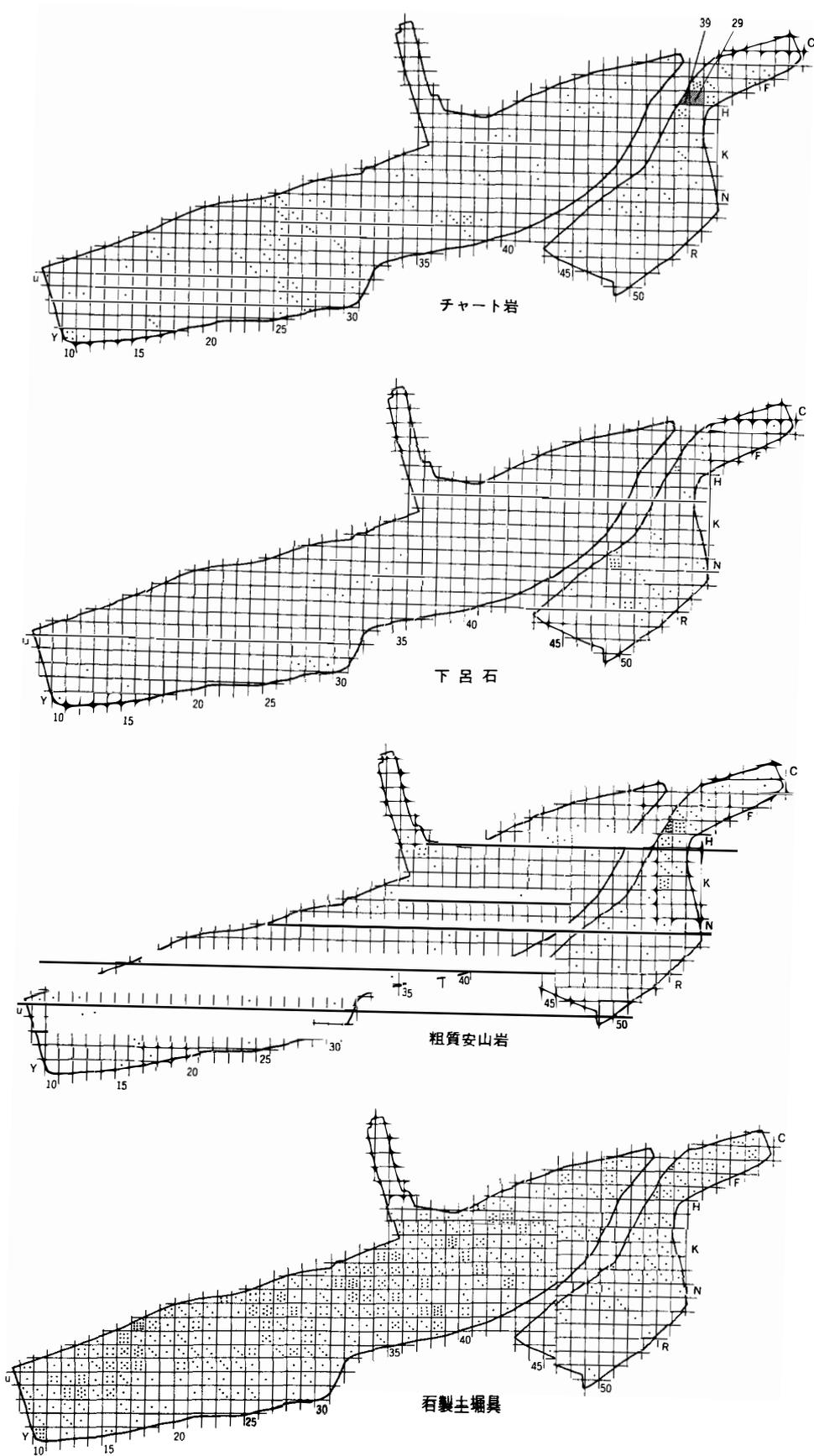
第67図 遺物出土分布図

全体の傾向として、第Ⅱ期までは分布が東半、南半に偏るが、第Ⅲ期以降は全体に広がり、集中も密ではなくなりまとまり程度でおさえられる。また、集中と称していても破片数で40点程度で、決して多い数字ではない。また、こうした場所で出土する土器片は同一個体としてとらえられる資料が多く、土器の個体が複数集中しているわけではない。したがって、出土状況からも土器のセット関係を導き出すことはできなかった。

次に石器類について、「チャート岩製の剥片・石核」「下呂石製の剥片・石核」「粗質安山岩製の剥片・石核」「石製土掘具」の分布状況について土器の分布にあわせてみてみたい。



第68図 遺物出土分布図



第69図 遺物出土分布図

チャート岩製の剥片・石核は53・54G区とその周辺に集中してみられるが、調査区全域に疎密をもって分布している。53G・54Gの集中部はI期の土器片集中と重なることからこの期を所産と考えてよいであろう。チャート岩製の接合資料（第36図455～466）もこの集中部で出土している。しかし、I期の資料の出土しない区域にもチャート岩製の資料は広がっており、II期以降にもきわめて少量のチャート岩製の石核・剥片類が伴っていたと考えられる。

下呂石製の剥片・石核は10～15グリット列、27～35のグリット列、46以南のグリッド列に散漫な状態で分布している。その中では49N付近にまとまりがみられ、接合資料（第38図471～474）もこの区域で得られている。VI・VII期の土器片分布とは重なるが、時期的な特定はできない。

また、礫面の観察から下呂石が露頭から持ち込まれていることが確認された。今後は、これが単なる交易であるのか、それとも人的、文化的な交流を伴うのか、剥片作出のあり方等から資料の増加とともに検討を加えていかななくてはならない。

粗質安山岩製の剥片・石核はチャート岩製の資料の分布と類似し、53・54G区とその周辺に集中がみられ、それ以外は調査区全域に散漫に分布している。したがって、チャート岩製の資料と同様I期にまとまった量がともなうが、II期以降には急激に減少すると考えられる。

石製土掘具は、調査区の全域に若干の疎密をもちながら散漫に分布する状況がみられる。ただし分布が調査区の東に偏る傾向が看取でき、V期以降の分布が調査区の西に偏りがちになる現象とは対称的である。西側の埋没谷がVII層形成時には湿潤な状態であったことは第III章で述べたが、埋没谷の陸化にともない活動域が拡大したことが考えられる。石製土掘具分布をその中でとらえるならば、活動域の拡大に石製土掘具の分布域拡大は伴わなかったことになる。石製土掘具は、主に遺跡の形成の前半期の所産であるか、調査区西部は陸化してなお石製土掘具の使用に適さなかったのであろうと思われる。

I期の土器片集中部にはチャート岩、粗質安山岩の剥片石核類が伴うのに対し、II期の土器片集中部には石器の類が伴わない。

(2) 縄文時代における勝更山神社周辺遺跡の性格

当調査区出土遺物の特徴は、第1に石製土掘具の出土が多量であったこと。第2に土器の出土が少量であったことが挙げられる。

石製土掘具は850点が出土しており、チャート岩製剥片、粗製安山岩製剥片の作出がI期の限られた空間で行われていたことと考えあわせれば、当遺跡の石器は石製土掘具の単一組成といっても過言ではない。石製土掘具以外の石器はきわめて微量で、集落等生活空間の中で使用されるべき石器は欠如している。しかも、石製土掘具のほとんどに使用痕が観察されることから、石製土掘具製作址ではなく、使用の場であったと考えられる。その作出、使用のあり方に関しては「石製土掘り具」の項で詳しく述べたが、素材剥片は横長の剥片で、その幅、厚さに規制の働く定型化したものであること。素材作出の場は別にあったこと。リダクションの存在等が明らかになった。

土器については、中期末から弥生時代まで長期間のものが、いずれの時期にもまとまった量が出土している。しかし、その点数は決して多いとはいえない。

当調査区は、中期末から長期間にわたり、石製土掘具を使用する空間であったととらえることがで

きる。また、堅果類以外の製粉が用途として考えられる石皿やクズの葉の底部圧痕からは、石製土掘り具の使用目的としてクズ・根菜類の採集が具体的に考えられる。長期にわたる遺跡の存続期間に、集落の機能を持たず、ただひたすらに根菜類採集の場として存続したことは、縄文時代における社会のあり方、空間のあり方を考える上で、重要なポイントとなりうることを記しておきたい。

第2節 古代以降の様相

(1) 勝更白山神社について

遺跡名に表れている通り、遺跡に隣接して勝更白山神社が祀られている。今回の発掘調査の成果から、勝更白山神社の由来について一考を試みたい。

勝更白山神社の由来には3つの考え方がある。1つめは奈良時代、泰澄の頃に開創されたという説。勝更白山神社について、神社明細帳に以下の由緒が述べられている。「当神社ハ元ト佐良宮ト称ス 元正天皇御宇養老四年七月朔日当村ニ奉勧請 白山大鏡卷伝佐良ノ宮ト白山四所の末社の内ニテ……（以下略）」養老四年のくだりは泰澄の伝承と結び付く年代ではある。泰澄と美濃馬場の結び付きは疑わしいものであるが、1つの可能性として扱いたい。

2つめは中宮三社の「佐羅宮」として平安末期までに開創されたという説。これは小林一秦氏によって指摘されている。氏によれば、長滝白山神社を中心とする本宮四社と石徹白の白山中宮を中心とする中宮三社による白山美濃馬場下山七社が平安末期には成立しており、鎌倉末から南北朝期にかけて長良川を下り拡張したとされる。氏は、「越前廟白山媛太魂神御鎮座日記鏡卷」から梅原（郡上郡美並村）と「金剣」（郡上郡大和町）の間に元来の「佐羅」が求められること。それに前述の由緒にみえる「元ト佐羅宮ト称ス」という記述から勝更白山神社を佐羅宮に比定している。

3つめは、開発に伴ない集落が開かれ、その際、鎮守として祀られたという考え方。県内500社を超える白山神社のほとんどは中世に開創されている。

さて、今回の調査における成果からこれら3つの考え方についてみてみたい。勝更白山神社における古代以降の遺物は灰釉陶器以降が中心で、それ以前のは出土しなかった。すなわち奈良時代創建説を支持する資料は得られなかったことになる。遺物は10世紀初頭から比較的まとまった量がみられ、13～14世紀に1つのピークを迎える。しかも器種組成は供膳具が主体となり、祭祀的な性格が強いといえよう。この年代は、小林氏のいう平安末期に最も近く、勝更白山神社＝「佐羅宮」説を支持する結果となる。また、この結果は白山美濃馬場における中宮三社成立時期を推測するのに貴重な資料を呈示することとなる。すなわち10世紀頃まで溯る可能性が指摘できるのである。

勝更白山神社の遺物は、13世紀後半以降減少しはじめ、16世紀にはほとんどみられなくなる。これは小林氏のいう下山七社の拡張期に重なり、美濃市上河和の白山佐羅・早松神社まで佐羅宮が下る時期にあたる。その後、18世紀以降の遺物が再び増大するが、これは近世の開発に伴うものであろうか。以上のような経緯のもとで中世から近世にいたる空間利用の変化も理解できる。

参考文献・引用文献

下出積興 1977『泰澄伝承と白山信仰』「白山・立山と北陸修験道」名著出版

小林一秦 1977『白山美濃馬場よりみた白山信仰』「白山・立山と北陸修験道」pp.102～126名著出版

八幡町教育委員会 1961『第八章1 神社』「郡上八幡町史」下巻pp.663～686 八幡町役場

第6章 自然科学分析

第1節 勝更白山神社周辺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科 中野 益 男

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子 菅原利佳 長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。⁴⁾

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて勝更白山神社周辺遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

1. 土器および土壌試料

岐阜県郡上郡八幡町に所在する勝更白山神社周辺遺跡から出土した縄文時代後期前葉のものとみられている土器を分析した。土器は口径約14cm、高さ約23cmの大きさであった。土器および土器内外の土壌試料採取地点を第70図に示す。試料No. 1は土器そのもの、No. 2は土器の内側の壁面に数cm巾で接触した部分の上層部土壌、No. 3はNo. 2と同じで下層部土壌、No. 4は土器内の中央部で上下に円筒状に採取した土壌、No. 5は土器の外側の壁面下部と底面に接触した部分の土壌である。

2. 残存脂肪の抽出

土器試料1582 g、土壌試料312~1070 gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表4に示す。抽出率は土器試料で0.0052%、土壌試料で0.0068~0.0152%、平均0.0094%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%の範囲内のものであった。分析試料中で抽出率を比較すると、土器内壁接触上層土試料が他の試料に比べて約2倍以上高かった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。⁵⁾

残存脂肪の脂肪酸組成を第71図に示す。残存脂肪から9種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)の7種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

試料中での脂肪酸組成パターンを見てみると、土器試料No.1が他の土壌試料とは若干異なるパターンを示し、土壌試料は殆ど同一のパターンを示した。このうち炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で約28~50%分布していた。次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物からきていると推定される。またステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計が、土器試料No.1で約17%、他の土壌4試料で約35~40%であった。通常の遺跡出土土壌中の高級脂肪酸含有率は約4~10%であるから、すべての試料中での高級脂肪酸含有量は多いといえる。しかし、それらの中では

土器試料No.1の高級脂肪酸含有量は少ないものであった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成成分として含まれている場合とがある。

以上、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸であったが、脂肪酸組成パターンや高級脂肪酸含有量は土器試料No.1のみが他の土壌試料とは若干異なる傾向を示していることがわかった。また、高級脂肪酸はすべての試料中に多く含まれていることもわかった。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノール-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第72図に示す。残存脂肪から20種類前後のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー-質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは土器試料No.1に約4%、他の土壌試料に約5~6%分布しており、土器試料中での含有量が最も少なかった。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4~8%分布している。従って、すべての試料中でのコレステロール含有量は通常の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールは土器試料No.1に約45%、他の土壌試料に約19~25%分布しており、土器試料中での含有量が最も多かった。通常遺跡出土土壌中にはシトステロールは30~40%もしくはそれ以上に分布している。従って、すべての試料中でのシトステロール含有量は通常の植物腐植土並みか、少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが土器試料No.1に約6%、他の土壌試料に約1~2%、スチグマステロールが土器試料No.1に約3%、他の土壌試料に約6~7%分布していた。これはカンペステロールは土器試料中に最も多く、スチグマステロールは土器試料中に最も少なく分布していることになる。通常遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中に含まれているこれらのステロールは一般的な植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは、土器試料No.1では検出されず、他の土壌試料中に約1~3%分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、土器試料No.1に約0.4%、他の土壌試料に約0.7~1%分布しており、土器試料中での含有量が最も少なかった。コプロスタノールは一般的な遺跡試料中では分布していても約1%くらいで、通常は殆ど検出されない。またコプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、土壌墓である場合には遺体の配置状況などが特定できる場合がある。⁶⁾今回のコプロスタノール含有量は通常の植物腐植土並みであった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上、⁷⁾土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる。^{8,9)}試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表5に示す。表からわかるように、土器試料No.1の分布比は約0.1、他の土壌試料のそれは約0.2~0.3で、土器試料の分布比が最も低く、またすべての分布比が指標値の0.6以下であった。従って、試料中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していないことを示唆していた。

以上、すべての試料中に含まれている各種ステロールは通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめで、コレステロールとシトステロールの分布比も試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していないことを示唆していることがわかった。また、全般的に少ない分布割合の中でも、土器試料No.1のみが他の土壌試料とは若干異なる傾向を示していた。動物性コレステロール量が少ないことから、試料中に含まれている高級脂肪酸は植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスに由来しているとも考えられる。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に出土土器に残存している脂肪が、これまでに分析した試料中に残存していたどの種のものと同様であるかを調べるために、予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析を行った。類似度の高い試料として挙げたのは、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した原川遺跡、¹⁰⁾出土土壌を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡、¹¹⁾出土土壌を再葬墓と判定した宮城県摺藪遺跡、¹²⁾出土土器を胎盤埋納用匏衣壺と判定した奈良県平城京右京三条二坊十五坪¹³⁾の試料、ヒトの体脂肪、ヒトの骨油、ヒトの胎盤、イノシシ、ニホンジカのような動物、ツグミのような野鳥、野生クリ、野生クルミ、ギンナンのような堅果植物試料である。

図からわかるように、勝更白山神社周辺遺跡の土器試料No.1はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やニホンジカ、イノシシなどの動物試料と共に相関行列距離0.1以内でA群を形成し、よく類似していた。土壌試料No.2~No.4はそれらのみで相関行列距離0.05以内でB群を形成し、非常によく類似していた。また、これらA、B群は相関行列距離0.15以内の所にありかなり類似していた。他の対照試料はC~G群を形成した。出土土器の大きさからヒトの骨のみを埋葬した場合やヒトの胎盤を埋納した場合も想定してみたが、それらに関するE、F群はA、B群とは相関行列距離的に離れており、同じ系統樹には属していないことがわかった。

以上、勝更白山神社周辺遺跡の試料のうち土器試料に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やニホンジカ、イノシシなどの動物試料に残存している脂肪と類似していることがわかった。また、他の土壌試料に残存する脂肪はすべてよく類似しており、土器試料に残存する脂肪ともかなり類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）と

の比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

試料中の残存脂肪から求めた相関図を第74図に示す。図からわかるように、土器試料No.1は単独で第2象限内の原点から離れた位置に分布し、A群を形成した。土壌試料はすべて第1象限内に分布し、B群を形成した。土器試料No.1の分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆し、他の土壌試料の分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆している。この成績は動物遺体が存在しないというステロール分析の結果とは一致しなかった。

7. 総括

勝更白山神社周辺遺跡から出土した土器の性格を判定するために、土器および土器内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で、高級脂肪酸もすべての試料中に多いことがわかった。しかし、土器試料と土壌試料とでは脂肪酸組成パターンに若干違いがあった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、土器試料中に残存している脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やニホンジカ、イノシシなどの動物試料に残存している脂肪と類似しており、土壌試料もそれらの土器試料等とかなり類似していることがわかった。種特異性相関からは土器試料に残存する脂肪は高等動物の体脂肪や骨油に、土壌試料に残存する脂肪は高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に、それぞれ由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、すべての試料中に含まれている各種ステロールは通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめで、コレステロールとシトステロールの分布比も試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していないことを示唆していることがわかった。また、土器試料は土壌試料とは若干異なる組成であった。この結果は先の脂肪酸分析の成績で、高級脂肪酸が多く含まれていることや、クラスター分析の結果で試料中に残存する脂肪がヒト遺体を直接埋葬した遺跡試料やシカ、イノシシのような動物試料に残存する脂肪と類似していることと一致しない。試料中に分布する高級脂肪酸は植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスに由来する可能性が高い。

以上の成績から、出土土器に残存する脂肪は残存する脂肪酸分析からは、ヒト遺体を直接埋葬した場合やシカ、イノシシのような動物を処理した場合に残存する脂肪と類似していることがわかり、ステロール分析の結果からは動物遺体もしくは動物脂肪が存在しないことがわかった。これらの結果は一致せず、残存脂肪分析からはこれ以上の土器の性格の推定は困難であった。そのため土器の出土状況等を考慮して判定する必要がある。

参考文献

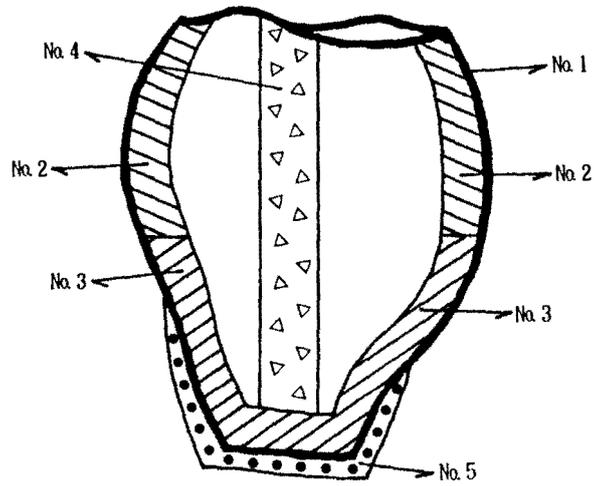
- 1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle:「Food identification of samples from archaeological sites」, 『Archaeo Physika』, 10巻, 1979, pp260.
- 2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold: 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- 3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäß—inhalte」, 『Naturwissenschaften』, 70巻, 1983, pp33.
- 4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」, 『歴史公論』, 第10巻(6), 1984, pp124.
- 5) M.Nakano and W.Fischer: 「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」, 『Hoppe---Seyler's Z.Physiol.Chem.』, 358巻 1977, pp1439.
- 6) 中野益男: 「残存脂肪酸による古代復元」, 『講演収録集—新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, 1989, pp114.
- 7) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- 8) 中野益男: 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, 『真脇遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- 9) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子: 「へロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, 『へロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書、第3集, 1987, pp191
- 10) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, 『原川遺跡 I—昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- 11) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏: 「寺田遺跡土壇墓状遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.
- 12) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏: 「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, 『未発表』, 宮城県教育委員会.
- 13) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子: 「平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」, 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—平成3年度』, 1992, pp38.

表4 土器および土壌試料の残存脂肪抽出量

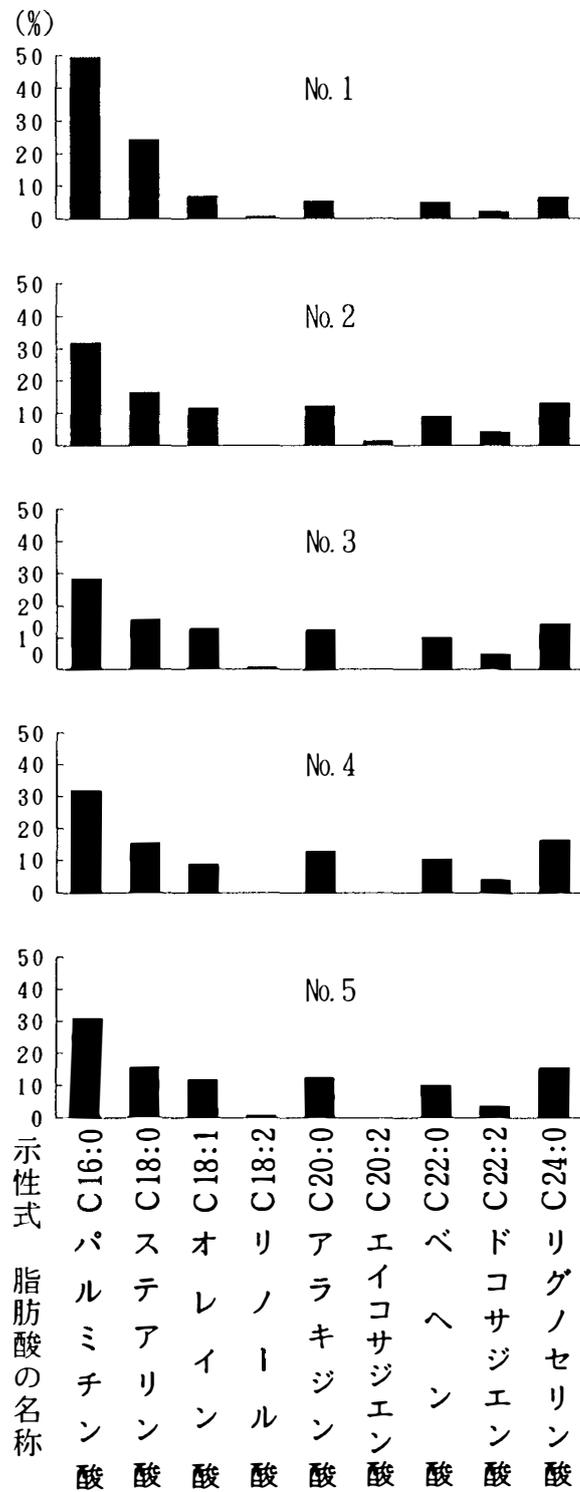
試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土器本体	1581.6	82.1	0.0052
2	土器内壁接触上層土	1028.8	156.3	0.0152
3	” 下層土	895.6	72.7	0.0081
4	土器内中心土	1070.0	77.7	0.0073
5	土器外壁接触土	311.8	21.2	0.0068

表5 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

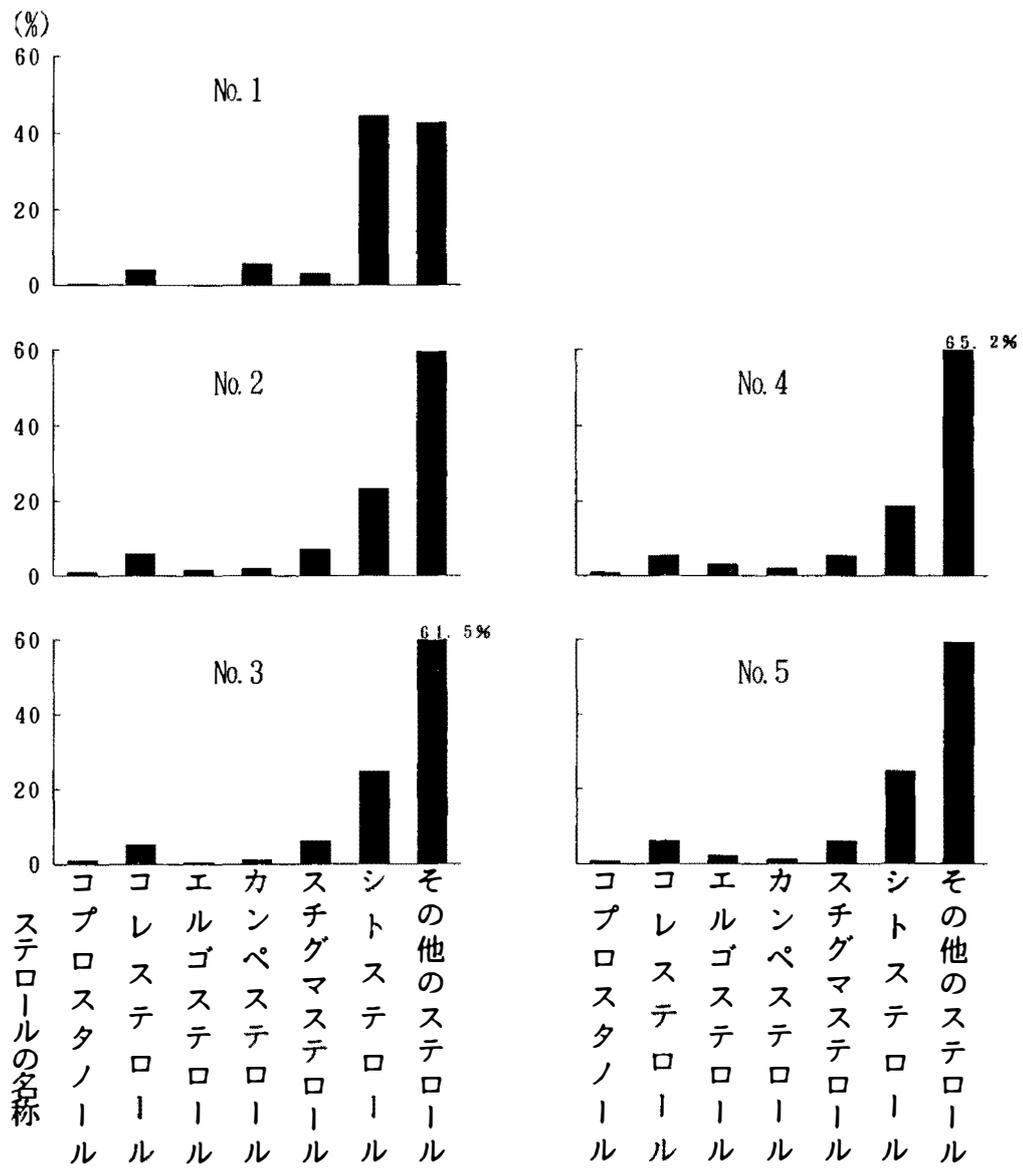
試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	3.95	44.62	0.09
2	5.88	23.34	0.25
3	5.03	24.75	0.20
4	5.35	18.60	0.29
5	6.13	24.67	0.25



第70図 土器内外の試料採取地点

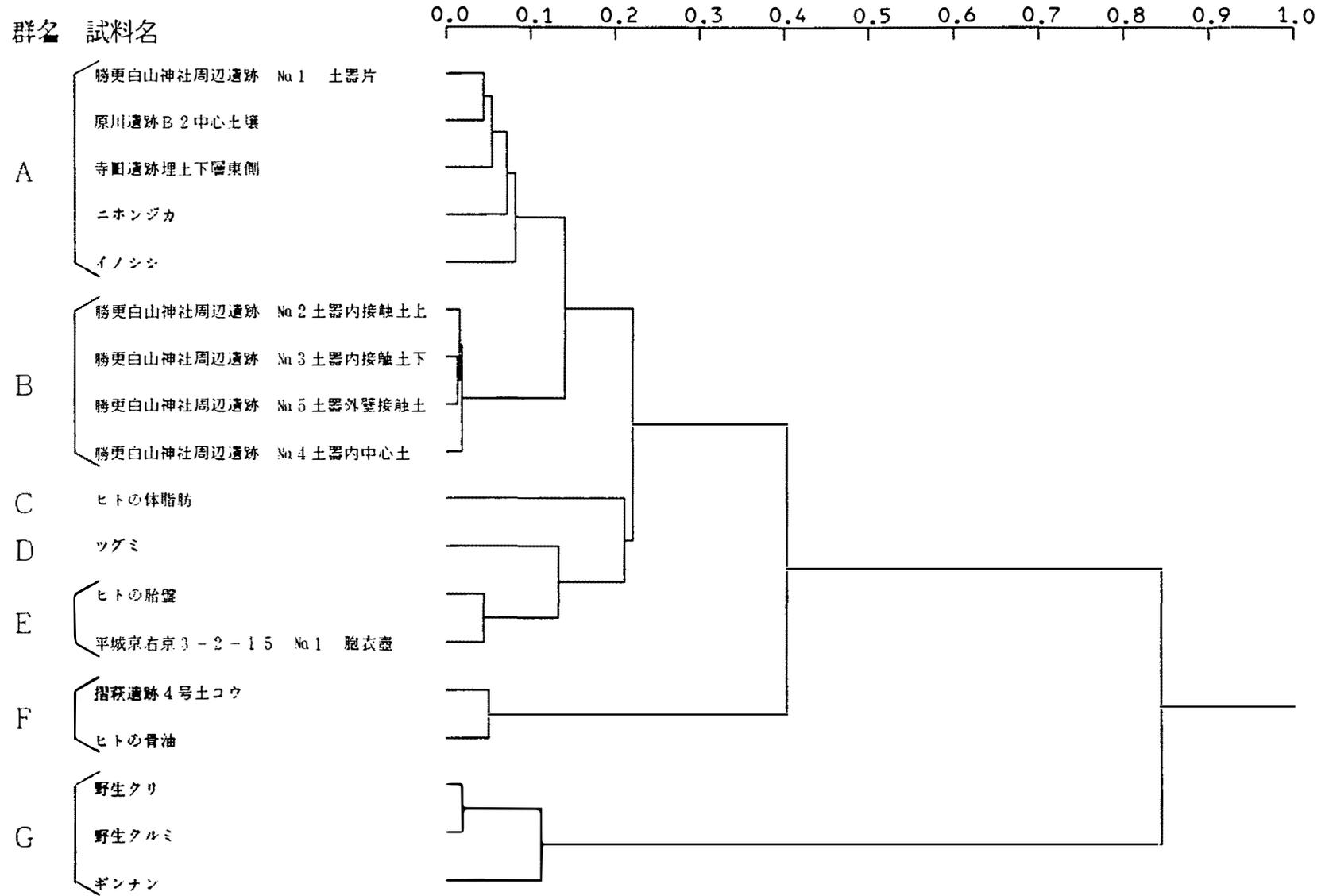


第71図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

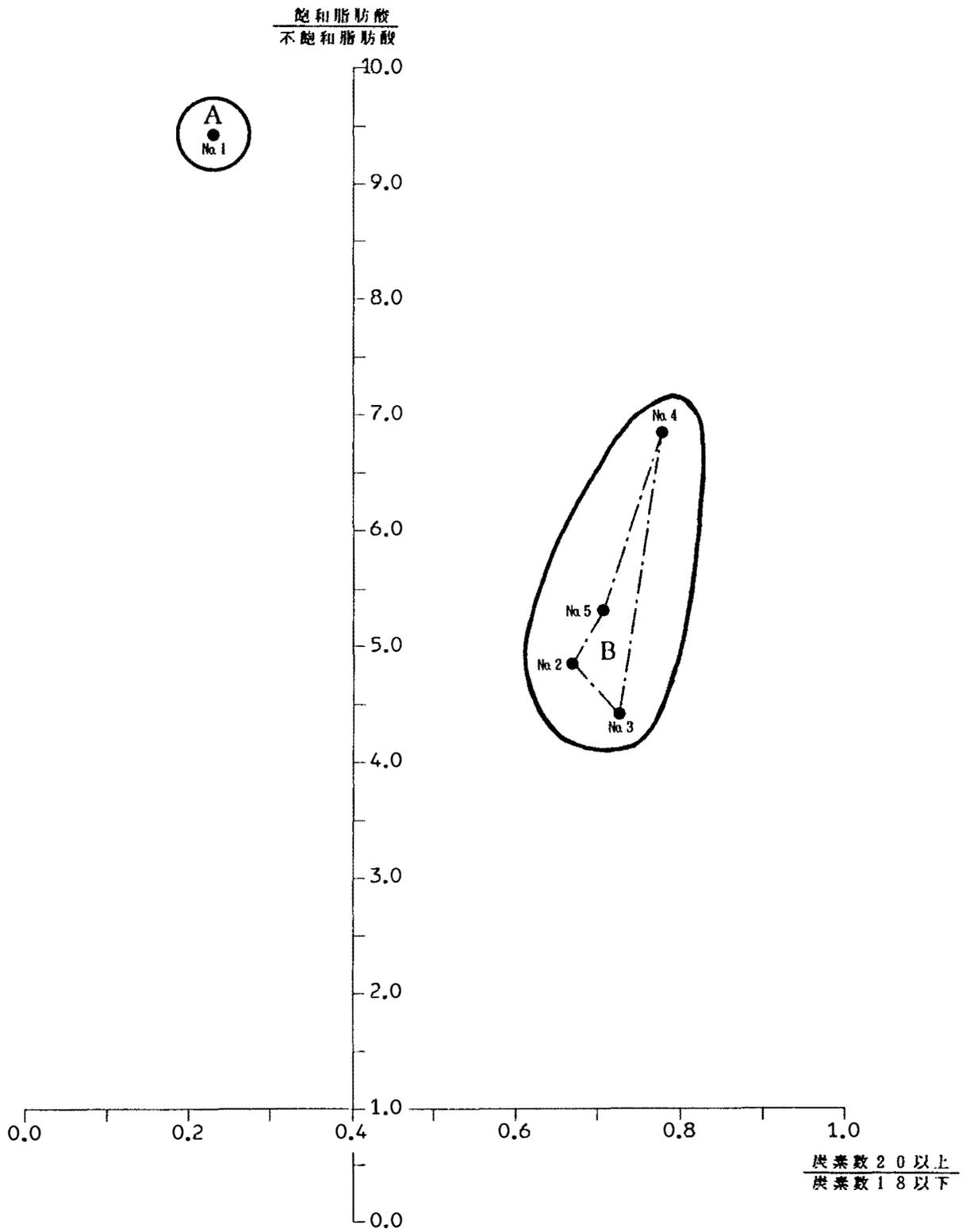


第72図 試料中に残存する脂肪のステロール組成

相関行列距離値



第73図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第74図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

第2節 勝更白山神社周辺遺跡出土灰釉陶器内面付着赤色物質の蛍光X線分析

菱田 量 (パレオ・ラボ)

1. 方法および結果

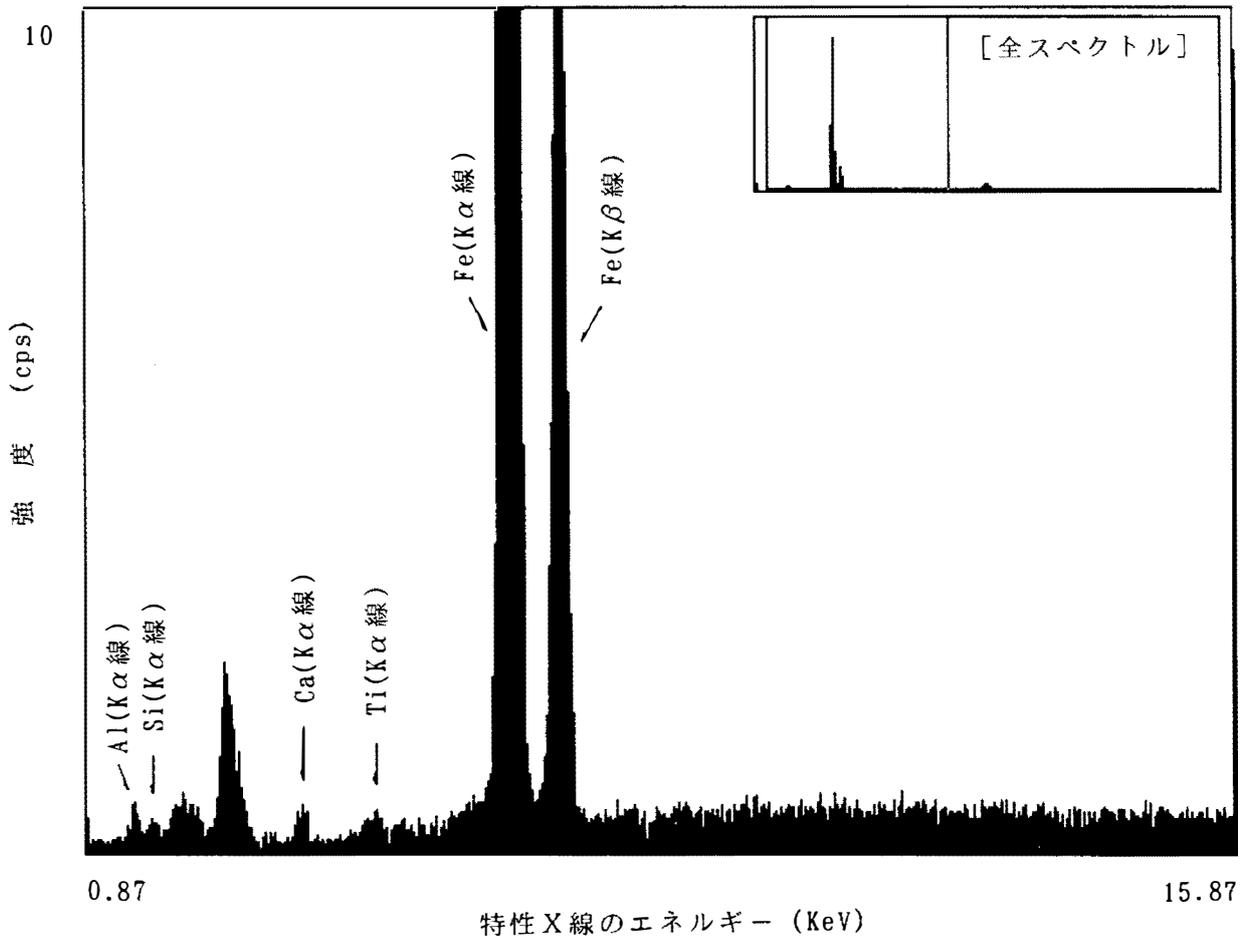
試料は、灰釉陶器（12世紀後半～14世紀前半）内側に付着した赤色物質である。この赤色物質が如何なる元素組成であるかを検討するために、蛍光X線分析を行った。

測定は、エネルギー分散型蛍光X線分析計(SEA-2001L：セイコー電子工業㈱製、Be薄型-X線管球(Rh))で特性X線を計測した(第75図)。なお、測定は、付着した状態で測定した。

試料の測定条件は、測定時間：500sec、照射径：10mm、電流：20 μ A、電圧：50KV、測定雰囲気：真空である。

その結果、鉄のピーク(FeK α 線およびFeK β 線)が明瞭に認められ、アルミニウム(Al)やケイ素(SiK α 線)あるいはカルシウム(CaK α 線)やチタン(TiK α 線)が検出されている(第75図)。量的には、定量分析を行っていないため明確ではないが、鉄は非常に多く含まれ、アルミニウムやケイ素などもある程度多く含まれていると考える。ただし、カルシウムやチタンは少ないと思われる。

以上のことから、この赤色物質は、鉄の酸化物と考えられ、赤色顔料としてのベンガラ(赤鉄鉱、酸化第二鉄、Fe₂O₃)と推定される。



第75図 灰釉陶器内側付着赤色物の蛍光X線スペクトル

第7章 西乙原遺跡周辺環境

長良川は八幡町市街地付近で吉田川と合流し、山に挟まれた狭長な段丘を左右に従えて南流する。市街地から5km程下ると、右岸に半月形をした平坦地が山に抱かれるようにして広がっている。平坦地の東部は三枚の河岸段丘面が長良川によって形成されており、水田が多く営まれている。下位の段丘面は現河床面との比高差6.5m。最も上位に位置する段丘面の現河床面との比高差は20m余ある。平坦地西部は崖錐堆積物によって扇状地状の斜面が形成されている。

この地域は地質的には古生層の砂岩・チャート岩が複雑に褶曲しており、崖面等でそれが確認できる。段丘上、残丘的に残された小山部や、西乙原北側の丘陵部ではチャート岩脈がみられる。調査区を覆う崖錐堆積物も砂岩とチャート岩で占められている。調査区南部は砂岩の比率が高くなる傾向も感じられたが、混在の枠を超えるものではない。

扇状地状の斜面は多く畑地として利用されているが、西乙原の集落は主にこの斜面に営まれている。山からの湧水は崖錐深く伏流するため地下水を得ることができず、山までパイプをひいて水を得ている家もある。このことから崖錐の厚さを推し量ることができる。

調査区は崖錐の西端、急峻な山塊との境に位置する。調査前には山林・茶畑として利用されていた。

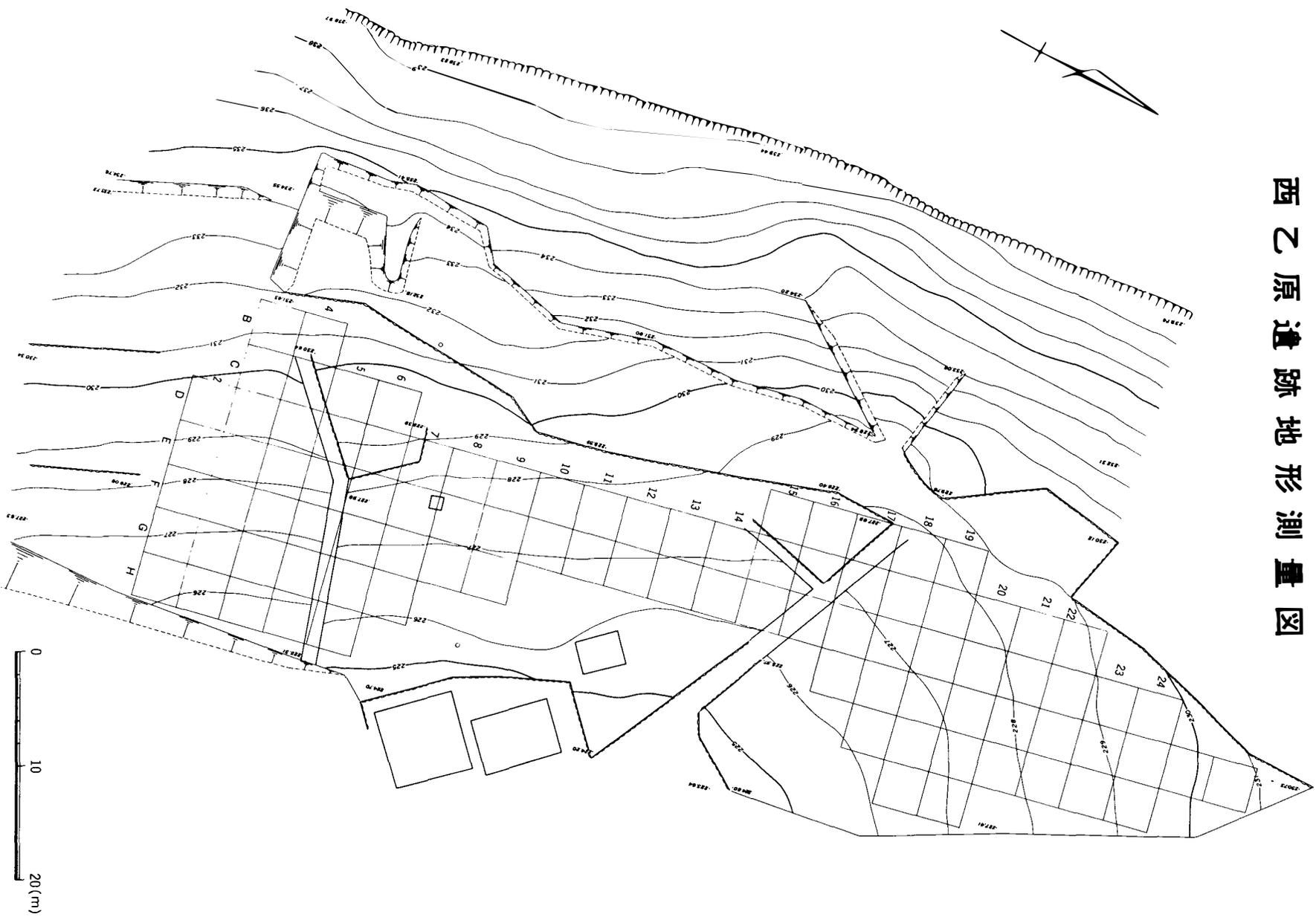
西乙原は縄文時代の遺物が散布する地として、古くから遺跡の存在が知られていた地域である。しかし、遺物の散布は斜面上にもわずかにみられるものの主体は段丘面上であり、特に下位の段丘面にある貝妻遺跡(G21H01027)を中心に、多量の遺物が出土する。貝妻遺跡は「西乙原遺跡」の名で小川栄一氏によっても紹介されている。それによると、オトメ石と呼ばれる立石の周囲から「石鏃・打石斧・磨石斧・石錘・石屑・土器出る。土器は撚糸文・爪形文・条線文・隆起線文ある。」とされている(小川 1952)。調査中、雨天時や昼の休憩時間などを利用して行った踏査によっても縄文式土器片や、チャート・下呂石製の石鏃・剥片類が採集されている。土器片は小片で年代のわかるものは少ないが、年代のわかるものは中期のものが多くそれ以前のもの確認されなかった。貝妻遺跡と長良川を挟んでおよそ対岸の段丘には東乙原遺跡(G21H01028)があり、縄文時代中期の土器片、石匙、石製土掘り具や、土錘、石笛等が出土している。圃場整備により滅失している。

西乙原を囲む北側の斜面には西乙原古墳群(G21H01024~26)があった。計17基の古墳群であったが滅失している。

中世には、村内に浄土真宗大谷派末寺蓮心寺が開かれた。中西村(現白鳥町)円徳寺門徒である井上浄念が文明12年(1480)、西乙原村に堂宇を建てたとされる。当時から集落が営まれていたことが推測される。

江戸時代に入ると、陣屋が西乙原に置かれるようになる。江戸時代、八幡町・和良村・金山町の一部は旗本遠藤氏が知行した。正保3年(1646)遠藤常友は弟の常昭に2千石、常紀に1千石を分知し、西乙原は常昭の知行となった。遠藤宗家が転封し井上正任が郡上に入ると、2代常就は陣屋を西乙原に移した。7代鐘次郎、8代新六郎の間に知行区域の新田開発が進み、元禄年間には2097石余、幕末には2702石余と増加し、大政奉還を迎えた。陣屋跡の付近には屋敷の周囲をめぐる堀の跡、馬場の跡も残っていたが、耕地整理後の現在、見るべきものは残されていない。

西乙原遺跡地形測量圖

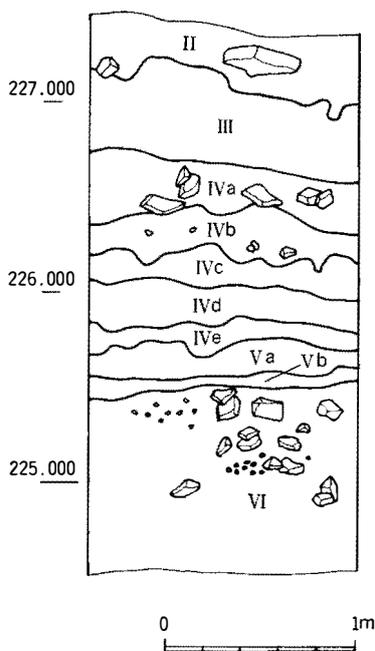


第76圖 西乙原遺跡地形測量圖

第8章 調査方法と基本層序

西乙原遺跡は山塊に近い崖錐性扇状地の斜面に立地しており、最上位の段丘面との比高差は20m余ある。基盤は段丘面か山塊であろうがその上を崖錐堆積物が厚く覆っており明らかではない。

基本層序は以下の通りである。主に土層形成の要因からIからVI層に大別した。



第77図 18D北壁土層断面図

- | | | |
|------|--------|---|
| I層 | 耕作土 | 重機により除去した。 |
| II層 | 暗褐色砂質土 | 谷部を挟んで調査区の南北に見られるが、南と北では礫の種類などに若干の相違がある。砂岩・チャートの小礫が入るが、砂岩はローリングを受けた亜角礫である。遺物はこの層より出土した。下のIII層が客土の可能性があることから、一次的な堆積ではないと考えられる。 |
| III層 | 暗褐色砂質土 | 谷状微凹地を中心にグリッド1～10辺りの範囲にみられる。指頭大の小礫が密にみられる。旧茶畑の範囲と分布が重なること、礫の大きさがほぼ揃うこと、崖錐堆積物中に混入しない円礫も少量みられることから、客土の可能性もある。 |

IV層 明褐色砂質礫混層 拳大以上の、サイズの不統一な角礫・亜角礫が多く含まれる。礫の疎密等により細分も可能であるが、いずれも崖錐性の堆積物であると考えられる。遺構はこの上面にある。グリッドD・E 9～18において、遺構面検出後V層掘削のため重機で除去した。礫の多少、マトリックスの違いでIV a～IV e層に細分した。IV a層は拳大以上の角礫が多く、IV b層は少ない。IV c層では更に減少し、礫はほとんどみられない。IV d層は砂粒が細くなるが小礫を多く含み、IV e層では小礫もみられなくなる。

V層 黒褐色粘質土 粘性かなり強く、礫も少ない。植物遺体を含み分解が進んでいることから、かつての地表面であったと思われる。グリッド10～18の範囲に広がるが、谷地に厚く、当層掘削後のVI層上面は傾斜が現地形より急であった。手掘りで掘り下げたが遺物は全く出土しなかった。V a・V b層に細分した。V a層は粘性強く、礫等有さない。V b層は粘性やや弱く小礫を有する。

VI層 赤褐色砂質礫混層 指頭大程度の角・亜角礫、拳大以上の角礫を含む。崖錐堆積物。重機によって2mほど深掘りしたが、以下同様の状況が続く。

第9章 遺構と遺物

第1節 遺 構

遺構は調査区北部においてのみ確認された。この地区は等高線が南西から北東方向に走る緩やかな南東斜面で、谷部にみられたⅢ層がなく、Ⅱ層を除去すると直接Ⅳ層の崖錐堆積層があらわれる。遺構はいずれもⅣ層上面から掘り込まれている。遺構は集石を伴う土坑が7基（SK1～7）と土壙墓が1基（SK8）の計8基である。土坑埋土は、注記のあるもの以外はⅡ層に相当する黒褐色砂質土である。

SK1

土坑群の南西端に位置する。径90cm、深さ70cm程の大きさでほぼ垂直に掘り込まれている。下部には暗褐色土の埋土がみられるが、その上には礫が詰まっている。礫は全てが角礫である。礫のサイズは鶏卵大から人頭大までバラエティに富むが、鶏卵大から拳大のものが中心である。礫と礫の間には土砂の堆積が希薄で、礫のみが重なり合っている状況である。集石の下面は底面に対して水平であるが、上面は谷側が高く山側は低く落ち込んでいる。土坑内より遺物の出土は確認されなかった。

SK2

SK1の北東に隣接する。口径部の径が100cm、底部の径が70cm、深さ65cm程の大きさで、底狭になりながらも壁はまっすぐ掘り込まれている。土坑内の埋土、礫の様相はSK1と同様であり、集石の上面の山側が落ち込んでいる。土坑内埋土下部より山茶碗の碗の口縁部破片が1点（31）出土した。15世紀中頃に比定される。

SK3

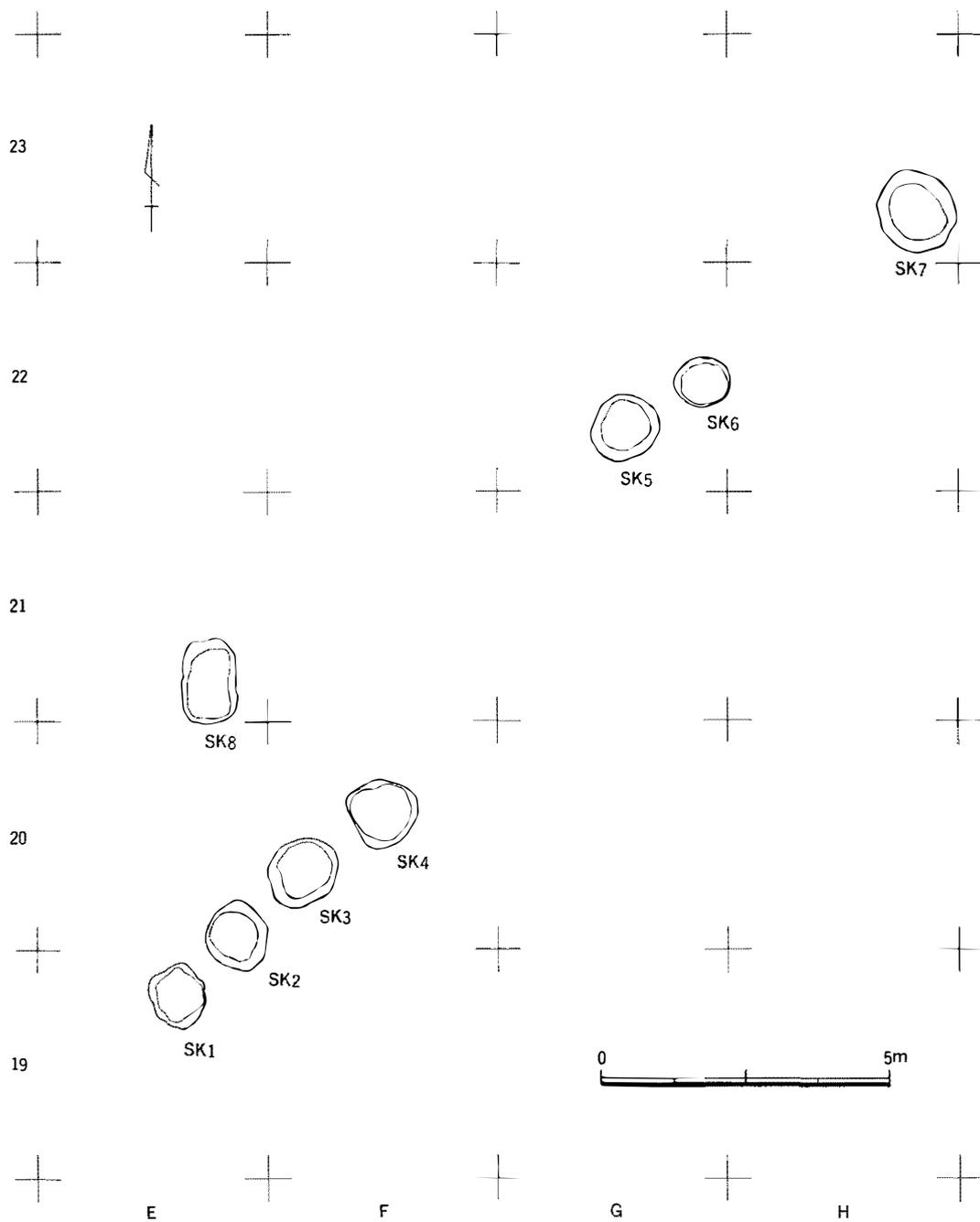
SK2の北東に隣接する。径105cm、深さ45cm程の大きさで、SK1・SK2と比較するとやや広く浅い。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、底面には若干の凹凸がみられる。土坑内の埋土、礫の様相はSK1とほぼ同様であるが、集石の下面に人頭大の礫が多く、上の方には鶏卵大の礫が多い。上面はやはり山側が落ち込む。この土坑の近辺で寛永通宝が出土しているが、土坑内より遺物の出土は確認されなかった。

SK4

SK3の北東に隣接しており、SK1～SK4の4基が平面分布上一つのまとまりを見せる。径100cm、深さ50～60cm程の大きさで、ほぼ垂直に掘り込まれている。土坑内の埋土はSK1と同様であるが、礫の密度は薄く散漫である。しかし集石上面の山側が落ち込んでいる様子は同様である。土坑内より15世紀中頃に比定される山茶碗皿の口縁部破片が（32）出土している。

SK5

SK1～SK4の一群の北東5m程の距離において、SK5・SK6が隣接して検出された。SK5は径100cm、深さ40cm程の大きさである。壁は垂直に掘り込まれているが、底部から壁面への立ち上がりは明瞭ではない。埋土は茶褐色砂質土で、視覚的な分層は不可能であった。ただし上半部に比べて下半部はしまりあり、下半部の上部には炭化物も点在する。上半部は土のしまりなく、礫が多く入



第78図 西乙原遺跡遺構分布図

る。集石上面の山側が落ち込んでいる。土坑内より14世紀後半～15世紀前半に比定される山茶碗の碗の口縁部破片が1点(33)出土している。

SK 6

SK 5の北東に隣接する。口径部の径100cm、底部の径75cm、深さ40cm程であるが、口径部が広いのは崩落したためであろうか。底部に崩落土らしき堆積がみられる。この土坑も元来は垂直に掘り込まれていたものと考えられる。礫は土坑の周囲に散乱している。土坑内の礫は上半に少数みられるが、拳大から人頭大のものが多く、総じて大きい。礫の直下あたりに炭化物が点在している。土坑内より山茶碗の碗の破片が2点(34)出土している。15世紀中頃に比定される。

SK 7

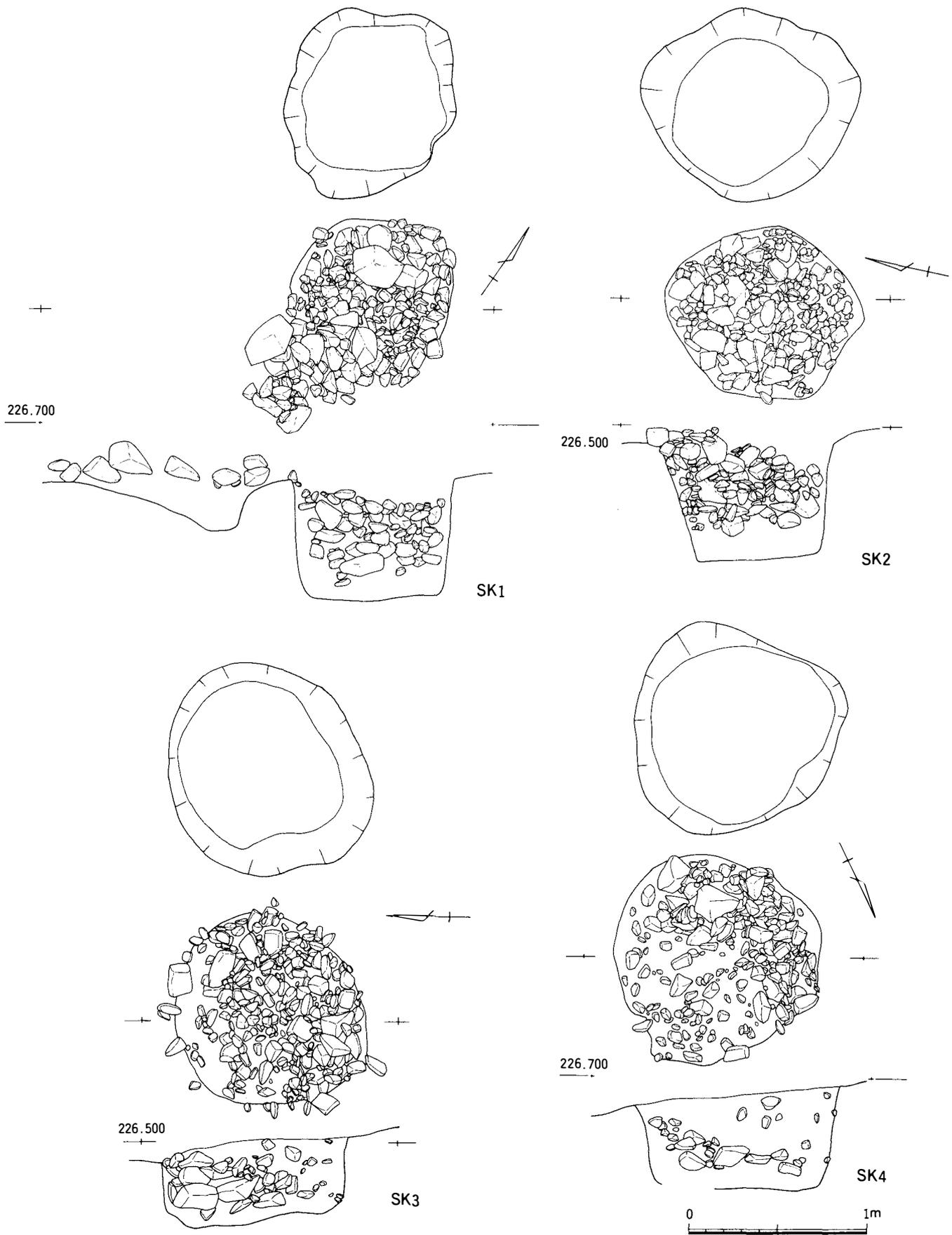
SK 5・6の1群より2m程北東で検出した。調査区の東端にあたり、これ以東の遺構の広がりについては明らかにできない。SK 1～6とは土坑の形態、サイズ、礫を伴う等共通する点もあるが、礫のあり方という点で様相を異にする。斜面山側を削平して平坦な面を作り、その面に径115cm、深さ70cmほど土坑を掘り込む。土坑中ではなく、埋土の上に鶏卵大から人頭大まで様々なサイズの角礫を積みあげる。礫は削平面一面に広がり、厚いところでは60cmを越える。土坑上に積んだ礫が崩落して散らばったとも考えられるが、礫の広がりにもまとまりがあり、広がり末端にもある程度の厚さが見られること。断面から崩落の様子は読みとれず、境目なくランダムに積み重なっていることから、若干の崩落はあっても、当初からこの範囲に礫がまとめられていたと考えられる。礫の間には土砂の堆積が希薄である。集積された礫の上、間から陶器片が数点出土している。集積上部からは天目茶碗1点、腰鍔茶碗1点(35)が出土している。天目茶碗は16世紀後半、腰鍔茶碗は18世紀に比定される。また、礫の集積中より鉄釉が施された碗1点、広東茶碗1点(36)、近現代陶器1点出土している。広東茶碗は19世紀後半に比定される。

SK 8

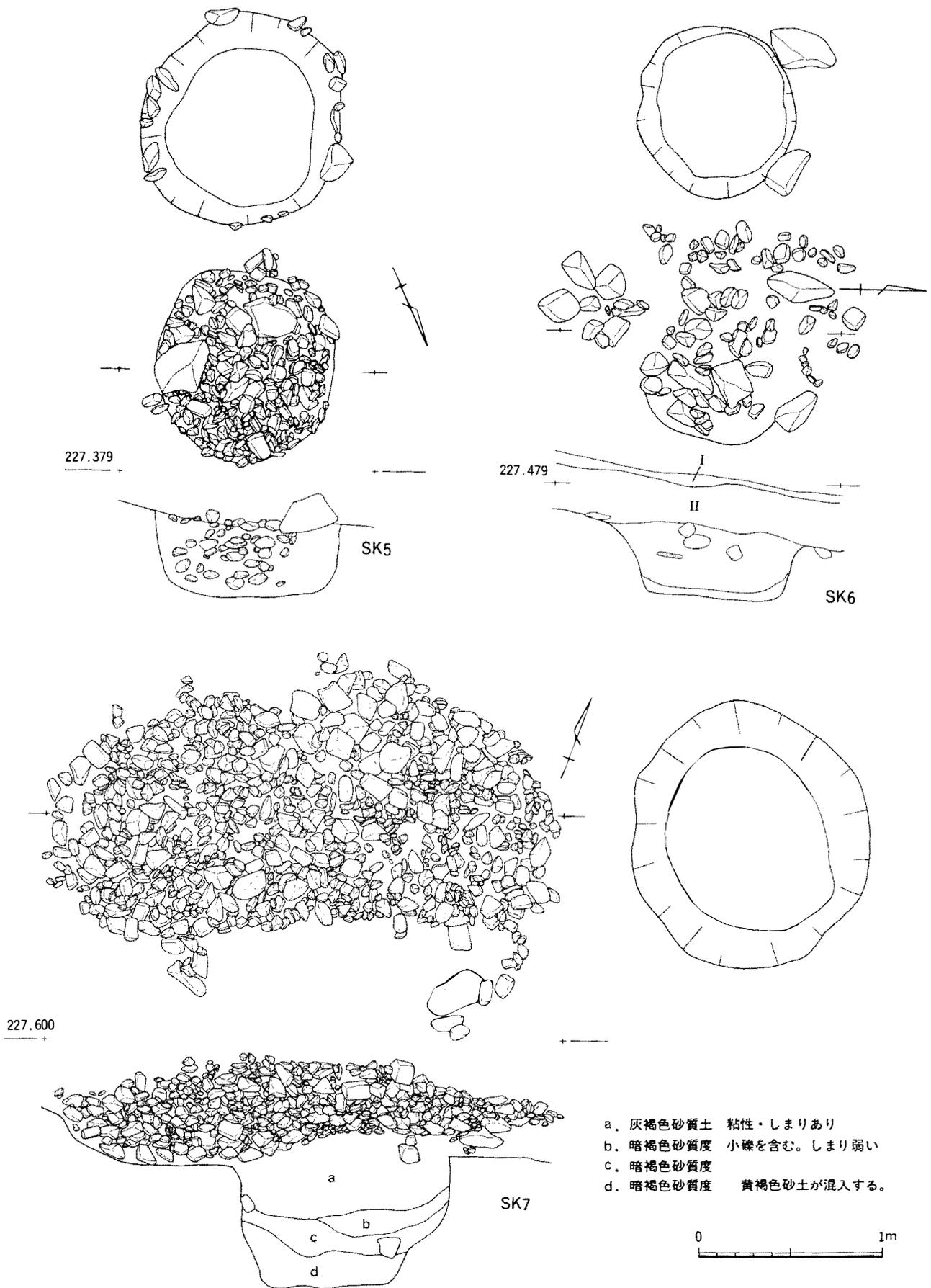
SK 1～4の一群の北に位置しているが、様相は大きく異なる。150×90cm程の長方形のプランで、30cm程の深さに掘り込まれている。鶏卵大から人頭大の礫が埋土の中位に、平面的には人頭大の礫が土壌の南部を囲むような形で散在した。これらの礫より下位で人骨が出土した。骨の遺存状態は悪いが、脳頭蓋等いくらかはその部位が認定できる。顔面骨はすでに細かな骨片となっており観察はできなかったが、頭部のやや南で下顎骨・歯のエナメル質が出土している。下顎は東を向きエナメル質も東に偏る。頭部より80cmほど南で大腿骨の球関節が、頭部の20cm南で大腿骨と脛骨がそれぞれ関節状態で出土した。出土状況から、頭を北に向けて足をたたくで埋葬されていたと思われる。ただし下顎の向きと膝が正反対であり、横臥の想定はできない。伏臥か仰臥で埋葬されたのであろう。腰部にあたる位置に木質の付着した鉄釘が2本出土しており(66)、木棺を用いたと思われる。炭化物片も出土している。しかし、年代を示す遺物は出土していない。

以上、検出した遺構についてそれぞれ見てきたが、最後に簡単にまとめておきたい。

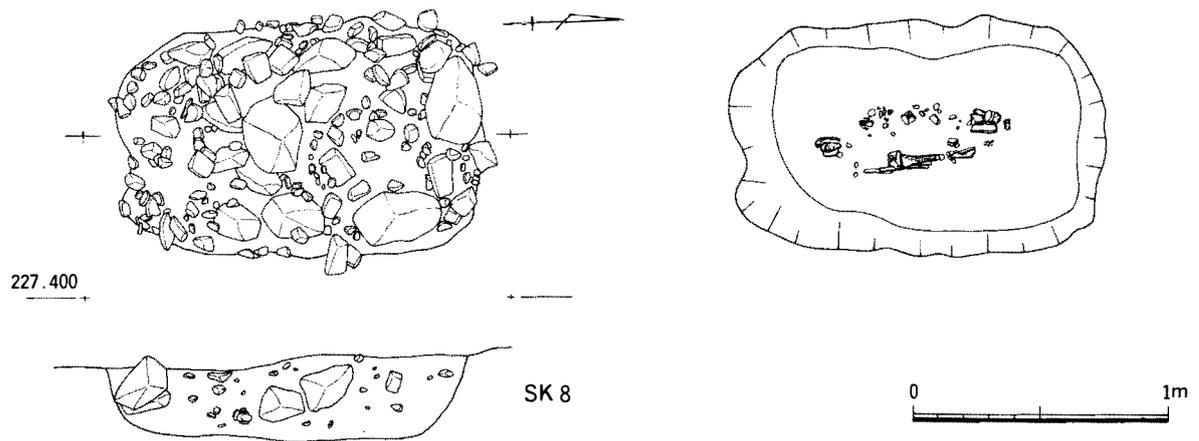
これらの遺構は2つのグループに大別できる。すなわちSK 1～7とSK 8である。平面分布を見ても、SK 1～7がほぼ一列に並ぶのに対してSK 8のみその列から外れている。また、集石を伴うか否か、土坑の形態、人骨の有無など相違点が際だっている。遺構の用途としては、SK 8が土壌墓であることは間違いないが、SK 1～7については用途を推測しうる資料が欠如している。SK 3付近で出土した寛永通宝も遺構に伴うものかどうかは確認できなかった。平面分布からSK 1～4とSK 8がセット関係にあるようにも見えるが、SK 5・6に対するSK 8的な遺構の存在が認められな



第79図 西乙原遺跡遺構図 SK1~4



第80図 西乙原遺跡遺構図 SK5~7



第81図 西乙原遺跡遺構図 SK 8

いことから、このセット関係については支持できない。したがってSK 1～7についてはその用途・機能を言及しないで、そのあり方についてのみ検討を加えたい。

SK 1～7は、集石が土坑内にあるか埋土の上にあるかによってSK 1～6とSK 7に分けられる。SK 1～6とSK 7は、伴う遺物から時期差が認められそうである。

SK 1～6は、更に平面分布からSK 1～4とSK 5・6に分かれる。しかしこれらの遺構群の間に際だった差異は認められない。礫の多少など全く同質とはいえないまでも、これらの遺構は同じ種類のものであるとしてとらえられる。

このグループの全ての遺構において、集石上面の山側が斜めに落ち込んでいる様子は、集石下面、もしくは集石中に備えられた物が、腐敗か何らかの作用のために空洞化し、そこへ礫が崩落したように見える。備えられた物は、崩落の規模から0.18m²ほどの大ききで、崩落の場所から土坑中央部ではなく山側にあったことがわかる。このことから、埋納物ではなく、やや大きめではあるが墓碑的な物であったと考えられる。

八幡町内の至る所にさまざまな伝承をもつ「塚」がみられる。しかし、西乙原の集石土坑だけでも、その形態や年代に差異があり、同質のものとはとらえられない。今回の調査ではSK 8以外の用途は明らかにできなかったが、ここで示した類型が八幡町内の「塚」の研究に何らかの指針を与えることができれば幸いと思う。

第2節 遺物

(1) 石器類

ほとんどの石器は II層中より出土している。石製土掘り具など軟質の資料は二次的な移動による磨減（ローリング）を受けており、中近世の遺構面がII層下面であることから、二次堆積であると判断される。出土した石器類の内訳は石鏃6点、石鏃未成品1点、くさび形石器1点、スクレイパー類3点、微細な剝離痕を有する剝片19点、石核2点、剝片・碎片類47点、石製土掘り具77点となっており、石製土掘り具が組成の中心となっている。これらの石器に伴う土器は出土していないため、年代については明らかでない。なお、遺物の石材については、石製土掘り具が砂岩と流紋岩、石鏃中2点が下呂石である以外は全てチャートを用いている。周辺の崖面や崖錐堆積物中からも良質のチャートを得ることができ、原石の採集は容易であったと思われる。

石鏃・石鏃未製品

1は下呂石製の凹基鏃。調整は薄く深く全面を覆う。頭部折損するが、折れ面も風化している。全面にローリングが及ぶ。薄身に仕上げられており、質量は1.0gと軽量である。2はチャート製の凹基鏃。表面頭部と裏面基部付近に素材の剝離面がみられる。右脚部折損している。やや厚手で、1.4gの質量がある。3もチャート製の凹基鏃。最も小さな製品で、質量0.3gである。表裏面に素材の剝離面を残し、周囲に細かな調整を加えて仕上げている。その中であって、素材剝片の打点の位置する右脚部だけは念入りに調整を施している。素材剝片そのものが小さなものであり、調整による減量を最小限に留めるために調整を微細化したのであろうか。4もチャート製の凹基鏃であるが、基部の挟りは浅い。薄く深い調整が全面を覆う。頭部は折損している。質量1.7g。5はチャート製の有茎鏃。表面中央部に素材の面を残すが、調整剝離によってほぼ全面が覆われる。質量1.0g。6は下呂石製の有茎鏃。茎部は折損し、折れ面も風化している。頭部は打撃による欠損が見られるが、それでも質量は2.8gと大形である。調整は粗い。ローリングを受けて磨滅し、剝離方向がはっきり読みとれない面もある。7は厚さ5.5mmと厚く、調整粗く、尖頭部もみられないことから未製品と思われる。チャート製で質量は1.8gである。基部は節理面にて折損する。側縁からの調整剝離面がこの折れ面に切られており、調整中に折れたことがわかる。折れ面から一枚の深い剝離が施されるが製品には至らない。

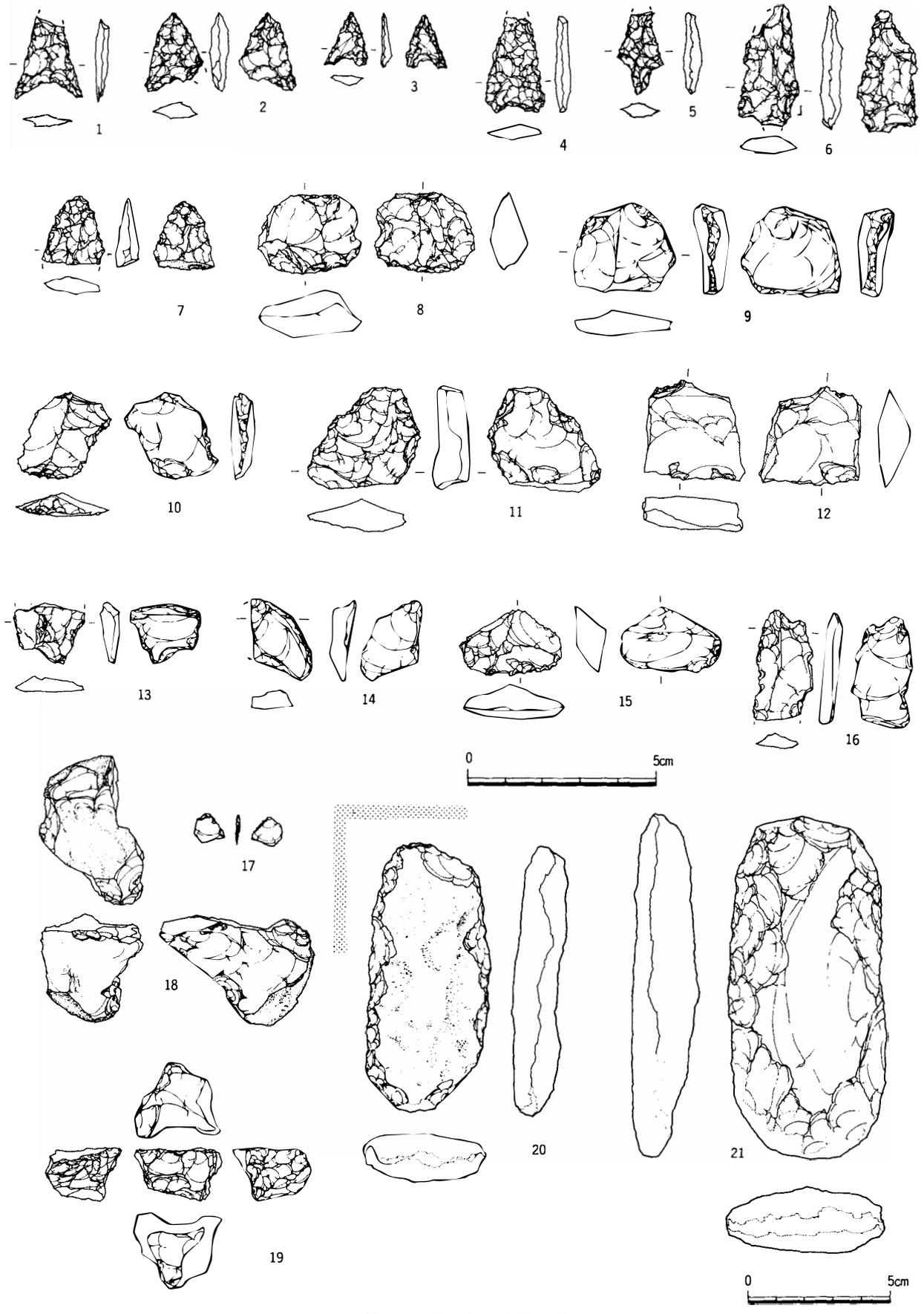
くさび形石器

8は上下両端の表裏に潰れがみられることからくさび形石器とした。表面にもポジティブ面がみられるチャート岩の剝片を用いている。裏面に敲打痕が数ヶ所みられる。

スクレイパー類

剝片の一辺かそれ以上に剝離を施して刃部を作り出しているものを、スクレイパー類として一括した。

10は剝片の端部と左側縁に急角度の刃部を作出している。端部は裏面から、左側縁は表面から剝離が施されている。上部は折断されているが、折断面は2枚でそれぞれが表と裏から加圧されている。9は剝片の両側縁に、両面から剝離を施している。下部は折れるが意図的なものかどうかは判断できない。11は剝片の両側縁に、表面からの剝離によって急角度の刃部を作り出している。下部は折れるが、その折れ面にも剝離が及ぶ。



第82図 西乙原遺跡出土石器類

微細な剥離痕を有する剥片

この類にみられる剥離痕は、スクレイパー類の調整剥離と比較してサイズが不揃いで連続しないものと、総じて小さく連続するものがある。後者は使用痕としてとらえられるだろうが、ローリングによる欠けとの区別は困難であることからこのようにまとめた。

12は、表面もポジティブな面である剥片の上下を節理面に沿って折り取ったものを用いている。側縁に微細な剥離がみられる。13も、上下が折り取られている剥片の両側縁に、図示できない微細な剥離が連続する。14は剥片の左部と下部を折り取り、残る右側縁に潰れ状の微細な剥離がみられる。上部と下部は若干疎らになるものの、総じて密に連続する。15は打面を大きく残す厚手の剥片を用い、その寸詰まりの端部に、中央右部は裏面から、左部は表面から、深さ3mmほどの浅い剥離が入っている。16は、下部を折り、頭部を裏からの打撃によって除去した縦長剥片を用いている。左側縁に大小不整な剥離が疎らにはいる。17は、碎片と呼ぶのがふさわしい小さなものであるが、この右側縁に、裏面から使用痕としてはとらえがたい急角度の微細な剥離が入っている。「微細な剥離痕を有する剥片」としてとらえられるものは、サイズにばらつきがある。

石 核

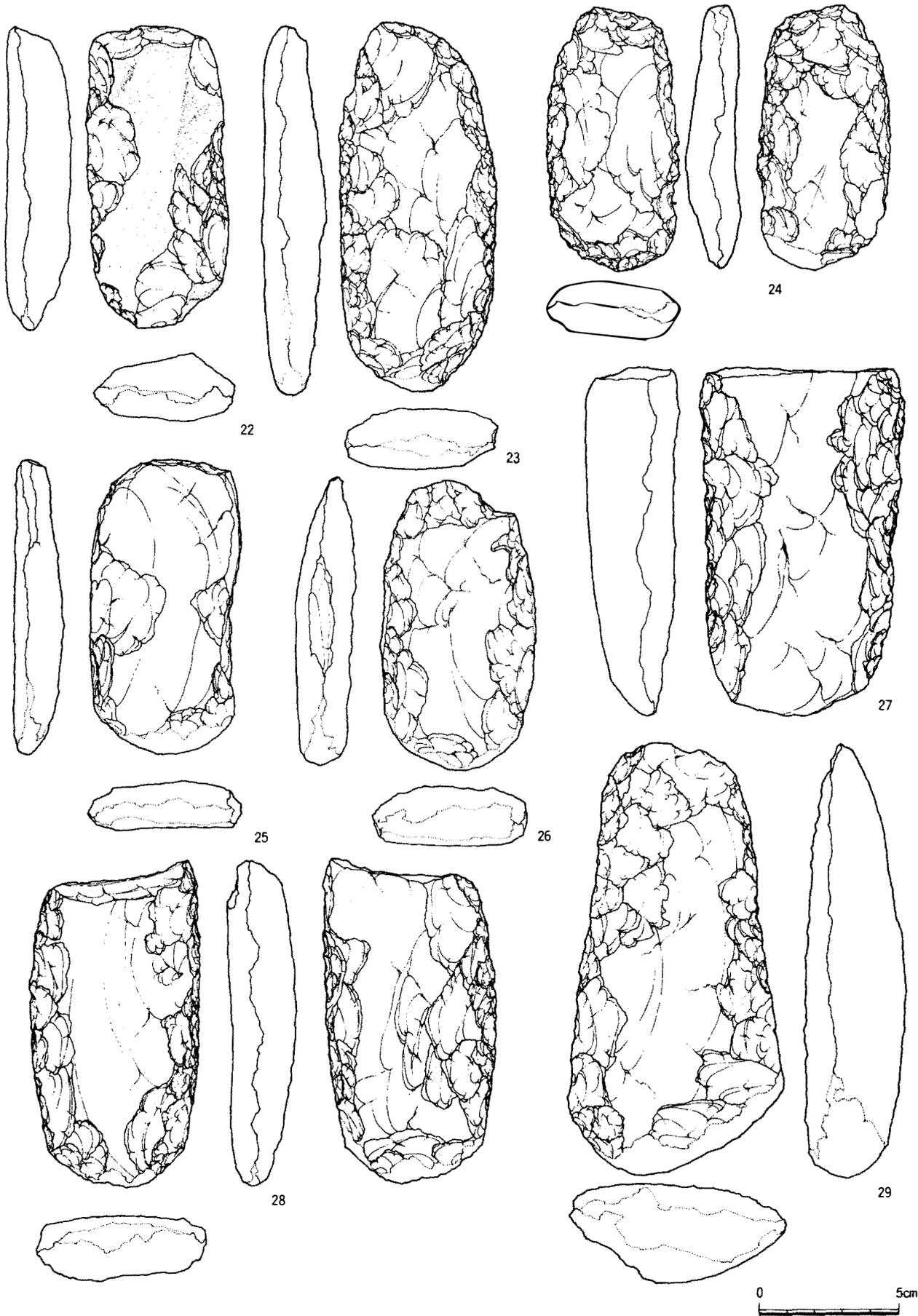
18の上面は、節理で剥離された平坦な面である。この面に2枚の小剥離を施して稜を作り、稜上加撃して2枚の剥片をそれぞれ左右の作業面に剥離している。剥片はそれぞれ2×4cmほどの不定形なものが得られている。原石は垂角礫ないしは垂円礫を用いている。19は打面転移を行う石核である。主に上面を打面とするが、中図では下面を、右図では中図作業面を打面とした剥離も行われている。これらの剥離面は上からの剥離面を切っており、上面打面の剥離が一通り行われた後打面を転移していることがわかる。階段状の剥離痕が多い。

石製土掘り具

77点中10点について図示した。表裏関係なく調整の密な面を図示したが、結果的には裏面を図示することが多くなった。打面部やバルブを除去するための剥離が裏面に施された結果であろう。

石製土掘り具のほとんどは、砂岩を粗割りした剥片を横位に用い、周辺に簡単な調整を加えて製品としている。したがって、素材の形によって製品の形態も強く規制される。撥形といわれる範疇に入れても良さそうな29の資料なども、意図的にこのような形態に仕上げたものかどうかは定かではない。実際に撥形とも短冊形ともとれる製品も少なくなく、この遺跡の石製土掘り具をその平面形態から分類することは難しく、従来の分類項目による限り意義も少ないと思われる。

20・21・23～29は、素材の剥片を横に用いた当遺跡の一般的な打製土掘り具である。表面は24が調整剥離に覆われ、28が裏面とは逆からの剥離面である以外は自然面に覆われる。23は流紋岩を用い、裏面は調整剥離のため素材の面が残らない。22は崖錐堆積物にみられる手頃な大きさの垂角礫砂岩をそのまま用いており、両面が自然面に覆われる。25・26の側縁には折断や敲打による整形もみられる。これら石製土掘り具の刃部には、磨耗というより潰れに近い使用の痕跡がみられる。勝更白山神社周辺遺跡出土資料の使用痕跡とは明らかに異なるが、これには使用目的の違い、使用方法の違い、使用場所の性格の違いなど様々な要因が考えられる。そのうち使用場所の性格の違いは明らかに存在する。すなわち、これらの遺物が含まれる崖錐の供給源は、礫の多い場所に相違なく、刃部の潰れからは礫の多い場所における使用が想定されるのである。



第83图 西乙原遺跡出土石器類

(2) 古代以降の遺物

灰釉陶器

皿 (37)

高台は丁寧に貼り付けられており、底部外面に回転糸切り痕が残る。また、体部外面には一部、灰釉が垂下している。

山茶碗

皿 (38～41)

38は高台を有し、接地面に靱殻痕が付着している。また、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。体部は直線的で中程に稜をもち、口縁部は丸く仕上げられている。39～41は底部外面に回転糸切り痕、板目、底部内面に静止指ナデ調整が認められる。39は底部が円盤状に突出しており、やや古い形態であるが、40、41は底部内面周縁がやや凹み、新しい様相を示す。

碗 (42～45)

いずれも高台を有し、接地面に靱殻痕が付着している。また、底部外面に回転糸切り痕、底部内面に静止指ナデ調整が認められる。45は断面逆三角形の高台を有し、底部外面に回転糸切り痕が残る。また、内面は非常に摩滅している。

瀬戸美濃陶器

染付丸碗 (46～48)

いずれも体部下方が丸みをもち、口縁部は丸く仕上げられている。47は中型であり、底部内面に5つのトチンの跡が残る。また呉須による文様は、底部内面に五弁花、体部外面に丸文と武田菱が交互に描かれている。48はやや大きく、腰部が深い。底部内面に花文、体部外面に花文と菊文が描かれている。46の底部内面には文字が描かれていると推定される。また、いずれも体部外面、体部と高台の接合部外面、口縁部内面、体部内面に横線が施されている。釉はいずれも透明釉が全面に施されており、高台接地面は拭い取られている。

広東茶碗 (49～51)

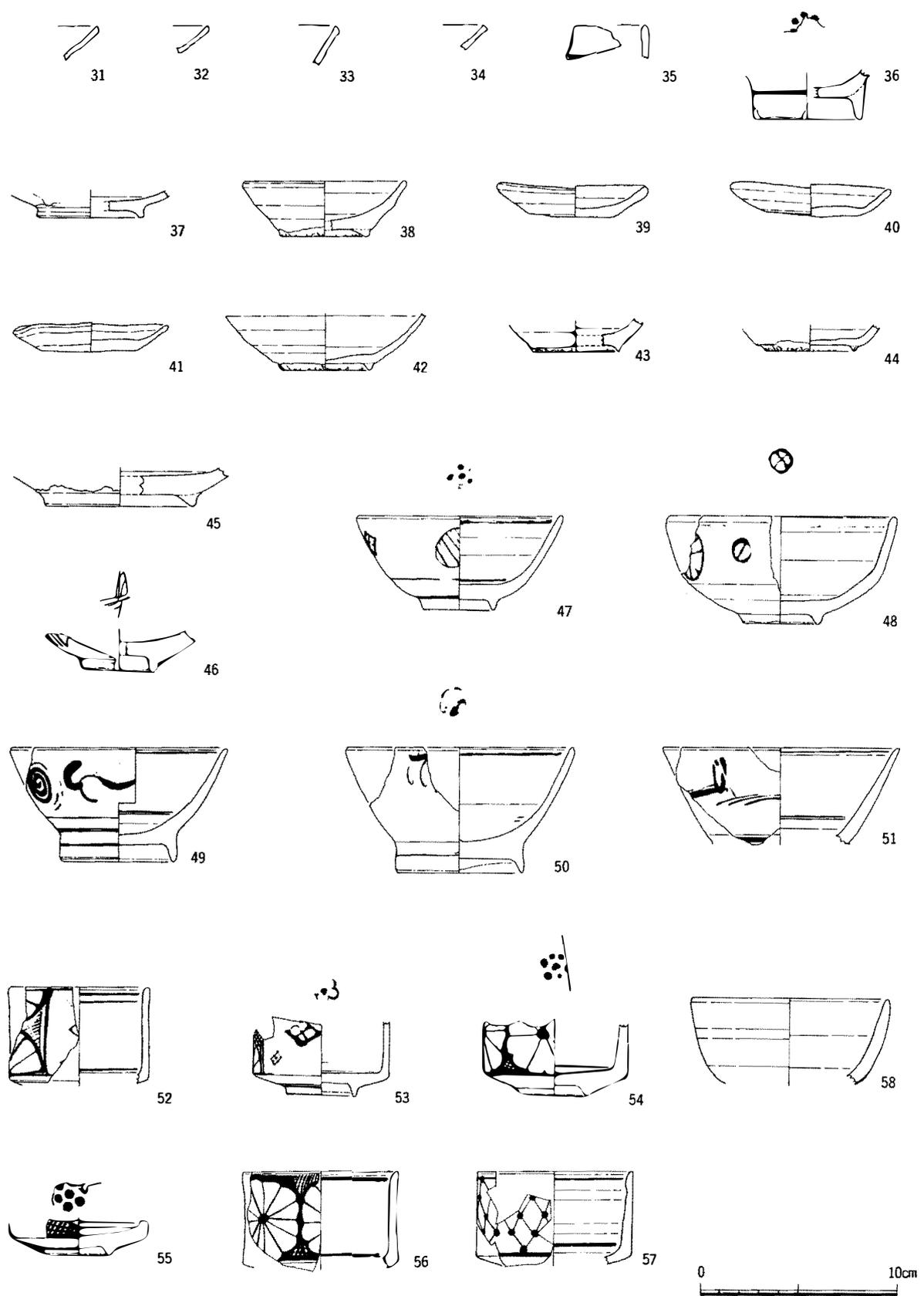
いずれも高台は外側が高く、体部は内傾気味に立ち上がる。呉須による文様は、49は底部内面に五弁花、体部外面に渦巻と弦状文の繰り返し、50は底部内面に五弁花、体部外面に海浜風景、51は体部外面に海浜風景が描かれている。また、いずれも高台外面、口縁部内面、および体部内面に横線が施される。また、釉は全面に透明釉が施され、高台接地面は拭い取られている。

箱型湯呑 (52～57)

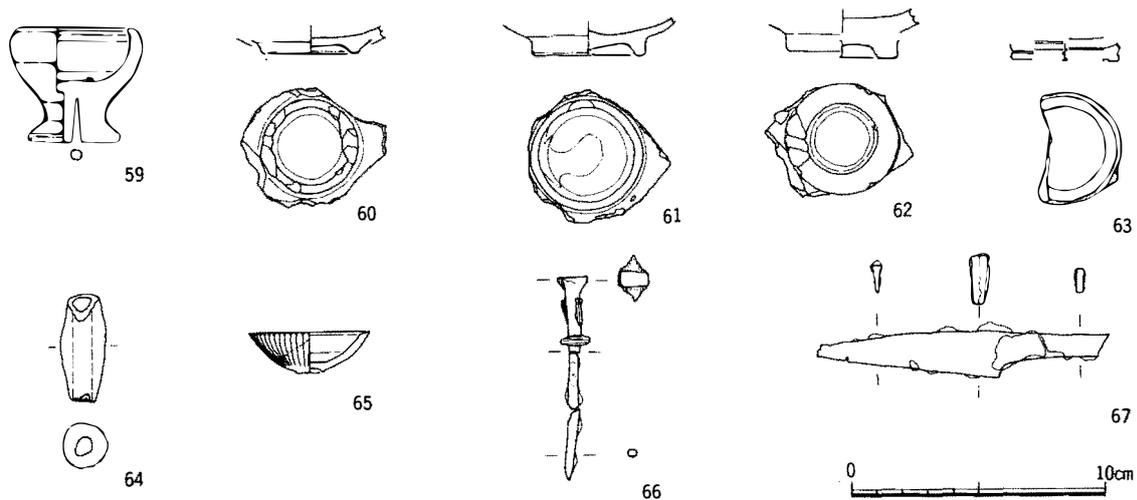
いずれも体部下方が屈折し、上方が直立する形態である。呉須による文様は底部内面にはいずれも花文が施され、体部外面は菊花つなぎ、割菊花つなぎと武田菱、格子目の交点に丸文を施すものの3形態がみられる。また、いずれも体部と高台の接合部外面、口縁部内面、体部屈折部に横線が施される。釉は透明釉が全面に施され、高台接地面は拭い取られている。

灰釉丸碗 (58)

やや厚手であり、体部は開き気味に立ち上がる。体部内外面に灰釉が施される。



第84図 西乙原遺跡古代以降の遺物



第85図 西乙原遺跡古代以降の遺物

乗燭 (59)

坏部は全体に丸みを帯びており、口縁部は内傾している。底部は回転糸切り痕が残り、底部中央からややずれた箇所に深さ1.8cmの未貫通の穿孔がみられる。穿孔により生じた粘土塊はへら状工具により削り取られている。坏部内外面に飴釉が施されている。なお、芯部は欠損している。

加工円盤 (60~63)

60、61は腰鍔茶碗、62は鉄釉丸碗、63は天目茶碗の底部を加工して作られたものである。

土錘 (64)

体部中ほどに最大径をもち、体部外面には縦位のへら削り調整が施される。また、端部は垂直に面取りされている。

伊万里

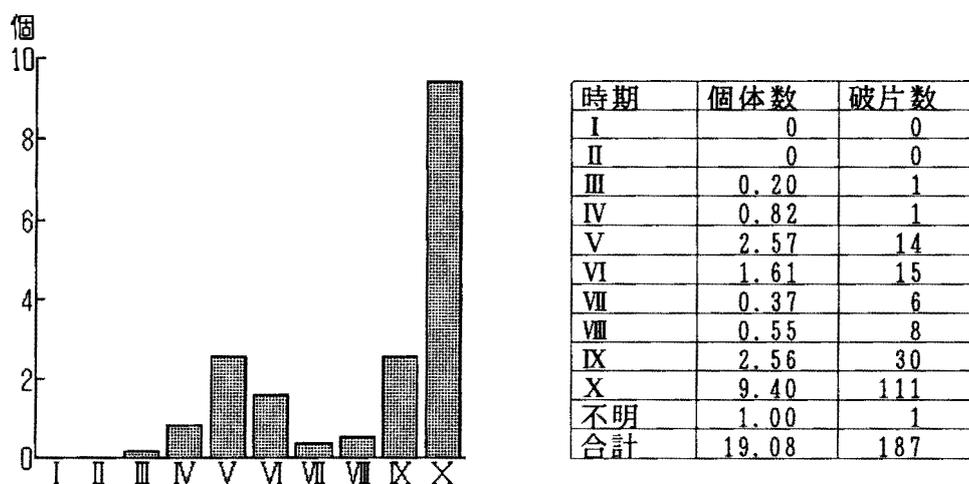
紅皿 (65)

型押し成形で、口縁部は内傾して面取りしてある。体部外面には底部より放射状に沈線が施される。体部内面および外面上半に白色の釉が施される。

西乙原遺跡 小結

本遺跡から古代以降の遺物は19.08個体、計測可能な破片数は187点が出土した。第86図は勝更白山神社周辺遺跡と同様な時間区分・手法を用いて各時期の遺物量を算出したグラフである。¹⁾これによるとIII期以降遺物量が増加し、V期においてピークをむかえている。そして、VI期以降減少し、再びIX期に増加し、X期にピークをむかえる。このように中世と近世にそれぞれピークがみられることは勝更白山神社周辺遺跡と同様な出土状況といえる。

- 1) グラフではI期とII期の遺物が全く出土していないことになるが、それは口縁部資料がなかったためであり、実際は灰釉陶器の底部破片が出土している。しかし、量的には極わずかである。



第86図 時期別個体数

表6 西乙原遺跡 古代以降の遺物観察表

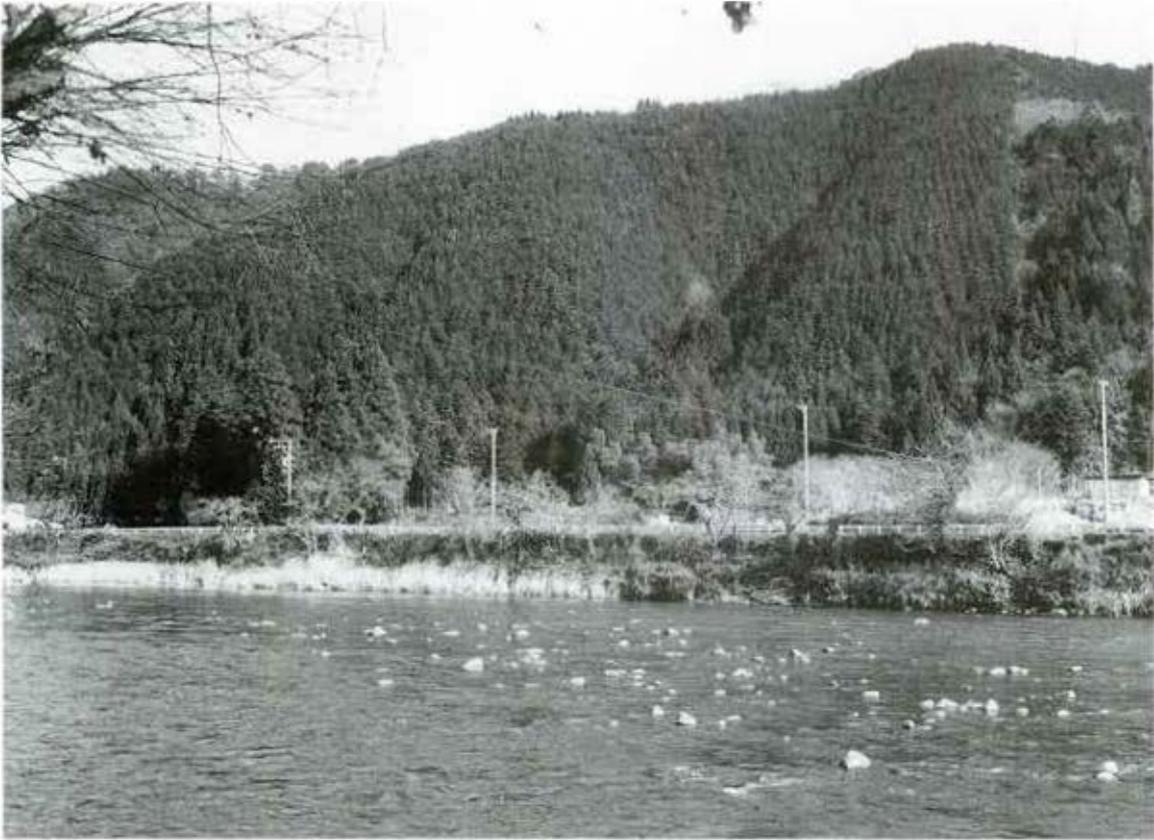
() は復元値を示す

番号	遺構	産地	器種	法量 (cm)			釉薬	備考
				■径	底径	器高		
31	S K 2	山茶碗	碗	—	—	—		
32	S K 4	山茶碗	皿	—	—	—		
33	S K 5	山茶碗	碗	—	—	—		
34	S K 6	山茶碗	碗	—	—	—		
35	S K 7	瀬戸美濃	腰鎊茶碗	—	—	—	灰釉+鉄釉	
36	S K 7	瀬戸美濃	広東茶碗	—	5.6	—	透明釉+呉須	
37	包含層	灰釉陶器	皿	—	7.0	—	灰釉	猿投
38	包含層	山茶碗	皿	8.4	4.6	2.8		尾張
39	包含層	山茶碗	皿	7.7	4.2	1.5		東濃
40	包含層	山茶碗	皿	8.1	4.5	1.6		東濃
41	包含層	山茶碗	皿	7.9	4.6	1.7		東濃
42	包含層	山茶碗	碗	—	4.6	—		東濃
43	包含層	山茶碗	碗	—	4.2	—		東濃
44	包含層	山茶碗	碗	—	4.6	—		東濃
45	包含層	山茶碗	碗	—	7.6	—		尾張
46	包含層	瀬戸美濃	染付丸碗	—	4.0	—	透明釉+呉須	
47	包含層	瀬戸美濃	染付丸碗	10.6	3.8	4.9	透明釉+呉須	
48	包含層	瀬戸美濃	染付丸碗	(11.6)	3.7	5.5	透明釉+呉須	
49	包含層	瀬戸美濃	広東茶碗	(11.0)	6.0	5.9	透明釉+呉須	
50	包含層	瀬戸美濃	広東茶碗	(11.6)	6.4	6.5	透明釉+呉須	
51	包含層	瀬戸美濃	広東茶碗	(12.0)	—	—	透明釉+呉須	
52	包含層	瀬戸美濃	筒型湯呑	(7.2)	—	—	透明釉+呉須	
53	包含層	瀬戸美濃	筒型湯呑	—	3.8	—	透明釉+呉須	
54	包含層	瀬戸美濃	筒型湯呑	—	3.3	—	透明釉+呉須	
55	包含層	瀬戸美濃	筒型湯呑	—	(3.4)	—	透明釉+呉須	
56	包含層	瀬戸美濃	筒型湯呑	—	3.4	—	透明釉+呉須	
57	包含層	瀬戸美濃	筒型湯呑	(8.0)	—	—	透明釉+呉須	
58	包含層	瀬戸美濃	灰釉丸碗	(10.0)	—	—	灰釉	
59	包含層	瀬戸美濃	乗燭	4.9	3.4	4.6	鉛釉	底部外面に未貫通の穿孔
60	包含層	瀬戸美濃	加工円盤	—	—	—	鉄釉+灰釉	腰鎊茶碗の転用、28g
61	包含層	瀬戸美濃	加工円盤	—	—	—	鉄釉+灰釉	腰鎊茶碗の転用、28g
62	包含層	瀬戸美濃	加工円盤	—	—	—	鉄釉	丸碗の転用、60g
63	包含層	瀬戸美濃	加工円盤	—	—	—	鉄釉	天目茶碗の転用、11g
64	包含層	土師器	土錘	—	—	—		一部欠損
65	包含層	伊万里	紅皿	4.8	1.0	1.6	透明釉+呉須	

参 考 文 献

- 大江 侖 『飛驒の考古学Ⅰ 益田川流域の縄文遺跡』 1965
 (叻大阪文化財センター 『小坂遺跡』 1992)
- 大参 義一 「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について 法仙寺遺跡・西北出遺跡の土器を中心にして」 『名古屋大学文学部研究論集Lxxlv』 1978
- 大野市教育委員会 『大野市文化財報告書 第3冊 右近次郎遺跡II』 1985
- 木下 哲夫 「気屋式以後(1)北陸に於ける壙之内2式相当の土器型式について(予察)」 『先史考古学研究』 第4号 1993
 (叻岐阜県教育委員会 『はいづめ遺跡』 1988
 叻岐阜県教育委員会 『宮下遺跡』 1991
 叻岐阜県教育委員会 『追分遺跡・下開田村平遺跡』 1922
 叻岐阜県教育委員会 『鶴尾山城跡・深戸遺跡』 1992
 叻岐阜県教育委員会 『中茂遺跡』 1992
 叻岐阜県教育委員会 『阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』 1993
 叻岐阜県教育委員会 『荒城神社遺跡』 1993)
- 鈴木 徳雄 「称名寺式の変化と中津式一型式間交渉の一過程」 『縄文時代』 第4号 1993
- 白川村教育委員会 『木谷遺跡』 1987
- 高槻市教育委員会 『芥川遺跡発掘調査報告書』 1995
- 多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編 『伊木力遺跡』 1990
- 千葉 豊 「緑帯文系土器群の成立と展開 西日本縄文後期前半の地域相」 『史林』 第72巻 第6号 1989
- 千葉 豊 「西日本縄文後期土器の二三の問題 瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題」 『古代吉備』 第14集 1992
- 戸田 哲也 「飛驒を中心とした縄文後期前半土器の様相」 『先史考古学研究』 第4号 1993
- 中津川教育委員会 『久須田遺跡発掘調査報告書』 1991
- 能登川町教育委員会 『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第17集 今安楽時遺跡』 1990
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 『福井県埋蔵文化調査報告 第15集 鳴鹿手島遺跡』 1987
- 平安博物館 『桑飼下遺跡』 1975
- 三方町教育委員会 「IV 出土遺物 I 縄文土器」 『北寺遺跡』 1992
- 柳澤 清一 「西日本縄文後期前葉編年の再検討 近畿地方を中心として」 『古代』 第98号 1994
 (叻横浜市ふるさと歴史財団 『稻ヶ原遺跡A地点』 1992)

圖 版



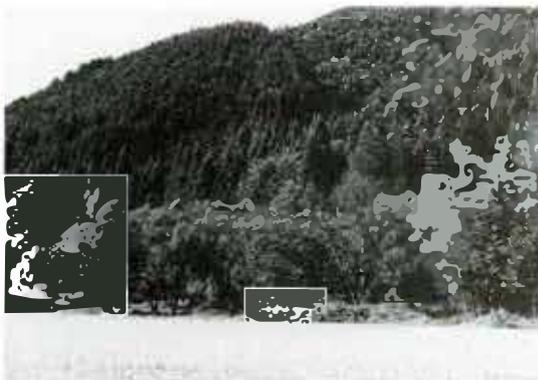
勝更白山神社周辺遺跡 遠景（対岸から）



勝更白山神社周辺遺跡 近景（南から）



勝更白山神社周辺遺跡 調査開始風景（北から）



勝更白山神社周辺遺跡 近景（東から）



勝更白山神社周辺遺跡 崖錯雑状況



勝更白山神社周辺遺跡 堆構状況



勝更白山神社周辺遺跡 SK13



勝更白山神社周辺遺跡 SK31



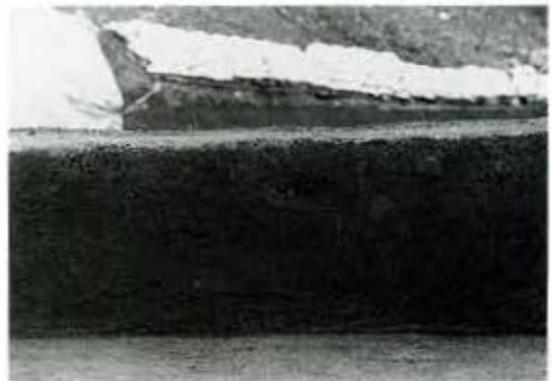
勝更白山神社周辺遺跡 SK10



勝更白山神社周辺遺跡 焼土塊分布状況



勝更白山神社周辺遺跡 SD1



勝更白山神社周辺遺跡 焼土塊断面



勝更白山神社周辺遺跡 SK23



勝更白山神社周辺遺跡 SK32



勝更白山神社周辺遺跡 SK23



勝更白山神社周辺遺跡 SK32



勝更白山神社周辺遺跡 SK26



勝更白山神社周辺遺跡 SK37



勝更白山神社周辺遺跡 SK26



勝更白山神社周辺遺跡 SK37 人骨



勝更白山神社周辺遺跡 井戸1



勝更白山神社周辺遺跡 土器片出土状況



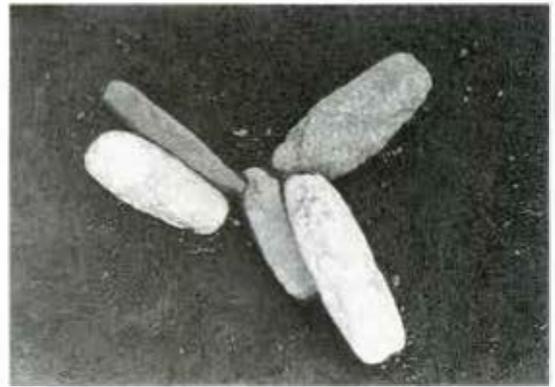
勝更白山神社周辺遺跡 井戸2



勝更白山神社周辺遺跡 石皿出土状況



勝更白山神社周辺遺跡 井戸3



勝更白山神社周辺遺跡 石製土器具出土状況



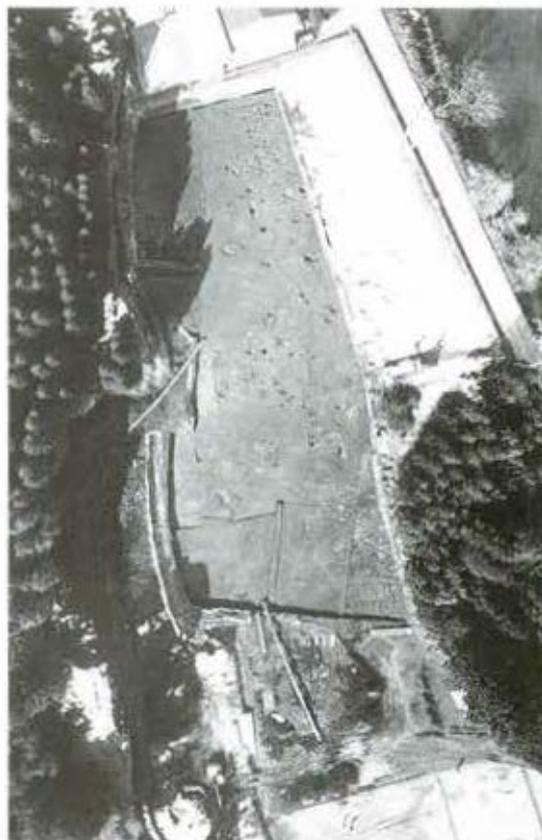
勝更白山神社周辺遺跡 調査風景



勝更白山神社周辺遺跡 調査風景



勝更白山神社周辺遺跡 南から



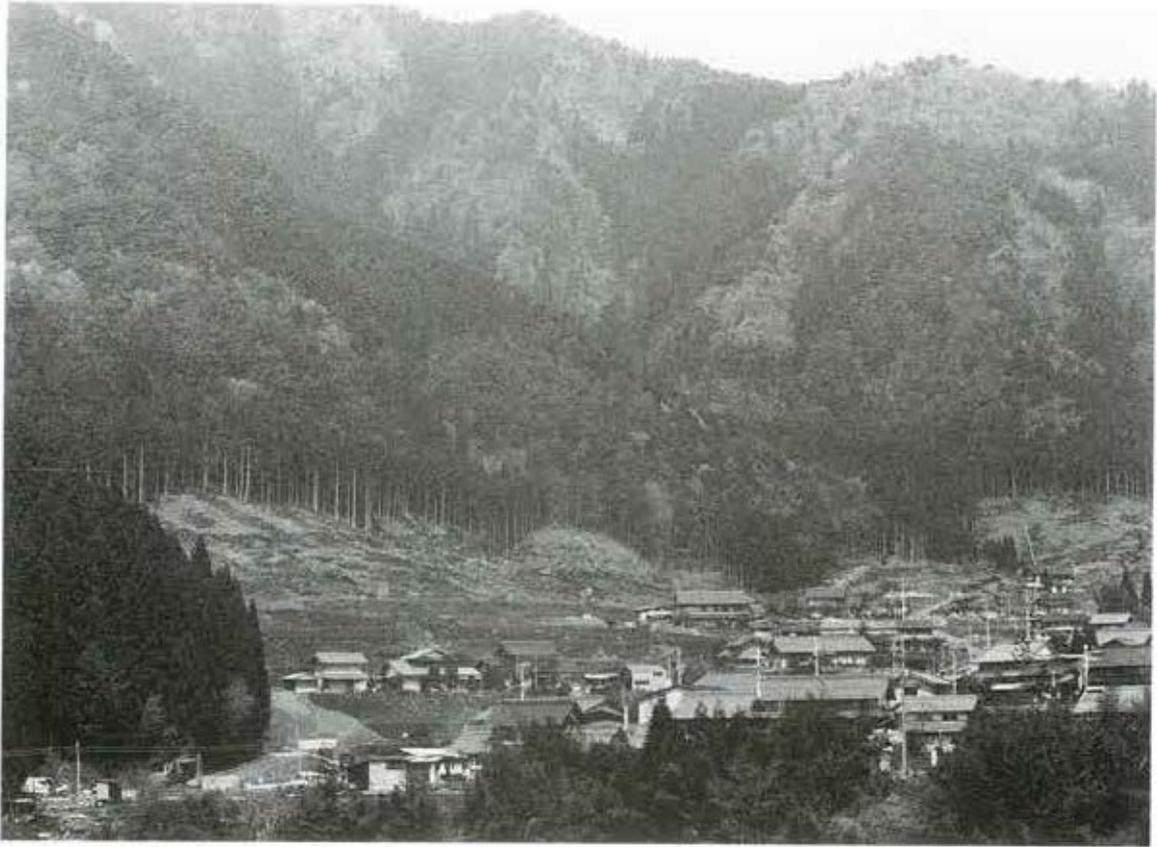
勝更白山神社周辺遺跡 北部遺構面



勝更白山神社周辺遺跡 北部究極・中部遺構面



勝更白山神社周辺遺跡 中央部遺構面



西乙原遺跡 遠景



西乙原遺跡 調査前景



西乙原遺跡 堆積状況



西乙原遺跡 SK1~4



西乙原遺跡 土坑覆土半殺状況



西乙原遺跡 土坑半殺状況



西乙原遺跡 土坑覆土除去の状況



西乙原遺跡 SK7 検出状況



西乙原遺跡 土坑半殺状況



西乙原遺跡 SK7 半殺状況



西乙原遺跡 土坑半殺状況



西乙原遺跡 SK7 完掘状況



西乙原遺跡 SK 8 半葬状況



西乙原遺跡 SK 8 人骨出土状況



西乙原遺跡 SK 8 出土人骨関係状況



西乙原遺跡 南から



西乙原遺跡 遺構分布



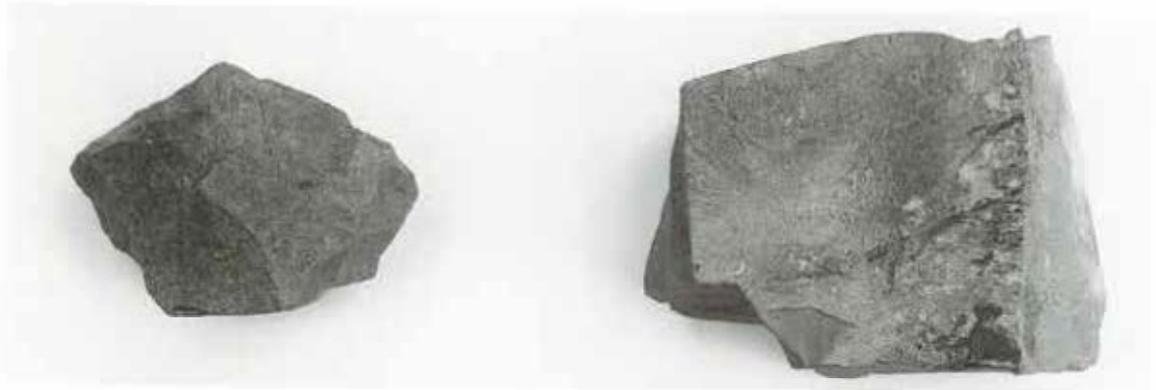
西乙原遺跡 完掘状況



勝更白山神社周辺遺跡 チャート岩類合資料1/1



勝更白山神社周辺遺跡 下品石石核2/3



勝更白山神社周辺遺跡 粗安山岩石核・分割破1/2



勝更白山神社周辺遺跡 粗安山岩剥片と石製土握具リダクション剥片(表・裏)1/3



勝更白山神社周辺遺跡
石製土握具リダクション剥片頭部拡大2/1



勝更白山神社周辺遺跡 粗剥片石器1/4



勝更白山神社周辺遺跡 石皿1/6.7



勝更白山神社周辺遺跡 燧石・叩石類1/5



勝更白山神社周辺遺跡 石製土掘具柄部資料 1/5



勝更白山神社周辺遺跡 石製土掘具側面 1/3



勝更白山神社周辺遺跡 石製土掘具刃部 1/1



勝更白山神社周辺遺跡 石製土掘具刃部 1/2



勝更白山神社周辺遺跡 石製土掘具刃部 4/5



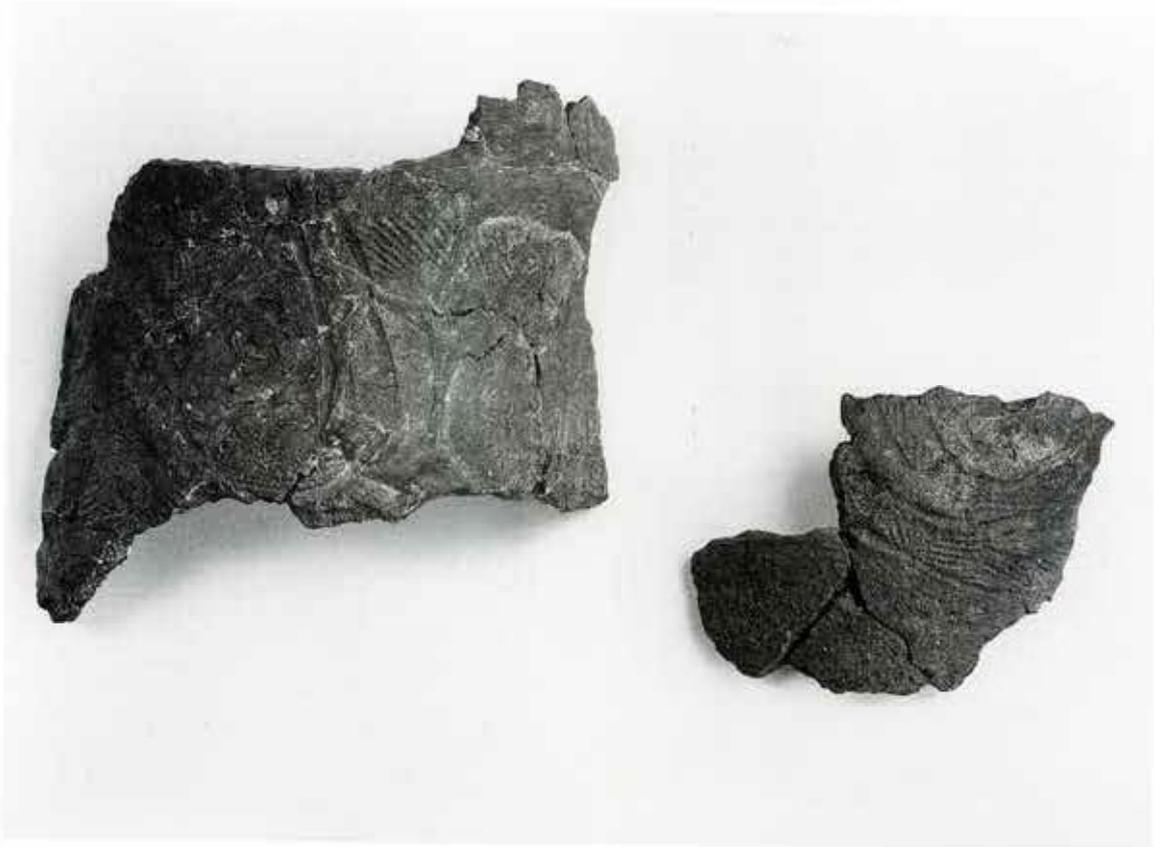
勝更白山神社周辺遺跡 石製土掘具刃部 4/5



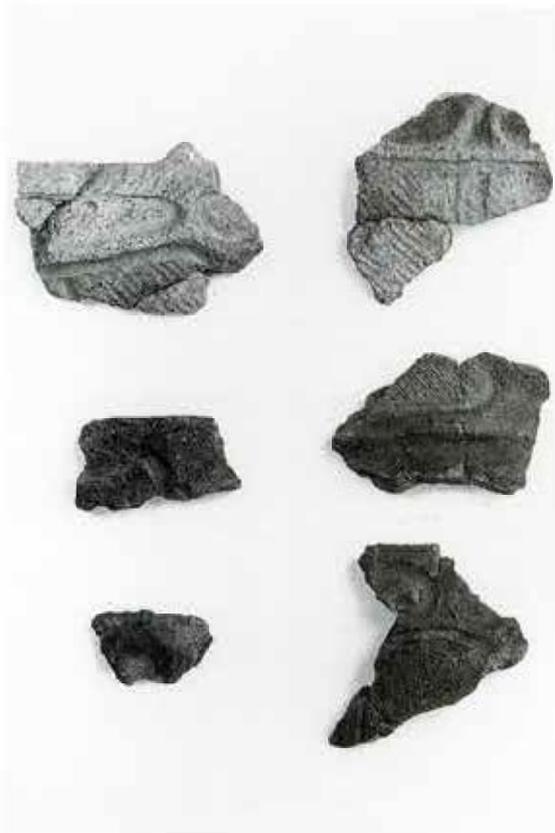
西乙原遺跡 石製土掘具刃部 2/5



西乙原遺跡 石製土掘具刃部 3/5



勝更白山神社周辺遺跡 第I期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第I期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第II期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第III期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 埋設土器(第III期) 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第IV期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第IV期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅰ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅰ期の土器 Ⅰ/4



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅱ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 1/4



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 1/3



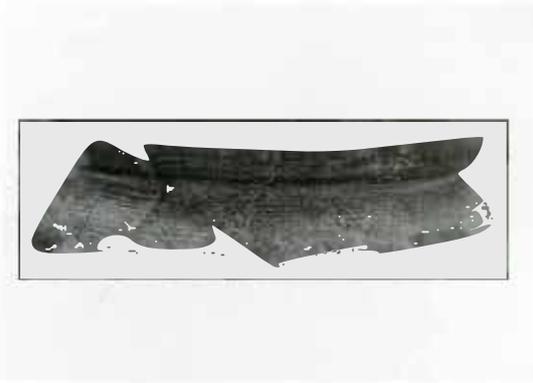
勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 2/5



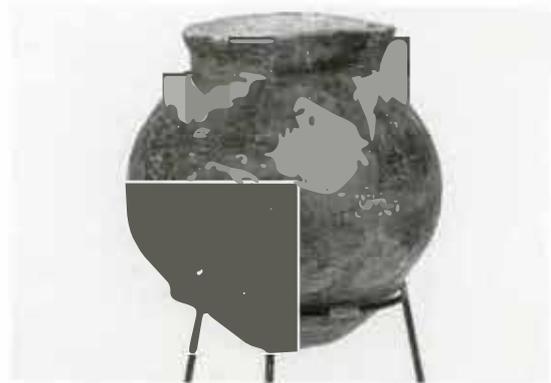
勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅴ期の土器 3/10



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅱ期の土器 2/5



勝更白山神社周辺遺跡 第Ⅱ期の土器 1/5



勝更白山神社周辺遺跡 不明原休 1/1



勝更白山神社周辺遺跡 オオバコ原休 3/4



勝更白山神社周辺遺跡
第Ⅱ期の土器オオバコ原休 4/5



オオバコ原休



勝更白山神社周辺遺跡 土器底節網代圧痕 1/3



勝更白山神社周辺遺跡 土器底節葉脈圧痕 2/5

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしおっばいせき、かつざらははくさんじんじやしゅうへんいせき									
書名	西乙原遺跡・勝更白山神社附遺跡									
調査名	東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書									
巻次										
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書									
シリーズ番号	第22集									
編者名	長 塚 彰 二									
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター									
所在地	〒500 岐阜県岐阜市市町1 (岐阜総合庁舎内) Tel.058(264)1111 内線814									
発効年 日	西暦1995年3月31日									
ふりがな	ふりがな	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原簿	調査項目	
									市町村	道路番号
西乙原遺跡	岐阜県郡上郡八幡町西乙原	481	G21108709	35°42'17"	136°56'41"	19920501 +	1,600m ²	東海北陸自動車道(築1棟~八幡町)	+	建設事業(に伴う)
勝更白山神社附遺跡	岐阜県郡上郡八幡町有坂	481	G21106767	35°44'57"	136°56'45"	19920825 +	9,200m ²	建設事業(に伴う)	+	建設事業(に伴う)
所収遺跡名	原 別	主な時代	主 な 遺 構			主 な 遺 物			特 記 事 項	
西乙原遺跡	遺物包蔵地	縄文時代 近世	集石土坑・土塚墓			石製土器片 陶磁器片		遺物は二次埋積、石製土器片の大部分には消れがみられる。		
勝更白山神社附遺跡	遺物包蔵地	中期末 + 晩期	石製土器片集積 埋設土器 焼土			縄文式土器片 (中期末~晩期) 弥生式土器 石器土器片		縄文時代中期末以降の土器が断片的に残される。石製土器片が650点出土しているが、他の石器はほとんどみられない。土器にわたる採集地であったと考えられる。		
		中世~近世	土坑・小土坑 集石土坑 土塚墓 溝状遺構 井戸			陶磁器片		中世以降では土坑の上下に溝状遺構が認められた。		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第22集

西 乙 原 遺 跡
勝更白山神社周辺遺跡

東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書

1995年3月31日 印刷

1995年3月31日 刊行

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内)

印刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社

「西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡」調査報告書正誤表

ページ	訂正箇所	誤	正
36	12行目	229～244	227～244
48	26行目	392・396	392～396
62	31行目	それ近い	それに近い
76	28行目	覆われるが、その剥離面	覆われる。背面の剥離面
87	No102-類	ネシ	ネ
88	No228-類	シ	ネシ
92	No539-類	シ	ネ
94	No713-類	シ	ネ
95	No726-類	シ	ネ
95	No750-類	シ	ネ
111	5行目	三日月高台	三日月高台
126	25行目	崩る	瀝る
145	19行目	19世紀後半	19世紀前半
158	10行目	(財)岐阜県教育委員会	岐阜県教育委員会
158	11～16冊	(財)岐阜県教育委員会	(財)岐阜県文化財保護センター
抄録	10段目	発効年月日	発行年月日